

龍の国 日本

カキフライW

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第二次大戦、世界中に巨大生物が現れ、大混乱が発生した。

日本でも巨大な龍が現れるも、古来対話をしていた天皇家が存続していたため、戦いにはならず対話と融和によって数ヶ月とかわからず平穏を取り戻した。

その日本が中央暦1639年よりも5年早く転移した。

注意事項。

とても駆け足だったり停滞して進みます。

また外人部隊で出来なかったネタを使います。

更新頻度は適当です。

目次

チュートリアル

第1話 | 1

外交策 | 4

3. 買収から買収 | 7

4. 準備、そして取り入り | 10

5. 権力の分散 | 14

6. 第一列強へ | 16

7. 戦乱の予兆 | 18

8. ギム防衛線 | 20

9. 浮島 | 22

10. 情報収集 | 24

11. 東伐軍排除 | 26

12. 表と裏の工作 | 29

13. 軍事会社 | 32

14. ロウリア王国 衰退 | 34

15. 次の一手 | 36

16. 旧兵器・魔王 | 40

17. 派遣・懐柔 | 42

18. 対魔王軍 | 45

19. 殲滅開始 | 47

20. 魔王排除 | 49

21. 内乱前・情報とは | 51

22. 内乱・正当性 | 54

23. 潮流・存在 | 57

24.	会談・分裂・介入	60
25.	圧力・命令・支配	63
26.	配備・エモール王国・TALOS	66
27.	新たな敵対国家	69
28.	デユロ・レイフォル	71
29.	エストシラント	73
30.	レイフォル領	75
31.	変わらぬ英国紳士・グラメウス大陸	77
32.	パーパルディア皇国・グラメウス大陸・レイフォル	80
33.	日本・グラメウス大陸・レイフォル	83
34.	グラメウス大陸・レイフォル裏切り者・ムー国	86
35.	漆黒の騎士・実用試験準備・輸出準備	89
36.	神聖ミリシアル帝国・鉱山区画奪還	91
37.	エスペラント王国・レイフォル	94
38.	殲滅戦・事情・事情聴取	96
39.	技術・協力	99
40.	訓練・先手	102
41.	水龍・電磁機兵器・光学兵器・想定相手	104
42.	魔帝の戦艦・禁忌の準備	106
43.	改造・改良・地獄・世界会議まで半年	108
44.	外交圧力	111
45.	軍事技術差	115
46.	外交判断	117
47.	仮初の平和外交	121
48.	世界会議まで三か月・・・	124

49.	世界会議まで一か月・・・	127
50.	世界会議	130
51.	カルトアルパス港	133
52.	ムー国の強化 前	136
53.	ムー国の強化 後	139
54.	騒乱と混乱	142
55.	情報収集	145
56.	想定外	148
57.	オタハイト防衛・マイカル沖殲滅	150
58.	グラ・バルカス帝国・老人会・アルーの戦闘	153
59.	戦車	157
60.	自律兵器・新型爆弾	160
61.	攻撃準備	163
62.	大陸間攻撃に向けて・空洞山脈航空戦	165
63.	バルクルス基地爆撃・同時多発攻撃	167
64.	アルー奪還・派兵準備・黒い鳥	169
65.	弾道弾・圧力・奪取に向け	172
66.	侵入・悪魔のカード	174
67.	奪還	176
68.	姫日本へ・破壊者	179
69.	会議・攻撃	181
70.	殲滅・終戦	183
71.	閑期・鳥人間コンテスト・動力機コンテスト	186
72.	閑期・リーム	189
73.	閑期・大規模演習	192

74.	アニユンリール皇国	194
75.	混成艦隊	197
76.	区別のない攻撃	199
77.	差別のない攻撃	201
78.	それは実験に過ぎない	203
79.	実戦でこそ知りえる事もある	206
80.	火	208
81.	血統と立場の違い	210
82.	兇戯はここまで	212
83.	最後の準備期間	214
84.	閑話 珍兵器	216
85.	閑 綺麗な禁忌・国家	218
86.	帰還 そして戦争の開始	221
87.	後の先	223
88.	不利	225
89.	暴力と武力の違い	227
90.	古きの海戦	229
91.	それは何もかもを焼き尽くす暴力	232
92.	後始末・そして黄昏の時代へ	234
地球への帰還編		
a.	暗寧の時代	236
b.	最新兵器	240
c.	圧力	242
本番		
0.	帰還と空間神の暴走	244

	1.	1629年	生存の為に	246
	2.	1629年	72時間戦争	248
	3.	神聖ミリシアル帝国・ムー国		251
	4.	1630年 初期	技術移転開始	257
	5.	資源国・海上都市・蠢く者達		262
	6.	制御された暴力とはつまり武力である		264
	7.	1631年初頭	軍備とは	268
	8.	1633年初頭	第一次策略	273
	9.	解析・混乱するムー国		277
	10.	1633年末期	局地戦？	280
	11.	1634年1月	1日戦争	285
	12.	チープ兵器	戦意破壊兵器	288
	13.	パーパルディアの乱れ		291
	14.	ロウリアの動き		293
	15.	戦意破壊のほずが		296
	15.	実用試作戦車		298
	16.	割れ始めるパーパルディア		302
	17.	1635年1月	やはり問題はお金である	305
	18.	1635年 4月	開発は続く	308
	19.	龍 兎戯		311
	20.	要塞	そして開発の完了	314
	21.	1636年 9月	準備完了まで	318
	22.	1637年	皇族の独断と魔王討伐部隊 そして戦争の準備	324
23.	エスペラント王国	魔王復活		328

24.	対魔王	331
25.	1637年末 繰り返される準備	337
26.	グラ・バルカス帝国の出現 恐れていた事態	341
27.	1638年末	344
28.	1639年初頭 ムー生粋の奇人と変人	352
29.	皇弟 強奪? 兵器の行きつく先とは	355
30.	ムーと帝国	358
31.	ロウリア東進先遣軍VSカニ	361
32.	兵の質が戦争の質	365
33.	攻撃	370
34.	危険	376
35.	レイフォルの行動	380
36.	パーパルディア皇国とパールネウス国	383
37.	列強統合空母打撃群	387
38.	パーパルディア戦争	391
39.	国家から州へ	395
40.	1639年 第四列強とは 責務とは	399
41.	1639年末 実験	402
42.	1640年初頭 外交?	406
43.	外交を装う	409
44.	静かな侵略 訓練という名の	412
45.	フィリアデス大陸	417
46.	1642年世界11カ国会議	420
47.	カルトアルパス会議 グラ・バルカス帝国本土	427
48.	カルトアルパス沖 海戦	434

49.	カルトアルパス沖 海戦	442
50.	1642年 PDW	450
51.	ムー大陸へ	455
52.	ムー初の対潜攻撃 入り込む術	458
53.	アルーに近づくモノ 赤く輝く結晶	465
54.	過剰な信頼 (オマーージュ作品を修正)	470
55.	アルー撤退	475
56.	脱出・強行偵察・発注	483
57.	戦争がもたらす世界各地への影響	490

チュートリアル

第1話

1942年、世界中に巨大生物が現れ、第二次大戦も中断され大混乱が発生した。

日本でも巨大な龍が現れるも、古来対話をしていた天皇家が存続していたため、戦いにはならず対話と融和によって数ヶ月とかわからず平穏を取り戻した。

伝説の龍神であると崇められ、皇居の一郭に身を休めているか、日本の上空を気ままに飛び回っていた。

だが、一方で世界中では、古代の大地の支配者と戦いになり国民を消失していった。口伝や継承などが行われず、または血統が途絶えた為に対話が出来なかったのだ。

英国王室と独逸の皇族子孫等により、融和が叶った国もあったが、そのほとんどは荒れていった、

世界中が混乱している中、嘆きを聞いた龍神が合衆国に現れた巨大な驚に戦いを挑み、討伐した事で平穏を取り戻し、第二次大戦は講和によって終結した。

戦いによって怪我をし、今まで沈黙を保っていた龍神の言葉に日本国内は震撼した。

《2020年 12月4日、日本はこの星から過酷な世界に転移する》と。

消息を絶っていた艦隊が1945年突如帰還し、得られた情報から信憑性を得た事で日本は国内の大改革と2020年に備えはじめた。

自国だけの技術開発では不可能と判断され、過去に得た満州等の放棄と共に国連への参加や米国とのつながりの強化、国際規格への対応など民主主義化、大日本帝国から日本へと国名も改めた。

あらゆる技術を購入し、軍事方面への開発を行い、国連やアメリカの打診に積極的に答え、軍事技術の開発に余念がなかった。

そして来る2020年 12月 3日、国内に残る決意をした日本人と僅かな外国人を残し、最後の通信が行われ、2020年12月4日 0時 夜が朝のように光り、日本は転移。

中央暦 1634年8月、

転移直後、皇居の一郭で休む巨大な龍が言葉を発した。

《ここは地球ではない》

その言葉に半信半疑になりながらも、急ぎ集められたデータが地球ではないということを示していた。

そして龍が大きく咆哮を上げると、第二次大戦中消えたはずのネームシップ戦艦が姿を現した。

金剛・扶桑・伊勢・長門・大和である。亡霊船となり建造した各工廠沖合いに現れ、大騒ぎになり各調査員が編成され調査が行われるも、まるで建造されたてのような状況であった。

《この世界は平和ではない。力を備えよ。太陽の神の意思なり》

神託により、近代化改修が行われる事になり造船に関わる業界は嬉しい悲鳴を上げ、砲塔や砲身の研究なども再開など急ピッチで進められた。

【軍国主義の再来だ】【日本はまた他国民を虐殺する】と野党を含めた世論操作の抵抗はあったが、具体的な神とも言える存在の言葉。そして下される龍の言葉に従い、恐ろしいほど反国家的な議員や各業界人の行っていた犯罪行為の裏が取れてしまい次々と失脚、

【お天道様はみている】

とでもいうほどに、日本を内部から攻撃していた人物が逮捕されていた。

中には、

「我々は神や龍の奴隷ではない！」

と叫ぶものもいたが、龍神が語ったとおり悪質な犯罪行為の裏が取れてしまい逮捕された。

自らを防衛するための準備が整えられていく中、限られた資源を得

るため、再編された日本が最初にしたのは国交開設であった。

もつとも近くであったクワ・トイネ公国、そしてクイラ王国に食料や資源の輸入、そして代わりに列車と、強く申し出のあった武器、コンパウンドボウとりカーブボウを輸出した。

外交策

国交が開設して数ヶ月、軍官民の突貫作業でインフラが建築されたことで食糧問題は解決し、ユニット化された油田設備も持ち込み、備蓄が切れるぎりぎり生産が開始された。

資源や食料に関して安定し、一方で技術的差が判明したことで、文明や文化に悪影響を与えてはならないとして、輸出に関してほぼ禁止となつてしまった。

経済界からはそれなりの突き上げがあつたが、學術情報や技術流出を繰り返す事で競争力を著しく失つた過去を咎められ、国外への一切の販売禁止が決定された。

なんにせよ。国外から入つていた製品や部品の国産化で産業界に余裕はなく、輸入される資源を元に急ぎブラックボックスの解析やCPUなど重要技術の国産化に精一杯で輸出に費やす余力はなかった。時折日本中に伝えられる龍の託宣、それによつて国内はまとめられ大きな混乱も起きず、定期的な弓の輸出のみを行い、外交官も受け入れない鎖国体制を取りながら技術の向上と軍備を拡張していった。

中央暦 1637年8月、

比較的海流が落ち着いている海域に巨大な人工浮島を建設、小さいながら飛行機の着艦も可能であり、外交都市としてクワ・トイネやクイラとの外交や商取引を開始した。

一方でクワ・トイネおよびクイラ以外とはいまだ国交を開設しておらず、人工衛星の打ち上げや高高度偵察機を飛ばし、周囲の情報収集に明け暮れていた。

クワ・トイネから入る情報は限られるが、それでも列強と呼ばれる存在や、その国々の振る舞いもある程度は聞こえてくる。

限られる情報を精査した結果。交流を持つべきと判断したのは、列強第一位 神聖ミリシアル帝国、列強第二位 ムー国であった。

もつとも近くに存在する第四列強 パーパルディア皇国は覇権主義であり、大陸内で戦争が続いているため準備が整うまで関わるべき

ではないと判断。諜報員を送り込み、内情を探ることとした。

諜報員は文明圏外国家の商人としてクワ・トイネの船に乗り、パールディア皇国に向う。肩書きは東方の小国の商人である。

現物貨幣として金の延べ棒を用意し、商品として上質な砂糖や人工調味料、そして養殖真珠を多数運び込む。切り札として、コスト度外視で生産された50カラットのブルー・ピンクの人工ダイヤモンドが持ち込まれた。

パールディア皇国 エストシラント港

船で到着するとその足で外務局に向う。お供として装備を擬装した自衛隊員が付き従う。

レンガで造られた立派な外務局の扉を開き、他の入国者とともに待合室で順番を待つ。

「次の商人」

大分横柄な態度でありこれが諸外国との応対をする外務に所属するものかと呆れてくる。

表情には出さずそのまま呼ばれた受付に向う。

「東方の国から商取引に来ました」

「国名と氏名、そして売る物をそこにかくように。許可発行は七日後になる」

随分と先になってしまふ、しかしこう言う時の為に金の延べ棒を用意している。

100gの延べ棒が入った小さな封筒を取り出し、そつと受付に差し出す。

「何卒早く許可が降りるよう手配して頂けないでしょうか」

受付の男は封筒の中身を確認すると、笑みを浮かべそつと懐に入れる。

「ふむ、今日の午後には出来上がるだろう。その頃に来るように」

やはり噂に聞いたとおり大分行政関係にも腐敗が広がっているようだ。しかし諜報を行うにも裏工作を行うにも都合がよい。

外務局を出てどの辺りの店と取引を行うか見立てるため、午後になるまで町を周る。

どこも小奇麗であり、建物にも統一性が感じられる。ガラス窓もある程度は使われているようだが、品質は良くなく大きさも限られているようだ。

時折通り過ぎる兵士達はマスケット銃らしきものを肩に担ぎ、隊列を組んで歩いている。

「どうやら文明も兵器レベルも中世より少し進んだ程度のような
ね」

「確かに、入念に確認を行おう」

小声で話をしながら町を回っていると、随分と羽振りのわるそうな商店が目に入った。あそこなら上手く利用できそうだ。

町を回ること数件当てをつけていると昼を過ぎ、外務局に戻ると用意されていた書類を受け取った。

3. 買収から買収

商取引許可書を受け取り、荷受をする為港で止められている荷降ろし場に向う。

「持ち込み禁止物がないか調べさせてもらう」

一応の検査もあるようだ。

「大したものは入っておりません。 監査官様のお力でお早く終わらせて頂けないでしょうか」

外務局担当官と同じように、しかし荷の量が多いので500gの延べ棒が入った封筒をそつと担当官に渡す。

中身を確認すると兵士に合図を送り検査を終了しろと命令が降りたようだ。

「問題なし。 行つていいぞ」

この国の潜入や物資搬入は金さえあれば容易そうだ。

量があるため港で荷車を借り、目当てを付けていた商店へと向つた。

パーパルディア王国 アマロツテ商店

客の入りが殆どなく、閑散とした店の前に荷車を止める。

「いらつしやいませ」

少々疲れているような店主が座るテーブルの前に移動し、皮袋を取り出し、テーブルの上で開いてみせる。

「我々はパーパルディア王国では新参な商人でして、大手では買い叩かれるのではないかとおもいましたね」

パーパルディア王国の商人は、極めて上質で雪のように真っ白な砂糖が、多額の金を産み出すことはすぐにわかったようだ。

客足が鈍い店にとつても渡りに船のようなものだ。

「我々と取引を優遇し取り計らつて頂けるなら、貴店のみにお支払いと考えております」

「なるほど、それでは当店が全て買い上げた上で、その一部をお支払いするという形でいかがでしょうか？」

少し欲を出したようだ。ここで甘い顔や弱みを見せれば、都合が悪くなる。道化とまではいれないが、こちらの都合がよいように動いてもらわなくては困る。

「そうですか、その内容ではお取引はお断りし、他の店に頼むとしましょう」

砂糖の入った皮袋を閉じて店の出口に向う為背を向ける。

「いや、すまなかった！ そちらの代理店としてこちらが販売するようにならう！ それでどうだろうか！」

パーパルディア皇国の帝都では税金が高い。少しでも払えなければ立ち退く事になり、属領に飛ばされてしまう。体裁など構っている余裕などアマロットテ商店にはなかった。

振り返り、再びテーブルの上に砂糖が入った皮袋を置く。

「居住可能な倉庫があればよいのですが、都合出来ますか？」

商店の主は少し考えながら口を開いた。

「当店が所有している倉庫があります。一部は従業員の住宅にもしていただきました、今でも使えます」

店主に案内された倉庫兼住居は立派なものではないが、それでもここを基点として商取引をしながら情報収集が可能となる。

「これはいい場所ですね。我々も安心して貴店と取引が出来そうです」

満足した表情を浮かべアマロットテ商店の店長に対して頷く。

「まずは輸送してきました、砂糖1000kgを卸させていただきました。他にも輸送してきた物も紹介いたしましょう」

倉庫のテーブルの上に新しい皮袋を置く。中身は人工調味料 うま味の素。

「こちらは我が国で調合された特殊な香辛料です。これを少量混ぜるだけで大抵の料理がとても美味しくなります」

店主は少し手に取り、それを口に含むと驚きの表情を浮かべた。

「信じがたいですが、塩でも砂糖でもなく、とても美味しいですな」

「こちらをまず100kgを無料で提供いたしますので、販路を拡大していただけると助かります。ですが、少量以上を入れると体調を

崩すことがあるので、注意してください」

古来から作られる製法を護って作られた養殖真珠。

養殖といっても品質や耐久性は天然と大差がなく、じっくり2年もかけて小さな核から丁寧に育て上げ、過去本物と差がないと鑑定結果を受けたものを持ち込んでいた。

「こちらは300珠あります。100珠は貴族との伝手を作るために使ってください。我々は業界に食い込むために手段は選びません」

綺麗な真円に等しく、美しく輝く真珠に息を飲みながら

とてつもなく大きな取引相手が出来たと店主は神に感謝していた。

だが諜報のため、そして非常時は内部から操るため権力者を味方に付ける。

物理的に戦争を行うのは数兆円の金がかかる。だが中から侵食するのは時間こそかかれども数十億円程度に済む。

それが腐敗している政治体制ならなおさらだ。

4. 準備、そして取り入り

中央暦1638年2月

防衛省

クワ・トイネ公国からロウリア王国が攻めてくる危険性があるとして、ロウリア王国の戦力分析が行われていた。

「それでは、航空戦力さえ対処方法を用意すれば、後はトラップでどうにかなるのだね？」

「地上戦力については数が多いだけです。簡単な武装のレンタルでどうにでもなります。問題は航空戦力への対処が全く無い事です」

「我々の食料と資源を護る為には、一時的な協力もいるでしょう」

「突然攻撃してくるわけではあるまい。侵略軍に空爆して終わらせればいいだろう？」

「最低限の費用ならば、ワイバーンだけを狙い、残りはクワ・トイネ軍に任せましょう」

クワ・トイネ軍には一部武器のレンタルを行い、ギム防衛基地の改修を有料で請け負うと打診したところ、クワ・トイネからは食料と引き換えに、丘に木造の防壁が組み立てただけの粗末な防衛基地の改良を引き受けた。

ロウリア軍の戦力は判明しており、その対策はワイバーンを除いて簡単なものだ。

地面を掘りぬき、幅20m深さ10mの堀を一面に作り上げる。木造の外観を保ったまま内側には運び込んだコンクリートユニットと鉄筋で高さ10m程度の防壁に作り変える。

堀の底は全て鋭利な棘を設置、落ちたらただですまない。ギム守護隊 将軍モイジは日本など不要だと当初言っていたが、大規模な建設作業に驚いていた。

「では、テストしますが注意して下さい」

固定式火炎放射器を起動させ、40m先までを焼き払ってみせる。

「こちらを30門 レンタルします。故障しても構いませんが、返却はしていただきます」

巨大な燃料タンクと繋がり、一面を火の海に変える事ができる。数の暴力で来ようと、面制圧で焼いてしまえばたいしたことはない。何よりも火は人の恐怖を煽る。広範囲で人が多く燃え上がれば、攻撃側の心は折れるだろう。

「ワイバーンに関しては、こちらで処分いたしますので、ご安心ください」

パーパルディア王国

アマロツテ商会は日本の砂糖やうま味の素の販売によって息を吹き返し、真珠の件もあり貴族の支援も取り付け始めていた。

町での情報収集を行いながら、国家の成り立ちや現在権力を握っている者達も判明しつつあり、どこから切り崩していくか。

まだ貴族との面会は叶っていないが、国家のシステムから考え、皇族でなければ余り意味がないとされた。

そんな中真珠が目にとまり、皇族の一人 レミールと面会する事となった。

「お前達がアマロツテ商会に品を卸している者達か」

第一外務局 レミール執務室に呼ばれ献上したいものがあると申し出ていた。

「して、献上したいものとは」

真珠が詰められた箱と50カラットのブルーとピンクダイヤモンドが納められたケースをメイドに渡す。

開かれた中を見てレミールは息を飲んだ。天然物として見かける事は、この採掘技術が劣る世界ではまずないだろう。

「我が国でも非常に希少なものです」

魅入っているのを確認し、こちらの用件を伝える。

「我が国はとても人口も少ないため、奴隷を供出することもできません。王も病弱で老い先も短いのです。なにとぞ王が存命の間、レミール様のお力で良き様取り計らって頂けないでしょうか」

国家の本来の形や状況を伝える必要などない。まずはこちらの思

感通りに動いてくれるか、その様子見である。

「あの、レミール様？」

宝石に意識が向いていたことに気付き、レミールは目の前の男達に視線を向ける。

「うつつむ。 そうだな」

視線を変えた先には美しく真円の真珠が200珠が納められた箱がある。これだけの宝飾品であるならば、搾り取ればもつと得られるだろう。

「この真珠を毎月献上せよ」

「これは年に一度、今年は来月に300珠しか採取する事が出来ません。それを全て献上いたしますので何卒ご容赦を」

焦るような表情を浮かべて答える。

真珠の採取は育成と品質にばらつきがあるが、最高品質となると2年以上の育成が必要となる。

本当はもつと多く採れているのだが、実情を知るわけがないのだから、真偽を混ぜて上手く伝えればよい。

「よかろう。 来月必ず献上するのだ。 それ如何によつては考えてやろう」

「仰せのままに致します」

金や銀などレアメタルは困るが、合成できるダイヤモンドや養殖でまかなえる真珠は金こそかかるが、問題はない。

これで誰を崩していくか決定した。徐々に、そして確実にレミールに権力を集め、皇帝と不仲にさせパールディア皇国内部の権力を二分させる。後は食料や宝飾品などをレミールの元に集めていけば、権力は勝手に集まっていく。

どれだけ皇帝に信頼があっても、頂点のすぐ近くに権力を持つ者が、側にいれば不安となり疑心暗鬼となり、自然と関係はひび割れる。

翌月、正式に日本はレミールの外務直轄地として取り扱われ、税収は食料10万トンで賄われると発表された。

いままで他の貴族や外務官などが砂糖などの利権を狙っていたが、皇族であるレミール直轄地と発表された事で手出しが出来なくなつた。

実際には日本がクワ・トイネから購入している食料を、そのままパーパルディア皇国に輸出するだけなのだが。

5. 権力の分散

中央暦1638年5月

今まで戦争をしていた国家を下し、新たな属領を得た事で大陸南部を全て制圧した。

盛大な祝賀会が行われ、玉座に座るルディアスが握る王杓には50カラットのブルーダイヤが収められ輝いていた。

しかし祭典のどこにもピンクのダイヤモンドはなく、レミールが個人的に所持している事は、日本の諜報組織以外誰一人として知る事はない。

ダイヤは永遠の輝きではあるが、また人を狂わす魔性の宝石、レミールはすでに宝石に魅入られていた。

諜報員達は毎月レミール邸に訪れ、物資の献上を行う。

「レミール様、こちらを献上したく思います」

女性は宝飾品、自らを美しく着飾ることに余念がない。だからこそ、宝飾品と共に最高級の絹を献上するために運んできた。

「こちらは最高級品であり、王族が本来使うものですが、全て献上する為にご用意いたしました」

メイドが反物を開くと光が美しく柔らかく反射し、その高級感は素人が見てもはつきりと分かる。メイドがレミールの元に運んでいくと、その手に触れる。

「素晴らしい手触りだ」

この世界の産業を調べたところ、絹は非常に高価であり、現代のものとは比べて品質が劣っていた。これもまた取り入る為に使えると判断された。

「こちらは新しい真珠で御座います。非常に希少なもので13珠しかございません」

黒真珠、日本でもほんの十数年前に養殖に成功したばかり、最高品質で事実採取量も少ない。光に当てると複雑な光を放つ。

「受け取っておこう。今後とも良き働きを行うように」

直轄外務地でありながらレミールは日本に訪れる事はなく、献上される品々を受け取り日本をろくに確かめる事もなかった。

新たな宝飾品と共に1万トンの食糧をレミール個人に献上、集まる食料や宝飾品に釣られ貴族もレミールの下に集まり、たった数ヶ月で大きな派閥となりつつあった。

また、アマロツテ商会を通して砂糖も流通した事で、お菓子の種類も増えたことでますます砂糖の需要は増えていた。

そろそろレミールに砂糖の献上も行えば、ますます権力があつまることだろう。

まずアマロツテ商会に卸している砂糖の量を半分しに、その代わりにレミールの元に毎月1トン献上する。これによっていままでアマロツテ商会から購入していたほとんどの貴族は、レミールの元に集まり購入しようとするだろう。砂糖を得てから人は墮落したと言う説もある、砂糖を手に入れるために多くの金銭や権力がさらにレミールに集まる。

この流れはもはやレミール自身にも止めることはできない。

6. 第一列強へ

中央暦1638年7月

現在日本の各造船所では護衛艦の建造と平行し、旧戦艦の近代化改修が行われていた。

改修を行うも扶桑は船体の試行錯誤状態であった為、VLSの搭載は不可能でありFCS連動・レーダー・ソナー・短魚雷・CIWSの搭載が精一杯であった。

現在扶桑で得られた技術情報を元に、金剛・伊勢・長門・大和の改修が順次行われている。大規模な改修が行われているためにまだ2〜3年はかかる。

列強国との外交を行うため、第一号改修戦艦 扶桑 を艦隊と共に派遣。

カルトアルパス港沖に到着しかなりの騒ぎとなった。何しろまったくの未確認国家から、ムー国以上の軍艦が突然現れ、国交を持ちたいと言いついてきたのだ。

神聖ミリシアル帝国側は外交官が対応し、外務局 会議室へと案内がなされた。

「我々の国家は第三文明圏 ロデニウス大陸 クワ・トイネ公国のさらに東方に存在します」

まとめられた資料を手渡し、国交をする上で輸出するものや輸入したいものを明確とする。

異世界から転移した事など書類に明記しても理解してもらえないとは思えず、重要な事である覇権主義ではないこと、友好的かつ対等に貿易を行いたい事を主とした。

「輸入したいのは以下の金属となります」

小さなサンプルを持ち込みそれを提出する。

「我々が輸出したいのは繊維や加工食品となります」

ポリウレタン製合成繊維とパンの缶詰などを持ち込んでいた。

「ふむ。 繊維についてこちらで確認します」

担当官が布と注意事項が書かれた紙を受け取り退出していく。

「これは？」

ミリシアルの担当官は缶詰を取り上げ軽く叩いている。

「中にパンが入っており、柔らかく13ヶ月から37ヶ月の食用が可能です」

試しに開けて中身を取り出すとふかふかパンが飛び出してくる。

「味も良好であり、様々な味も備えております」

何種類も持ち込んでいたので、全てを開封し先に試食してみせる。

ミリシアルの担当官も恐る恐る食べてみると、柔らかさと味に驚いたようだ。

目を開いて千切ったパンを手で握ってみたあと、もう一口口に運んだ。

「考慮しておきましょう。 鉱石についてはこちらから折り返し連絡いたします。 三日ほど滞在してください」

「わかりました。 良き返答を何卒お願い致します」

丁寧に頭を下げ席を立とうとしたところ止められる。

「ひとつお聞きしたいのですが、貴国の軍艦は自国開発ですか？」

何かを探られているような、妙な様子が見られる。

「はい。 我が国で開発し製造した艦となります」

「そうですか。 いえ、失礼しました」

「どうやらこちらにも諜報員を派遣する必要があると、政府に連絡したほうがいいだろう。」

後日、パンの缶詰の大量発注が決まり、恐らく船舶で使用されると考えられた。

7. 戦乱の予兆

中央暦1638年12月

神聖ミリシアル帝国との外交を終え、次に扶桑を含めた外交艦隊はムー国に向け出航。多角的に鉱物資源を手に入れるため、大国との外交に動き始めた。

一方で外交のための浮島には神聖ミリシアル帝国の商人も訪れ、パンの缶詰や生地などを買い求め、貿易黒字は予想以上に上がりつつあった。

そんな中、ロウリア王国が軍備を整えていると情報が入り、国籍を隠した航空機の準備が進められる。

これはクワ・トイネ公国に詳細に説明していないが、確認したところ鉄龍と日本の戦闘機を呼んでいるからだ。

国旗がなければ所属不明国家、もしくは未確認の野良ワイバーンになるだろうと予測された。

F-35Aの塗装を白一色に変更し、侵攻が確認された場合全てのワイバーンを駆除する。それで任務は終了、費用はクワ・トイネ及びクイラから資源で賄うよう話が着いている。

そして浮き島に現れる商人達には少しずつ噂を流している。

《最近見慣れない凶暴な白竜がギム周辺の空を縄張りとして飛びまわっている》と。

もちろん噂半分でしか聞くものはいないが、少しずつ広まるだけがいい。事が起きた時、その竜の仕業となればよいのだから。

ギム防衛陣

「それは適切ではありません。まず囲むように撒いてください」

ギム防衛陣では、火炎放射の効率的使用方法を教えているのだが、噴出す炎の恐怖に怯え上手く操作できていなかった。

簡単な戦略のレクチャーも行い、後始末が日本にまで及ばぬ様きっちり方をつけてもらう。

中央暦 1639年1月

第三兵器技術研究所

たった5人しか所属者の居ない場末も場末、帝国時代の技術研究と保存を目的とした零細部署。

技術が失われぬように細々と予算も付いており、資料をデータ化しプラモデルやCG企業に設計図の提供などを行っている。

「たっ……大変です！」

いつも静かで埃も被っているような部署に、慌てて新人が駆け込んできた。

「クラウドファウンディングでオイ車の予算が付きました!!」

「はあ？ あれはジョークで出したやつだぞ？ そんな酔狂なやつらが出たのか？」

転移後のジョークとして、旧帝国陸軍未完の戦車 オイ車、3000万でプラモデル、3億で実物大模型、30億で実物復元、出したものだ。

所長は信じずにイスに寄りかかったまま古い図面をデータ化していた。

「ほんとうです！ 見てください！」

部下が差し出した書類には、30億円を突破し34億3241万と書かれていた。

ひったくるように書類を掴み目を通すが、間違いなく正式なもので申請金額を超えている。

「……上に報告をしてくる」

所長は席を立つと書類を持って本庁をに向った。

1カ月後、三菱協力の下、旧設計図を参考に大型ブルドーザーを基にして製造に取り掛かった。

8. ギム防衛線

ロウリア王国の侵攻が確認され、国籍を消したF35A編隊は国境を越え、ロウリア軍のワイバーンに強襲を仕掛ける。

「敵総数150、攻撃開始」

レーダーで敵を捕捉したF35A編隊は空対空誘導弾を発射、次々と誘導弾によってワイバーンは四肢を地上にばら撒くものの、誘導弾の搭載数の問題から25m機関砲によって数騎は仕留め、そのまま周囲を大きく旋回したあと海側や内陸部の二手に別れその場から姿を消す。

地上では何が起こったか理解できず、本国からワイバーンを呼び寄せるも、再びF-35A編隊を投入し全滅させる。

日本としてはここが白竜の縄張りであり、ワイバーンが一切通れないと理解すればよし。

歩兵戦力だけであれば堅牢に建設したギムの防衛陣を突破は難しく、計画は頓挫するだろう。

3度繰り返したところでワイバーンの確認できている保有数が少なくなり、侵攻部隊は歩兵及び騎兵戦力のみでギムに向い始めた。

これで非常時を除いて日本側の介入は終わりとなる。

「来たぞー！」

ギム防衛軍司令官であるモイジは、地面を埋め尽くすようなロウリア軍の人の波を見たことで、恐怖に震える部下たちにかつをいれる。

「恐れるな！ 我々がクワ・トイネを守るのだ！ 火炎放射開始!!」

城壁に設置されている火炎放射器から炎が吐き出され、地面ごとロウリア兵を焼き払う。身が焼ける激痛でのた打ち回り、助けを求めて近くの兵士に抱きつき延焼していく。

それでも少数の部隊が堀の前までくるが、余りの深さに飛び込むことが出来ず弓矢の餌食となっていく。

幾つかの部隊が梯子を担いでくるが、渡そうにも木材だけで20mを超える長梯子などないようで、堀の底に下ろそうとして落ちてい

く。

そんな状況のため防衛陣地の唯一の城門であり橋に向け殺到していく。

「橋だ！ 橋を落とせ!!」

木で出来た橋。たつぷり油をしみこませているので、火をかければ激しく燃え上がり簡単に崩れ落ちる。

最初は石を落としていたが、破城槌を押しながら兵士が渡り始めたところで火をかけると、油のしみこんだ橋は激しく燃え上がり、兵士達は悲鳴を上げながら橋の下に落ちていく。

ただ、余りに激しい炎によって一枚目の防壁である古い木の防壁に火が燃え移り、固定していたロープを切ると堀の下に落ちていく。

堀の下に落ちても運よく生きていたものは、これによって確実に死ぬだろう。

炎に巻かれ悲鳴と絶叫がこだまするなか、夕闇が周囲を覆うまで戦いは続き、戦線はギムの防衛陣で膠着状況となった。

いまだ9万近い兵力を押し留めているのだが、迂回されてしまう可能性もあるので住民は攻撃を受けたと同時に退避を始めている。エジエイまで日本によって整備された道路が通っている為、馬車によって順調に避難は進んでいた。

9. 浮島

外交交流として、情報や技術流出をするわけにはいかないため、設備のほとんどが人力で電子制御のない機械式のために人手が多く掛かり、日本から労働者を呼ぶわけにも行かず、当初は自衛官職員による小規模施設があるだけの浮島であった。

しかし徐々に問題が発生し始めた。

「……また入港する船が増えたな」

港湾管理官は次々と入港してくる帆船にため息を付く。

日本国内だけでも手一杯なのに、商人が集まりだした事で飲食店や販売所の人手がまったく足りなくなってきた。

「どうしたものか。受け入れぬわけにはいかんし、人員を増やす当てもない」

神聖ミリシアル帝国と国交を持ったことで領事館も建設され、小さな町は活気に溢れている。

浮島の管理責任者は入港量の激増と、混雑している店からの増員要請に悩まされていた。

「クイラに依頼をしてみようか？」

「元々クイラ王国は傭兵や人材派遣をしていたそうです。いつそここの警備や販売など人材派遣を依頼してみようか？」

「一考する価値はあるか。大まかに概要を纏めて上げてみよう」

クイラ王国

現在日本からクワ・トイネと繋ぐ鉄道が敷設され、さらに大規模な油田と鉱山が稼働していた。

その為経済もかなり良好になり、国民が飢えることはなくなっている。

外交官が訪れ、クイラ王国の外務大臣と会談を行っていた。

「人員派遣ですか？」

「はい。我々の島では現在人手が不足しています。販売及び警務の為に派遣して頂きたいのです。正当な報酬もちろん支払わせ

ていただきます」

「業務内容はわかりましたが、何人ほどご希望ですか？」

「およそ100人、ことによっては増えると思いますが、警備と販売業務等の増加具合でしょうか」

外交官のメツサルは渡された書類に目を通す。

「わかりました。数日以内に派遣できるよう取り計らいましょう」

クイラにとって日本はお得意様中のお得意様、さらに仕事が入るとなれば少々の無理をしても早めに対応をするつもりであった。

そして浮島ではクイラ王国から派遣されてきた獣人達が主に働くことになった。

船の誘導から物資の輸送、許可されている食品や装飾品等の日本製品の販売から警務までを請け負い、どこの国が見ても第三文明圏の文明圏国家程度に見えるだろう。

日本という国の真実を知られる必要なく、第一列強及び第四列強と取引がある国であるため、横暴な行いをする商人はほとんどおらず、時折無謀な海賊が現れるも、表向き船足が遅い日本の船ではなく、直接買い付けに来ているミリシアルやパールディアの武装商船に返り討ちにあっている。

しかし、一つ問題を解決すればまた一つ問題が発生する。

常駐人口の増加に伴う住居不足、海洋油田プラントを参考にした中央となる人工島の建設やさらなる浮島の接続によって解決をし、また広がった事による出店と人材不足の繰り返しによって一大商業島になりつつあった。

10. 情報収集

パーパルディア王国では、レミールを通さない限り日本の布は手に入らず、浮島に態々買い付けに来るものが多いが、販売量が少なく買える商人は少なかった。

横暴に振舞おうにも、ミリシアル帝国の商人もいるためその様な事はできず、丁寧に対応する日本の商店から大人しく購入していた。

「親方様、今回は布の買い付けが4反物分、砂糖が200kg、ウオツカを五瓶確保できました」

「うむ、これで今回も大もうけが出来る」

今日もまた、パーパルディア王国から商人が買い付けに来ていた。決して多い量ではないが、需要に対して供給がまったく追いついていないため、これだけでも武装商船を往復させるだけの価値を生み出してくれる。

「さて、今回も寄っていくとするか」

商人は部下を連れて混み合う往来の中を進み、一際大きくテーブル席が店の外にまで広がった店舗に入る。

「親方様、この店は？」

連れられてきた次期番頭は周囲を見回している。

「ここでもしか飲めない酒を味わえる場所だ。おい、ビールをくれ」

最近では浮島でしか飲めない冷えたビールの売れ行きが良く、高い身分でありながらわざわざビールを飲む為に訪れる好事家も現れ始めている。

酔えば口が軽くなり、また話す内容は重要なものが多くなる。

「ロウリア国がクワ・トイネに向け海軍を出航するそうだ」

「蛮族なのに数は多いからな。まったく仕入れが面倒になる」

「クワ・トイネの食料は安く、輸出に向くというのにまったく」

こういった酒場の客にはいくらか諜報員も混ざっているが、商人達の会話から得られるものは多い。日本が発展していると分かれば、やっかいものだが情報封鎖で文明圏ぎりぎりの国家であるならば、探られる心配もない。

「お客さん、新しいビールが少しだけ入荷してますよ」

常連客には優遇する。時折少数ながら別種類のビールも販売し、気分をよくすれば口はなおさら軽くなり情報は得やすい。

「おお、ではそれを頼もうか。つまみも頼むぞ。金には困つたらんからな」

趣味や趣向、売れる物や各国の情報、交流実験や情報操作をしている浮き島は、様々な理由をつけてここでしか食事が出来ないものが多くある。

クイラの獣人達が働き始めて一ヶ月、新たに一つのことを判明した。

それは獣人族は身体能力が標準的な人間に対して1.5倍程度優れており、肉体労働および兵力として非常に優れているということ。訓練の結果次第では国外での軍事活動要員とし、主に獣人を中心とした国营軍事会社を設立してはどうかと計画が始まっていた。

11. 東伐軍排除

ギム防衛陣で戦闘が進む中、クワ・トイネから援軍の依頼が入った。
《ギムに攻めているロウリア軍の排除》

やはり数の暴力相手には防衛だけで精一杯な状況で、ギムから離れた場所に陣を張られ膠着状態になっていたのだが、数を頼みに囲まれつつあった。

防衛省 会議室

「さて、クワ・トイネが払える金額には限りがある。最低限かつ最大限敵を恫喝するには何がよいかね？」

「ギム防衛陣に入り込ませ、大規模爆弾による空爆でしょう」

「クワ・トイネの兵士達は、夜の時間に撤退させます。ロウリア軍は我々の供与した火炎放射器を欲するでしょうし、情報の限りでは兵の質が低いため防衛陣内部の略奪を行う可能性が高いかと」

「なんでしたら、退避は我々の車両で行い、代わりに酒をおいてきましようか」

「迅速な撤退を考えれば我々が手を貸すのもいいだろう」

「空爆にはMK 77を主に投下、一発のみデイジーカッターも投下します。防衛陣の再使用は当分の間不可能になりますが、生存者の精神は壊れる可能性も高く軍事組織としては壊滅するでしょう。」

「気が付けなければ、クワ・トイネの兵も危険ですが」

「それがよからう。ではクワ・トイネに作戦内容を伝え、早急に準備を進めるように」

数日後、大型トラック数台を利用しギム防衛陣から兵士の撤退が始まっていた。

「武器など置いて搭乗を急げ！」

「もつと奥に詰めて座れ！」

「全員だ！ 全員搭乗を急げ！」

30台のトラック満載にギムに残っていた兵士を押し込み、真夜中であるため、暗視ゴーグルを装着しライトもつけずに夜道を疾走する。

翌日、空となったギム防衛陣にはロウリア軍が侵攻、大量に残されていた酒や食料を奪い、橋頭堡として野営陣地から物資を運びこみ、篝火を焚いてその日はクワ・トイネの美味しい食料や大量の酒で宴会を始めた。

空からも確認できる篝火にほとんどの兵士が防衛陣の内部にいることが確認できる。

その様子を空から爆撃機であるA-10編隊が爆装し飛行していた。

「投下を開始する」

Mk77 焼夷爆弾をロウリア軍に向け投下。炎が立ち上り兵士が焼き尽くされていく。火炎放射によってトラウマを持っていた兵士達は狂乱状態になり、四方へと逃げようとするが面投下による焼夷爆弾によって次々と焼き尽くされ、運よく城門近くに居た一部の兵が仮設の橋を越え撤退していく。

「状況確認、仕上げを投下する」

デイジーカッターを投下、キノコ雲をあげギム防衛陣を焼き尽くした。

その様を生き残ったロウリア軍の兵士は見て、何人かはその場に立ち尽くし、神様か神龍の怒りでも買ったのかとほとんどが地に伏せて許しを請うていた。

数日後、帰還したモイジ達が見たのは防壁が砕け、黒焦げとなった生き物の残骸が大量に散らばる廃墟であった。

「では、モイジ様、敵軍壊滅をご確認頂けたのならば、作戦完了書類にサインを頂きたいのですが」

「あつ、ああ わかった」

僅かながら生き残っていたロウリア兵は居たものの、ギム防衛軍よりも生存者は少なく、その殆どが発狂していたため戦いになどならなかった。

モイジが書類にサインを確認する。

「では、我々は火炎放射器を回収して帰還いたします。防衛陣の修復依頼があります場合は、別途ご依頼ください」

啞然としているモイジに頭を下げると、手早く工作部隊が溶解し破損した火炎放射器の撤去作業に入った。

12. 表と裏の工作

パンの缶詰の発注量が徐々に増えていき、需要に対して供給が間に合わなくつつあるため、神聖ミリシアル帝国に新たな提案として

・火も水も使わない防災食（カレーライス、牛丼、シチュー&ライス、和風ハンバーグライス、中華丼）

・濃縮野菜ジュース

・野菜シチュー缶

・インスタント麺（カップめん・カップスパ）

・フリーズドライ果物

上記の試食会を開いたところ、どれも好評であった。

どうやら缶詰や保存食というものはあっても、やはりまだ味を向上させるという段階には達していないようで、全品の発注とミリシアルの酒肴に合わせた新開発依頼が入った。

以上の事から神聖ミリシアル帝国の艦船は長期航海には多くの補給艦を必要としている事も、そしてその際には食による士気不安定さも判明した。

これならばお互い友好的に振舞う事も可能であり、我々は彼らが必要としない鉱石資源を、彼らには必要とする加工食品の提供と相互に利が在る。

浮島には神聖ミリシアル帝国の商船が常駐するようになり、他国も一目置き高圧的な交渉を押しってくる国家は減ってきている。

我々を攻撃すれば、少なくとも取引のあるミリシアルやパーパルディアが怒る事だろう。予想通り、戦って武力を証明せず、さらに情報を出させずに国威を上げることが出来た。

占領して富を奪うのは下策、いつ寝首をかかれるか、反乱を起こされるか考えなければならぬ。交易で利を得ればその心配はしなくていい。無論平和的交渉という心労はあるが、殺される心配よりは負担も少なくコストもかからない。

「レミール様、申し訳御座いません」

潜入工員である日本の商人はレミールの前に深々と頭を下げる。「ロウリア国のクワ・トイネ侵攻に伴い、クワ・トイネを経由しての輸送が困難になっておりまして、献上が一週間遅れてしまいました」

表向きは大した船も持たず、航続距離が短いためクワ・トイネを経由して物資を輸送している事になっている。ロウリア軍の動きが活発となり、船が困難になっていると表向き伝える。

「また、クワ・トイネ公国がレミール様に食料20万トン进行献上したいと、書状を持ってまいりました」

メイドに手渡し、その書状がレミールへと渡る。

その書状には良き取り計らってもらえるよう、個人的に献上する量と国家に献上する量が書かれている。むろんこの書状は日本の口添えであり、食料による交渉を日本に任せてもらえるよう話していた。「足りぬな」

レミールは数字に×を入れ新たに書き直し、メイドに渡すと日本の商人へと戻される。

「これだけの量を献上するよう伝えよ」

そこにはレミール個人に40万トン、国家に対して100万トン献上するように訂正されている。

「レミール様のお言葉、確かにお伝えいたします」

クワ・トイネは日本によって物流インフラが整備された事で、食料の生産量はますます増えており、日本に対して5000万トン輸出しても、まだ1000万トン以上の輸出余剰が出ていた。

「しかしレミール様、クワ・トイネは現在ロウリア王国から攻撃を受けています。いつまでクワ・トイネが献上出来るかどうか」

「蛮族共など、黙らせる事は容易い。お前達は言われたとおり献上しておればよい」

「失礼致しました。それではこちらが今回の献上品で御座います」

メイドが運び込んできた台車の上には、様々な色に染色された高級絹の反物と、食料や砂糖などの目録が記録された用紙が置かれている。

「もう下がってよいぞ」

丁寧な頭を下げ、そのまま部屋を出て邸宅を離れた。

半月後、大量の食料をパーパルディア皇国に献上する為、多くの船舶がクワ・トイネから出航、献上を見届けるためにパーパルディア皇国、第三外務局の船が派遣され、盛大にもてなしを受けたあと、献上品を積んだクワ・トイネの船と共に帰国の途についた。

しかしその事を知らず、ロウリア海軍はクワ・トイネの輸送船を攻撃してしまった。

ロウリア国海軍は意図せずパーパルディア皇国への〈献上品〉が載った船を〈偶然〉襲い沈めてしまったのだ。献上品の確認をしていたパーパルディア皇国の職員の報告により、ロウリア国の行為が伝えられ、その事を知ったパーパルディア皇国は気分を害し、第三外務局の懲罰軍が送り込まれ、ロウリア海軍は4000隻もの大軍であったが、その1000隻近くが沈められた。

むろん献上できなかった分の食料はもう一度クワ・トイネに献上させている。

直接戦わずして〈偶然〉に〈タイミング〉よく食料を献上することで、船数隻と少数人員を失っただけでロウリア国海軍は大打撃を受けた。

すでに建前上クワ・トイネは、パーパルディア皇国のレミールの管轄する従属国家であり、パーパルディアの非公式保護国である。その国を攻めるといふ事は、パーパルディアに牙を？くのと同じとなった。

管轄官や管理官など送られない様に、従順に従っているようにみせ、必要なほど下手にでる。命令など下されなくても指示された量より多く食料を献上し、ただただ平にレミールに恭順の意を示す。

皇族に属し、第一外務局責任者であるレミールの下であるならば、皇帝ルディアスを除いて意見できるものは居ない。

食料以外価値のない文明圏外国のクワ・トイネに望んで赴くものなど居らず、管理するものが不要なほど従順であればよい。

13. 軍事会社

家賃・食費・アイス無料、武具・給与は直接支給で募集をかけ、クワ・トイネやクイラに居る獣人の傭兵を雇い入れる形で国营軍事会社の設立が成された。

・両刃剣

刃物メーカーに依頼、恐ろしい切れ味に獣人達は当初は扱いに困った。

・コンパウンドボウ

・コンパウンドクロスボウ

慣れない作りながら、単純なものであるので慣れるのは早かった。

・鎧

当世具足をベースに設計され、近代的な素材で作りに上げている。

警務してるクイラの傭兵とは異なり、統一した物となったことで、軍事組織という側面は強くなったが、時折商人たちから聞こえてくる声は、蛮族の兵という評価のようだ。

しかし体面上あくまで日本は文明圏国家相当であり、正確な軍事力を表にはならない。

アルタラス王国

最近近海をミリシアル帝国の艦船が往来し、時には食料や水の補給で寄港する事もあり、船員から文明圏国家相当の技術と国力を持つ新興国家が東方に出来た事を伝えられ、王女ルミエスは外交を行うために浮島に訪れていた。

「発展した国ですね」

ルミエスは整備されたレンガの道や、一定の形で整形されたブロックの出来の良さから、文明程度を自国より高いと判断した。

お付の外交官は荷物を運びながら後をついていく。

「ルミエス様、日本の大使館です」

浮島と接続する中央の人工島に造られた、レンガ一階建ての質素な大使館、本当の姿は地下にあり最新設備と自衛隊員が常駐している。

獣人の兵士が警備している門を通り抜け、質素にまとめられている通路を通り抜けると大使館貴賓室に向った。前もって書面を届けており、本日外交に向けた話をすすめる事になっている。

係に案内され、開かれた扉の中にはテーブルを迎えに

「ようこそいらっしゃいました ルミエス王女様」

丁寧に対応する男の服装はクワ・トイネに似ており、文明程度が高いようにはみえない。

「この度は会談の機会を設けて頂き感謝しております。こちらは友好の証になればと、アルタラス特産品であります魔石をお持ちいたしました」

「これは高価なものを、ありがとうございます」

日本にとってはまったく価値がないのだが、それでも表向きは必要であるように振舞う。

「どうぞ、お座り下さい」

この部屋に設置されているイスやテーブル等はクワ・トイネに発注したもの、文明程度を推測できるものはない。

向かいの席に座ってもらい、主題となる話を始める。

「本日は国交開設に向けてとのお話ですが、我々は資源も限られ文明も発展しているわけではありません。一体何をお求めになられているのですか？」

アルタラス王国の文明程度はロウリア王国を超え、第三文明圏では文明国家程度である。

「まずは友好的な外交関係を築くべきだと考えており、何かを求めていると言うわけでは御座いません」

14. ロウリア王国 衰退

中央暦1639年 5月

当初ロウリア国はパーパルディア皇国の国家戦略局から支援を受けていたものの、国策として行っていないかつたため、監査軍は何も知らずに攻撃を受けたとして正当性を主張し侵略を行っていた。

パーパルディア皇国監査軍はロウリア海軍の数の力によって相手を殲滅したものの自らも壊滅しかけ、正式にパーパルディア皇国軍が派遣された。ロウリア王国では諸侯を集め、幾重もの防衛陣を張ったが、地竜リンドブルムや魔石マスケット銃には手も足も出ず、肝心のワイバーンもワインバーンロード相手には不利でしかなかった。

数の暴力を持って何とか抑えているようだが、直にロウリア王国は負ける。ロウリア国王はロデニウス大陸の南側を経由し、王妃と子達を逃れさせた。

クワ・トイネは積極的にパーパルディア皇国の兵団に、レミールの名を持って食料を提供した。一部ではこれでは属国ではないかと、声を荒げるクワ・トイネの役人も居たが、日本側が説得する事で穏便に済ませている。

これもまた、来るべき時を作るための準備として。

日本国内 富士演習場

出資者はVIP席に、通常席には一般参加者にカメラマン達が集まり、観覧席は大混雑していた。

「では、オイ車のお目見えです」

多くの歓声とフラッシュが集れる中、倉庫から大重量大型ゆえの地響きと土煙を上げて演習グラウンドに現れる。

見た目は紛れもなく設計図どおりのオイ車ではあるのだが、外見こそ似せているが、34億という限られた範囲で出来うる限りの復元であった。

当初の設計より広めで分厚い履帯。

74式から流用した720馬力ディーゼルエンジン。

重量を支える太く丈夫な転輪。

現有戦車と同じ軽量高強度の装甲鋼板。

主砲は150mmがないので、短砲身化した25口径155mm榴弾砲。

副砲は47mmがないので、ブッシュユマスターIII 35mm機関砲。

機関銃に7.7mmがないので、7.62mm機関銃。

ボルト止めのようで全面溶接作り。

内装や操縦方法も現代的に直されている。

いくらか新技術で軽量化されているといっても総重量は110トンにもなる。

盛況のうちにお披露目は完了し、これを機会に

・グレートパンジヤンドラム

・カリーニン7

・試製新砲戦車（甲） ホリ

・冰山空母

・300級飛行船

様々なクラウドファウンディングの展開が始まった。

どれも予算を国家が捻出しなければ問題ないとして、国家として黙認されているのだが、一定期間の維持費を含める事を条件と成された。

そしてオイ車については今後正式運用される事になり、正式名 旧44式戦車 通称オイ車 で登録がなされた。

15. 次の一手

中央暦1639年8月

ロウリア王国は滅亡し、パールディア皇国の属国となった。管理官が派遣されたことで、資源は搾取され国民は奴隷同様の扱いを受けている。

ロデニウス大陸南部海域に逃亡し、日本に保護という名目で捕らえられた数名を除き、王族は全て処刑された。

浮島の一区画で軟禁されてはいるものの、相応の生活は保障していた。時が来たとき、親日国家としてロウリア王国を復興させるために、基本的な国家運用方法や平和主義思考など教育しておく。

再び民衆の不満やはけ口として戦争や弾圧を行わないよう、その様な事が時間稼ぎとしかならないことをきっちりと指導を行う。

防衛省 会議室

「そろそろパールディア皇国への国力削減を行う」

「ルディアスとレミールの権力はほぼ拮抗しています。皇族と民衆はややルディアス派ですが、貴族や商人はレミールに傾いています」

「陸・海・竜の半数近くはレミールに従うでしょう。貴族軍人の多数はレミール派です」

「デュロ駐留軍はレミール派の軍人貴族が多く、全面的にレミールに従うと思われまます」

「肝心のルディアスとレミールの仲は？」

「レミールはルディアスに好意を向けていますが、ルディアスは権力を持つレミールに猜疑心を持っているようです」

「レミールもまた、ルディアスが最近距離を置くことに疑問を持っているようです」

「皇帝ルディアスには地位を、皇女レミールには財産を狙っていると情報を町に流せ。 職員には、日を見てさらに貴族達の財産を没収すると噂を流せ」

第二兵器技術研究所

「魔石についてある程度わかりました」

日本国内に魔法適正があるものがないため、分析と言うよりアルタラスから購入した書類から運用方法を考察が行われた。

「火の固体魔石は石炭に近く、煤煙を出しません。蒸気機関につきまして極めてクリーンな運用が可能かと思われます」

「なるほど、それは火力発電にも流用できる可能性があるわけだな。

研究を続けよう」

華もあれば予算もある第二兵器研究所では、魔石の科学技術利用の研究が行われていた。

第三兵器技術研究所

クラウドファンディングは広く数十種類展開されたが、やはり良くてプラモデルどまりであり、そのほとんどが達成する事無く消えていった。

・300m級飛行船

日本飛行船が主の出資。

・XF5U

フライングパンケーキ、航空技術愛好会が主な出資。

・五式中戦車チリ

戦車極みの会が主な出資。

以上が想定額を超える事ができたが、これ以上増えても仕方がないため受付を停止された。

オイ車と同じように正規運用するため、ある程度の制約や合格ラインが設けられたものの、協力企業によって各自製造が開始。

中央暦1639年 10月

レミールは皇帝ルディアスにより全ての職を解かれ、邸宅への謹慎が言い渡された。

「ルディアス様……何故ですか」

そして皇都に流れる貴族達の財産を没収するという噂。真意は定

かではないが、さらなる軍備拡張を行うために、多くの資金を必要としているのは確かであった。

貴族の財産を没収すれば、その資産は膨大であり軍備拡張に使うことは容易だろう。

「私の……全てが」

屋敷に集められた様々な宝飾品、すでにルディアス皇帝への気持ちよりも、レミールは自らの財産の方が大切であった。

「侍女を呼べー！」

レミールを含めた多くの貴族達は財産を持ってデュロへと逃れた。むろん皇帝ルディアスはこのようなことを許さず、デュロ防衛隊に捕縛を命ずるも、命令を拒否し貴族の兵たちが集まりだした。

これは事実上の反乱であった。

「パーパルディア皇国の皇帝 ルディアスの名を持って、このようなことを許すことはない！」

国家の正当性を言った所で、食料と工業都市を握っているのはレミール側にある。それに伴い多くの軍がレミールに付き従い、皇国軍の5分の2が集った。

今まで日本やクワ・トイネからの献上が行われていた食料によって、自国属領の農業の生産力は落ちており、デュロのレミールに直接献上される為にパーパルディア皇国はいずれ飢える事になるとレミール達は考えた。

しかし日本は非公式にロウリア国を経由してエストシランにも日本及びクワ・トイネの食料を献上し、お互いにすり潰しあう内乱へと発展させる形に誘導する方策を採った。

デュロの行政府にはレミールに付き従う貴族や軍人が集まり、会議室ではこれからの戦略について話し合いが行われていた。レミールは軍の運用については分からないため、皇族としての象徴であり、「レミール様、物資の献上にあがりました」

日本やクワ・トイネからの食料の献上を受け取る重要な役目がある。さらにアルタラス王国から購入した後、日本から魔石の供給も行

う。これによってデュロで兵器の生産が安定し、数的不利も補える。
これでレミール派の生命線はクワ・トイネと日本となった。そして
この供給がある限り、工業拠点を押さえ替えているので優位性は保たれ
る。

他の皇族は巻き込まれないよう口を閉じ、皇宮で事の成り行きを見
守った。

16. 旧兵器・魔王

五式中戦車チリはオイ車より問題が多かった。それはサイズが限られる為に誤魔化しが利かないのだ。

問題となったのは、試製七糎半戦車砲（長）I型、53口径75mmなんて現在の日本には存在しない。限られた予算で新しく一門製作するわけにもいかず、多方面に問い合わせ、僅かな情報を元に探し回ったところ、記念館に保存されている物の中で2門ほど保存状態が良好なものがあつたが、砲弾がないところで行き詰った。

弾薬は消耗品、砲だけがあつてもなんら意味はない。完全な手詰まりであり、結局は五式中戦車案は放棄され、代替案として試製新砲戦車（甲）ホリIが選定された。II型の案も出たが、製造しやすさから判断されたが、これもこれで問題が発生した。

情報によつては連装対空機銃、37mm戦車砲など、自走砲の域を超えた移動トーチカのような装備が成されていた。装甲についても全面傾斜板や機銃や砲搭載タイプなど、どこまで再現するか会議がなされ、

16式機動戦闘車に搭載されている52口径105mmライフル砲を流用。

37mm戦車砲は排除し正面は斜装甲板。

7.7mm連装対空機銃の代わりにM151プロテクター7.62mm機銃。

エンジンは74式の720馬力を流用。

現有戦車と同じ軽量高強度の装甲鋼板と選定された。

中央暦1639年 12月

パーパルディア皇国内で激しい内乱が続く中、トールパ王国にある世界の門に魔王軍が現れた。

多大な犠牲を払いながら魔王軍を防ぐトールパ王国は、各国に援軍を求めると答える文明国家はほとんどなかった。

むしろ日本にも援軍が求められ、魔王復活の報せは日本政府にとつ

て驚きであった。

1945年に帰還した艦隊からの情報では、勇者と呼ばれる者達が討伐に向かい、その後こちらの世界で得た伝承はいずれ解ける封印が成されたと聞いていたからだ。

当時の将兵で生きている人物を呼び出し、分かる限りの情報を精査すると、チハ程度の火砲では効果がないことが判明。

討伐するためには大口径戦車砲もしくは爆撃が必要となる。ただし、今ここで戦力を出せば軍事力に気付かれてしまう。

秘密裏に同時代の船である改装の終わった金剛を送り出した。そして旧44式戦車 オイ車及び完成されたばかりの試製新砲戦車甲ホリを輸送艦と共に、旧日本帝国時代の旭日旗を描かせる。

顔を完全に隠し、魔王及び魔物の討伐が終わり次第速やかに撤退する。

名乗りがどうしても必要なときは「太陽神の使い」とだけ話す。決して関わらず、任務を遂行するだけに徹する。今度は逃がさず確実に魔王を仕留める事を第一任務、第二に捕虜の救助、第三に魔物の駆逐となる。

表向きは軍事会社から300名を派遣、これで対外的に済ませてしまおう。

17. 派遣・懐柔

パーパルディア王国 デュロ

パーパルディア王国にも援軍を求める報はきたものの、パーパルディア王国は外務局を通して断っていた。

しかし、その情報をレミールへと流す。

「レミール様、魔王が復活したトール王国に少数でも兵を送り、レミール様の正当性や慈悲深さを国内外に示してはいかがでしょうか。民はレミール様のお考えに感動するかと」

商人に偽装した日本の工作員は物資を献上する際に、レミールの思考を心地よく兵を送るように誘導する。

後もなく自分に酔いながら進む以外道がないレミールにとっては、この程度の言葉でも充分動かす事ができる。

「私の深き考えを多くの者達が感謝するでしょう。 その者、そのように取り計らいなさい」

側に仕える従者はレミールの命を受けて部屋を後にしていく。

レミールに献上された全ての物資は、その後軍や民間に配分されている。レミールが決定すれば誰も逆らう事はできない。

「我々は小国なれど、レミール様が相応しい存在だと考えております。何かありましたら微力なれどお力添えを致します」

第一の相談役は日本でなくてはならない。だからこそ害がない点については出来る限り協力を惜しまない。

「では、最近臣民の声が悪い。何かよき考えはあるか」

「それでは、レミール様直属の兵隊を用意し、臣民に食べ物を支給させては如何で御座いませうか。 食が満たされれば不満も減りませう」

「食料だと」

食料は献上によって充足している。それでも貴族達が直接臣民に配るなど考えた事もないだろう。

「我々が安価で満足するものを考案いたします」

「よかろう。 やってみよ。 出来の次第によってはお前達を取り立

てよう」

貴族達が基本食さないジャガ芋を集め、それを調理場で大量に加工を行う。塩フライドポテト、ジャガバター、屑肉とジャガイモの塩バター焼き、地味に依存性がある悪魔の炭水化物料理。貴族が食べる高級な食材ではなく、それでも大量に安価に美味しく作れる。

最近では浮島で多く食べられているのだが、国外に買い付けにできる商人以外は知らないだろう。

匂いにつられて兵士達が集まってくるが、レミール様からの命令を伝え、そのまま配給を手伝わせる。安価な木皿を大量に用意し、出来上がった料理を大鍋に入れて兵士に警備させながら広間に移動する。何事かと人々が集まる中、大きく声を張り上げる。

「これはレミール皇女様から、国家のために働く臣民への褒美である！」

レミール皇女から臣民への努力の褒美である事を、大々的に広報しながら町の中で配給を行う。兵士から、中級臣民も下級臣民も、そして奴隷まで全てに対して別け隔てなく配る。

ほんの少しの褒美でもよい、それでも食が満たされれば不満は減る。皇女と言う立場のものが、全ての臣民に対して初めて褒美を取らせる、これだけでも士気と名声は上がる。

一度に用意できる量が限られるため、デユロ内でも10箇所くらい何日もかけて回り、案の定不満は一定まで減り、皇女の慈悲と振る舞いに感謝の声があがる。

「良き働きであった。お前達を相談役に迎えよう」

いままで不満とまではいかなかったが、余り良い言葉が町に流れていなかったが、いまではレミール派への感謝の言葉が広まっている。

これからも一定の期間をおいて食事の配給を行えば、悪化する事ないだろう。

「身に余る栄誉、御期待に答えられますよう尽力いたします」

トップが優秀であるに越した事は無いが、無能でも行動的な馬鹿でなければよい。能あるものに託し命じるだけで国家や組織は回るのだから、レミールには象徴の皇女として振る舞い、美しく強くあれば

よい。

日本がレミールの側で重要な立場に入り込み、貴族達を徐々に排除しながらパーパルディア皇国を自在に操る。

また一歩、パーパルディアに知られずに日本の影響力を増すことが出来た。

18. 対魔王軍

到着した獣人傭兵部隊は、限られた装備でトール王国や他国の兵士たちと討伐に出るも、コンパウンドクロスボウはオーク程度なら問題はなかったが、オーク相手にはほとんど通じないため撤退することしかできず、いたずらに兵力を失っていった。

大型のコンパウンドクロスボウを握る一小隊が、逃げる他の兵士を押しつける。

「どけー！」

獣人の腕力でも弦を引くことができず、一小隊にしか配備されていない強力なクロスボウ 440FPS、牽引ハンドルを回し、装填された矢をオークへとむけトリガーを引いた。

運動エネルギーにして166FP、カーボン製の強力な矢が筋肉を貫き、猛毒のトリカブトを塗り込んでいた矢じり体に突き刺さる。

「どうだー！」

獣人達はオークをにらむように見る。

日本から特別に供与されていた数も限られる毒矢、ヒグマさえも殺すことができる致死量が塗られた特別製だが、それが5本も突き刺さっても死ぬことなく、オークはその場から撤退していった。

この特別製のクロスボウ以外でオークを引かせることはできない。それも三日間くらいは見かけないが、それを過ぎると再び姿を現してしまい、これでは倒すことはできなかった。

パールディア王国から派遣された兵士は、気温からリンドヴルムやワイバーンロードを連れて来る事ができず、マスケツト銃を装備した200名のみ。

マスケツト銃は驚異的であり、オークを仕留めオークが出てこない限りは常に圧倒していた。しかしオークが出てくるとマスケツト銃では仕留めることも止めることもできず、被害を出しながら撤退することしかできなかった。

そのころグラメウス大陸側陸上、コンクリートブロックや鉄板で仮設された荷上場に、陸揚げされたオイ車及び戦車ホリが大地を進んでいく。

王国に近づくと地響きを上げる音に魔物達が群がり、先頭を進むオイ車に襲い掛かるも巨大な鉄の車体に弾き飛ばされ、オイ車前方2砲塔による機関砲の掃射によって撃ち倒されるか、履帯に踏みつぶされていく。

その後方を進む砲戦車ホリは上部機銃で撃ち漏らした魔獣や魔物を片付け、さらにそのあとを複数の73式装甲車が追従する。

装甲車に搭乗する自衛隊員達は、皆ギリースーツを着用し、輪郭も顔も完全に隠している。HK416アサルトライフルかM240軽機関銃を装備し、無言でその出番を待っていた。

任務は魔物及び魔獣の駆除、そして人質になっている人間の救助となるが、人質の優先度はそれほど高くはない。

あくまで救助は正規軍の役割であり、不正規任務に等しい今回は、トールパ王国から話のあったオーガと魔族、そして魔王のみを標的とする。邪魔をするなら正規軍を殺傷こそしないが、武力をもって排除する命令が下されていた。

19. 殲滅開始

トールパ王国北側の防壁は崩されており、魔物が闊歩している状態であつた。

オイ車を先頭に防壁を超え王都に入るとゴブリンの群れが襲い掛かり、ひたすら踏みつぶしながら進み続ける。

一定数を仕留めると逃げ出し始め、73式装甲車から下車し、小隊に分かれ町に入っていく。

市民が大量のゴブリンと数匹のオークに囲まれているのを発見、無言で合図が送られると数人に分かれ、静かに各物陰に隠れながら3か所の射撃ポイントに移る。

所定ポイントに到達し、合図が行わると同時に一斉射撃が行われ、全身をハチの巣にされ地面に転がった。

啞然としている住民をそのままに、各分隊に分かれ魔物や魔獣の排除を開始する。

その頃大通りではオイ車と砲戦車ホリが進み、巡回や生き残りをしていた魔物が群がり引き付けていた。

大通りの中央広間に到達するとオーガがオークキングとオークの集団を引き連れてオイ車の前に現れた。

「タツ、タイヨウシンノツカイ!?!」

オーガが驚いた直後、主砲の155mm榴弾砲が発射され、瞬発式に設定された榴弾はオーガを粉々に吹き飛ばし、オークキングなども巻き込んではいけ飛んだ。

爆発音によって集まりだしたゴブリンとオークが全方向から現れ、オイ車後方の連装機銃砲塔によって薙ぎ払うも、余りの多さに切りがない。

大通りの中央広場で信地旋回をしながら全武装を駆使していた。

そんな中一匹の魔族が翼を広げ空から様子を見ていた。

魔王の側近であるマラストス、過去の戦争でも太陽神を見ており、

オイ車に描かれている国旗からその存在に気付いた。

魔王に報告に向かおうとしたとき、離れた場所で1人の隊員がHK416アサルトライフルの照準を合わせトリガーを引いた。

マラストスは片側の翼を引き裂かれ、飛行するための魔力を練っていた部位が破損し地面に落下。

「太陽神の使いめええ！」

オークやゴブリンと異なり、正確な言葉を発したことで近くにいた隊員達は十分な知性があると判断し、即座にナイフを引き抜いて手足に突き立てる。

マラストスは激痛の悲鳴を上げてのたうちまわろうとするが、ナイフが全身を固定し動くこともままならない。

「魔王はどっこだ」

隊員が問うが、魔法らしき物を使おうとしたのを確認すると、即座にナイフで深く手足をえぐる。

絶叫が上がり魔法が中断されると再び繰り返す。

「魔王はどっこだ」

淡々と質問を繰り返し、十数分後には体を切り刻まれ、出血死したマラストスの死骸が転がった。

通信によって救助を切り上げ、魔王がいるという本陣に向かって行軍を開始する。

20. 魔王排除

救助された市民は魔物が居ない南側に逃げ始め、騎士団と合流をしていた。騎士たちは状況が読めないものの、装備を整え南門を出ると北門へと向かっていった。

そのころ、自衛隊の本隊は魔王軍本陣に向け砲撃を開始していた。オイ車の主砲である155mm榴弾砲によって陣は吹き飛ばされ、オーガは巻き込まれて碎け散り、魔王ノスグーラが現れる。

「太陽神の使いか！ 今度こそ仕留めてやろう!!」
地面から巨大な石の人形が現れ、踏みつぶそうと歩き始める。

オイ車の少し後方で待機していた砲戦車ホリは、105mmライフル砲の照準を合わせ、砲撃によって破壊するがまた元に戻っていく。
「砲戦車ホリは砲撃を継続、こちらは元凶を仕留める」

向かってくる巨大なゴーレムを砲戦車ホリに任せ、オイ車は前面の2砲塔及び主砲の照準を魔王に合わせ、2砲塔に35mm機関砲の掃射が行われる。

最初はいくらか当たっていたのだが、途中から表面に到達する前に光の壁のようなものが現れ弾かれはじめる。

しかし衝撃は通っているようで、防ぐような体制をとりながら、地面に少しずつめり込んでいっているようだ

「対象生物 魔王。 機関砲では効果を認められず、主砲照準合わせ」
主砲である155mm榴弾砲の瞬発式信管は魔王にあたる前に弾け、身を覆っていた何かが消え去る。

その直後に撃ち続けられていた35mm機関砲弾が体を貫き、魔王は胴体や手足をばらまきながら地面に転がった。

魔力が絶たれたゴーレムは岩くずに戻る。

「太陽神の使いめえええ!!!」

拡声器を使ったような広範囲に魔王の声が響く。

「良く聞け!!下種どもよ!!!近いうちに魔帝様の国が復活なさる!!!おまえら下種の世界も間もなく終わるぞ!!!圧倒的な魔帝国軍によって、お前らは奴隷と化すだろう。はっはっはは……」

予言じみた事を喋った魔王の体は白くなると砂と変わり消えていった。

念のため隊員が砂の一部を確保、解析に回す。

「任務完了。撤退する」

様子を遠巻きながら見ていた騎士たちが駆け寄り、自衛隊に話しかけるが何一つ答えることなく、たった一言。

「太陽神の使い」

と答え、73式装甲車に乗り込みトール王国を離れていった。

南門の城壁から神聖ミリシアル帝国の情報局員ライドルカは状況を見ていた。

太陽神の使い。過去魔王軍をグラメラス大陸に追い返したという。

今回も再び現れ、魔王を完全に排除してしまった。その軍事力は今の神聖ミリシアル帝国を上回るほどだろう。

本来ならば追って詳細に情報を調べるべきだが、私一人ではそれは不可能。北壁からトール王国を離れていく様子を見ていることしかできなかった。

数枚は魔写に収めておく事は出来たが、神聖ミリシアル帝国でもあれだけ巨大な鉄の陸船を造るのは不可能だろう。

ラヴァーナル帝国とは異なる兵器の方向性、そして魔王が語った魔王の復活、急ぎ帰国し報告を上げなければならない。

2.1. 内乱前・情報とは

パーパルディア王国のルディアスはトーパーを支援しなかった。

だが、レミールは支援を行い、その兵士たちが太陽神の使いをその目に見たことで、そして共に戦った国々は周辺国との覚えが良くなっている。

どのような状況であれ、太陽神の使いが戦うその場に居た事が名誉となったのだ。

もはやそのままにしては置けないと、ルディアスは自分に従う兵士を集め始めていた。

ロウリア王国に配置している兵力も減らし、属領の統治兵さえも一部引き上げ、圧倒的戦力を整えている。

しかし、そのような事を知らず、統治組織や各国の領事をしている者達は相も変わらず、アルタラス駐在外交官は王国に対して、鉾山と王女を奴隷として献上を求めた。

ルミエスはその状況のために商船に偽装した船で東に逃れ、その船は浮島へと向かっていった。

浮島・趣向品

超硬質小豆バー、とても安価なお菓子で最近浮島で人気が出始めている。

持ち帰ることは難しいのだが、わざわざ冷凍用の魔道具を運び込み、大人買いを超えて段ボール買いしていく貴族や商人も少なからず出始めていた。

限られた趣向品などから、不思議な国であり本国にはもつと多くの物があるのではないかと、本国の位置を探る者も出始めている。

しかしミリシアルや最近国交のなったムー国が穏便に済ませていることから、無理な方法に出る国はない。

むろん、時折本国の位置を探ろうとする商人はいるのだが、“不慮の事故”によって遭難してしまっている。幸い海流は日本本土から離れているので、万が一にでも到達することはない。

最近では滑走路をムーやミリシアルが利用しているが、日本は一切使用せず、物資の輸送も機帆船となる日本丸などを利用し、表向きもできうる限り隠している。

最近ではワイバーン用の滑走路を求められており、獣人達に給料を払って比較的浅い場所であるとして、夜の間には輸送した浮島を接続し、土を埋め立てるなど拡張が進められている。

情報局員ライドルカによってオイ車に描かれていた国旗と、扶桑が使用していた国旗が同様であるとわかると、情報局員の一部が浮島に派遣していた。

「確かに、あれは太陽神の使いから、与えられたものです」

大使館ではミリシアルの外交官が穏便にはあるが、同じ国旗を使用している点について問われていた。

「ここよりさらに離れた地におりますが、訪れることはできません。

招待もなく訪れれば攻撃を受け排除されます。我々は守秘と引き換えに技術を与えられています。それも限定的なものです」

「では、我々が外交を行いたいと伝えても不可能だと?」

「日本も、連絡船が来ない限り連絡を取る方法がありません。彼らは太陽神のみに従う平穏を望む国家です。その平穏を破ろうとする者には容赦がありません」

どこまで信じるべきかとミリシアルの外交官は考え込んでいたが、どちらにせよ日本としてはミリシアル帝国を迎えるつもりはない。

いまだ万全の状態ではなく、攻撃衛星の打ち上げから通常兵器の量産まで軍事拡張中である。

「では、連絡船が次に来た時には我々が外交を行いたいと、代表が領事館に来てもらえるよう連絡を頼みたい」

「それでしたら構いません。ただしいつ来るかは私共もわからないことはご了承くださいますようお願い致します」

ミリシアル帝国が怪しんでいたとしても、無理をして太陽神の使いを怒らせる事はないだろうと読んでいる。

彼らは列強であり世界平和の指標の一つ、探りを入れてくることは

あっても実力行使に出る可能性は低い。

2.2. 内乱・正当性

パーパルディア皇国内では本格的な内戦がはじまり、ルディアス派とレミール派による交戦が始まった。

一進一退ともとれる戦いに両派閥共に戦力を失い、属領にほころびが発生し始めていた。

「レミール様、属領にも食料を配給しては如何でしょうか？ また管理官をレミール様に従う貴族に入れ替え、今までとは異なる政策を実施すればさらなる名声につながるかと」

属領を汚職の酷い管理官ではなく、従順な貴族の領地支配体制に戻す。

そしていずれは貴族を州の代表者として選出し、貴族体制から徐々に民衆からの選出に移行させる。一世代の時間がかかる可能性があるだろうとも、これが最初の一步となる。

「よかろう。概要をまとめ提出せよ」

属領にはレミールに従順な貴族を領主として選出、レミールの指示として支配における注意点やなすべきことをまとめた書面を渡し、それを実行できる限り領地であることを認める。

もちろん指示されたことを実行できなければ、貴族としての地位と財産をはく奪し、新たな貴族に据え変えられる。

そのようなことを理解しつつも、元は国家であった巨大な領地を与えられ、歓喜してレミールを賛美して各地に散っていった。

貴族には私兵で領地を支配させ、引き上げた兵力はすべてルディアス派の軍とぶつけることができる。

もはや内乱は消耗戦の形を取り始めていた。

日本 第二技術研究所

「元々エアロスクラフト社からML868の中型は購入していましたし、最大サイズも設計構造データだけはありましたから」

ML86X

全長

280m

最大幅	108m
最大高	66m
最大速度	222km
最大高度	3600m
最大航行距離	9445km
最大積載量	500トン

全世界最大のモンスター飛行船、それが航空自衛隊基地の滑走路で係留されていた。

時間こそかかっても、基本となる構造情報があり、参考となる現物があればそれほど長い時間かからない。

「テスト飛行1000時間をクリアしましたので、運用は可能です」
 「これで運用の幅がかなり広がる。500トンはかなり魅力的だ」
 500トンと言う膨大なペイロードを持つ輸送機は、今後いかなる状況でも多くの力となる。

日本 第三研究所

「XF5U フライニングパンケーキも完成しています。こちらはまあ、アメリカの技術者が好意的に協力してくれましたので」

全長：8.5m
 全幅：11.1m
 幅面積：44.13m²
 武装：12.7mm機関銃x6
 Mk82 500lb爆弾x4

どこからどうみても空飛ぶ平面なカメもしくは空飛ぶ円盤な形状をしている。

幸いなことに現在でも運用されている民間機DC-4が同エンジンを搭載し、中小企業がエンジンメンテナンス部品の発注を受けていたため、たやすく製造することができた。

完成品は鉄製ではなく、利点である木材のハニカム構造や合成繊維などを使用して軽量化に努め、短距離飛行能力を優先している。

制空機としては多大なる問題がある代わりに、短距離離着陸及び大

きなペイロードを持っている。

今後はムー国から航空機を一機輸入できれば、半年から一年で販売することもできるだろう。

23. 潮流・存在

ルミエスは東に逃れ、浮島に到着していた。

日本はパーパルディアの友好国であるため当初は絶望していたが。

「聡明なるレミール様に訴えては如何でしょうか」

ルミエス自身にとって想定外の提案であったが、第三文明圏で保護ができる国などなく、身の安全を図るためには危険を冒す必要があった。

ルミエスは覚悟をもって、日本からの書面をもってデユロを訪れ、前もって日本によって準備されていた手はず通り、直接レミールの元を訪れ書状を渡した。

「そのような命令を皇国がするとは、まるで内部を統制できていないではないか」

属領統治や他国威圧による占領はもちろんレミールも理解していた。しかしやり方が余りにも品がない。

レミールも女性であり、性奴隷として目の前の女を差し出せという、皇国の命令書にはさすがに気分を害した。

「レミール様、ここはルミエス様を保護し、慈悲と正当性を世界に訴えては如何でしょうか」

「もし、手元に置いていくのが問題でしたら、クワ・トイネ公国にでも滞在させては」

レミール自身が気分を害しているのだ、あとは都合良く押すだけで充分。

「ルミエスと申したな。我が名の下に保護を約束しよう。デユロからクワ・トイネに赴くが良い」

ルディアスが行う政策とは異なる道を進み、このままいけば女尊男卑の法令もレミールは通しそうだ。

浮島

ミリシアル帝国の領事館員が増えたのだが、スパイ活動まではいかないが、島を調べるような頻度が増えていた。

少々未熟な諜報活動ではあるが、厄介であることに違いはなく、急遽ではあるがミリシアル帝国との対話を行う事とした。

用意されたのはクラウドファイティングで制作された巨大飛行船 ML86X。オイ車及び砲戦車ホリを搭載し、浮島へと向かっていた。

浮島から見える距離に巨大な船影が見えると騒ぎとなり、日本の大使館が呼びに行くことなく、ミリシアル帝国の外交官は窓からその状況を見ていた。

「まさか……」

ミリシアル帝国にも飛行船はある。だが、ML86Xほど巨大なものではない。

啞然としている中、日本の外交官の使いがミリシアル大使館に訪れた。

「太陽神の使いがいらつしやいました。お会いになりたいのですから飛行場にお出てください。日本の外交官も向かっております」

「わっ、わかった。私もすぐに行こう」

浮島の飛行場に降り立った巨大飛行船、太陽神の国旗が描かれ、多くの人々が驚きながら眺めていた。

接続されたタラップから3人の人間が下りてくる。

着物を着用し、顔には様々な和面を付け、日本人と同じ人種と気付かれないよう、配慮しているのもあるのだが、日本と作法が違うということを明確にしたいのだ。

日本大使館の者は敬うように差し出された紙を、丁寧に受け取り下がる。

これで一応ではあるが上下関係があり、他国であると明確にしたい思惑がある。

日本の用が済んだ事を確認し、ミリシアルの外交官であるファイアームは前にでる。

「私は神聖ミリシアル帝国の外交官、あなた達は太陽神の使いであると間違いないだろうか」

少しフィアームの方向を向くが、体までを向けることはない。

「あなた達と話すべきことはありません」

筆頭と思われる者は再び飛行船に向かっていく。

代わりに後ろに控えていた2名が前へと出る。

「筆頭は忙しいのです。補佐である我々がお話を聞きましょう」

本音を言えば不満ではあるが、会談の約束をしていなかったのだから仕方がないとフィアームは割り切る。

「まず質問にお答えします。我々は太陽神の命により行動をしています」

「そうですか。それでは正式な会談を行い、世界会議に向けて貴国へ大使館の設営などの話を」

「我々の全ては太陽神のために存在します。太陽神の命がない限り、国内に迎える事はできません。世界会議というものにつきましては、一月後に担当をここに送りお聞きしましょう。それで宜しいでしょうか」

「……わかりました。では一月後に」

有無むを言わさぬ言葉の強さに、フィアームは了解してしまった。

「それでは失礼いたします」

巨大な飛行船に全員が乗り込むと浮島を離れ、飛行場には降ろされた多くの物資と、外交官達だけがその場に残されていた。

24. 会談・分裂・介入

中央暦1640年 4月

浮島に再度訪れた太陽神の使いと、神聖ミリシアル帝国の外交官
フィアームとの会談が行われた。

会談の場所は巨大飛行船内の会議室である。

「我々はラヴアーナル帝国と戦う事を、太陽神から命じられています。

それ以外の事について干渉する予定はありません」

「しかし、我々神聖ミリシアル帝国もまた、ラヴアーナル帝国の復活に
備えています。来るべき日も近く、世界が協力する必要がある
あります」

「確かにその通りでしょう。我々は準備を進めています。その技
術は大変危険であり、他国がもし悪意をもって使用すれば、世界が滅
ぶでしょう。例えいかなる国であろうと、我々の国に受け入れるわ
けにはいきません」

核の技術、宇宙開発の技術、大陸間弾道弾の技術、そのどれか一つ
でも世界に広がれば、いずれ世界を壊してしまう。

倫理観がまだ育っていないこの世界ではとても危険な物だろう。

「神聖ミリシアル帝国は、そのような事は決してしません」

「神聖ミリシアル帝国なら大丈夫でしょう。ですが万が一にでも、
たった一人の諜報員によって他国に流れ、悪用されたら危険です」

ここまで危惧されている事を説明され、いささか納得しかねる内容
にも口出しはできない。

ミリシアル帝国の軍事技術もまた、文明圏国家に悪用されれば、厄
介な事になるのは間違いない事を理解していた。

「外交官3名でしたら、飛行船で空中から見学できるよう手配いたし
ましょう。ですが国内に降りることも、映像で記録することも承
できません」

余りにも厳しい内容にフィアームは眉をしかめる。

神聖ミリシアル帝国を軽んじるような発言が多く、気分が良いもの
ではない。

「我々神聖ミリシアル帝国は第一列強であり世界で最も進んだ国家、余りにも無礼ではありませんか？」

「如何なる国であろうとも、例外なく我々の対応は平等です。全ては太陽神の意思のみ、太陽神様に命じられない限り、以前に下された神命通り、誰一人受け入れることはございません」

対応は全て一律とする。優先すべきは神命であると言うことを明確に、そして例外はなく不遇でも特別でもないことをはっきりしておく。

ここまではつきりと言われてしまえば、これ以上何かを言ったところで何も変わらない。

フィアームはそれ以上要求を伝えることはできず、会談は終了した。

パーパルディア皇国のルディアスに従っていた地域では、求心力の低下による離反が発生し、ロウリア王国では反乱が発生していた。

ロウリア王国を制圧していた軍団が離反し、新国家パーパルディア国を名乗り勝手に独立を始めた。

そのような事をルディアスが認めるはずもないのだが、レミール派との内戦中であり、兵力を送る余裕はない。

またレミール派でもない軍にクワ・トイネ公国が食料の供給をするわけもなく、パーパルディア国はどんどんと飢えていった。

その為クワ・トイネ公国の国境に、ワイバーンロードや兵団が略奪に現れ、非常事態に陥った。

しかし統制が取れない軍隊など、質の悪い略奪団となんらかわらない。

砕けた防壁に石を積んだり、死体で埋まっていた堀を整え、整備しなおしたギム防衛陣地には、ワイバーンも配備し備えていた。

そのほとんどをパーパルディア皇国に引き上げ、残っていた少数部隊から、さらに引き抜いた大隊規模にも満たない軍など、精銳を集められたギム防衛隊4万にとっては敵として相手にはならなかった。

この事態を日本は予想していた。だからこそ、定められていた行動

を開始した。

25. 圧力・命令・支配

日本からレミールに宛てた書状が届けられ、レミール派の者達は大騒ぎとなった。

【太陽神の使いが、レミールとの会談を求め訪れる】

神話の時代から再び現れてトール王国で魔王を討伐した、その一団がパーパルディア皇国に訪れるというのだ。

急ぎ準備が整えられていく中、巨大な飛行船がデュロの近くに着陸し、格納庫からオイ車や砲戦車ホリ、そしてギリスーツを着用した隊員が下りてくる。

地面を揺るがす超重戦車オイに、ほとんどの貴族は力の差を理解し恐れたが、何人かの貴族はこの力を奪おうと考え始めていた。

レミールやパーパルディア皇国の外交官達は、飛行船内の会議室へと案内される。

船内は通路も明るく、完全に空調で制御された空間に

「ようこそ。パーパルディア皇国 代表の皆さん」

会議室に設けられた会談場では、和服と和面で顔を隠した外交官がレミール達を待っていた。

「どうぞおかけください」

レミールはソファーに座るが、外交官や軍の責任者はソファーの後ろに立ったまま、直立の体制を取っている。

「パーパルディア皇国、デュロの軍はトール王国に魔王討伐に、軍を派遣したのは確認しています。 単刀直入に問います。 我が国は魔王と戦うために存在します。 あなたの国家は何の為にあるのですか？」

望むべき回答を言わせるために誘導してきた。

ここで思惑とは異なる発言をするのならば、傀儡にする必要性もない国家となる。

「世界を平和にするために、全世界をいずれは支配し……」

レミールが話していること、これはパーパルディア皇国の皇族に広がるルディアスの考えである。

そのことは日本の諜報部が確認していた。

「汚職が広がり、他国の王族を性奴隷によこせと、要求する国家にそのような事ができると？ いずれは内乱を起こされ内部から崩壊するだけでしよう」

内乱と言われ、パーパルディア一団の眉間にしわが寄る。

レミール派は間違いなく、内乱を起こしている側なのだ。

「支配でなく、融和。それが出来なければ、ミリシアルやムーのようにはなれないでしょう。何度文明を発展させても、国家は衰退します。今のあなた達が動いたように」

今回は日本に仕組まれたことではあるが、いずれパーパルディア皇国は内部崩壊をしていたことに違いはない。

汚職の蔓延、苛烈な属領支配、募る不満、篡奪を続けなければ保てない国家など長くはもたない。

いずれは属領の民が全員酷使され死亡するか、腐敗で自滅する未来しかないだろう。

「しかし、あなた達はルディアス派よりは、まだ可能性があります。

国を改革しなさい。その為の知識を与えましょう」

レミール達は国政に干渉されることと、太陽神の使いの知識を得られるという二つを天秤にかける。

神話の力を持つ国家からの誘い、列強第一になれる可能性。

「断るのなら、我々が関わる事は二度とないでしょう」

富を与え、内乱を起こさせ、最後に国を売らせる。

レミールの後ろでは、外交・政務・軍務の三人が話し合い、自らの利権について小声で話している。

ここでそういった者を全て捨てて、判断できるかどうか、ここがレミールの正念場となる。

国家、そして国民の為に他の何かを捨てられるか、それとも自分自身のために他の何もかもを捨てるか。

「我々としては、一旦この話を持ち帰り」

「ルディアス様は私を不要として、全ての職を解き謹慎を申しつけました」

後ろに控える者たちの言葉を遮り、レミールは話し始める。

「このままでは私達はルディアス様にとって裏切り者、もはや留まる事は出来ないのです」

「過酷な道ですが、知識を有効に利用できれば、ムー国にも迫るほど急速に発展できるでしょう。そうすればパーパルディアに住む人達も、あなたを認めるでしょう」

「よろしく願います。私達にどうかお力を」

いまだパーパルディア皇国内を一強に統一することや、文明を発展させる手間はあるが、長らく時間がかかったものの、ようやくパーパルディア皇国の一角が落ちた。

第三文明圏はもはや直接下さなくとも自由に操れる。

飛行船を降り、レミール達を見送る。

「最後に、もし、悪意を持って世界、そして我々に牙を剥いたとき」手を上げると、超重戦車オイ車と砲戦車ホリの砲門が、隠れて襲おうとしていた集団を吹き飛ばす。

飛行船から妙な動きをする兵士の動きは丸見えであり、襲撃しようとしているのは分かっていた。

「魔王軍と同じく、世界から消滅させます。その事をお忘れなきように」

驚いているレミールや貴族たちをあとに、外交官達が飛行船に乗り込むと、超重戦車オイ車と砲戦車ホリも格納庫に搭載され、飛行船はパーパルディア皇国を離れていった。

26. 配備・エモール王国・TALOS

パーパルディア王国の一角は落ちた。

残りにすべきことは統一による完全傀儡化。そこでレミール達に向けて技術の開放を行う方針を取る。

定期的に相談役を浮島に送らせ国政への関与、基本としては相談役として現在いる日本人をそのまま利用する。

そして利用度を高めるために、技術として魔石による蒸気機関とパーカッションロック式銃の構造図を提供。

現物として日本で製造された火の魔石式蒸気機関と、火の魔石蒸気式トラクターを贈与した。

危険な実用試験はパーパルディア王国に行わせる意図もあるが、ルディアス派と戦うためだけではなく、ロウリアに生まれた新しいパーパルディア国の排除にも力が必要であった。

現在デュロ工場において急ピッチで生産が行われている。

兵力の整え直しを行い、3か月で本国の制圧を終わらせ、ロウリア王国で勝手に独立をした一派を排除しなければならない。

政治体制の変更から領地の運営方法、あらゆることに手を付け、国を立て直す。

そうしてようやく国家として使う価値が発生する。

中央歴1640年5月中ごろ、浮島にエモール王国の者達が訪れた。

彼らの言い分では竜の神々の一端が降臨されているとお告げがあったとして、合わせると風竜騎士団と共に、かなり強引に話を進めに来ている。

むろん日本として受け入れるわけにもいかず、しかし引くこともしないエモール王国に困り果て、龍神様に伺いを立てたところ、沖繩にて会うこととなった。

風竜によつて集まったエモール王国の代表たちは、飛行船に誘導されながらも沖繩の波照間空港で待つ龍神様の元へ急いだ。

体長150m近く長い巨体を横たえ、退屈そうにしている姿を見ると、エモールの竜人達は、急いで駆け寄りその場に膝をついて崇めた。風竜達もまた、その場に伏せている。

「偉大なる竜の神々に座する存在、我らはあなた様の子です」
龍神は見下ろすように見るものの、あまり興味がないようにみえる。

《我は汝らの神ではない》

その言葉に頭を下げていたエモールの外交官や戦士は驚いて頭をあげる。

《汝らの神に近く遠き神が我、汝らは国に帰るがいい》

「なれど、なれど竜の神々に属するお方！ 我ら竜人族にとっては偉大なる神に変わりは御座いません！」

「どうか我らがエモール王国にお出でくださいませ！」

《我は古来からこの国の龍神也。この地から離れる気など無し。国に帰らなければお前達を滅する！》

龍神が大きな咆哮を上げ、空中に舞い上がり本州に向かって飛んで行った。

強烈な咆哮を身に受けたエモールの者達や風竜はその場に伏せ、少し経ってから風竜に乗り込み浮島へと向かった。

日本 防衛省

「TALOSの配備が完了しました。 TALOS小隊編成完了です」

【Tactical Assault Light Operator Suit】

米軍で開発されていた強化外骨格、7・62mmクラス程度では貫くことができない全身装甲と、12・7mm重機関銃を手持ちで操れるハイパワー、米軍でも転移直前に正式配備が開始されたばかりの代物だ。

むろん惜しみなく技術協力をした日本でも生産され配備されている。

ただし、訓練と適正な銃火器の生産に手間取り、部隊編成が遅れていた。

「とはいえ、今は使用する必要性がない。従って訓練は継続し備える」

操縦者は空挺からさらに選抜した化け物揃い。

訓練の上ではあるが、TALOS一分隊に一つの基地が落とされている。

それでも米軍で配備されている精鋭TALOS部隊と比べるとやや劣るくらいだろうか。

27. 新たな敵対国家

偵察衛星から、大規模な戦争を行っている国家が確認されていた。それは第二文明圏を攻めており、所有しているだろう軍事情報も大まかではあるが、旧大日本帝国とほぼ同一程度であることは大いに驚きであった。

急ぎムー大陸の小国を経由し、諜報員をレイフォルに送り込む事は成功したものの、得られた情報によると、外交による平和活動は不可能であり、裏工作もパーパルディアと異なり非常に難しい国家であった。

その国家の名を グラ・バルカス帝国 という。

本来であれば傀儡化したパーパルディア皇国を利用しつつ、平和かつ融和策を取りながら魔帝に備えるはずであったが、都市への大規模砲撃を行う国家相手に対話で解決できるはずもない。

世界への関わり方について、方針変更を余儀なくされた。

レイフォル諜報員から得られた情報では、日本と同じく国内への資源問題を抱えており、それを解決するために第二文明圏の制圧に当初動いたようだ。

その後は野望ともいうべきか、世界制圧を目的に軍事拡張をしている様子もある。

不思議なことに軍の運用形態や兵器レベルや形状などから、帝国時代の日本と非常に酷似していた。

ならば急所は資源、第二文明圏から完全にたたき出し、冷え上がるまで海上封鎖を行う。

パーパルディア皇国に取った方策は、比較的穏便な方法であったが、グラ・バルカス帝国に対しては、脅迫・暗殺・懐柔・飢え、技術力がなまじ高いだけに手段を選ぶ余裕はない。

潜入工作員を増員し、グラ・バルカス帝国、レイフォル領の切り崩しは油断なく進められる。

グラ・バルカス帝国 レイフォル領

建物や道は大正時代の日本によく似ており、上下水道の設営も進められている様子であった。

しかし道行く国民の表情は悪く、時折兵士による厳しい声が町に響いていた。

「文明程度は紛れもなく大日本帝国程度のようにです」

「秘密警務も居るだろう。注意しろ」

気付かれないよう過ごしながら、他国の商人として入り込んだものの、入国や物資検査に暗に賄賂を求められること数回、憲兵に罰金の名目で金銭を徴収されること2回、帝国時代の日本でも質の悪い兵士が問題行動を多々起こしたが、グラ・バルカス帝国ではそれくらいが標準的兵士の質のようだ。

砲撃によっていくらか損傷しているものの、その為レイフォルにある小さな二階建ての家を借りる事が出来た。

街中はそこら中の家が修理中、もしくは立て直して壊されており、住民の活気は全くない。

「長い潜入になる、みな気付かれないよう細心の注意を払い、食料・物資・船舶・輸送、全ての情報を集める」

人数が限られる以上、工作をするにもかならず情報が必要になる。まずは行動するため表向きの信頼を得る必要があった。

28. デュロ・レイフォル

レミールに従う属領は30ほどではあるが、離反する様子もなく徐々に落ち着いているのとは異なり、ルディアス派の急激な求心力の低下、そして属領を抑えていた領地軍の引き上げによって属領は次々と反乱を起こしていた。

日本からの知識提供や国政への介入もあるが、属領を任せられた貴族たちもそれなりであり、出来うる限り命令書に従うことで、属領民の不満が少しずつ減っていたのとは異なる。

もともと、当初派遣された半数の貴族は実行できなかったため、財産と地位没収の上で首の入れ替えが行われたのだが、その没収した財産は臣民と領地に分け与え、属領の支配を確固たるものとしていく。

技術提供によって現在ではパーカッションロック式銃と、蒸気機関の生産が行われていた。

パーパルディアの技術レベルで量産をするのはまったく不可能であったが、生産するだけであるならば不可能ではなかった。

「レミール様、蒸気機関車の第一号車が見えてまいりました」

短いながら線路も敷設され、煙突から蒸気を吹き出しながら、火の魔石式蒸気機構を積んだパーパルディア初の機関車がデュロ駅に到着、多くの住民が歓声を上げている。

「線路の敷設も進めば、今後は馬ではなく蒸気機関車によって大量かつ長距離の輸送が可能となり、パーパルディア皇国はさらに発展するでしょう。最新式銃の配備も始まり、いずれは鋼鉄の船の建造へと我々の未来は順調に進んでいるのです」

レミールの演説によって歓声はさらに大きくなる。

蒸気機関車公開の場に訪れていたレミールの周りには、それを祝う貴族や高官が集る。

そんな中、一般人がレミール達の居る場所に向かおうとして兵士に止められていた。

「一般人は近付けませんよ」

突如銃声が響き、小型のマスコット銃によって兵士は倒れ、一気に

レミールまで近づき、もう一つの銃を向けトリガーを引いた。

翌日には軍の志願者が増えていた。

潜入していたルディアスに従う暗殺者がレミールを襲い、護衛にいた兵士が3名が犠牲となったのだ。

多くの人の目に留まってしまったことから、中立に近かったデユロの臣民もレミール派に完全に傾き、軍への志願や工場の稼働率向上など、パーパルディア皇国首都へ侵攻への気運が高まっていた。

グラ・バルカス帝国 レイフォル領

グラ・バルガス帝国の情報が集まる中、パーパルディア皇国とは異なり、汚職はあるものの組織は比較的しつかりしており、特定の人物を崩すのは難しいと判断、グラ・バルカス帝国幹部の事故死と物資の横流し、そして買収から少しずつ始めることとなった。

焦らず、一歩ずつ、確実に。

29. エストシラント

ルディアス派はレミール派の軍によって押され、すでにエストシラント寸前まで迫っていた。

レミール派は侵攻と同時に突貫作業で進められる線路の敷設により、往復が可能となった大規模輸送によって物資の心配がなく、迅速な補給が可能。

もとより同軍であったことから兵の質も同じであり、食料や物資が潤沢であるレミール派とは異なり、食べ物もそれほど多くなく、属領軍を集めたことで物資不足に陥っていた皇帝ルディアスの軍は士気も低い。

中央歴1640年6月

皇都から逃げ出す住民も多く、皇族もレミール側につくものが増えたことで、ルディアスは皇帝の座から降りた。

レミールは皇帝の座に就くことはなく、空席のまま、次代皇帝が浮島で太陽神の使いからの勉強を完了するまで、副帝として立つと正式に発表。

パーパルディア王国の皇族が、太陽神の国から学ぶという話は世界中に広がり、第一や第二列強からも留学を望む声があがるも、丁重に断りを入れることとなる。

副帝となったレミールは政策として、離脱した属領33はそのまま独立を認め、過度の汚職をしていた貴族や官僚の大規模な粛清を行った。

反発する貴族や軍部の者は居たものの、属領30の支配で頭角を現していた新鋭の貴族達や、今回の内戦で出世した軍人はレミールを支持し、反発する者達を抑え込んでいた。

実力を示す機会も与えられ、賞罰がはつきりしていることから、賛同するものも多かった。

デュロではパーカッションロック式ライフルの量産が行われ、ペツパーボックスピストルも少数ながら生産され、近衛兵に先行して配備されていた。

中央歴1640年7月

パーパルディア皇国では急ぎ軍の再編成が進められ、新設された統合外務局から、正式に旧ロウリア王国に建国されたパーパルディア国に対して、不当な占拠を止め引き上げを命ずるも拒否、討伐軍が編成されロウリア王国への派遣準備が行われた。

立場が人を作るといえるのは詭弁であり、適性のあるなしに大きく左右されるが、どうやらレミールには執政者として才能があったようだ。

相談役である太陽神の使いから、精力的に国家運営に関する知識を吸収し、改革に取り込んでいる。

新たなレミールの政策には、むろん保守的な者達の反発もあるが、有力な貴族・軍部・臣民の女性陣への根回しを忘れず、今まで蔑ろにしていた基幹産業や内政を重視。ルディアスが国土拡大の皇帝というならば、レミールは内需と安定を重視する副帝であった。

一方独立した属領は各々に活動を始めるも、リーム王国による侵略によって隣接する属領が二つ落とされ、独立した国家は救援を求める事ができる他国もなく、パーパルディア皇国の属領との国境線まで迫ってきた。

30. レイフォル領

情報収集を進めるうち、主計幹部による具体的な汚職の情報を得たことで、用意していた金塊と人工ダイヤモンドを賄賂として、嗜好品面で食い込む方針とした。

タバコや酒類、甘味など軍にとっては嗜好品、食い込むのは楽な事ではないが、一度成功すれば汚職などしている者達に近づきやすい。

レイフォル領では一軒しかない高級店に主計課の幹部を招待、最高級料理を店側に依頼し、個室で対応をする。

主計課の幹部とはいえまだ若手ではあるが、切り崩していく第一歩としてはふさわしい。

「我々のようなものにお時間を頂き、ほんのお礼でございます」

レイフォルで購入した菓子箱の中に、お菓子の代わりに延べ棒を詰めて差し出す。

文明力を気付かれないよう、樽と陶器に詰めて持ち込んだ酒類、そして金の延べ棒。少々パーパルディア皇国よりも予算はかかるが、

「ふん。蛮族の割には心得ているじゃないか」

中を確認すると、若い幹部は満足そうに椅子に背を預ける。

「グラ・バルカス帝国の方々には、嗜好品を卸させて頂けないかと考えておりました」

取り出したお酒をコップにつき、相手に差し出し様子をうかがう。

見下した目で見ながら酒に口を付けると、少し驚いたような表情を浮かべた後飲み干した。

「まあまあだな。いいだろう。他にも持ってきてるんだろうな？」

「もちろん、こちらに準備してあります」

これで一つ、レイフォル基地内部に入る手段ができた。

中央歴1940年8月

レイフォル領グラ・バルカス基地に物品の納入をするため、基地内部に正式に入れることになり、そこでまた新たな主計課の幹部を経由

し、基地司令部にウイスキーを贈った。

物資の納入が行えるようになれば、関りが自然と増え使える弱みが見つかり、それがまた食い込む手段となる。

仲間内とはいえ賭博や女に入れ込んだ借金や、秘密警務にばれるとまずい案件を持つ兵士など、脅迫に向く兵士。

有能であり軍を効率的に運用する排除すべき幹部、金で都合よく運用できる幹部、徐々に判明して行く限りでは、陸軍や空軍に暗殺すべき人材はそれほど多くはない。

むしろ金や嗜好品で動かせる人材が多く、生かしておいたほうが都合がよかった。しかし海軍はそうではなく、わかる限り非常に精強であり兵の質も高い。

暗殺するにも海上に居ることも多く、輸送や補給で寄港している間しか狙い目がなかった。

暗殺の準備として、レイフォル産密造酒作りを始める。検死技術や取り調べ方法も判明したことから、良い酒を存分に飲ませ泥酔した後、最後に飲ませて中毒死させる。

その為にレイフォルで手に入る作物で、質が悪いもので毒性を含むものを使用、調べれば密造した酒による中毒死と思われるだろう。

数日後、陸軍の主計課の少佐が川で溺死しているのが見つかった。軍警察が調べたが事故として片づけられ、日本と酒肴品納入について取引のあったことは闇に葬られた。

3.1. 変わらぬ英国紳士・グラメウス大陸

日本の転移に伴い多くの外国人が転移前に帰国。しかし日本に残ることを選んだ在住外国人もいた。

クラウドファンディングでオイ車が通った事を知り、英国紳士達は設計図から模型、そして必要な工数から予算を用意し、ぜひとも製造をしようと政府と軍に詰め寄った。

その熱意に負け、製造許可が下りたことで、日本国内にある英国自動車工場総出で生産を始め、何を思ったのか改良も加えた。

Excaltibur (エクスカリバー) 戦車

- ・ 76mmの代わりに短砲身105mmライフル砲
- ・ 現行のアルミ装甲材＋空間装甲
- ・ 砲塔部12・7mm機銃
- ・ イギリス自動車製ディーゼルエンジン
- ・ 紅茶セット

豆腐のような装甲車のような箱形の後部を持ち、前部砲塔旋回範囲も100度の奇抜な戦車。

非常に軽量で軽戦車ともいえる古い設計思想であったが、全備重量28トンかつその速度は63kmにまで達するなど、評価される点多々あった。

優れた重量バランス、軽快な機動性と車高の低さ、複数同時に空挺輸送も可能な重量。

欠点とされていた装甲の薄さも、最新技術である程度解決され、操作系も改善。

16式機動戦闘車と非常に酷似しているが、車高に関しては遥かに下回っている。

陸上自衛隊では山岳地帯や不整地帯向けに、少数を正式に採用してはどうかと議論も始まっており、これをきっかけに他国も陸海空に対して協力的に技術考案をすることになる。

また一方で非常に問題視されている点もあった。

日本の戦車は90式を除いて山岳や河川の多い国内防衛に向き、平

地の多い地域での運用には不適切であると、その為各国の協力を得ながら90式の改良に取り掛かる事になる。

グラメウス大陸

トーパ王国からグラメウス大陸北部に、魔王残党軍と思われるものが確認されたと世界に伝えられ、再び太陽神の使いが現れるのではないかと、各国から兵の派遣が行われ、1万の軍勢はトーパ王国に集まっていた。

「トーパ王国北方騎士団、団長アボン。 総指揮をとる立場に推薦され、尽力させていただく」

集まった軍勢の纏める国家にはトーパ王国騎士団が務め、大規模な軍が世界の壁北側に展開していた。

「パーパルディア皇国 銃砲士団 アロン団長」

もちろん、レミールの命令のもと、パーパルディア皇国からも最新装備で身を包んだ銃士隊が送られてきていた。

むろんまだ国内情勢が安定していないため、精鋭部隊を派兵する事は出来なかったが、それなりに信頼出来る部隊を出していた。

完成したばかりの魔石式蒸気トラクターも運び込まれ、新たな銃器に各国は驚かされたが、軍規も非常に厳しいらしく、言葉遣いから態度まで律しられ、今までとは余りにも違うパーパルディア皇国には他国も非常に驚いた。

「日本国 傭兵部隊 部隊長 ウオーバン」

相変わらず日本からは獣人の傭兵部隊が派遣されたが、今回は100名の精鋭部隊が含まれる。

鍛冶師に依頼して制作された50振りの日本刀が、特に近接戦闘を得意とする獣人に配備されている。

また今までとは異なり、クロスボウの矢についても変更が行われた。

40人は相変わらず毒矢が配備されているが、10人のみ非常に危険な鏃が配備された。

矢じりが交換できる特別な矢に対し、特殊ケースに収められた5個

の鏝。C4爆薬を仕込み対象に打ち込むと爆発する。

技術開発部の悪乗りで開発されたものであったが、威力測定では2重のレンガの壁くらいは粉碎できることが分かり、毒矢では対処しきれない相手の為に用意された。

32. パーパルディア皇国・グラメウス大陸・レイフォル

パーパルディア皇国では現在多方面に軍を展開していた。

ロウリア王国を占拠している集団の排除、リーム王国と国境線でのにらみ合い、トーパ王国への派遣など、パーパルディア皇国でも少々無理が出ていた。

一方で文明は急速に発展している。

簡易的ではあるが軍を動員し、属領を含めて国内に上水道や下水道を敷設、衛生という概念を国中に広めつつ、食料生産や蒸気鉄道による物資輸送に力を入れていた。

食料を十分に生産し、衛生環境を整え死亡者を減らせれば、技術を対価に食料や奴隷を求める必要もない、そう日本では分析された。

つまり技術を対価に、文明発展に回せる資源を得られる商業国家となれるはずである。

いまだ安定した国内とは言えないものの、パーパルディア皇国は変わりつつあった。

グラメウス大陸

侵攻している魔王軍残党討伐軍はとある地点で交戦状態に入っていた。

前哨基地と思われる場所では、大規模とまでは行かないものの、1万近い魔獣の数に対して戦闘状態に入っており、少なからず人が出ていた。

「オークキングにはパーパルディアの銃士隊に対応願え！ 到着するまでは防御に徹しろ!!」

体長3mもある巨大な獣相手には弓や槍では対処できず、パーパルディア皇国の銃以外では対応が難しく、討伐はなかなか終わらなかった。

「オーク30体が現れたぞ！ 魔法騎士団をこちらに回せ!!」

「ゴブリンが多過ぎる！ 東側には増援を！」

大規模な軍団になれば命令系統をはっきりし、編成を整えなければならぬが、その力はまだまだなく逐次投入という悪手を取り、魔王残党軍討伐は非常に遅れていた。

レイフォル領

次の段階として銃器の入手を諮り、老朽化による廃棄予定であった歩兵装備の一式の横流しを受けた。

やはり大日本帝国時代の銃器に非常に酷似しており、38式歩兵銃や鉄帽など基本的には同様であり脅威度は低い。

問題は戦車や装甲車、戦闘機の情報なのだが、それも解決する案件が飛び込んできた。

「海軍からの情報です。 10日後、輸送船団が到着しますが、機関不調の問題で一隻が5日ほど遅れているそうです」

「すぐに上に連絡を。 我々も人員を交代する」

大口の案件に手を出す以上、潜入工作員を入れ替えなければ、足がついてしまう。再潜入の手間はかかるが、安全に事を進めるのに妥協をしてはならない。

レイフォル海域に潜んでいた一隻の海自艦が、慎重にグラ・バルカス帝国のレーダー及び哨戒網から逃れ、静かに罫を投下し再び哨戒網から離れる。

待ちに待った拿捕することができる船舶、これを逃してしまいうわけにはいかない。

設定時間になり展開、スクリューに巻き付く鎖を下げた小型ブイが広がり、何も知らずに航行していたグラ・バルカス帝国の輸送船はスクリューを破壊された。

通信は現在妨害中であるため、現状これ以上打つ手はないとしてグラ・バルカス帝国の海兵は脱出艇に乗り込み離れていく。

暗闇に紛れ漂流する輸送船を、海自の船が曳航しレイフォル周辺海

域から離れる。

輸送船に積み込まれていたのは、数こそ少ない物の戦車や装甲車、銃器や軍服、一部の機密書類など、正確にグラ・バルカス帝国の軍事力を測る事ができる物資が満載されていた。

33. 日本・グラメウス大陸・レイフォル

発展した技術を持つ国が日本一国になった為、技術発展の行き止まりに到達する可能性が高い。

それを避けるために、発想の転換、滞りなく様々な技術を発展させるには、如何にするべきか。

自由かつ物事に、既存に囚われない発想ができるかと会議を行った所、それは食生活に関わるのではないかと至る。

硬い頭を柔らかくする食生活といっても、日本は和食や洋食など様々であり、元々こだわりのない自由ともいえる。

複数の提案があった。

イギリス曰く、《紅茶とマーマイト》があれば発想は自由になる。

ドイツ曰く、《黒ビールとソーセージとジャガイモ》があれば何でも作れる。

しかし人体実験を国内で行えるわけもなく、実験的にパーパルディア皇国の技術研究者向けに、紅茶とマーマイトの常用的摂取、作業食をソーセージとジャガイモ、食事酒と寝る前の寝酒にビールを供与した。

一月絶たず、パーパルディアでは様々なものが発案された。

- ・ パイクリート
 - ・ 16連発ペツパーボックスピストル
 - ・ 大型ラツパ銃
 - ・ 後ろ込式マスケツト銃
 - ・ 蒸気機構2連結エンジン
- など、梓に当てはまらない発想と開発が進められている。

一定の効果が出たとみるべきか、発想の混乱と判断すべきか日本側も困り、数年経過を見るとして、今後もパーパルディアには紅茶等の供与継続を決定した。

魔王残党軍討伐軍では、駆除した魔物たちが縄張りとしていた小さな前線基地で会議を行っていた。

「それでは、ここより北へ魔物討伐の継続を決定いたします」

グラメウス大陸に展開していた魔王残党軍討伐部軍は、指揮官同士の話し合いにより、壊走した魔物の討伐を行うとして、北方面に侵攻することとなった。

「北西には日本傭兵部隊・パーパルディア、北はトーパー王国、他国は北東を担当する」

3方面に分かれ、魔物討伐にグラメウス大陸に侵攻している様子を、偵察衛星から逐次時状況を確認していたのだが、北西の一区画は分厚い雲に阻まれ、状況確認できない可能性があった。

その為先行して偵察部隊を乗せた小型機を飛ばし、最低限の情報を得ることにしたのだが、想定外の情報が入った。

城塞都市と思われる領域の確認。

このため少数ながら兵士及び外交員の派遣が決定され、安全を確保するためTALOS小隊の護衛が決定された。

レイフォル

消息を絶った輸送船の一件で海軍による探索が行われ、周辺海域に海自艦の展開が不可能になった。

その為、潜入作業員は通常の取り入りに変更し、いずれは永世中立を表明しているムー国にも攻め入ると情報を得るに至る。

情報を得ることは成功しているものの、買収は難航していた。

「このような物を渡されても困りますねえ」

にやけた表情を浮かべながら、机の上に置かれたダイヤのネットワークス、グラ・バルカス帝国陸軍の中佐は見ていた。

「いえいえ、この度の取り計らいの細やかなお礼です」

中佐から陸軍第4師団長への賄賂を流してもらった。

「ボーグ殿も機嫌も良く、またウイスキーとやらを持ってこいとの話だ」

「ありがとうございます」

上層部へ賄賂を流すために、この中佐を挟むしか方法がなく、その上なかなかの量の賄賂を要求してくる。

おそらくボグに渡る予定の賄賂も中抜きしている事だろう。

34. グラメウス大陸・レイフォル裏切り者・ムー国

魔物を討伐していく中、補給の必要があるので道を造成しながらのため、時間はかかっているもの順調に北への侵攻が進んでいる。

このまま順調にいけばおよそ15日程度で、城塞都市まで到着すると計算されているが、それまでに一定の成果を上げなくてはならない。

オスプレイによつて農村地と思われる場所に降下、着陸した機内からTALOS小隊が周囲を警戒し、外交官もオスプレイから降りる。

過剰戦力の可能性もあるが、魔物が闊歩する地域に対して、少数で行動をするため外交官の安全を守らなくてはならない。

「魔物の襲撃だ！」

武器を持った集団が、取り囲もうと集まり始める。

レイフォル

ようやくボーグ師団長との面会になり、直接会談の場を得ることができた。

「ふむ、お前達の酒はなかなか良い味だ」

「はい、ボーグ師団長様には30本お届けさせていただいております」

「30だと？ 20しか届いておらんが」

「いえいえ、ボレス中佐に30本お渡ししております」

何か思うことがあるのか、ボーグは少し考える様子を見せた。

「まあいい。 今後は直接私のもとに届けるのだ」

「しかし、私どもでは基地内に入る権限が御座いませんので」

「そんなものわしから出してやる。 次からは直接届けるのだ。 よいな」

「承りました」

ようやく、グラ・バルカス帝国の司令部周辺まで入る手段を得ることができた。

数日後、ボレス中佐は横領及び軍規違反によつて銃殺刑となった。

グラ・バルカス帝国に対して、ムー国でも情報収集が必要であり、大規模電波塔の建設が必要であった。

しかしムー国に対して、外交的アドバンテージがあるわけでもなく、ムー国に対して技術支援も必要であると考えられたのだが、何よりもまずは燃料問題がある。そのためムー国に対して太陽神の使いとして訪れる必要があった。

一から図面を興したティーガー1戦車、解析しても問題ない旧式精油設備の図面、これをムー国に供与する。

対価として、オタハイトから東に少し離れた島に、大規模な燃料備蓄庫および港の建設を行う。

「これを……ですか」

外交官と共に訪れた技術士官であるマイラスは、提示された資料に驚いていた。

ムー国ではどの部分を考慮しても、自分達の持っている技術のはるか先をいつている。

だが、それをわかりやすく、また製造に関する要点まで記載されていた。

「我々としては第二文明圏にも対魔帝の準備を整えたいのです。その場を得る対価としてお譲り致しましょう」

対価とする場所は無人島であり岩だらけで生き物も居ない。しかしムー国領土内に他国の基地が作られるのは、例外にするには余りにも大きい事案である。

だが、対価は余りにも魅力的であり、グラ・バルカス帝国の危険性が高まっている中、あらゆる点でムー国を発展させる情報が目の前にある。

「他にもありますので、こちらへ」

案内された船内格納庫には、グラ・バルカス帝国の戦車と戦闘機が置かれている。

「情報の収集も終わりましたので、今回はこれをお持ち帰りください」
技術にそこまで詳しくないムー国の外交官も、十分すぎる対価と、

立地を求めている理由を理解した。

「上に確認を取りますので、お時間を頂けないかと」

2週間後、ムー国マイカルから東に離れた無人島に、太陽神の使いの基地が建設される許可が下りることとなった。

35. 漆黒の騎士・実用試験準備・輸出準備

エスペラント王国とは当初些細な誤解があったものの、太陽神の使いとわかると、歓迎と共に現状の説明がなされ、魔物に脅かされている事実が判明した。

魔物の町があり、魔物の軍を形成し軍事教練を行っているとのことだが、その数が余りにも多い。

数万ともなると少数の部隊で対処は不可能。本隊へ支援を求め、エスペラント王国仮設駐屯地に試作兵器が輸送されてきた。

今回の件を利用し、実戦テストを行うため様々な物が運び込まれる。

鉱山区を開放するため、編成を整えている最中、突如振動音が響き馬に乗った騎士が仮設駐屯地に向かってきた。

「魔物の襲撃です！ どうかお逃げください！」

農業地区の外壁を破壊し、なだれ込むように魔物が入り込んでいた。

ギリースーツを着用した隊員が銃を構えると、離れた外壁から黒騎士を先頭に、ゴブリンやオークなどが迫ってきていた。

「あれが漆黒の騎士ですか」

防衛に当たっているエスペラント王国の兵士たちが、まるで小枝のように吹き飛ばされ、体の残骸をばらまいている。

「捕えましょう。何かしら情報が得られます」

ワイヤレス式テーザーガンを装備した隊員5名が、テーザーショットガンを構え、3箇所撃ち込み、漆黒の騎士はその場に倒れる。

残りの魔物達は銃撃によって仕留めようとするも、散り散りになり逃げ始めた。

注意しながら漆黒の騎士に近づき、様子を見ると完全に昏倒しているようで、手早く鎧と武器を回収し、妙な頭飾りも取り外す。

誰一人倒すことができなかった漆黒の騎士を、赤子の手をひねるかのようにあっさりと捕縛して見せる姿に、エスペラント王国の者達は啞然としていた。

「気を付けて組み立てろ。ここで爆発したら大変なことになるぞ」

仮設駐屯地内では、現在危険な物体を組み立てていた。

パンジヤンドラム3型

直径3m、クレイモア左右及び正面搭載

電子システムによって精密に制御され、ロケット推進で対象に突撃し、搭載した3方向クレイモアで敵を殲滅する。

ゴリアテ2型

火薬以外を全て市販品で製造され、極めて安価で自走式クレイモアとして使用できる。

どちらもきわめて安価かつ、84式無反動砲6基分の価格で調達でき、その割に火薬の搭載量が大きい為に8倍程度の影響範囲が広い。

今回の対人兵器として実試験をするため、魔物相手に運用するために運び込んだ。

状況によつてはこれも売却するのだが、この世界の文明程度を考えればぎりぎり生産できるところだろうか。

浮島

ムー国から日本に対して、旧式でありマリンの前機種である飛行機が販売された。

むろん太陽神の使いとしてではなく、浮島に住まう日本としてである。

これで一定の技術を吸収したとして、半年後にはXF5U フライングパンケーキを逆輸出することができる。

正式に購入したので、浮島の基地に運び込みばらばらにしている。ここから用意した木材などで作り直し、エンジンはムーから購入する。

軍事兵器についてはムー国が輸出しない方針なので、銃器の搭載はないが逆輸出なら問題はない。

3.6. 神聖ミリシアル帝国・鉱山区画奪還

ミリシアル帝国に対して、ムー国と同じように何か情報を出さなくて平等とは言えない。

その為、レーダー技術の概念のみを公開することとした。魔法について理解が不可能なためではあるが、それでも過剰な情報提供ともいえる、

概念が分かったことで、パルキマイラの一部の技術が判明し、量産までとはいかないものの、試製品が第零号魔導艦隊への配備が行われることとなった。

一方で対価として、火と氷の魔石の高度な精錬方法の提供を受け、火力及び冷却に関して技術開発を行っている。

実用化するには安全確認が必要なため、10年近くかかる事が予想されているものの、技術は一步步進めるもの、時間がかかって当然なこと。

何も知らぬ魔法について、流用性が高い火と氷だけでもまずは十分。

鉱山区奪還のため区画を分ける城門が開かれ、騎士や兵士が魔物達に向かっていく。

その間を抜け、魔物の群れに向けパンジヤンドラムが突進、魔物をなぎ倒すと同時に3方向に向けクレイモアが射出され、数十体のゴブリンが吹き飛ばされ数匹のオークも地面に転がった。

ゴリアテもまた操縦され、適切な位置とタイミングでオークキングとオークの集団のみを標的とし、一気に半数を吹き飛ばした。

実機運用上効果は見込めるも、使用上の注意が必要なため適切ではない。これがパンジヤンドラムの最終結論となった。

ゴリアテについては有効性は見られるも、対戦車火器としての特性が強く、対人や対魔には向かない。

ゴリアテもまた、未来へと至る次の可能性の一つ、対魔帝に対して有用な可能性を考慮し、ドローンシステムの生産を行うとして、飛行

型・戦車型の生産を開始する事とした。

パンジャンドラム及びゴリアテは今後生産されることはないが、技術情報の一つとして記録に残される。

操縦者が危険を冒す事なく、一定数の魔物の討伐に成功。ドローン兵器の運用は避けられていたが、やはり兵士が危険を避けられるのは利点であり、自衛隊としても配備が検討される事となる。

「漆黒の騎士が出たぞー！」

先日捕えた漆黒の騎士は、身に着けていたもの全てがない状態では、極めて落ち着いており攻撃性もなかった。

話も通じる事から対話を行ったところ、頭に妙な輪を付けられてからの記憶が曖昧らしい。これは操られていたことが明白であり、殺す事は適切ではない。

多くの情報を得るためにも、多数の漆黒の騎士を捕える必要がある。

「重騎士隊前へ！ 時間を稼げばあとは太陽神の使いがなんとかしてくれる!!」

「耐えろ！ 騎士の意地を見せろ!!」

漆黒の騎士が振り回す鉞のような大剣を、数人の重騎士が大盾で受け止める。

「居ました。 一名確認」

高所から確認していたところ、スパイ活動を禁止されている状況で、戦闘の経過を見ていた者が一人、他にそれらしい動きをしている者はいない。

「射殺しろ。 頭を残すことを忘れるな」

頭を消し飛ばしてしまうと、誰だったのかわからなくなる。

スパイ行為をしていたのなら、調べるためにも人物特定ができる状態であればならない。

「了解」

TAC—50を構える隊員の照準が合わせられ、高い音を立てて胴

体を貫通し対象の人物は地面に倒れた。

「よし、いいぞ。漆黒の騎士の動きを止めろ」

3人の槍兵が持つスタンランス、単純にスタンロッドの長さを延長したものだ、高電圧の電気が弾ける音が響き、漆黒の騎士はその場で地面に倒れ意識を失った。

簡単に倒せたことで槍兵は驚くも、他の兵士たちは急いで漆黒の騎士の鎧と武器をばぎ取り、頭部の輪を取り除いて捕えた。

37. エスペラント王国・レイフォル

死体の検分が行われ、エスペラント王国側ではすぐに誰だか判明した。

「この者は、技術局に所属していました」

「技術局ですか」

「はい。オキストミノ区が攻撃を受けた時の生存者で、技術局に入ったのですが、いま兵達が家に向かっているはずですよ」

家を探すと白骨死体だけであり、魔道具と思われるものも発見された。日本独自に調べるわけにもいかず、エスペラント王国が現在調べている。

新たな武器を供出するわけにも行かないため、現在ギリースーツを着用した隊員が訓練相手をしているのだが。

「まっ、まいったー」

TALOSを着用した隊員によって、重装騎士10人が訓練用の大槍で打ち倒され簡単に制圧されてしまう。

「正面から力を受け止めてはいけません。受け流す事を考えてください」

余りにも魔物という技術を持たない生物を対象とした訓練が多かったため、白兵戦技術もいまいちであり、基本から鍛え直しが必要であった。

TALOSとて、同型相手に力押しで勝つ事は難しい。だからこそなおさら技術というものが重要視された。CQCなど通常軍よりも非常に厳しく鍛えられている。

弾を込めていないフロントロック式マセット銃の訓練においても、遠距離からではなくショットガンに近い間合いかつ、迅速に攻撃を仕掛け距離を取る

つまり重装騎士と共に移動し、攻守の分担をすることで最大限、現状の武器を有効活用する。

その為には重装騎士が体を張って攻撃を受け止めなければならならず、どちらも連携のミスは決して許されない。

エスペラント王国を国として承認するためには、日本ではなく列強が発言することが一番である。

そのため神聖ミリシアル帝国に、外交官及び技術官の派遣を願うしかないのだが、まだエスペラント王国まで魔物討伐隊は到着していない。

太陽神の使いとして飛行船に乗せるつもりがないことから、道を切り開きながら討伐をしているのを待つ。

正式に道が出来たなら、その時に神聖ミリシアル帝国に伝えればよい。

レイフォル

潜入作業員もかなり入り込み、陸軍及び空軍の動向について、情報を得る事が出来ている。

問題はやはりそこまでであり、海軍だけは上手くいかない。せいぜい詳細な運航計画のみであり、海軍部については指令エリアに入っていない。

一方でかなり問題のある情報が得られていた。

グラ・バルカス帝国は世界会議をきっかけに、全世界に対して宣戦布告を行うというのだ。

余りにも時間がなさすぎる。内部から操る事も離反策を取る余裕もない。

せいぜい技術情報や作戦内容を得る事くらいだろうか。

38. 殲滅戦・事情・事情聴取

ML86Xによって部隊が派遣され、戦車の配備が始まると、慌てたのか大規模な軍勢が西方区域に急遽向かっていることが分かった。

航空映像から全軍を西区に集めていることが分かり、正面から当たる事になるのだが、こちらとしても効果的に罠を仕掛ける事ができるので助かっていた。

大規模な音響兵器（LRAD）、アクティブ・ダイナリアル・システム（ADS）を複数設置。

一体何の道具なのかエスペラント王国はさっぱり理解できていないが、それが兵器であることくらいはなんとか理解できていた。

設置が完了した翌日、魔物の群れが西区域壁に魔物の襲撃が開始された。

「照射開始」

LRADによつて大音圧が直接照射され、体のバランスを崩し次々と倒れていく。気絶するほどではないが、脳さえも揺らし集中力をえぐり取る大音圧には、体そのものも揺すられその場に座り込んでしまう。

無理やり突破してきた集団には、ADSの照射によつて誘導加熱により皮膚表面が焼かれるような錯覚地獄を味わう。

脳を揺らされ、体を心理的に焼かれた影響でまともに動くことができなない魔物を、騎士や兵士が一体ずつ仕留めていく。一時間と保つものではないが、延々と照射を続け、範囲外となった場所から仕留めるのなら何ら問題はない。

一体ずつ丁寧に仕留めていると、大型の狼のような獣が4体現れる。その後ろには黒騎士が隊列を取っており、本隊であることは確かだろう。

「ゴウルアスが出たぞー！」

今までの狼の獣とは違い、象に匹敵する大きさのある角を持つ狼が現れた。

「オイ車、ホリ車前進！」

いまだのたうち回るゴブリンやオークを踏みつぶしながら、城壁付近で待機していた二両が前進を開始。

ゴウルアスの頭部の角が光り、強烈な爆発がオイ車に襲い掛かる。しかし僅かに車体が持ち上がっただけで、爆発に対してなんら損傷を負うことはない。

どうやら主に衝撃波と猛火が主であり、直撃でもしない限り戦車を破壊できるほどではないようだ。

155mm榴弾砲及び105mmライフル砲の照準を合わせ、ゴウルアスを吹き飛ばす。大物さえどうにかしてしまえば、あとは後方に下がり一体ずつ時間を掛けながら仕留めれば片が付く。

順調に片付けていく中、離れた場所に見えていた火山が爆発し、巨大な竜が姿を現した。

騎士や兵士たちが恐怖によって混乱が広がっていく。

それどころか魔物達も慌てふためき、城壁から離れ四方に逃げ始める。

「戦車前へ！」

混乱を抑えるため無理を承知で戦車のみ前が出る。開始された砲撃によって攻撃を受けた竜の視線がこちらに向くと、魔方阵のようなものが竜の口周辺に浮かび上がり、とつさに後退を始めたオイ車の正面が弾け飛び、副砲が歪み履帯がえぐり取られる。

直撃していれば耐えられないだろう。

さすがに戦車などでは対処できず、待機していた航空機による攻撃が開始される。

機銃によって穴だらけになり砕け落ちた首、強度はそれほどでないようだ。

「体が……再生している」

伸びる樹木の枝のように、巨大な竜は失った頭を再生し、削れた胴体を修復し始めている。

「プラナリアと同様だとすれば、総体積の6割を超えて損失すれば再生はしないはず」

急ぎ手順を纏め、翼を機銃により破壊、次に頭部を誘導弾で破壊し、最後に爆装している航空機から投下された5001bによつて胴体を砕く。

手順通りF-35C編隊による攻撃が始まり、飽和攻撃によつて全身が弾ける。

数回上空を旋回し完全に死滅したのを確認、F-35C編隊は帰還していく。

「状況終了」

救助した黒騎士達から、筆頭であるバハラーが紹介され、彼もまた輪による制御を離れ状況を説明してくれた。

彼らは鬼族であり、国を襲つてきた者達によつて姫が攫われ、さらにバハラーを始めとした騎士達が、謎の輪によつて操られていたそう
だ。

操られていた間の記憶は曖昧でありながら残っており、拠点としていた場所を案内され多くの情報や物資を確保することができた。

また、鬼族からの依頼で、彼らの姫を救助を願われた。そしてまた、彼らは以前現れた太陽神の使いをエスペラント王国よりも知っており、新たな情報がある程度得られたことも収穫であった。

「西方海岸に国籍不明船舶を確認、魔道戦列艦と思われるも、国識別旗なし」

攻撃空母かがは、レーダーに映る艦船を確認していた。

「エスペラント王国侵略の重要参考人の可能性あり。座標を送れ」

偵察衛星にマークされ、連携された偵察衛星システムによつて航路を逐次監視、アニウンリール皇国へと入港してくのを確認した。

39. 技術・協力

第三兵器技術研究所

現在エスペラント王国で中破したオイ車の修復が行われており、普段暇な研究室も忙しくなっていた所、新たな案件が飛び込んできた。以前砲身がない為制作不可能であったが、ムー国で生産されている75mm砲を輸入することで五式中戦車チリの制作が可能となった。もちろん加工精度が低い為、切削加工などは日本側ですることになるが、これでチリの生産が不可能ではなくなった。

- ・ 75 mm 榴弾砲
- ・ 7・62mm 機銃
- ・ 車体機銃の削除
- ・ 軽量装甲板
- ・ 74式エンジンの流用

設計図を起こし直し、3か月後にはオイ車やホリ車と共に運用されることとなる。

ラインメタル日本支社

英国紳士がいくつもの実績を残した事にドイツ技術者も奮起し、名戦車の再現に取り掛かった。

ティーガーI及びティーガーIIである。

ティーガーI

むろん56口径8・8 cm KWK 36なんて代物は、国内にはないが、ムー国では砲身が存在していた。もちろん工作精度は低いものの、こちらで手直しをすれば十分なものであったため、複数を試験名目で輸入し手直しを始めた。

10式の120mm新砲の技術協力のための工場もあることから、手直しや車体の製造そのものは難しい点などなく、完成後にはムー国沖に建設中である基地に輸送が決定された。

- ・ 56口径8・8 cm 榴弾砲
- ・ 7・62mm 機銃

- ・ 現有戦車と同じ軽量高強度の装甲鋼板
- ・ 駆動輪の改良
- ・ 車体機銃の削除
- ・ 商用ディーゼルエンジン

実用性の追求と大戦時に不満点であった箇所の改良である。

ティーガーII

ティーガーIIにはクルップ社によつて否定された強化案に10.5cm砲のラフ図がある。

当時の技術では対空砲の10.5cm Kw.K. L/68を砲塔に搭載するのは不可能であるが、現在のロイヤル・オードナンスL7 51口径ならば、機構も小型化されており十分に搭載可能であった。

- ・ 51口径105mmライフル砲
- ・ 自動装てん装置
- ・ M151プロテクター7.62mm機銃
- ・ 大幅な軽量化を目的とした試作積層装甲
- ・ 中空増加装甲
- ・ 車体機銃の削除
- ・ 駆動輪及び履帯の大幅な改良
- ・ サイドスカートの追加
- ・ 90式エンジンの流用

なお、ティーガーIIに関しては、ドローンのテストベッドとして使用される。

当初74式・90式・10式なども考えられたのだが、車内やシステムが最適化されている為、ドローンシステムを試験導入する内部空間の余裕はなかった。

多くの人員で運用される事から車内空間に余裕があるティーガーIIは都合がよく、製造途中であったことからドローンシステムを組み込むのもちようどよかったのだ。

名前もティーガーIIから、正式にケーニクス・ティーガーに変更さ

れ、初のドローンタンクとして運用するために製造開発が進められている。

むろん正式に購入と予算配分が為されれば、製造したくなるのが独逸魂である。

各国大使館や企業への打診、クラウドファンディングの利用などを進めて制作されたのが、独逸面＋戦車＋悪乗りⅡ超重戦車マウスである。

- ・ラインメタル 120mm L55滑腔砲を搭載
 - ・7.5cm同軸砲を排除
 - ・7.7mmを12.7mm重機関銃に変更
 - ・積層中空装甲を多用し、187トンから134トンまで減量
 - ・中空増加装甲の追加
 - ・V型12気筒ターボチャージド・ディーゼルに変更
 - ・駆動系をハイブリットから通常方式に変更
- 装甲に関してはもつとも薄い場所でも150mm、撃ち抜けるものならやってみると言うばかりの厚さである。中空装甲で軽量化しているといっても、材質は現代装甲材であるためさらに硬い。
- 今の技術であれば、まともなマウスを生産することは十分に可能であった。
- 価格の低減と兵装と機能の制限、自動装てん装置も搭載はない。機械式計算機程度は搭載しているが、旧式すぎる。
- 完成後、公開したのちムー国に売却するか、富士演習場で死蔵するか議論がなされている。

40. 訓練・先手

グラ・バルカス帝国に対する備えが必要であるのだが、現状では神聖ミリシアル帝国しか対抗することが不可能であるのは明白であった。

魔帝でもない相手に日本が主力として対応するのはコストがかかる。ムー国に対して、人材を用意する。

「訓練……ですか」

「魔帝に備え、ムー国の戦力を計りたいのです。陸軍及び空軍一部隊、新鋭戦艦一隻を求めます」

建設中の無人島基地に、ムー国の外交官を呼び会談を行っていた。さすがに兵力をよこせという内容にムーも難色を示したが、量産体制に入れていないティーガーI、生産するために公開された予備技術情報だけでも、ムー国は軽く見ても5年は鋼鉄関連の技術が進歩している。

「グラ・バルカス帝国について何かわかりましたか？」

「それは……現在分析中ですよ」

提供された兵器を解析し、銃器や戦車について出来る限り情報を集めている。それはムー国の30年近く先の技術で作られ、簡単に製造できるものではなかった。

作れなくはない。だが量産は難しいといったところだ。

「我々の提供した情報と比較し、協力を得たいとの考えに至りましたか？ 日本が貴国に販売打診している飛行機も、我々が公開した技術の一部が元となっていますよ」

危険で甘美な誘い。最新技術の塊である戦艦と航空機の提供と引き換えに、それを超える技術を持つ国によって訓練を受ける。これは国家として大きな利となるのだが。

その技術が流出するというリスクが伴う。

「上に報告しますので、お時間を頂ければと」

ムーから建造中のラ・カサミ級戦艦一隻、マリン型航空機20機と

パイロット20名、自動車機工兵20名、歩兵30名、以上が派遣された。

ラ・カサミ級戦艦はそのまま日本に曳航され、対潜対空艦として改装が進められる。完成後訓練を行う。

マリンについてはばらばらに解体し、全てをX5FUへと作り変え、自動車機工兵はティーガーIで訓練に使う。

教導団として基礎からすべて叩き直す必要があった。

グラ・バルカス帝国に対抗する為、神聖ミリシアル帝国の協力が不可欠。その為ミリシアルに対して、懐柔策を取る必要性が産まれた。例えばグラ・バルカス帝国が何かしらの圧力を掛けたとしても、屈しなくてもらっては困る。

レーダーについては以前の概念公開に伴い、どうやら製造が曲がりなりにもできている情報が入っている。

必要なのは対空能力と対潜水能力、しかし対空については電子システムが必要であり、これを公開するわけにはいかない。

だからこそ、古来の防空側戦術について概念を公開した。音速を超える相手には無意味ではあるが、レシプロ機であるならば、十分な効果を得られることは歴史が証明している。

潜水艦についてはアクティブソナー及び対潜迫撃砲の概念を公開した。

ミリシアルの技術者は随分と驚いていたが、エスペラント王国から得た情報から、魔帝が海洋性の魔物を従えている可能性を説明し、急ぎ開発するよう念を押した。

4 1. 水龍・電磁機兵器・光学兵器・想定相手

浮島の周辺では水龍が出没しており、長いこと注意をしていたのだが、まるでイルカのように人懐っこく、それどころか言葉が通じる事が多かった。

彼らは水龍と呼ばれ、人の営みや争いに興味はないようだ。

形や大きさこそ異なるが、生態はシャチのようなものではないかと考えられ、使役した例がないのなら契約をしてはどうかと議論がなされた。

海洋に探査等をするにも、彼らの縄張りであり争いになつては大変だと、交渉を試み、彼らは知性が高く、蛸型海魔と引き換えにチョコを混ぜた飼料を、定期的に等価交換。またこちらから何かを頼む場合も、チョコ飼料を対価とすると取り決めに成功した。

彼らはとても理解力も記憶力も高く、水中に沈んでいる遺跡がないかと尋ねたところ、複数の沈んでいた魔帝の遺跡が発見され、水没していたものの見たことのない人型兵装と船を発見することができた。

水龍の協力を得ながら空気注入や穴をふさぐなどしてサルベージに成功し、戦艦と思われる船舶を現在輸送中である。

大和・長門の改装は順調に進行、現在最終段階として、電磁加速砲塔の搭載が行われていた。

戦艦という大きなペイロードを利用し、魔帝が持つという大陸間弾道コア魔法を迎撃する為、開発と搭載が進められている。

一方で、魔帝が多数の誘導弾を搭載している可能性を考慮し、戦術高エネルギーレーザー (Tactical High-Energy Laser、THEL) の搭載も行われている。

全てが最重要軍事機密であり、伊勢・金剛については、従来のイージス巡洋艦と同じシステムが搭載された。

いつでも出航が可能であり、グラ・バルカス帝国に対して準備は整えられつつあった。

90式も現在改良中であり、レオパルドを参考に、ラインメタル社およびロイヤル・オードナンス社の協力得た。

- ・砲塔の大型化
- ・ラインメタル 120 mm L55
- ・完全油圧サスペンション化
- ・隔離装甲の追加
- ・C4I完全対応
- ・スラット・アーマーの追加

対魔帝として改良を進めているが、肝心な想定兵装が不明なため、出来る限りの改良に留まる。

そもそも伝承にある人型ロボットらしき存在、その装甲及び火力が分からない限り改良の程度が不明。

それこそガン〇ムなのかガン〇リフォンなのかアー〇ードコアなのかパト〇イバーなのか、性能に差があり過ぎて予測がたてられていなかった。

過去の伝承や発掘した遺跡の情報を解析しているのだが、それらしき残骸や情報が見つかっていなかった。

水龍族の話でもそれらしい巨大人型兵器の残骸を海中でも見たことがないという。

4.2. 魔帝の戦艦・禁忌の準備

日本・皇居

先進世界11か国会議の期日が近づく中、海中からサルベージされた魔帝由来のもの、その解析が順調に進んでいた。

「つまりアイオワ級戦艦の兵装と同等であるか?」

「41センチ砲だけではなく、CIWS・ハーブーンと思われるものが確認できました。魔道兵器なので詳細な点は不明ですが、確認できる形状や設備から8割方該当するかと」

沈んでいた場所を教えてくださいました水龍たちの話では、遙か昔海龍が水中に引きずり込んで沈めたそう。

戦艦は船底を上に向け、そのほとんどが泥炭地帯に沈んでいたのだ、サルベージに時間を要したが、大して劣化せずに原型を保っていたのが幸いであった。

内部にも当時の道具と思われるものも多く、解析できる情報は多く文明程度の判別ができた。

「対艦誘導弾を持つとなると、これは手ごわい相手となる」

「現在以上の解析は、魔道技術を持たない我々では難しいかと」

「大凡、朝鮮戦争直後の文明程度と思われます。数さえ居なければ我々でもなんとか対処が可能です」

「国家技術が分かっても、国家規模がいまだ不明なのが恐ろしい所だ。

アメリカ規模であつたら手も足も出せんぞ」

その数何より問題であつた。同規模の国土を持つのなら対処の仕様があるが、アメリカ本土ほどの広さがあるのなら、まずまともな戦争の状況に陥つたら勝ち目はない。

技術性あつても数の暴力の前に屈することになるだろう。先制攻撃をもって滅ぼす以外手がない。

「通常弾の攻撃衛星の配備も完了しております。こちらはMOAB以上核未満といったところででしょうか」

攻撃衛星の起動キーが用意されていた。

「不遜な話だが、最悪でもこれで勝敗を決したい。気の重さが違う」

「順次衛星の打ち上げは行います。搭載するための、MIRV型水素爆弾も研究中です」

会議に出ているすべての人物の表情が良くない。大陸間弾道弾よりも、即応して落とす事が出来る攻撃衛星搭載型水素爆弾。

撃てばどれだけの被害が発生するか予想もつかない。

しかし、コア魔法という大陸間弾道弾を撃ったという、魔帝に対して対抗できる武力を持っていなければ、こちらがただ蹂躪されるだけになってしまう。

どうしようもない苦肉の策であった。

対魔帝に対する準備が進められていく中、グラ・バルカス帝国の全世界に対する宣戦布告の時期は迫っていた。

外交的で出来る限り手を打つため、準備もまた進んでいる。

得られた情報は限られるが、動きを鈍らせ内部に食い込む方法を練っていた。

4.3. 改造・改良・地獄・世界会議まで半年

ムーから提供されたラ・カサミ級戦艦 ラ・カーニャ

まだ砲塔も搭載されておらず、航行が可能な状態であったがちょうどよかった。

前部18基 後部15基も搭載、ボフォース四連装対空機銃、艦上がヘッジホッグ化するほどの集中配置、人力で当たるかどうかは訓練に左右される。

その為連日厳しい訓練にあたり、さらに幹部クラスには戦術教育も行われていた。

現在位置を狙って当てるのではなく、銃撃を飛行予測先に置く戦術を取る。さらに四連装対空機銃3基を一群として運用し、面射撃に徹する。

次いで商用レーダーの搭載、航空機や船舶の位置を確認するため、利用方法から味方航空機との連携方法など座学享受。

次いでソナーの搭載、対潜迫撃砲ではあるが、艦中央付近両舷に設置されている。撃沈目的よりも、音響効果を強めに設計され、ロートルな調音装置では最悪監視員が鼓膜を失うほどの音を発生する。

至近であれば沈めることも可能であるが、距離があつても電子的に音響ガードがない限り、効果が見込める音響爆弾としての意図が強い。

一方で対艦攻撃方法が失われている為、長距離魚雷を艦首に搭載している。搭載数は12発で大抵の相手は沈められる。

X5FU、操作性の異なる航空機にパイロットたちは苦勞しながらも、同型機相手に訓練を行っていた。ロケットを搭載不可能なため、一撃離脱戦法を重視しているようで、優秀な旋回性能を相まってドッグファイトも可能である。

現在ムー国が日本よりライセンスを買い取り、生産を開始している。

ティーガーI戦車、ムー国では生産され始めたばかりであり、有効な戦術や運用方法、そして現場での簡易メンテナンスなど、基礎から

叩き込まれている。

共通していることは、

【鬼の山城、地獄の金剛、音に聞こえた蛇の長門。日向行こうか、伊勢行こうか、いつそ海兵団で首吊ろか。】

【地獄榛名に鬼金剛、羅刹霧島、夜叉比叡。乗るな山城鬼より怖い。】
その歌と同様に、ムー国無人島基地では地獄のような訓練が連日、ムー国兵に施されていた。

夜間になれば連日のように脱走を試みる者達が現れ

「ひいいいいい！」

「いやだああああ！ 俺はかえるんだああああああ！」

「くそ！ 泳げる奴だけでも泳いで逃げろ！」

全員捕えられ営倉へと引きずられていく。どれだけ泣こうが喚こうが、訓練を完了するまで外部との連絡を許さない。

日本の自衛隊は陸海空を含めて第二次大戦中の厳しさを維持しており、この地獄の訓練が実戦において命を助けるのだが、戦時下になつたことがないムー国から送られてきた兵達ではなかなか耐えられるものではなかった。

将兵は無論苦言を伝え、本国に連絡しようとするも握りつぶされ、完全に外部との連絡を絶たせていた。

人間は追いつめられると大体似通ってくるのか、彼らが配備されているX5FUや戦車には髑髏の部隊章が描かれ始め、気晴らしになればと特に咎める事もなかったので自然と広まっていった。

魔帝の戦艦については科学的にできる解析は終了し、残りは魔道についての分析が必要であり、神聖ミリシアル帝国の外交官を呼び出し、写真を渡し興味があるかどうか問い合わせを行ったところ、外務大臣が航空機に乗って飛んできた。

神聖ミリシアル帝国名称 パル・カオン、

神聖ミリシアル帝国にも一隻しか存在せず、非常に貴重なためほと

んど解析が進んでいなかった。つまり壊れているとはいえ、もう一隻あると言うことは解析が進むと言うことになる。

パル・キマイラ

サルベージした2隻とも4割ほど破損している状態ではあるが、部品取りにするには問題がなく、非常に欲していた。

「では、受け渡しは海上で行うことで」

神聖ミリシアル帝国としても重要機密事項であり、他国に見られるわけにも行かないため、大型船舶を利用した海上受け渡しを希望。

むろん対価として

ミスリル級魔導戦艦 1隻

ゴールド級魔導戦艦 3隻

シルバー級魔導巡洋艦 3隻

ロデオス級航空魔導母艦 1隻

以上を派遣させた。彼らにとってはそれだけの価値があるという意味でもあるのだが、日本としても訓練と改造を施さなければ、直接手を下す可能性が高まり、グラ・バルカス帝国相手に抑止力にならない。

簡易的ながら商用の高出力レーダーを艦橋に増設し、艦橋要員には見方と利用法を伝え、幹部クラスには艦隊戦の戦術などを叩き込む。

海上受け渡しの成功と引き換えに、到着した一個艦隊はムー国に建設中の基地へと移動。

ムー国の兵士は新たな犠牲者の到着に歓迎の意を表し、全ての通信機器及び連絡方法を奪われ、ムー国の一団と同じように厳しい訓練を受ける事となる。

航空機の供出は断り、かわりにムー国と同じようにX5FUを使用し訓練している。

4.4. 外交圧力

グラ・バルカス帝国に対して牽制を掛ける為、レイフォル領にML86Xで向かう。

内部に増槽タンクを装着し、往復に関して補給の必要性を除き長大な飛行となった。

旧レイフォル領に近付き、グラ・バルカス帝国の無線通信回線に強制的に割り込み、外交に来たと伝えると警戒機がいくつも上がってくる。

その警戒機に誘導され駐機出来る空港に降りるも、少しでも技術というものを理解できるのならと、四脚クローラ方式双腕型コンセプトマシンを持ち込んでいた。

これを利用し、格納庫から降ろされた物資をトラックの荷台に積み替える。

ほとんどが人力で、せいぜいブルドーザーやクレーンが最新建機であるグラ・バルカス帝国では、真似どころか理解することさえ難しいだろう。

4連履帯による自由自在な動き、双腕による複雑かつハイパワーで繊細な動作、電子光学と機械工学技術の塊である。

複雑な動作が可能なため、災害救助現場でも使用される最新鋭機。

周囲にはどんな機械なのか理解が出来ず監視していたものの、慌て始めたグラ・バルカス帝国の兵たちが集まりだしていた。

コンテナトラックでさえグラ・バルカス帝国製の物よりも遥かに大きく、兵士たちは何が訪ねてきたのかわからずただ光景を眺めていた。

曲がりなりにも理工学を嗜むものなら確固たる技術差を理解できるだろう。

最後に超重戦車オイ車及び砲戦車ホリ車が降りてくる。周囲を警戒し最悪な事態が発生した場合、それ相応の被害を与えるために用意されている。もちろんそんなことをが起きては困るのだが。

彼らにとって直感的に認識できるだろう文明の先にある兵器はこれしかなかった。

レイフォルの外交責任者であるシエリアとダラスが外務省で待ち、会議室に入ると同時に席に着かず太陽神の使いとして話を始める。

「シエリア・オウドウイン 20代後半 独身、趣味は映画鑑賞、外交官としては優秀ですが、最近はストレス性と思われる便秘気味」

「ダラス・クレイモンド 20代半ば 独身、熱狂的皇帝崇拜者であり、感情的な面が強く外交官としては一流とは言い難く、外務局内での評価は高くはない」

二人はゾツとした表情を浮かべる。

初めて会ったというのに詳細にプロフィールが淡々と語られる。

「グラ・バルカス帝国陸軍第8軍団長兼最前線基地バルクルス総司令者 ガオグゲル・キンリーバレッジ、上昇志向があり、軍人としては優秀なれど軍規に関して少々問題があり」

グラ・バルカス帝国の重要情報、情報の流出どころの話ではない。話を続けながら小さな写真を2枚取り出し、テーブルの上に置いた。

そこには夜間の帝都ラグナの皇城と工業都市が空から映されていた。

衛星写真を拡大したもののだが、彼らの常識から考えれば航空写真をいつの間にか撮られたと、認識するだろう。

「我々の目と耳はどこまでも届いています。我々と平和的外交を行いますか？ それとも 戦争 を致しますか？」

脅迫を含めた武力外交、技術力とそして急所を捕えていることを見せた。

諜報力は軍事力に関わるため理解できるはず、裏に手を回しつつ真つ向から武力と技術による圧力を掛ける外交。

時間がない以上これしか方法がなかった。

「レイフォル外務省出張所では、私の一存では判断は許されず、一旦本国への伺いを立てなければ回答は難しいと言わざる得ない」

シエリアは今この場で主導権を握られないよう、そして下手に煽らないよう慎重に言葉を選ぶ。

「届くのは目と耳だけとは限りません。その事を理解していますね？」

日本として、暗に伏せているが、武力行使も可能だと伝える。

「きつ、貴様！ 我がグラ・バルカス帝国に対して！」

シエリアは感情を露わにしにかけているダラスを即座に手で制する。

「ダラス、黙るか下がっていないさい」

少なくとも、皇都を空撮できる技術を持つ国家であり、スパイを潜入させられる軍事力を持つ国家の外交官が目の前にいる。

これからの発言は全て、重要な事となり繊細な駆け引きとなり、僅かな弱みを見せる事も出来ない。

「先ほど申し上げましたが、この一件はレイフォル出張所では判断ができません。本国への問い合わせが必要な案件であり、返答には数日かかると思います」

タブレットを二個取り出し、一方をシエリアに一方を外交官に向けてる。20インチタブレット画面には、リアルタイムに双方の表情が映し出されている。

「リアルタイムに連絡できるよう、これよりも大型の設備を置いていきますよう」

隔絶し過ぎた技術に余計な言葉を一切出さず、驚く表情を出さないようシエリアは気を付けていた。

「ですが、解析しようとするば」

説明をしようとしたところ、外から大きな爆発音が響き、シエリアとダラスが急いで窓の外を見ると、小さなコンテナが粉々に吹き飛んでいた。

「どうやら説明が遅かったようですね。少々お行儀が悪い方々が居るようで、許可なく我々の物資を開封しようとしたようです」

危険性を伝えるために持ってきたコンテナなのだが、勝手に開けようとして吹き飛んでしまったようだ。

慌ててグラ・バルカス帝国の兵士たちが集まりだす。

「御覧の通り、少しでも開封・分解しようとするれば大爆発を起こします」

写真・録画・再生のみに機能制限したタブレット端末を渡す。

使用方法をシエリアに教えるが、爆発するという言葉に少し表情を引きつけているが、それでも説明するために使用方法をメモしながら話を聞いている。

4.5. 軍事技術差

大き目のケースを取り出し、テーブルの上で開いた。

「これで技術差は理解できるでしょう」

H & K G 11、グラ・バルカス帝国の兵も武器として認識できず、持ち込むことを止める事ができずにいた。

「銃器……ですか」

見た目が余りにもグラ・バルカス帝国の標準銃器と異なる為、シエリアもダラスも理解できず、ただ眺めている。

「射撃場で試験すればわかります。もちろん返却していただきますよ」

グラ・バルカス帝国の外交官補佐が受けとり、わざわざグラ・バルカス語に翻訳されたマニュアルと共に下がった。

外交補佐官によって陸軍兵が射撃場で試験を行っていた。

しかしその性能に啞然とし、急ぎ軍務局でまだ業務を行っていたランボール大佐を呼びに行った。

焦る士官の説明をよく理解できず、ランボール大佐が直接赴き、試験をしたところで同じく驚き、銃をじつと見つめる。

「これをどこで手に入れた……」

啞然としながらも、銃をテーブルに置き軽く震える手を握り締めて隠す。

「いま、外交に來ている国家より、技術評価用に提供されています」
構造はさっぱり不明であり、装弾の方法もわからないのだが、グラ・バルカス帝国が配備している銃よりも、全ての面において勝っている。

生産開始されたばかりの連射銃は、機密であり少数しか配備されていない、少なくとも技術評価などで出せるような代物ではない

日本としては構造を一切理解できないだろうという目論見もあるのだが、予想以上の衝撃を与えた。

これを分析するべきだという考えと、この技術を持つ国家相手はど

れだけの脅威となるのか予測がつかない。

「急ぎ解析に回せ」

「銃器は明日返却いたしますので、分析や解析はまずいかと」

「そうか ならばそのまま返却せよ。 これを持ってきた者達は今まだレイフォールに居るのだな？」

ランポールは技術士官から情報を聞き出し、すでに夜ではあるが駐機場に急いで向かい、見たこともない巨大な戦車が止まっているのを見つけた。

外交相手であるため、許可を取らずに調べる事は出来ないが、グラバルカス帝国の中戦車ハウンドを遥かに超える存在が目の前にあった。

「これは……、まずい」

ランポールが急ぎ外務省に赴くと、いまだ作業を行っているのか光がともっている窓がある。

恐らく対象とする国家の情報を集め、精査している事だろう。その場にランポールも加わるべく、外務省に入ってしまった。

翌早朝、今日の会議の準備をしている外務局にランポール大佐は訪れ、どのような相手が外交に来ているか、見極めるために参加を申し出ていた。

シエリアもまた、渡されたタブレット端末や写真から危険な相手と理解し、平の外交官達は徹夜で作業に当たっていた。

シエリアはケイン神王国以上の国家と想定し、上司である部長ゲスタに問い合わせるも、怪しいものだと思える事はなかった。

そのため現場の軍務局士官であるランポール大佐と話し合い、最低でも情報をまとめたうえで本国の指示を再度乞うことにした。

4.6. 外交判断

連絡用として8.5インチの薄型4K液晶ディスプレイが設置された、コンテナハウスが置かれる事となった。屋根にはソーラーパネルとアンテナが設置され、衛星通信で繋がれている。

簡単な操作で、コンテナハウスからタブレットに対して通話が可能な事を見せる。実際にはタブレット端末単体では不可能なため、衛星通信機器を日本側が持っているのだが。

「簡単な娯楽として、我々の国では100年ほど前の映画などを流しましょう。見るのはあなた方の自由ですが」

簡単な娯楽として、兵器や科学技術の発展につながるものを排除した、第一次大戦までを題材とした十数の映画を視聴可能であり、音響も充実しかなり迫力かつ臨場感がある。

裏はもちろんあり、懐柔と戦意を下げる事にあり、兵士が好むだろうアダルトイナ作品は意欲を下げるサブリミナルを流していた。

「それでは二か月以内の回答をお待ちしております」

三日間の会談後、ML86Xに乗って離れていく太陽神の使いを見届け、シエリアは出来る限りの情報を纏め、本国にいる上司に直接報告する為、三日後本国行きの航空機に飛び乗った。

グラ・バルカス帝国本土 帝都ラグナ 行政地区

写真に写っている巨大な飛行船、超重戦車オイ車、砲戦車ホリ、これらは少なくともグラ・バルカス帝国では製造不可能なものであり、何よりもタブレット端末による動画や写真の映像に頭を抱えていた。先進技術開発局に持ち込むも、分解は不可能という点を除いても、まったく構造を理解できないという事であった。

グラ・バルカス帝国ではセルテープ映画、大きな白黒真空管テレビ、そして大きな機械式カメラが当然である中、板一枚で写真・動画・再生と出来る機器など考え及ばない。

そして記録されている銃器の映像、そこには責任者であるランボール大佐が映っており、欺瞞情報でないことは明白であった。

「すぐ、会議にかける。君は結果が出るまでラグナに留まるように」
外務省東部方面異界担当部長ゲスタは、さすがに無視できない情報
であるとしてすぐに上に情報を上げた。

数日後、将校が集まり会議が行われていた。

「……ランポール大佐、これは間違いのない事なのかね？」

ランポール大佐もまた帝都ラグナに戻っており、集められた情報を
元に行われている会議に、参考人として参加していた。

「はっ！ 彼らが持ち込んだ銃器は、我々の物と隔絶した性能を持っ
ております。戦車もまた、そちらの たぶれつとたんまつ なるも
のに表示されている通り、巨大であり砲も大きく」

ランポール大佐によって調べられた情報が星付き将校に伝えられ
る。

「航空機的能力は大したことはないのだろうか？ 敵国として相手には
なるまい」

「いえ、航空機も2万5千キロを無補給で往復するため、鈍重な飛行船
を使ったと申しました」

「それが真実であると仮定するならば、例え飛行船だろうと、そのよう
な飛行船を作る技術など我々にはない。その巨大な戦車を二台も
抱えて飛ぶなど、搭載量から考えても航空技術を想像も出来ん」

情報局員からの報告がなされる中、各将校が意見を述べていく。

「海軍については不明ですが、ミリシアル帝国に寄港した日本という
属国の戦艦は、オリオン級に近い物です。属国にもそのクラスを供
与したとなると、ヘルクレス級相当は配備している可能性が高いと」

オリオン級を属国に提供するなど、少なくともグラ・バルカス帝国
なら属国に提供するのには型落ち品、つまりオリオン級が型落ちとなる
軍事体系を持っているという認識になる。

「陸軍では苦戦も……必須かと」

すでに征服へと準備が進められていく中、世界最強を自負する以上
これが最大限の表現となる。

「はつきりとは言えんが、飛行船だけならどうにでもなる。しかし
あんな巨大なものが作れる以上、油断できる相手とは言えん」

「海軍としては数次第となるが、情報がないのではなんともな」

正確に陸海空の軍事を計る情報はない、しかし陸だけに限定すれば劣る事は明確であった。

「情報局は何をしていたー」

陸軍将校から大きな声上がり、情報局の面々の表情が悪い。

東の果てであり、情報封鎖も厳しい為何一つ調べられず、せいぜいミリシアル帝国が気にかけている国家程度の認識であった。

「そいつを解析して技術を計れんのか」

一人の空将がタブレット端末に指をさす。

「これは借り受けたものであり、さらに分解すると大爆発します。

試供品が爆発したのを確認しており、分解解析は不可能かと。もちろん返却せずということもできますが、敵対と取られた場合」

「空爆される可能性があるわけか」

夜間空撮された帝都ラグナの写真もみな確認しており、いつ撮られたのかそれさえ判断できていなかった。

前代未聞ともとれる帝都ラグナの空撮写真、ケイン神王国とも異なる技術力を持っているのは確かであった。

「相手の言い分は平和的外交か、戦争ということだが、現状では判断が難しい。だが、少なくとも防空体制が完全になるまで、手出しは控えるべきだろう」

「陸軍では重戦車の開発、帝都防空体制の強化、以上が整うまでは彼ら望む平和的外交とやらを結び、諜報員を送り込むべきだ」

「レイフォルに潜り込んで諜報員の排除、これも重要となる」

軍部の最上級会議の決定事項として、皇帝の決定した世界征服に関して反対意見を出すわけにはいかず、太陽神の使いに関しては一旦様子を見るべきとの判断に至る。

「これは、少し離れた議題となりますが、輸出品として、軍用飲料の試供品を受けており、お持ちしております」

缶ではなく瓶に封入された物が机の上に置かれる。

「検査は完了しております。主成分は不明なものが多く、分析できなかつたですが、無害であることは人体で確認しております。摂取すると一時的に疲れが激減し、眠気が抑えられ、集中力が増したという結果が出ています。我々でも生産できないかと解析を試みているのですが」

実際はカフェインを大量に含んだただのエナジードリンクなのですが、医学や栄養学、化学技術で劣るグラ・バルカス帝国では製造も分析も不可能なものであった。

エナジードリンクは科学と化学、そして医学と栄養学等によって作られている。先進技術がない国家で作れるようなものではない。

「輸入するしかないというわけか。技術の程度が読めんな」

「魔法などというふざけた物もあるのだ。苦労もするだろう」

「しかし、そんなものを服用され、戦場に立たれては困る。我々も入手しておかなくては」

47. 仮初の平和外交

世界会議まで4か月・・・

グラ・バルカス帝国は太陽神の使いとは平和的外交を結ぶ事を選んだ。

平和的外交の間に軍備を整え、太陽神の使いの戦力を上回ったとき、侵略するつもりなのだが、日本の意図としては十分であった。

タブレット端末はGPSと録画機能が常時動作しており、大まかではあるが重要基地の場所と、会話内容や名称などが適時記録され、返却を受けたのち全ての情報が日本に渡り、重要人物の顔や名前、役職から重要拠点などが判明。

もはやどこを狙えば的確に戦力や国力を削る事が出来るのか、完全ではないにしろ日本の手の内となった。

もはや平和的外交も必要ではない。いつでも重要基地をピンポイントで攻撃し、戦力及び国力を奪える。

平和的な外交でお茶を濁しながら、太陽神としての日本は表向きは中立であり、平和的外交を行うが、裏ではミリシアルとムーを支援する。

日本としては太陽神の使いの属国としてただそれに従うそぶりを見せ、輸送船などが到着する場合の受け入れ先となればよい。

すでに潜入作業員は新しい人員に入れ替え、面が割れないように商人や配達人にかわっている。

レイフォル領・・・

外交としては基本的な書類の承認が終わり、交易から始めることとなった。

「それでは、まずは購入希望であったエナジー飲料を20トン」

MK86Xよりも小さく中型飛行船であるML868、最大積載量は60トンだが商業輸送するには十分。

レイフォルの駐機場に止まるMK868から、いくつもの木材コンテナが下ろされる。

太陽神の使いとして受け取るのは様々な植物と果実、これの研究しものによつては食料としてクワ・トイネ公国で増やすことになる。

「我々には奴隷は不要ですよ」

運び込む途中であった一つの木材コンテナを持ち上げたまま、四脚クローラ方式双腕型コンセプトマシンが停止する

「なんのことでしようか？」

木材コンテナを投げると、地面にぶつかって人間の絶叫が上がり血が流れ落ちる。

「しっ、失礼しました！ どうやら密航しようとした者がいたようですよ！」

「そうですか。管理体制はしっかかりしたほうがいいですよ。スパイが入り込む可能性がありますからね」

にこやかに答える太陽神の使いに対して、表情を変えぬよう外交官は取り繕うが、上手いかずに表情が引きつってしまふ。

会談室では交易品について話し合われていた。

「兵器をお求めですか」

「技術試験に使用された銃器を求めらる」

「あなたの国では、交易がなつたばかりの国に兵器を輸出するのですか？」

シエリアから外務省東部方面異界担当部長ゲスタに移管され、一時的にレイフォルに訪れていた。

外交が下手なのか、駆け引きではなく一方的に近い要求が多く、少々呆れながら対応をしていた。

「我々はグラ・バルカス帝国、当然だろう」

「そちらの最新兵器を輸出するなら考えましょう。こちらとしては骨董品など不要ですが、他国に売ればいくらかにはなるでしょうか」

「我が国の兵器を骨董品というのか！」

ゲスタは大きな声を上げるが、太陽神の使いとして落ち着いたまま答える。

「骨董品コレクターになら需要はあるでしょうが、古過ぎて実用性は

ありません。 100年ほど前の兵器など、我々に価値はありませんから」

グラ・バルカス帝国として、最新兵器を輸出できるわけもなく、また強硬に出るわけにもいかず、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、会談は終わった。

48. 世界会議まで三か月・・・

世界会議、第三文明圏としてパーパルディア皇国が代表として出席する。

魔石式蒸気機関によって鋼鉄の船の建造に成功したばかりであり、外輪式ではあるが技術的に新たな段階に達しつつあった。

元々魔道文明であるため、蒸気機関についても水の補給さえ行えば、丸一日連続して燃え続ける火の魔石も作りだし、蒸気機関は文明の発展に寄与、その恩恵を受け始めたばかりであった。

人員を内政に回しているパーパルディア皇国は、国境線でリーム王国とにらみ合う以上の事はせず、兵数の削減と近代化を行っていた。

フィルアデス大陸諸国では、リーム王国による大陸制圧戦争が起きるのではないかと危惧されていたが、すでにパーパルディア皇国ではパークッションロック式とはいえ回転式拳銃が生れ、定数が減った事で訓練も行き届き兵士の質はかなり上昇、リボルビングライフルの少数配備も始まり、すでに軍部としてはリーム王国など眼中になかった。

ロウリア王国を支配していた軍団も討伐され、浮島で保護されていたロウリア王妃と王子により、再興が為されたものの、第三文明圏は現在不穏な状況が続いている。

リーム王国が元パーパルディア皇国から独立した6個の国家を手に入れ、影響力を増してきていた。

その為クワ・トイネ公国に食料、クイラ王国に鉄材、アルタラス王国に魔石を買い求めた。輸出入は世界的交易で何ら問題はないのだが、高圧的であり各国に適正価格より安く買い叩こうと武力をちらつかせている。

「文明圏外国家風情が！ 我々は文明国家リーム王国だぞ!!」

どの国でも高圧的に出ては、相手国を困らせていた。

第三文明圏で対することができる国家は、パーパルディア皇国であるが、今だ前体制のイメージが強い為どの国も苦勞していた。

外交担当がシエリアに変わり、交易品目録の中にあり、軍需品に直結しないものの関りがあるものを求めていた。

「原油を購入したいのです」

原油、クイラでは設備が万全に稼働しているので、売却することに何ら問題はない。

むしろ余りにも原油の自噴量が多く、農業向けに土質改良をしようにも、原油が混じっていない大地の確保にも苦勞するほど。汲み上げないと原油が土壌を汚染してしまうという、地球では考えられない事態に陥っていた。

日本国内では昭和50年代以来、懐かしきガソリンリッター80円まで落ちているが、産出量が多すぎる為、巨大備蓄タンクをクイラ港湾部に次々と建造することで、なんとか異常な価格下落を抑えていた。

10億k1を超える備蓄タンク群を建設中であり、そうでもしなければクイラで大規模農業など不可能であった。

「いかほど必要ですか？」

「50万トンほど」

これはグラ・バルカス帝国の年間使用量の三分の二に達するのだが、

「タンカーはお持ちですか？ 輸送料を支払うなら2隻でレイフォルまで輸送しますよ」

「はっ？ 二隻ですか？」

グラ・バルカス帝国の石油タンカーは最大でも12000トン、船団を構成し何往復もしつつ輸入するつもりが、たった二隻で輸送できる事に驚いていた。

日本としても、ムー国マイカルに原油、マイカル沖合にある基地に燃料を輸送しており、レイフォルならばそれほど遠い距離ではなかった。

問題はグラ・バルカス帝国側が支払えるかどうかなのだが。

「お支払いはどのようになりますか？ 植物や種子はもう不要ですよ」

為替についてグラ・バルカス帝国とは結んでいない。いずれ紙くずになる事を理解してのことだが、グラ・バルカス帝国としても、いずれ敵になる相手国の為替など考えても居なかった。

「金でお支払いできればと」

どんな状況であろうが、金だけはどの国も欲するものであった。太陽神の使いとして計算を行い、価格の提示を行う。

「輸送料別として、金1304kgでしょうか。レイフォルまでの輸送料は金200kgですね」

決して安くはないが高くもない転移前のレートに合わせた価格、しかしグラ・バルカス帝国としては納得がいかない

「少々、高くはありませんか?」

「50万トンですから、これくらいでしょう。これでも二隻輸送で少なくしているのですよ?」

グラ・バルカス帝国としては、世界に対する宣戦布告に備え、大量の原油を必要としていたため購入することとなる。

49. 世界会議まで一か月・・・

ムー国に新たに航空機パイロットを要求、ようやく1000人体制となり、航空戦力として期待できる段階に達し、陸海空と共に全兵士の表情も険しい顔つきになり、訓練前とは比べものにならないほど精強となった。

ミリシアル艦艇はレーダーの運用に苦勞したものの、XF5Uの運用に伴い識別や戦術に適應できるようになり、最低限ではあるが航空誘導も可能となった。

これ以上は時間もない為、手の打ちようがない。

レイフォル領

レイフォル沖に到着した原油タンカーから、グラ・バルカス帝国の小型タンカーに移し替えられ、順調に衛星映像からラグナ及びレイフォルの原油及び燃料備蓄地区、そしてタンカーの航路と陸地の輸送路が徐々に判明している。

空中給油が必要なが、これで戦争が起こっても、容易く精密爆撃で継戦能力を奪うことができるだろう。

時同じくレイフォル領 射撃場では、売却を行う前の試射が行われていた。射撃場で直接渡し、その場で回収することになっている。

もちろん日本として売るつもりなど全くないのだが、平和的外交を行う以上建前の行動は必要であった。

太陽神の使いとしてハンドガンを持ち込み、グラ・バルカス帝国の兵士と幹部が試射を行っていた。

S & W M 460XVR 14inch:

I M I Desert Eagle . 50AE 10inch:

射撃場では的として、グラ・バルカス兵が使用する防弾胸当てを使用していた。

「まったく意味がないのか」

防弾胸当てを破壊し、その裏に置いてあった西瓜に似た果物を粉々に粉碎する。グラ・バルカス帝国ならば小銃でなければ不可能な事

に、構造から威力の違いまで大きく差を開けられて居ることを痛感していた。

「一般商用品ならこの程度でしようか。では次はこちらをご覧ください」

太陽神の使いは当然とばかりに特に表情を変えず、太陽神の兵士が銃を構える。

Glock 18c :

FAB Defense KPOS G2 Kit

33マガジンを使用、まずハンドガンのままセミオートで10の的を撃ち抜き、10秒足らずでKitを装着、SMGサイズとなったGlockのフルオートで再び的を貫く。

「こちらは許可証が一応必要な商用品です。試射も許可がありませんのでお断りいたします」

拳銃サイズでフルオートなどグラ・バルカス帝国には存在しない。冷汗をかいているグラ・バルカス帝国の将兵に触れず、太陽神の兵士として手早く銃器をケースにしまう。

「次は骨董品ですが、もつとも安価に売却できます」

Mauser C96 M713 Gold Engrave

d :

木製ストック・クリップ装填器。

「これは……」

開かれたケースの中の銃を見て、グラ・バルカス帝国の親衛隊及び陸軍精鋭に配備され始めているものに似ていることに気付いた。

「100年ほど前の骨董品ですが、フルオート射撃が可能です」

セミオートならばグラ・バルカス帝国でも酷似したものはあったが、フルオートが不可能であり、クリップ装填器や木製ストックなどまだ開発がされていなかった。

「どの品も最低単位は100万丁、弾薬は100億発からです」

「それは余りにも」

「あなた達、コピーするなど言ってもするでしょう？　これが最低限の売却個数となりますよ」

「そのようなつもりは……」

事実解析しコピー生産するつもりであった為、何かを言い返せるはずもない。

「ライセンスというシステムもありますが、安くはありませんよ」

取り決めの結果、M a u s e r C 9 6 M 7 1 3のライセンス権購入という形となった。

その頃、ムー沖合 無人島基地では訓練も終了を迎え、第一陣が空洞山脈へと向かった。

他国に知られぬよう空洞山脈内で訓練を、そして内部に整備と補給が可能な基地の建設を行っている。

分解し空洞山脈に運び込まれたタイガー戦車5台、そしてマウス1台、機工師団として組み立てと訓練にあたる。

上空からも確認が不可能であり、ムー国の軍部の中でも少々特殊な命令系統になり、軍部ではなく議会発動後となる。

50. 世界会議

多くの艦船が集まるなか、第三文明圏からはパーパルディア皇国が代表として訪れたが、先にリーム王国が第三文明圏名代として訪れていた。

神聖ミリシアル帝国としてもリーム王国を認めるつもりなどなく、早々に断りを入れるも居座っている。

世界会議に参加することができるのは、文明圏に強い影響力持つ国家であり、第三文明圏ではいまだパーパルディア皇国が代表であった。

パーパルディア皇国の最新鋭である鋼鉄船が魔導蒸気エンジンによつて水飛沫をあげながら、巨大な外輪を回しカルトアルパス港に入港。

人々がパーパルディア皇国の発展に驚く中、グラ・バルカス帝国のグレード・アトラスターが入港。その巨体と黒鉄の造形美に多くの人々が見上げていた。

半日ほどおいて、船体を浮き上がらせ高速で向かってくる船に港は大きな騒ぎとなった。

ナツチャンWorld

ウエーブ・ピアーサーと呼ばれる形状を採用された高速ジェット双胴船。

貨物満載1450トンで最大36ノット、航海速度で30ノット、最大で41.5ノットを誇る。

遅いように思えるが、貨物船としては異常な速さである。

速度を落とし、ゆっくりと船体を沈み込ませながら接岸、さらに半日遅れて属国として日本の戦艦扶桑が貨物船と共に入港した。

開催された世界会議では、エモール王国から魔帝復活までの予測年数の発表により、会議は大きく乱れたが、対する為に現れた太陽神の国家と紹介も行われ、その後にはグラ・バルカス帝国による宣戦布告。名目上は第一第二文明圏、そして南方大陸への宣戦布告となり、そ

の対象には太陽神の使いの国家及び属国は含まなかった。

もはや会議は非常に乱れてしまい、まともな議題の進行など出来る状態ではなくなり、荒れる世界会議の中、静観している太陽神の使いとして場を鎮めず言葉を伝える。

「私達は戦後魔帝に対するのであれば、戦争など気に致しませんよ。

ただし、戦時国際法の取り決めは行うべきでしょう」

もちろん表向きは中立ではあるが、グラ・バルカス帝国では分かる限りではあるが、支配体制が好ましくないと裏では他国に支援を行う。

太陽神の使いとして促し、簡単ながら戦時国際法の取り決めが行われ、

- ・ 背信行為の禁止
- ・ 非戦闘員及び降伏者、捕縛者の保護
- ・ 戦争犯罪の処罰

戦時国際法の知識がなかったミリシアルやムー国は、理解するのに少々苦労していたが、グラ・バルカス帝国には規定があった為取り決めはスムーズに行われた。しかし、

- ・ 交戦法規
- ・ 中立国の義務

これらは今後と言うことであり、グラ・バルカス帝国にもないため、結ばれなかった。

列強同士の大規模な戦争について話し合いが続いていく中、アニユンリール皇国は単独でその場を後にした。

急ぎ足で会議場を離れようとしているところ、一人になったとき呼び止める。

「どちらに行かれるのですか?」

「いえ、我々は文明圏外国家、列強に戦争を挑むような国家相手に」

アニユンリール皇国の外交官は、隠す事が出来ない憎しみの目を太陽神の使いに向け、丁寧な言葉を選んで隠そうとしている。

「それほど我々が怖いのですか? 魔帝の捨て子さん」

「……なんのことでしょうか」

隠れていたTALOS部隊によって外交官は抑え込まれ、魔法が使えないよう神聖ミリシアル帝国から入手した魔力を封じる枷をつける。

「あなた達がラヴァーナル帝国から見捨てられた、光翼人の末裔であることはわかっています」

エスペラント王国から得た情報を精査し、アニユンリール皇国の正体は判明している。

船はすでに拿捕し、見た目は帆船であったが内部には動力が存在し、機帆船であることは明白であった。

神聖ミリシアル帝国でもまだ極々一部しか知らされていない、エモール王国が知れば最悪種の存亡を掛けた戦争に発展しかねないため、グラ・バルカス帝国の一件が片付くまでは最重要機密としている。

51. カルトアルパス港

太陽神の使いが離れた後も、物資の搬出搬入作業がある為、日本の戦艦扶桑と貨物船は停泊していた。

宣戦布告前に、神聖ミリシアル帝国が大量購入した保存食の荷下ろしと、鉱石類の積み込みである。

建前上中立となる為、今後は軍事に関わる輸出入は少々控える事になるが、その前の契約ならば何ら問題はない。

順調に積み込みが行われている中、フォーク海峡の防衛線は崩壊しかけ、カルトアルパス港にまでグラ・バルカス帝国の航空機が迫っていた。

「グラ・バルカス帝国航空機、こちらに向かっています」

識別反応がない以上、航空攻撃は無差別になりやすい。日本も宣戦布告の対象外としても、自衛のために攻撃をしなければならぬ。

「貨物船を守る為対空攻撃を用意」

戦艦扶桑

基準：31,800トン

全長 215.1m

全幅 31.5m

最大速度 24.5ノット

兵装

41 cm (45口径) 連装砲6基

C I W S 1 A 6基

68式3連装短魚雷発射管 × 2基

戦艦扶桑は、FCS・レーダー・ソナー・機関換装、その程度の改装が限界である。トップヘビーな艦橋を絶妙なバランスで支えている船体を、大きく改装することが出来なかったが、一方で大型な艦橋の為に電子システムの搭載には他の艦に比べて苦勞はしなかった。

レーダーには無数の航空機が港及び民間地域に、爆装していると思

われる航空機の姿が映されている。

「港湾部、軍事エリアではなく商業区及び市民住居への飛行ルートを確認」

やはり前準備が足りなく、軍港と商業港の区別がついておらず、カルトアルパス港に対する無差別攻撃となってしまうっていた。

「邦人及び民間人保護のため迎撃を開始する。CIWSを稼働せよ」

唯一カルトアルパス港に残っていた、戦艦扶桑は単艦での迎撃戦に入る。

灰色に染められた戦艦、港の沖合に停泊していたため攻撃に移ったのだが。

「対空砲火が来るぞ！ 全機散開しろ!!」

CIWSから放たれる対空銃撃、カルトアルパス港に向かっていったアンタレス及びシリウス爆撃機は、正確な対空砲火によって次々と火だるまと化し墜落していく。

「リゲル雷撃機はどうした!？」

停泊している以上、攻撃するには雷撃が最適であったのだが。

「港まで来ているのはアンタレスとシリウスだけです!」

空襲のために態々リゲル雷撃機を送るわけもなく、シリウス爆撃機護衛の為のアンタレスしか空襲に来ていなかった。

「なんと少しでも爆げ」

CIWSの設定距離を割ったグラ・バルカス帝国の航空機は、戦艦扶桑によって接近することも出来ず、対空砲火によって海上に落ちていく。

30機程度撃墜されるところで、攻撃を止め引き上げていく。

「グラ・バルカス帝国艦隊と無線が繋がりました。宣戦布告の意図はなく、識別ミスによる攻撃だと連絡がありました。その為謝罪を行い、グラ・バルカス帝国が負った人的及び軍事的損害については問わぬそうです」

「情報を正確に外交部に回すよう連絡を、我々現場サイドが考える事ではない」

後日、日本として問題視することもなく、太陽神の使いとしても問題ないと回答をすることとなる。

日本としてはこれを理由として、グラ・バルカス帝国に正式に宣戦布告をしてもよいのだが、対魔帝の為に軍備を整えている兵器を、グラ・バルカス帝国に使うのは好ましくない。

試験や試作品、主力外兵器などなら投入できるのだが、主力兵器を投入する事は控えていた。

5.2. ムー国の強化 前

有翼人から情報の非人道的抽出が行われている中、神聖ミリシアル帝国からアニユンリール皇国に対して、グラ・バルカス帝国との海戦に巻き込まれ、船は沈没したと連絡が入られた。

もちろんスパイによって外交官が行方不明になり、太陽神の使いによって船が奪われた事までは伝わっているだろう。

問題はいつ仕掛けてくるかであるが、いままで国家を秘匿していた以上、まずは情報収集を重ねたうえでと予測されている。

属国である日本の位置も浮島しか世界的に知られておらず、本土の位置さえも秘匿している現状、攻撃をしたくとも出来ないはずなのだから、まずは浮島への潜入工作員を最大限警戒を始めた。

フオーク海峡海戦によるラ・カサミの大破、これはムー国にとって最新鋭である戦艦が敗北しただけではなく、技術的に敗北したという事であった。

一方で、カルトアルパス港に居たムー国の外交官達は、戦艦扶桑の性能を目で見えており、浮島にムー国の外交官が訪れていた。

ちやうど都合よくというわけではないが、監視衛星からムー国の飛行機が向かっていること、さらにラ・カサミを曳航しながら少数の艦隊が向かっていることを確認し、太陽神の使いとして偶然を装い浮島に前日に到着した。

物資の積み下ろしをしていた所を、ムーの外交官達が訪ね、技術士官や外交官は対魔帝部隊や供与された技術から、太陽神の使いとの技術力差を理解していた。

だからこそ、ムー国を守るために、なんとしても協力を取り付けよう、必死であった。

「ムー国として最大限人員も資源も協力いたします」

「ムー国民を守るために何卒お力を」

「特にその必要性を感じません」

外交の一環として、ML86Xの外交室で話を聞いていた。

太陽神の使いとしては、戦争には興味がないという立ち位置であり、建前を含めて協力をする事は出来ない。

「ムーは日本、ヤムートと一万年以上前からの友好国でございます。何卒何卒太陽神の使い様のお力をお貸し願えますようお願いいたします」

日本はムー国と古来の関りがあるヤムートとして、間を取り持つ形を取る事で、目の前で頭を下げたりとパフォーマンスを行い、上下関係がある別の国家であることを明確に示す。

「仕方ありませんね。それでは対魔帝用として試験改装を行います。あなたたちがどう使用しようとも、我々は関与しませんし、何が起きても関与しませんよ。ラ・カーニャにおいて十分データ収集も終わりましたし、不要となった試験兵器も搭載しましょうか」

対魔帝用を名目として大規模改装を行うこととした。

現在の基準でいえばイージス巡洋艦こんごうよりも、小型のラ・カサミは手を入れる箇所は余りにも多かった。

しかし考え方を変えれば、軽巡洋艦程度のペイロードを持つ船であり、大破していることから原型を留めないほど改装が可能という事でもある。

船のみ日本本土に曳航し、ラ・カーニャの改装で様々な構造や改造案が建てられ、次のラ・カサミ級のために用意しておいた資材や部品を投入することとなった。

- ・ 45口径41cm単装砲

長門から取り外され、自動装てん装置とFCS調整搭載のみ。

- ・ ミストラル6連装・遠隔式SADRAL

シーRAMより安価に製造できる可能性から試作製造されたのだが、結論だけでいえば、弾薬費は安く済むものの即応性に劣り、最大6連発から対魔帝戦には不向きとされた。

- ・ ヘッジホッグ

多弾散布型の前投式対潜兵器、これもまた魔帝がシーサーペントな

ど海魔を使役していた場合、安価に対応できるかと期待されたのだが、確実に仕留められる短魚雷の方が安価だという結論に至った。

・ 89式魚雷改

18式に換装されているため旧兵器、船舶からも発射できるように一部のみ改良が施されている。

・ 船体の改造

・ 船体の延長 131.6↘150m

・ 流体力学に船体形状の変更

・ 機関の変更

原型さえ残すつもりがないほど、全てにおいて手を入れる。

これだけの改良を施したところで、1970年代の力を持つだろう魔帝に対応は難しい。これもまた、ムー国での教導団名目で自衛をさせるための戦力ではない。

日本がラヴァーナル帝国を対処するまで、壊滅しないよう自衛してもらわなければならない。

技術がある程度公開したところで、どうやら思考の根本に世界平和及び融和主義があるムー国ならば、未来的に考えても悪用の可能性は非常に低いという結論に達していた。

またコピーや解析に関する事など、約束を守るとも確認が取れている。

53. ムー国の強化 後

X F 5 Uの運用を兼ねてムー国航空基地全ての滑走路は延伸工事、そして燃料の備蓄作業が進められている。高出力のエンジンを稼働させるため、適切に生成された燃料が必要なためだ。

マイカルでは燃料精製設備が稼働し、蒸気機関車や車両を使って国内中に輸送されている。

商用品ながら高出力のレーダー基地もキールセキに設営され、現在無人島基地で訓練を受けた技術士官が運用を行っている。

ムー国の商用エンジンも複数仕入れ、様々なテストをした結果、第一次大戦から第二次大戦の戦間期にあり、まだまだ基本的な工作精度から技術理解が足りていないことが分かる。

X F 5 Uのライセンス生産で幾らか向上も見られてはいるが、やはり民間レベルまで技術の広がりを見せておらず、推測できる段階ではまだまだグラ・バルカス帝国に対して正面切つて戦いを挑んで勝てるとは思えない。

しかし陸海空においてムーに対する処置は全て終わった。

これでグラ・バルカス帝国に負けるようであるならば、もはやラヴァーナ帝国に対して時間を稼ぐことも出来ないだろう。

グラ・バルカス帝国 レイフォル領

レイフォルに現在航空機と物資が運ばれていた。

名目は航空機の売却するための第一評価試験となるが、グラ・バルカス帝国がこの所、どうも太陽神の使いとして、空戦能力を疑っている節がある為、少々圧力をかけるために、技術取得済みで保管してあった航空機を引っ張り出す事にした。

DH・110 シービクセン

最適なジェット構造の航空機情報を与えないため、いささか異質な航空機となるが、これでも十分な速度と航空戦能力を持つ。

レイフォルの飛行場では、意地でも背後に着こうとグラ・バルカス帝国の航空機パイロットは技術を駆使するが、簡単に突き放され自由

にレイフォルの空を飛行する。

「旧式ですからこの程度ですね」

ごく当たり前の表情を浮かべながら、空を見上げている太陽神の使いに對し、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながら、航空機パイロット達は空を見上げていた。

「あれで、旧式、ですか」

陸軍空将であるパースはグラ・バルカス帝国が誇るアンタレスが、まるで猛禽類に弄ばれる小鳥のように思えてしまった。

「あれでも魔帝相手には一対一が関の山でしようかねえ」

魔帝という怪しい存在を気に掛ける相手に、少々正気を疑いたい点もあるが、それでも目の前の現状は理解ができる。

旧式相手にさえ、アンタレスでは相手にならない、それが現実だ。

「100機の輸入、いや全てを機種転換するだけの購入を打診できるだろうか」

解析は不可能だとしても、修理メンテナンスを繰り返せば必然と構造はわかる。

そこから新たな航空機を開発と、パース空将は考えていたが、一機当たりアンタレス数十機分の価格に財務局が許可するわけもなく、最低単位の100機さえ購入する事は出来なかった。

日本 防衛省

「MOAB、少数ですが生産が完了しております。 ですが、さらに拡大された爆弾の開発は難航しております」

ある種の技術的限界、MOABの大型化は難しく、新しい技術開発が為されない限り、非核型爆弾の高威力化は技術的停滞時期に入っていた。

「ムー国無人島基地、大陸間弾道弾の配備が完了しました。 核ほどではありませんが、MOABを搭載したと思ってもらえれば良いかと」

実質的にグラ・バルカス帝国内が射程距離範囲となった。 西方方面

における軍備増強は以上で良いだろう。

これからはアニコンリール皇国に対する為、大陸間弾道弾の精度向上及び通常弾及び水素爆弾の開発に国力を割かなければならず、わざわざ相手をしている余裕などない。

太陽神の使いとして、技術力差を理解し、第一第二列強との戦争を、有利な状態で辞めるならこれ以上は関わらず、変わらぬのなら燃料貯蔵庫及び、物資貯蔵庫への攻撃を開始する。

54. 騒乱と混乱

フィルアデス大陸

リーム王国は第三文明圏においてパールディア皇国とは異なり、宣戦布告さえ行わず一方的に侵略を開始、さらに属領の数を13に増やし、国名をリーム帝国と名を変えた。

第三文明圏で対することができるのは、パールディア皇国しかないが、内戦中に独立した国家が救援を求められるわけもなく、独立した国家群で協力し対抗しようとしているが、独立して間もない為まともな兵装もなく、ほとんど一方的に蹂躪されるだけであった。

パールディア皇国としては、前政権の問題もあるので積極的に介入するわけにも行かず、状況を静観しつつ、属領への蒸気鉄道の敷設と、最新兵器への切り替えを急いでいた。

日本国 浮島

ここ半年、目に見えて訪れる各国が増え、人が飽和状態に近くなっていた。

これ以上浮島を拡大できるはずもなく、人数を制限しているのだがそれでも入港待ちの船が出てきている。

リームが商業活動の独占を始めてしまい、第三文明圏では浮島とパールディア皇国くらいでしか平等な交易が難しくなっていた。

どの国でもリームの外交官や商人が滞在し、無理難題の交易要求をしてくるため、干渉されない交易港を求めている。

「最近リームの奴らのせいで交易がしにくい」
「まったくだ。クワ・トイネの食料を売り回るのに税金を求めやがる」

「アルタラスの魔石にもだ。どこでも五月蠅くてかなわん」

「だが従わないと、高圧的どころか撃沈された船もあるそうぞ」

どの商人達も浮島の食堂兼酒場で愚痴を吐き、様々な情報交換が行われていた。

「大変だ！ リームの艦隊が来たぞ!!」

リーム帝国が浮島にも戦列艦船団が訪れ、砲身を浮島に向け停泊していた、これは意図した脅迫である。

多くの人々も最近のリームの行いには辟易していたが、少なくとも第一第二列強と交易のある日本の浮島でこのような事をするとは思ってもいかなかった。

混乱している中、リーム王国の一隻のみ入港してきたが、日本の浮島責任者がその場で断りを入れた。

「この浮島に戦列艦隊を連れて何の御用でしょうか。不要不急であるならば、このような事は外交的問題になりますよ」

戦艦扶桑のみが浮島に駐留していたが、パールディア皇国はたった一隻でも戦力の違いを今なら理解ができるだろう。だがリームにとってはたった一隻、脅迫外交の中でたった一隻など目にもくれなかった。

「文明圏外国家が。我々はフィリアス大陸を統べるリーム帝国。不敬を働けば貴様らなど滅ぼすのは容易いのだぞ！」

「我々の太陽神の使いの下に生きる国家、あなた達の事などどうでもよいのです。平等な商取引を行うつもりがないならお帰りください」

港で叫ぶリームの外交官相手に、日本として正式な入港を拒否。一切聞き入れることなく相手にしない。

そんな中、戦艦扶桑が静かにリーム艦隊と浮島の間へ移動し、砲身を艦隊へと向ける。

「我々リームに対して！ただで済むと思うな！」

リームの外交官は船に戻ると、風神の涙を使い艦隊に戻っていく。船が艦隊に戻ったとたん、戦列艦船団による艦砲射撃が扶桑に襲い掛かった。

明確な敵対行為、球形砲弾なので命中率は高くないが、それでも何発もの砲弾が扶桑にぶつかる。

「リームの奴らやりやがった!!」

「こんなときに戦争かよ！」

「みんなにげろ！」

港は大騒ぎになり、大混乱になりそうなのを獣人の警備兵が落ち着かせようとする中、騒ぎをかき消すような轟音が鳴り響き、人々の動きが止まった。

砲撃を受けた戦艦扶桑は何の影響もなく、2門6基の砲口が交互に撃ち始め、次々とリームの艦隊を鎮めていく。

半分ほど沈めたところで不利を悟ったのか、リームの艦隊は浮島を離れていった。

「皆さま、この度は騒ぎになって申し訳ありません。これからも浮島による交易を何卒お願いいたします」

戦艦扶桑はわずかに装甲に歪みや構造物に傷がついたが、船としては何ら問題がなく、静かに普段通り係留している港へと戻った。

日本としてリームは危険国家として、今後一切の入港及び接近を禁止、必要であれば中立国家として自衛行動をとると発表、安心して交易を訪れてほしいと世界に伝えた。

55. 情報収集

バルチスタ海域では世界連合の艦隊とグラ・バルカス帝国艦隊と引き分けに終わった。

日本としては世界連合がかなり健闘したという評価であったのだが、実質的にはラヴァーナル帝国の兵器によるものだということははっきりしていた。

引き渡したパルキマイラが飛行物体との認識がなかったため、ラヴァーナル帝国に対して、さらなる情報収集の必要性がある。

少なくとも、あれだけの物体が飛行する以上、何かしら未確認の技術があると考えられ、グラメウス大陸の再調査とラヴァーナル遺跡の発掘と解析をさらに進める事とした。

防衛省

「ムー国 対魔帝部隊 海軍・空軍の第一次訓練が終わりましたので、入れ替えを行います」

訓練が終わったから入れ替える、ただそれだけの事である。

対魔帝部隊を、グラ・バルカス帝国に対して利用したところで、日本の知るところではない。むしろ実戦経験を積むという貴重な経験が得られる事だろう。

「我々が手を貸せる範囲はあと少しだけだ。 念のため空洞山脈基地にケーニクスティーガーのテストを兼ねて派遣するように」

現在ケーニクスティーガーはFoster-Miller TALLONを参考に完成し、基礎試験は完了している。可能であれば実戦試験を行いたいところであった。

日本としては戦力を整え、ラヴァーナル帝国と戦っている最中、自衛出来ればそれでよし、それ以外については平和・融和主義のムー国に干渉する理由はない。

ラ・カサミ及びラ・カーニャはオタハイト港に、そしてXF5Uの航空部隊はキールセキ航空基地及び首都オタハイト防衛に回される。

「次の議題です。 鬼姫の場所が判りました」

太陽神の使いとして戦況を静観、そんな中、ようやくアニウンリール皇国内における、鬼姫が囚われていると思われる場所の特定ができた。

外交官達から情報を抽出した結果ではあるが、その位置はブランシエル大陸の砂漠の中にある。先進生物研究所に在るという。

「これは、困ったな。場所が余りにも悪い」
地図や研究所の大まかな構造ラフ図を見て各責任者が眉間にしわを寄せた。

特殊部隊を投入しようにも、少し離れた場所には非常時に備えてか軍事基地もあり、砂漠である以上視界も良い。

さらに魔物と呼ばれる特殊生物を扱う場所であり、いまは丁重に扱われていると言っても、もし魔物達を放たれてしまえば簡単な救出とはならない。

静かに潜入し、周辺エリアを陽動攻撃したうえで迅速に救助し離脱、それをしなければ囲まれてしまう。

「救出には空挺及びTALOSを投入し、近い基地には弾道弾を撃ちこみます。それでもどれだけ誤魔化せるかはわかりませんが」
「早めに奪還しなくてはな。戦力の集中投入も考慮し作戦立案をしよう」

レイフォル領

「資源購入をしたいのです」

通信機を利用し、シエリアは太陽神の使いに対して資源を求めていた。

購入目録は天然ゴム・石油・鉄・アルミニウム、つまり資源が困窮を是はじめたという意味でもある。

バルチスタ海戦で艦船と航空機を予定よりも消耗し、生産率をあげようにも大量の物資を即座に用意するのは難しい。

ある程度処理の終わった加工資源を輸入した方が、生産するのに非常に都合が良い。

「輸送とお支払いはどうしますか？」

国内であれば国債でどうにでもなる。しかし為替取引をしていない外国と国債が使えるわけもなく、金の支払いは国庫に直撃する。

「可能であれば、金ではなく戦時国債でお支払いをしたいのですが」「戦時国債ですか。それだけの価値はあるのですかね？」

金ではなく戦時国債での支払いの打診、そろそろ頃合いとなる。事故を装って原油貯蔵施設の一部を破壊すれば、戦争継続するには国力を大幅に失うことになるだろう。

「バルチスタ海戦では痛み分けと情報があります。戦時国債を買ったところで勝てるのですか？」

負ければ紙くずとなる戦時国債を買うのはリスクが伴う。そもそもグラ・バルカス帝国を勝たせるつもりなどない。

「グラ・バルカス帝国が負けることなどありません。戦時国債も十分な価値になります」

「残念ですが、戦時国債でのお支払いはお断りします。中立の立場である以上、戦時国債を購入するのは適切ではありません。金とそうですね、レイフォル領等で産出していた魔石で支払ってもらいましょうか」

日本としても魔石に価値はほとんどないが、安く大量に買い叩けるならそれも悪くはない。グラ・バルカス帝国としても、科学文明である以上持て余している物を売り払うのなら、二束三文でも大量に売り払うと予測できる。

結局グラ・バルカス帝国はアルタラス価格に比べて、十分の一未満の価格で大量に魔石を、代金とする取り決めを行った。

それ相応の購入要求量であったが、代金の7割以上を魔石で支払うとし、金の割合は多くなかった。

金についても国内の保有量が減っているのだろう。

56. 想定外

太陽神の大型コンテナ船が、グラ・バルカス帝国レイフォル領から出航。通常価格より大分高めに設定された資源をグラ・バルカス帝国は購入、例えばグラ・バルカス帝国が相手だろうと、対価を支払うのならば技術に關しない限り売却をする、その方針に従っていた。

レイフォルに物資を輸送したのち、念のためマイカルで食料と水の補給、日本に向け物資を積んだコンテナ船が向かう中、マイカル沖300km、ここで一つ太陽神の使いとしても、グラ・バルカス帝国としても想定外の事態が起きた。

コンテナ船がグラ・バルカス帝国の水偵によつて攻撃を受けた、明確に日本の旗を掲げ、グラ・バルカス帝国が使用している無線周波数に太陽神の国家と伝えるも、通信が繋がる事はなく脱出艇に乗った船員も殺された。

幸い最後まで船に残っていた船長だけが生き残り、ムー国の船舶に救助されたことで、攻撃した航空機の識別が早急にできた。

取引のある中立国への攻撃、さらに非戦闘員である民間人の殺人、宣戦布告するには十分すぎる行為であった。

直ちに問題となり、ML868でレイフォルに外交官が赴いていた。

「グラ・バルカス帝国からの宣戦布告の意思は受け取りました」

急ぎグラ・バルカス帝国が状況を確認する中、確かに潜水艦隊がマイカル沖にて、同日同時刻に一隻の輸送船を攻撃し、沈めていることが確認できた。

つまり、明確に太陽神の使いの国家、それもレイフォルに物資を運んだ帰路に攻撃を仕掛けたことになる。

「そのようなつもりは決してありません！ これは海軍部のミスで！！」

「もはや手遅れです。船舶撃沈だけでしたら交渉の可能性もありましたが、避難艇に乗った20人の船員は、銃撃を受け死にました。民間

人の殺害に関しては、国家として責任を取って頂きます。それでは」青ざめるグラ・バルカス帝国の外務省の職員や軍部の者を置き去りに、外務省を離れると通信用コンテナを引き上げ、レイフオルを離れていった。

今まで表向き、ムーや神聖ミリシアル帝国には、対魔帝の為に訓練を施していた部隊や艦隊の、対グラ・バルカス帝国への使用には何も言わなかったが、許可を正式に両国に出した。

ムー国では、オタハイトに対魔帝部隊が配備され、連日首都防衛艦隊に訓練を付けている。

教導団として戻ってきた兵士の表情の変化に皆驚き、訓練を受けている首都防衛隊はまったくついていけず、毎日地獄のような訓練に「悪魔のラ・カサミ、地獄のラ・カーニャ」

と呼ばれ、配属されることをムーの海軍兵は非常に恐れた。

そんな中、衛星映像からグラ・バルカス帝国の艦艇が、北回りでムー国オタハイトに向かっていている事が分かり、秘密裏にムーに対して警告。

オタハイトから急ぎ首都防衛艦隊及び対魔帝艦隊が迎撃のために出航した。

57. オタハイト防衛・マイカル沖殲滅

迎撃に出た艦隊のレーダーにはグラ・バルカス帝国の航空機が映り、戦闘態勢を整える。

「対空攻撃用意！」

ラ・カサミによる対空誘導弾、ミストラル6連装・遠隔式SADR AL2基が次々と発射され、グラ・バルカス帝国の航空機は成すすべなく火達磨となって墜落していく。甲板では発射が終わると甲板員によってミストラルの再装填が行われる。補給は時間との勝負、訓練によって早急に補充が行われる。

一方ラ・カーニャからは空を埋め尽くすほどの対空砲火が撃ち上げられ、接近しようと試みる爆撃機が次々と火の塊となって墜落していく。

余りの対空砲火に空の一面が対空信管の爆発によって黒い煙に覆われ、まるでドーム状に防空圏を表していた。

700kmのXF5Uを標的に様々な対空砲火訓練行い、レーダーによって速度予測さえできていれば、推定速度予測によって対空砲火ポイントを見極める事が出来る。

脅威ともとれる防空能力に、グラ・バルカス帝国の航空機が撤退していく中、過酷な訓練により、やせ細っていたミニラルの目は鋭く海上を睨んでいた。

「我々がムー国を守るのだ！ 各員一層の奮闘を期待する!!」

ムー国を守る為と言う意思を中核に、地獄のような訓練を耐え抜き、強化された守ると言う意思はラ・カサミを最大効率で運用している。

迫るグラ・バルカス帝国の艦隊をレーダーと視界で捕え、45口径41cm単装砲の照準が自動で合わせられる。

「主砲射程に入りました！」

「撃てええい！」

ラ・カサミの船体を揺らすほどの轟音、10数秒の飛翔時間を置いたのち、先頭を進んでいた駆逐艦を砕き爆発炎上し沈んでいく。

劣化モデルとはいえ、自動装てん装置とFCSによって次の標的へと砲身が向けられる。

30秒の時間をもって続けて発射される大口径の砲弾は、重巡洋艦の装甲を打ち砕き大きな爆炎を上げた。

「長魚雷射程30kmです！」

「戦艦に向け魚雷発射！ 次いで巡洋艦、駆逐艦に向け攻撃を続行せよ！」

注水が完了し、設定の終わった長魚雷が発射され、慌ただしく艦内では次弾装填作業が行われる。

「敵戦艦から砲煙確認！ レーダーから交差無し判定！」

「航路そのまま！ 続けて魚雷発射せよ！」

最大船速で航行しながら、レーダーと鍛え上げた技術を信じ、ラ・カサミは次の標的へと魚雷の設定を行う。

交差する砲弾によって激しく波が船体を揺らし、船内では少なくともいけが人が出るも、ラ・カサミの最大限運用を続ける。

ほんの20分、その時間によって魚雷が到達し、グラ・バルカス帝国の艦隊は水柱を上げ水中に引きずり込まれていった。

ムー国 マイカル

日本企業はないが、国家法人が情報収集を行い、原油精製技術について簡単な指導を行っていた。

ティーゲル戦車と同時公開した技術によって発展した製鉄・精油技術。しかしそれに伴う大気汚染を危惧し、大気汚染防止技術、これだけは最新設備を与えなければ世界を汚染してしまう。その為に太陽神の使いとして、ブラックボックス化した浄化設備を販売し、接続と運用方法を指導していた。

そのマイカルに向け、グラ・バルカス帝国の艦隊が迫っていることが分かり、邦人保護のために潜水艦が静かに忍び寄っていた。

優先すべきは対魔帝戦と国民の保護、次いで世界の平和であり、無差別攻撃になりかねない場所に攻撃を仕掛けようとするなど到底容

認できるものではない。

ただ静かに、一隻たりとも残さず、気付かれることもなく、4隻のそうりゆう型潜水艦が潜んでいた。

一度に空母を含んだ5隻の艦が沈み、グラ・バルカス帝国の艦隊が慌てふためく中、続けて魚雷が発射され通信を行う暇もなく艦隊は1時間もかからず消滅した。

何も理解することができず、マイカル市民は何が起こったのかも知る事もなく、ただ現状の平和と迫る戦火だけを心配していた。

58. グラ・バルカス帝国・老人会・アルーの戦闘

グラ・バルカス帝国では、宣戦布告をするつもりはなかった国に対して、民間人の殺人と言う行為をしてみました。

それも紛れもなく技術的にも上回る国家に対しての行為に、該当潜水艦の艦長やパイロットの罪を問うが、それだけで許されるわけでもなく、明確に宣戦布告と思われる言葉を公式に受け取っている。

「現場は何をしている！」

「海軍の失態だぞ！」

「陸軍から情報はないのか！」

「情報局はどうした！」

戦うしか選択肢はない。正確な軍事力は不明ながら、技術力だけは確実に上回っている。早急にムー及びミリシアル帝国との戦争を終結させ、太陽神の使いとの戦争に向かわなければならぬ。

会議は紛糾し、海軍艦隊の増強と防空体制の強化、そして陸軍の増員や戦時体制の強化など、国家存続のために舵をとる。

それでもなお、外務省は外交的解決を求め、何かしら手がないかと模索していくこととなる。

90代後半の元大日本帝国時代の空軍技術者から、繰り返し送られてきた直訴状、それは失われた震電を復元、彼らにとって試作機が作られただけで終戦によって停止された苦心の機体であった。

他国企業やクラウドファンディングとは異なり、用意した予算も微々たるもので設計図と直訴状のみであるため、国の予算を使うわけにも行かず断りを入れていたのだが、とある会社の社長が全財産を寄付し、制作が決定された。

ムー国とミリシアル帝国への売却を視野に入れ、HONDAによって制作が開始。しかし簡易的な設計図はあるものの、詳細図は失われて久しい為、残されていた構造設計図面を元に、一から図面の引き直しが行われた。

しかしラヴァーナル帝国の戦闘機はおそらくM1.0から1.5

程度の速度が予測されており、いまさら750kmの震電を復元しても何の意味もない。

それならば売却済みのXF5Uでも充分である。だからこそXF5Uにも利用できる小型ジェットエンジンの搭載を含めた改良が行われた。

一方で問題点も多かった

・エンジンの過熱

調整を施されているとはいえ、本来はピトー構造の民生ジェットエンジン、エアインテークの形状変更が必須となる。

・エアインテークの改良と改善

商用エンジンであるためエアインテークがピトー型の為、適切な2次元ランプ型を探さなければならず、その為操縦席後部のエアインテークが大型化など弊害も発生。結局D型インテークと機体上部にもインテークの追加が為された。

・機体強度不足

750km想定した設計に対し、M1.0に耐えられるわけもなく、構造材や内部構造の強化が必要であった。

・ピーキー過ぎる制御性

操作に関して機敏に反応し過ぎてしまうため、安定性に欠ける。

結果として設計者、鶴野技術大尉の先見性・計算・設計は間違っていないかったが、それは電子制御という技術的対処が出来る事が前提であった。

現状では、余りにもピーキーなために4機製造された時点で、量産してもムー国への売却さえ難しいと判断。電子システムを搭載するわけにも行かず、機械式システムで全て対処できるわけもなく、制御さえできれば高性能というじゃじゃ馬となってしまう。

制作された震雷改はムー国無人島基地に輸送され、ムー国航空パイロットの中でも、特に操縦技量の優れたパイロット一名に供与されることとなる。

震雷が完成するころ、ムー国ではアルー防衛隊に向けムー国対魔帝

教導団中隊が到着していた。

「決してあきらめはしない！ 覚悟は良いか！」

「はっ！」

本来は対魔帝の為に用意された戦力、しかしそれはムー国民を守る為でもある。

命令を拡大解釈し、無理やりの行軍、数百台の戦車相手に1教導団、そして航空支援もない。

だが、ここで行動をとらなければ、アルーの住民が蹂躪されてしまう。

アルー都市内に牽引式対空機銃を急ぎ配置し、運搬車から弾薬や偽装網が急ピッチで設営されていく。

しかし過酷な訓練を乗り越えたと言っても、数は極めて少数であり、住民を逃がす程度の時間を稼ぐ事しか出来ない事を理解していた。

「対空機銃設置よし！」

グラ・バルカス帝国による砲撃が始まり、届いた砲撃が建物を破壊し始める。

「1台は対空機銃防衛！ 残りの戦車は全て前へ！ 歩兵隊は民間人の保護と撤退を支援！」

砲撃が届かないアルーの街中に移動式だが設置された対空機銃10基、残りの戦車7台は迫りくるグラ・バルカス帝国の部隊に対し、迎え撃つため前線へと向かう。

すでにアルー防衛隊と激しい戦闘に入っており、銃弾や砲弾が飛び交う中を進んでいく。

「楔を打ち込むぞー！」

先頭を走る超重戦車マウス、ほぼ3方向からグラ・バルカス帝国戦車の砲撃が集中し、その装甲に弾かれるが車内は酷い騒音が響き、上空からアンタレスによる機銃掃射も行われる。

「砲塔機銃破損！」

「退くな！ 前進を続けろ!!」

通信機からはアルー防衛隊の被害と、そして味方戦車の被害が伝え

られている。

少しでも的となり、そして反撃をしなければ

「4号車！ 履帯をやられた!!」

頑強なティーガー戦車とはいえ、履帯に当たってしまえば破損はしてしまう。

とても低い可能性とはいえ、ゼロではない事態が発生してしまっ
た。

「そのまま砲台として撃ち続ける！ 誰もアルーに入れさせるな!!」

「了解！」

「第二牽引対空機銃！ 弾が切れた！ 補給完了まで車載機銃で撃ち
続ける！」

地面を埋めるかのように迫る、グラ・バルカス帝国の侵攻部隊に対
し、中隊規模でしかない対魔帝部隊が相対した。

59. 戦車

3方向から戦車の主砲、そして上空から航空機銃によって、滅多打ちにしているのにもかかわらず、止まることなく攻撃を続ける超重戦車マウス、そのマウスからの砲撃が行われるたびに一両ずつ味方の戦車が吹き飛んでいく光景に、グラ・バルカス帝国の陸軍は恐怖に陥っていた。

「化物が！」

爆撃機から爆弾が投下され、マウスの砲塔に直撃し爆炎を上げる。

歓声が上がリ、完全に動きが止まった巨大な戦車に近付いていく。天板は裂け、穴が開いているように見える、完全に撃破したように見えた。

グラ・バルカス帝国の戦車が近づく中、120mmの咆哮が全てをかき消した。

「まだ生きてるぞ!!」

「馬鹿な!?!」

先程の爆撃は増加装甲として天板にも装着された空間装甲によって阻まれ、機銃とアンテナを吹き飛ばしたものの、超重戦車マウスを撃破するまでには至らなかった。

さすがの衝撃によって搭乗員は一時的に意識がもうろうとしていたが、耳栓をしていたおかげで鼓膜も失っておらず、操縦を再開した。「撤退だ！ 撤退せよ！」

少数の部隊である以上、迂回してアルーを襲う事は出来るかもしれない。だが、撃破も出来ない化け物が陣取っている以上、放置しておけばいつまでもバルクルス基地を狙われる不安が付きまとう。

悪魔のような巨大な戦車に、たった7両の教導団に第一次ムー国侵攻は一時的にとん挫した。

すでに教導団の損耗も激しく、教導部隊は撤退を開始。鹵獲されてしまえば、さらに不利になってしまう。そのような事を許せるはずもない。

損傷したティーガーを無事な戦車で牽引し、牽引式対空砲は車両に

よって撤退、可能な限り無事な避難民と共に空洞山脈へと、キールセキに向け撤退していく。

ドローン基地と空洞山脈の間で、ケーニクスティーガーが運用テストを兼ねて単独で行動。完全ドローン化したことで、さらなる追加改造を受けていた。

ロシアAIタンク ウラン―9を参考に、フランス製汎用誘導弾ミストラルを4基砲塔後部左右に搭載、贅沢な仕様ではあるが、ドローンタンクに求めるべき機能を見極めるためのテストベッド、第一号として潤沢に機能の追加が為された。

ケーニクスティーガー・TALON

AI搭載型遠隔操作ドローンタンク

・51口径105mmライフル砲

・M151プロテクター7・62mm機銃

・ミストラル汎用誘導弾 4基

日本にとっても、日本に残った各国の軍事会社にしても、AIドローンタンクは未知の領域に近く、どこまでをAIに任せ、どこまでを遠隔操縦にすべきか手探り状態であった。

「動作に問題なし。AIも順調に周辺状況を理解しています」

送られてくる情報をモニタリングし、各国の技術者が見ている中、自衛隊員によって操作される。

「システム 通常モード 安定」

GPSに従い自ら最適なルートを選び、ケーニクスティーガーはドローン基地近くまで移動を続ける。

そんな中周辺を判断する為のレーダーに偵察機と思われる表示がうつり、その方向には追いかけていると思われる民間人の姿がカメラに映った。

急ぎ話し合い、こちらを見られる可能性もあるが、人命を優先するとして実戦テストを開始。何よりも実戦テストが行える良い機会であった。

起動キーが入力され、各企業によって製作された軍事AIは、異世界で初めて対人戦を開始した。
「システム 戦闘モード 起動」

60. 自律兵器・新型爆弾

FCSと連動したAIが自動で最適な武装を選択し、民間人を追い回す航空機に照準を合わせる。

誘導弾では爆発四散した破片が民間人に及ぶ可能性を考慮し、105mmライフル砲が戦闘機の未来位置へと向けられ、主砲から轟音を上げ装弾筒付翼安定徹甲弾が発射された。

数秒の時間において、航空機は風穴を開けられ、衝撃でバランスを崩すだけではなくバラバラになりながら墜落。

こちらに気付き、降下してくる3機をレーダーとカメラアイで捕え、前進しながらFCSによってミストラル汎用誘導弾の照準が合う。

高精度のAIが即座に標的をロック、操縦者に攻撃許可を申請、たった一回許可のトリガーを引くだけで全てが終わる。

許可を受信したケーニクスティーガー・TALONからミストラルが発射され、ロケットと認識した3機のアンタレスが回避行動を取ろうとしたが、ミサイルは追尾し全てを火達磨へと変え撃墜した。

戦場から離れた場所で、非現実的でありながら、兵士を危険に晒さずに命を奪う。実に効率的で安全な戦争。

「状況終了しました」

モニターしていた自衛官や技術者が安堵の表情を浮かべ、システムを切り替えAIにまかせる。

「システム 保護モード 移行 民間人保護 優先」

AIの判断によってゆっくりと女の子達の所に移動。困惑している二人に自衛官が話しかける。

「あの……」

「横から上に乗りなさい。空洞山脈基地まで送ります」

非常時として車体に乗るように促し、民間人の女の子二名を車体に乗せたまま空洞山脈基地へと向かう。

「帰還開始」

AIは順調に入力された命令に従い、空洞山脈内にある基地へと安

全なルートを選択して帰投した。

この結果は重く見られ、

機能を一部限定し安価に量産する方針が決められる。

とはいえ、ケーニクスティイーガー・TALONはコスト度外視であるため、安価なものが望まれた。

しかし一定の問題もすでに米国で出ていた。

実際の命に対する感覚が酷く鈍ってしまうため、ゲーム感覚で攻撃許可トリガーを引いてしまうと言うことだ。

この倫理観の欠如に関して、一定数以上のAイドローンの運用は不可能であるとの考察もされている。

マグドラ群島

爆弾の技術的ブレイクスルーとして生み出された電子励起爆薬、シミュレート上ではTNT比較500倍であったが、合成精度の問題なのか現状では50倍程度が製造限界であった。現在も継続して研究が進められている。

しかし試験しない事には実用性は計れない、そのため1トンの電子励起爆弾が制作された。計算上はMOABの約5倍程度の威力を持つと想定されている。

1. 3600m以内の障害物を消し去る
 2. 7200m以内の人間を殺害
- 計算上は以上となる。

神聖ミリシアル帝国の協力を得て、マグドラ群島にある岩だけの小さい無人島で実験することとなった。

「コア魔法に近い爆弾とは」

ミリシアルとムーの技術者が共に観覧することになり、離れた場所で戦艦扶桑に乗って居た。

「コア魔法と同じものもありますが、これは異なります。コア魔法は推測が正しければ、使った大地を汚染し、数十年生物が住めないようにしてしまいます。これは単純に破壊するだけです」

「3・2・1」

強烈な光が周囲に発せられ、40kmも離れているところから観測していたのだが、衝撃波によって船は激しく揺れる、巨大なキノコ雲を上げ、巻き上げられた土砂が暗雲となり周囲に黒い雨が降り始める。

「偵察機によって映像が送られてきました」

映し出された映像には、跡形もなく無人島が消し飛び、浅い岩礁だけが残されていた。

ミリシアルとムーの外交官は光景の前に言葉を失い、日本としても眉間にしわを寄せた。予定していたよりもあまりにも威力が高過ぎたためだ。

「……威力を抑えたのですが、少々危険すぎますね。これは1トン以上は製造を控えるべきでしょう」

すでにMOABと同じ10トンクラスから200kgまでの製造を開始していたのだが、高過ぎる威力に使用する場所が限られてしまう。

これからの製造方針として主製造は500ポンド、つまり約227kg爆弾に収めるとした。威力が高すぎるのもまた、多目的利用の弊害となる。

そして急ぎ弾道弾への搭載も行われ核に準ずる戦略兵器としてさらなる開発が進められる。極めてクリーンに、核とほぼ同じ範囲を吹き飛ばせる兵器として。

61. 攻撃準備

鉾山町キールセキ

日本からの一部の技術公開によって、製鉄や鉾山技術の発達に伴い、景気は非常に良くなっており、人が集まり栄えていた。

酒場での話題はグラ・バルカス帝国との戦争であり、教導団の活躍とアルーの惨劇が語られていた。

「あの化物戦車、本当にやりやがったな」

「だがぼろぼろらしいぞ」

「すぐに直せるだろ」

「アルーは酷いありさまだそうだ」

「グラ・バルカス帝国の奴ら、本当に人間か!？」

アルー防衛は一度は成功したものの、損害が酷い為避難民を連れ部隊は撤退した。ドーソン基地も放棄され、最前線はキールセキ及びエヌビア基地となっている。

エヌビア航空基地にはXF5Uが次々と集まり、グラ・バルカス帝国との戦いに備えていた。マリンとは異なり海軍にはまだ配備されておらず、グラ・バルカス帝国にはまだ知られてはいない。

「そろそろ来ますが、失礼な態度を取らぬよう気を付けてください」

教導団のパイロットであり、空軍中佐である担当官が滑走路で並ぶ新兵に説明しているのだが。

「エース中のエースだつてきいたぞ」

「特別に許可された新鋭機つてどんなのだろうな」

「XF5Uと大差ないだろ?」

教導団の面々は無言のまま整列していたが、新兵は無駄口をたたいてしまう。

XF5Uは教導団及び主力部隊にのみ配備され、地方隊などにはマリンがいまだ主力であり、さらに太陽神の使いが使用する航空機をまだ一度も見ることがなかった。

「きたぞー!」

声を上げた新兵の視線の先には、誘導として先行していた震電、甲高い轟音を轟かせながらM1・2の速度でエヌビア基地の低空を抜ける。その翼には大きくムー国の国章が描かれ、誇りあるムー国の戦士であることを表していた。

「「おおおおお!!」」

新兵の歓声の中、操縦の難しい震電を操り滑走路に着陸、ゆっくりと駐機場まで移動しパイロットが下りてきた。

エルビア基地 空軍司令官の前に立つと敬礼で答える。

「グラ・バルカス帝国と戦うため、帰還いたしました。必ずムー国内の空を自由には飛ばせません」

「うむ。 貴官ら教導団には期待している」

ムー国内で期待と歓迎が行われている中、滑走路では太陽神の使いの兵力として、B―1B爆撃機ランサーが2機着陸した。MK―84汎用爆弾を電子励起爆薬に換装し、5トン爆弾に匹敵するMK―84励起爆弾を24発搭載。バルクルス基地を地図から消すため、高高度から単独で爆撃を行う。

制空権が例えなかったとしても、B―1Bなら問題なく爆撃が可能であり、たった2機でも電子励起爆薬なら、衛星写真で確認できている基地を十分に破壊しきる事が出来る。

6.2. 大陸間攻撃に向けて・空洞山脈航空戦

ムー国無人島基地に設置されている発射台に、通常弾ではあるが大
陸間弾道弾が設置され、グラ・バルカス帝国沿岸に存在する軍の燃料
貯蔵庫、10万トンの生成された重油が保管されている地区へ向け、
攻撃を行う準備が進められていた。

本国への攻撃など全く考慮されておらず、大気圏外から降下してく
る誘導弾をグラ・バルカス帝国が迎撃を出来るわけもなく、何が起き
たか認識する事さえできないだろう。

とはいえ、日本として使用経験がない為、精密なシミュレーション
を繰り返し、確実に標的に攻撃を加えられるよう、入念な準備が進め
られていた。

ドーソン基地、アルーの町、その二か所を奪還する為、空洞山脈基
地からは整備の終わった教導団戦車隊が、エヌビア基地からは教導団
と主力航空部隊が制空権奪取に向かう。

もちろん、制空権を奪えなかったとしても、B-1Bランサーによ
る高高度爆撃は行われる。

エルビア航空基地からXF5Uが次々離陸していく中、ゆつくりと
震電が滑走路に入り、甲高い轟音をたてXF5Uを引き離し高度を上
げていく。

ムー国総数100機の航空機による制空権奪取、第一次反抗作戦の
幕開けとなる。

ドーソン基地には占領したグラ・バルカス帝国によってレーダー設
備が設置され、空洞山脈上空で敵機を発見し急遽アンタレスによる航
空戦が始まった。

「くそー、妙な航空機のくせにー！」

アンタレスは苦戦し、速度・旋回性能・火力、どれをとってもXF
5Uが上回る。

ムー国を守る為、過酷な訓練を乗り越えたパイロットたちとことな

り、格下相手に戦う心構えであった、グラ・バルカス帝国の航空機パイロット達は、マリン相手に練度も下がっており、ほとんど対応することができない。

ドッグファイトによってXF5Uに何発か機銃があたるものの、失速や墜落することなく、戦闘が続けられアンタレスが次々と落ちていく。

数発程度当たったところで、ハニカム構造かつ木製のXF5Uを撃墜する事は出来ない。

むろんコックピットやエンジンはどうしようもないが、その強固さと安定具合は、ムー国にとつても利でありマリンと入れ替えて大量生産が行われている。

生産と配備のバランスが取れていないが、いずれは艦載機もXF5Uばかりとなるだろう。

「空の化け物が来るぞー！」

「後ろを取れー！」

「数で対応しろ!!」

甲高い音を立て、一機の航空機がアンタレスの間を抜け、2機が墜落していく。

一撃離脱戦法、M61バルカン一門、射程も長く連射速度もはるかに上回る震電によって、アンタレスは容易に撃ち抜かれ、背後を取ろうとするも距離を取られてしまうか、墜落するかのような急旋回に対応できず、近付いてくるたびに2〜3機が落ちていく。

狙われれば回避する事の出来ない死神が、鎌首もたげて迫ってくる。その恐怖は絶対のもので編隊は連携を取る事さえできず、ただ逃げ回り混乱した通信が錯綜するだけであった。

しっかりと震電の特性を理解し、それを生かせるパイロットが乗り込み、状況の混乱を助長させムー国にとつて有利な状況を作り上げていた。

63. バルクルス基地爆撃・同時多発攻撃

1時間にも及ぶ激しい航空戦の末、ムー国はグラ・バルカス帝国の航空機を殲滅、制空権を完全にムー国が奪取することに成功した。

爆装したXF5Uもドーソン基地へと向かう中、先行して爆撃機B-1Bランサーが基地上空に到達、レーダーに映る事もなく上空から爆弾の投下を始めた。

一発当たり5トン爆弾に匹敵するMK84励起爆弾が48発、満遍なく投下され炸裂する度に建物が消えていく。空襲警報が鳴り響く暇もなく、爆炎と黒煙が吹き上がり、小さなきこの雲がいくつも上がる。

ほんの10分にも満たない爆撃によって、バルクルス基地はその機能が失われ、地下施設に居た将兵も爆発による空気圧を受けて大半が死亡。しかし基地司令官であるガオゲルグは、新戦車受領の為にレイフォルに居り難を逃れていた。

バルクルス基地において僅かな生存者が空爆から逃れた直後、続けられたムー国によるXF5Uによる空爆が占領されていたドーソン基地にも行われ、事実上アルーを守るのは占領軍のみとなった。

ここでムー国はアルー奪還を決断、生産されていた全ての戦車や対空機銃など物資をキールセキへ輸送を開始、それと並行して第二文明圏各国に対して、ムー国の戦果を大々的に報道、対グラ・バルカス帝国戦線に加わるように伝え、バルクルス基地を第二文明圏の反攻拠点としての立て直しと人員の派遣を求めた。

事実上瓦解したドーソン基地は物資集積及び輸送経路基地とし、バルクルスを最前線として立て直す。バルクルス基地の跡地はほぼ更地と化しているため、一から作り直した方が早いのでドーソン基地よりも都合が良かった。

ムー国だけではなく、太陽神の使いとしても建設には協力すると伝えており、第二文明圏のいくつかの国家はムー国に協力し、兵力の供出を行うことを申し出た。

とはいえ、いまだ事態が好転しているわけでもなく、いくつかの国

はやはりグラ・バルカス帝国に対して消極的であり、如何に自国の体制を保てるかに注力していた。

グラ・バルカス帝国が大混乱に陥っている中、準備の整った弾道弾がムー国東海無人島基地から発射され、グラ・バルカス帝国沿岸部重油保管施設に向かっていた。

太陽神の使いによる宣戦布告によって防空体制が強化され、連日アントレスによる航空警戒が行われる中、突如重油保管施設が大爆発を起こして吹き飛び、次々と近くの燃料保管施設を巻き込み炎上していく。

数万トンの重油を失い、さらに延焼したことで人員に設備、そしてガソリンを始めとした燃料も1万トン近く失った。

グラ・バルカス帝国の調査では原因不明であり、直前にレーダーに何か写ったとしか情報はなかった。

輸入した大量の原油がろうとも、万トン単位の重油を生成するのは簡単ではない。保管設備の建設もあり、現代の日本でもかなりの時間をも有するだろう。

衛星写真から攻撃に成功したのを確認してはいたが、問題もあった。標的から100mほどずれていたため、あやうく民間施設に影響が及びかけてしまった。

その為更なる開発が必要であると判断され、現在保有している旧式の弾道弾2基はグラ・バルカス帝国に対して在庫処分を行うと決定がなされた。

照準は北部及び南部海軍基地に定められ、半月以内に発射するための準備が進められていく。

64. アル―奪還・派兵準備・黒い鳥

アル―には撤退できなかつた住民が残され、凄惨な状況におちいつていた。戦時国際法が結ばれていながら、アル―で守られていない事は明白であり、私刑・強盗・暴行・強姦が横行していた。

軍隊とはそう言った事が起きるからこそ、内部で厳しく取り締まる部隊が必要となるのだが、グラ・バルカス帝国ではそれが形骸化していた。

むろんドーソン基地やバルクルス基地が完全に破壊されたため、統制が破壊されてしまったというのもあるが、将兵の質が余り良いものではなかつたのも要因の一つであつた。

ム―国の教導団と編成されたばかりの自動車と装甲車ばかりの機甲師団、そして歩兵師団がキールセキを出発し、空洞山脈を抜けてアル―へと向かつていた。

主戦力とはいえ、グラ・バルカス帝国とほぼ同等か一步劣る装備が基本であり、参戦した第二文明圏各国の装備となるとさらに落ちるものとなる。

それでも数万の歩兵や工兵は重要なものであり、キールセキから空洞山脈内を通る形で、突貫で線路の敷設が行われている。制圧が成功した後も、物資供給が間に合わなければ奪還されてしまうからだ。

主力航空部隊は現在補給及び訓練中であり、大金星を挙げた震電に至つては現在メンテナンス中で飛行はできない。

ム―国では本格的整備が出来ないため、一度戦闘飛行を行えば太陽神の使いに整備してもらわなければならない。とはいえ、とんでもない撃墜数をたたき出し、名実ともにエースであり戦意鼓舞に使える人材を早々前線に送れるわけもないが。

太陽神の使いとしても兵力を用意し、超大型飛行船ML86Xによつてオイ車・ホリ車・チリ車が輸送され、不整地向けに生産が行われていたエクスカリバー戦車も20台投入された。

危険な市街戦など行うつもりはないのだが、都市から逃げてきた兵士への対処、難民を保護するために兵力を派遣する。

ケーニクスティーガー・TALONを参考に、人員の安全性を確保できる事からドローン戦車の開発が急がれた。

ロシアのウラン―9・米軍のRIPSAW M5を参考に、用途及び主目的などを明確に、価格低減と重量低減に努める。

何よりも重視されたのは小型軽量でローコストであること。

一から車体を再設計しては時間がかかり過ぎる、各国の軍事産業に協力を求め、会議の結果、FV107シミター装甲偵察車を参考にするとした。

全長： 5.148 m
全幅： 2.242 m
全高： 2.096 m
全備重量： 7.07 t
武装： Mk 44 ブッシュマスター II 30mm×1

7.62mm機関銃L43A1×1

ミストラル汎用誘導弾×2

HOT 対戦車誘導弾×2

各種センサー類、レーザー警戒システム、熱/電気光学カメラを搭載、簡易レーダー、最低限であり互いに連携させることで群として運用する。

連携接続することで多目的に状況を判断し、群れで対応させる。

B―2スピリット・ジャパン

日本でも一機しか存在しない。虎の子、アメリカから購入する時もありかなり無理しており、専用ハンガーで厳重に保管されている、全てを焼き払う黒鳥である。本来であれば有事の際には米国主導で使用さ

れる事になっていたが、転移前に所有を完全に移管されていた。

いま現在、アニコンリール皇国の先進研究所に攻撃を仕掛ける為準備が進められていた。先進研究所に近い基地を高高度から爆撃し、それと同時に特殊部隊を潜入し混乱している間に鬼姫を奪還、基地は新型の電子励起爆弾で跡形もなく吹き飛ばし、奪取されたことを隠す。

着々と準備が進められていく。

65. 弾道弾・圧力・奪取に向け

グラ・バルカス帝国に対して残されていた大陸間弾道弾が撃ち込まれ、北部と南部の軍港が破壊された。

しかし南部に至ってはミスが起きてしまった。正確とは言えない狙いであったにせよ、海上で爆発してしまい巨大な津波を引き起こし、民間施設にも被害をもたらしてしまった。

このため現状の弾道弾の精度では内陸にある軍事基地を狙うのは適切ではないと判断され、現状では空爆による精密な攻撃が最適であるとの判断に至る。

ミリシアルの艦艇を先頭に、ラ・カサミ級2隻、日本の扶桑と艦隊を組んでプシュパカ・ラタン沖に停泊していた

神聖ミリシアル帝国及びムーと共に訪れ、総意としてアニユンリール皇国の外交官と話を行っていた。

「ヘイスカネン国から誘拐した鬼姫エルヤの返還を求める。これは命令である」

神聖ミリシアル帝国の外交官が代表として、アニユンリール皇国外交官に対して要求を出していた。

「一体それはなんのことで」

「ヘイスカネン国を我々は国家承認し、詳細な情報を得ている。言い逃れや隠す事は許しません」

冷汗を流しているアニユンリール皇国の外交官を尻目に、一切の妥協を許さぬ強い口調で話を続ける。

仮にも神聖ミリシアル帝国は第一列強、現在戦争中とはいえ、すでに太陽神（日本）の参戦により大勢が決しつつあり、運用していなかった対魔帝艦隊を派兵していた。

「期限は3週間、それまでに返還がなければ、周辺国との一切の交易を禁ずる。それでもなお返還しないのであれば、覚悟を決めるように」

確固たる証拠があるとして、有無を言わさず言い渡す。

所詮は偽装出島、しかしそれゆえに本当の戦力を配備していないことはわかっている。

確率は半々ではあるが、アニウンリール皇国本土から艦隊が出てくるか、それとも黙殺するのだが、日本の読みでは黙殺方向で返還を行うと考えられている。

むろんそのような事をさせるつもりはなく、表向き公式的に圧力をかけ、どうすべきか会議を行っているうちに強奪し、返却できないとして非を問うつもりであった。

一年か二年か、完全に交易を禁止する間に、ミリシアルやムーは国力の増強を行う算段であった。

現在　大陸の北側を航空機が飛行していた。

先進生物研究所の爆撃40分前に強襲し、鬼姫エルヤを救出、そして爆撃の騒ぎに乗じて離脱すると言う事になっていた。

防空体勢も破壊する為、先行したF-35Aもステルス機能を優先した装備で防空識別圏に侵入、レーダー関連設備を破壊するため、そして先進生物研究所に向けてV-22が向かっていた。

最大まで増槽タンクを装着したV-22、往復距離にあまり余裕はないが、それでも救出部隊を送り込むには十分である。

迅速に鬼姫エルヤを奪還する事が任務のため、TALOSのみで構成された救出部隊を編成、たった2小隊ではあるが強襲するには、これ以上の戦力を投入すると撤退時に時間を要してしまう。

66. 侵入・悪魔のカード

前もって行った偵察行為によって得ていた防空レーダーに向け、夜の闇に紛れこみ、低いエンジン音を響かせながらアニュンリール皇国の防空識別圏に侵入。

当初は電波妨害も考えたのだが、相手にレーダーは妨害できるといふ技術的な思考を与えないため、不明機による爆撃もしくは同胞のテロ行為と認識させるため、あえて電波妨害をしない方針を選んだ。

浮島に係留されているML86Xの会議室、そこにはミリシアルとムーの軍務の高級官僚が集まっていた。

「では、こちらを御覧ください」

大画面にはこれからの大まかな作戦スケジュールが表示されていた。

「これから新生物研究所に突入します。映像はリアルタイムに送られてきますが、少々凄惨な映像が流れますのでご注意ください」

TALOS部隊から映像が送られてくるのだが、もちろん戦場の為えげつないものも映し出される。それは覚悟してもらわなければならない。

「定刻です。レーダー基地への攻撃が終わり、強襲奪還作戦が始まります」

画面には地図上に光点とマークが記され、順調に作戦内容をクリアしている状態が映し出されている。

「第一ミッション完了。これより新生物研究所への潜入をミッションを開始します」

本格的作戦が始まる前に、続いてグラ・バルカス帝国に対する説明を行う。

「一つの工廠を除きすべて爆撃、海軍施設及び工業区を爆撃します。ついで行政区に対して警告のチラシと同時に鉄塊を投下。いつでも殲滅できる旨と降伏を求めます」

ミリシアルやムーの観戦武官や外交官は渡された資料に目を通す。

「列強各国はアニュンリール皇国に向け、これから2年で準備を整え、戦争をしなければなりません。なによりもラヴァアーナル帝国にも備えなければなりません。問題児の相手をいつまでもしている暇はないのですよ」

本来の敵はラヴァアーナル帝国であつて、グラ・バルカス帝国ではない。なのでいつまでも関わって国力を消耗させるわけにはいかないからだ。

「僕の星についても、一週間以内に回収し地上に降ろします。解析準備について神聖ミリシアル帝国の魔道科学者に解析を願いますが」「我々であれば、解析は出来ると思います。ですが、時間は要するか」と

魔導分野においてミリシアルを超える国家は存在せず、ミリシアルに頼むほかはない。

「ムー国においては、ラ・カサミ級及び空母の建造を急いでください。こちらでもラ・カーニャをベースとした改良部品の製造を急ぎます。アニュンリール皇国の技術はミリシアルとほぼ互角かやや上回っているくらいでしょう」

上回っている、その言葉にミリシアルの観戦武官は苦い顔をするが、衛星写真からそれらしいという情報は得られていた。

むろんそのこともミリシアルに伝えられており、その対策も考えられていた。

「これから行われるアニュンリール皇国との戦争は、ラヴァアーナル帝国と戦う訓練となるでしょう。ミリシアルも戦時体制の移行と航空機・空母の量産を急いでください。戦艦ではもはや戦いにはなりませんので、防空艦についての概念も公開致します。またミリシアルからは航空技術者とラヴァアーナル帝国研究者の派遣を求めます」

もはや猶予は残されていない。アニュンリール皇国相手に大損害を被るようでは、日本がラヴァアーナル帝国と戦っている間に破滅してしまう可能性だつてあるのだから。

67. 奪還

新生物研究所にもっとも近い基地がB-1Bランサーの空爆によって消滅、防空レーダーの破損によって混乱している中、さらに基地の消滅、この状況で冷静な判断ができるのは、実戦を繰り返した将兵くらいだろう。

V-22が侵攻し、空挺高架下TALOSの部隊が新生物研究所に突入、警備システムを破壊に回る部隊と鬼姫救出に回る部隊に分かれる。

襲撃者の情報を隠すため、研究者などは一人残らず射殺し、地位の高い者と思われる人物を捕えた。

「鬼姫はどこだ」

死なないうような急所を外しながら手足を刻み、居場所とアクセス方法を吐かせる。一人の研究者を使ってアクセスルートを開けさせ、迫る爆撃時間を無駄にしないよう、いくつもの隔壁や区画を抜け目的地へと駆け抜ける。

「残り29分」

囚われている区画に到着し、代表として随行してもらった一人の鬼族の黒騎士に鬼姫エルヤを確認してもらう。

「姫様！」

一角にある牢獄から、黒騎士が硬質のガラス越しに対象の人物を見つけた。

「おお、お前は」

研究者に扉を開かせ、黒騎士は鬼姫エルヤの間に跪く。

「ご無事なヨウで何ヨリで御座いマス！」

「再会の確認はあとで、投下時刻が迫っています。お早く」

「姫、今ハお急ギ下サイ」

「良く理解できませんが、今は従いましょう」

再開と安堵に時間を要している暇などなく、急がなければ空爆に巻き込まれてしまう。

頷く鬼姫エルヤを黒騎士が背負い、来た通路を走り戻り始める。

いくつもの通路を抜けたところで、出口付近で問題が発生した。

「魔物の敵襲！」

巨大な蛇と百足が融合したような化け物、その後ろには通路を埋めるほどのオーク達が居る。

12・7mm重機関銃を持つTALOSが対応するも、効果は見えないがその背後からは次々と新しい魔物が現れ続けた。

強行突破しようにも、TALOS部隊ならまだしも鬼姫エルヤを怪我させるわけにはいかない。

「ロケット！」

TALOSがSMAWロケットランチャーを構え、横の通路に皆が退避すると同時に発射された。

蛇のような百足のような生き物が弾け飛び、その後ろにいたと思われる一人の男が怪我をしたようだが、魔物の統制が乱れ、そのまま魔物の群れの中に隠れてしまう。

「再度ロケット！ 次いで12・7mm重機関銃斉射!!」

再び発射されたSMAWロケットによってオークの群れの一部が吹き飛び、重装備のTALOS分隊が12・7mmを集中させ、狭い範囲を一気に片付ける。

いままで統制されていた魔物の動きが乱れ、周囲に散り始める。どうやら操っていただろう対象を、仕留める事が出来たようだ。

「急げ！ 空爆開始まで時間がない!!」

TALOS部隊は任務を全うし、鬼姫エルヤと共にV-22に乗り込み離れていく。

それからほんの6分後、B-2スピリット・ジャパンの2,000lb爆弾 16発によって新生物研究所は念入りに破壊し尽くされ、小さなくぼ地のみが残された。

アニユンリール皇国の守備隊が新生物研究所に着いたとき、何も残されておらず、どの国が行ったのかさえ判明することはなかった。

- ・ 不明兵器によるレーダー防空システムの破壊
- ・ 不明兵器による軍事拠点の壊滅
- ・ 新生物研究所の消滅

二大列強から突き付けられている鬼姫エルヤの返還要求、積みあがる難題にアニユンリール皇国は動きを鈍らせていく。

それでもなお、グラ・バルカス帝国との戦争で戦力を消耗し、完全に戻るには5年は掛かると読んでいるアニユンリール皇国は戦争の準備を進めていた。

68. 姫日本へ・破壊者

非常事態と言うこともあり、浮島ではなく鬼姫エルヤは日本本国へと輸送された。

多くの理由もあるが、何よりも安全を確保し、新生物研究所で何かされていないか精密検査を行うためだ。

「いつ戻れるのですか」

鬼姫エルヤは精密検査を受け始めて一週間、あらゆる病原菌や血液検査などを行っているため時間を要していた。

「数日以内には、ヘイスカネンにお送りすることができます。もうしばらくお待ちください」

検査結果はどうしても時間がかかる。体の構造は大分人間と近いとはいえ、相違点もある為時間が通常よりも掛かっていた。

「今のところ問題もなく、検査終了次第となります」

付き人として黒騎士が側に控えているが、国内を幾らか見て回り知見を広めてはいるが、国の皆が待っている事は確かであり、早く戻る事を希望していた。

グラ・バルカス帝国は守勢に回る事をよしとせず、主力艦隊を派遣。1000隻にもなる大艦隊は、圧倒的物量をもってムー国首都オタハイト、および商業都市マイカルを殲滅。そのまま神聖ミリシアル帝国首都ルーポリスを攻撃する為に向かっていた。

しかし数キロにもわたる船団は格好の的であり、ムー国東海無人島基地からB-52Jストラトスフォートレス 3機が向かっていた。

そして同時期、B-1Bランサー2機が空中給油を得て、グラ・バルカス帝国本土上空に到達していた

グラ・バルカス帝国のレーダーでは発見する事が出来ず、ステルス性能を存分に生かし、対応不可能な高度から内陸部への爆撃、それも精密に軍事拠点だけを狙い、電子励起爆弾を投下、5トン爆弾に匹敵する威力によって巨大なキノコ雲を上げ、軍事拠点が地図から消えて

いく。

無敗・無敵の神に選ばれた帝国が、突然受けた爆撃によってグラ・バルカス帝国の国民は逃げ惑い、混乱し何が起きたのかも中々理解する事が出来なかった。

B―1Bは精密に進路上の軍事基地2箇所を爆撃、首都を守る為と思われる軍事拠点だが、もう一か所目的地があった。

アンタレスの妨害を受ける事もなく、悠々と帝都ラグナにまで至り、グラ・バルカス語に訳された降伏を求めるチラシを大量にまく。

そして何の変哲のないただの鉄骨、それを一本落とす。

“いつでも首都を地図から消せる”

その意図を明確に理解させるための過度の爆撃、これでもなお理解せずに戦争継続するのなら、繰り返し軍事拠点を爆撃し、それでも理解しないなら工業区、そして商業区と順次爆撃を行う。

燃料も弾薬もただではなく生産にも時間がかかる、戦費を回収した所で生産時間を無駄にした事に違いはなく、無駄は極力避けたい意図があった。

69. 会議・攻撃

御前会議に集まった将校は皆途方に暮れていた。

強化した防空体制を潜り抜け、首都を守るための航空基地が地上から消えた。攻撃されたのではない、地上から消えてしまったのだ。

建物の残骸も残っておらず、クレーターだけが残され、失った将兵の数は甚大であった。そして発表していなかった戦況情報、それが国民に知れ渡り政治も混乱、志願する国民と講和を訴える裕福層、国内は割れている。

国民は憲兵が混乱を抑えてはいるが、帝王グラ・ルークスの耳にも届き、詳細な報告を求められていた。

首都オタハイトに向かうグラ・バルカス帝国の大艦隊、本来であれば空対艦誘導弾を使うのだが、あらゆる爆弾の在庫処分を決定した。撃沈するのは難しいかもしれないが、艦の上部構造物を破壊してしまえば、脅威ではない。戦闘能力を喪失した後、そのあと余裕をもって撃沈するなり拿捕するなりすればよい。

グラ・バルカス帝国の艦載レーダーでは認識できない高度から、Mk. 82爆弾 500ポンド爆弾1を胴体内に×27発 翼下に×18発 合計45発、3機によって爆弾の雨が降り始める。

突然の攻撃に艦上爆撃機と判断したのだが、レーダーに反応もなく監視員が目視で見つけた。

「敵航空機！ 東はるか上空!!」

双眼鏡を持った参謀が確認すべく、艦橋から上空の確認を行う。

「とてつもなく巨大な機影、超高空に3機！」

対空砲の届く高さを遥かに超える超高空、無慈悲にも投下される爆弾の雨が迫ってくる様子が見える。

「全艦退避行動を取れ！ 艦隊航行では的になる!!」

しかし艦の速度と爆撃機、退避出来るはずもない。なにしろ速度が異なる。

航路を変更したところで容赦なく爆撃が降り注ぎ、巡洋艦や駆逐艦は沈没、戦艦や空母は被害甚大な状態となった。

爆撃が終わる頃には、三分の一ほどの艦が損害を被るもの、それでも侵攻を止めることなく、これで攻撃は終わりだと願いながら、ムー国首都オタハイトに向い続ける。

B-52Jの爆撃は確かに終わった。だがそれは電子励起爆薬に変更する為、旧式化した古い爆弾の在庫処分行為でしかない。これから本格的な「攻撃」が始まる。

ムー国無人島基地に集まり、補給の終わった対艦誘導弾を満載した航空機編隊、重武装のF-2と翼下に装着したF-35が静かに向かっていった。

一度に120発の空対艦誘導弾の波状攻撃、反復攻撃が必要となるがそもそも戦いにする気など日本側にはなかった。

ただ効率よく敵を排除、被害を出さないように最善を尽くす。

それが武威も何もない現代の戦争であった。

70. 殲滅・終戦

容赦も慈悲もない、空対艦誘導弾の波状攻撃、補給の時間があるとはいえ、定期的に行われる攻撃によって手も足も出ずにグラ・バルカス帝国の艦が沈んでいく。

本来であれば無人機によって攻撃する予定であったが、今回は新人パイロットの訓練を兼ねている。

無人機は現在量産体制に入り、本来の戦争に備え、ほんのわずかな数以外は本作戦では投入されていない。

無人艦の建造も計画されているが、これはまだ一隻目の建造が進んでいるに過ぎない。

人の価値が高騰する中、人が戦場で戦う事を終わらせようとしていた。

何よりも相応の損害を被る可能性をラヴァーナル帝国に対して想定しているため、無人化は急務であった。

半日にもわたる攻撃によって艦隊は壊滅、いづらか降伏し拿捕された艦もあったが、事実上グラ・バルカス帝国は外征能力を失ったに等しい。

手足をもがれ、首に短刀を突きつけられた状態に陥り、グラ・バルカス帝国はようやく降伏した。

軍事拠点も破壊され、継戦能力を著しく喪失したのもあるが、帝都に威嚇とはいえ明確な爆撃があったためだ。

何よりもグラ・ルークス皇帝が戦況を正確に把握し、勝機はないと判断を下した。暗君でも賢君でもないが、愚かな皇帝ではなかった。無条件降伏であったが、太陽神の使いとして

- ・ 戦争犯罪者の引き渡し

- ・ 第二文明圏からの撤退

- ・ 自衛を超える軍事力の保有の禁止

- ・ 対ラヴァーナル帝国軍部隊の供出

一方で譲渡も行い

・皇族の存続容認

・安価な食料の売却

・GAの返還と保有許可

ただし、戦争犯罪人の査定には全て太陽神の使いが行うとして、外交官から議員、そして大手企業の幹部から軍の将兵に至るまで、徹底的に調べ上げられ、半数以上が戦争犯罪者として「処理」された。

建前上は無期懲役ではあるが、過激派及び抗戦派を態々刑務所に入れて管理しておく利点などなく、ムー国の刑務所に収監されていたが、ムー国内の問題児との喧騒における刑務所内による「事故死」となった。

莫大な戦費の支払いは、残存艦とあらゆる兵器の売却をムーに行う事、そして工作機械や技術権利まで売却することで減額を行った。

むろんムー国から様々な権利や金銭の支払いを受け、日本は戦費の回収は行っている。グラ・バルカス帝国の技術とはいえ、取り込むことでムー国は急速な発展が見込める為、支払いはスムーズに行われた。

神聖ミリシアル帝国は、ムー国東にあるイルネティア国に監視のための施設を建設、そして賠償金の受け取りで一応の矛を収めた。

何よりもアニュンリール皇国との戦争に備えなければならず、賠償金の一部として受け取ったレイフォル産の20万トンの魔石を精錬し、解析の進み解放された技術を取り込んだ兵器の製造で余裕がなかった。

兵器工廠は連日フル稼働であり、新しく開発された魔道機関によって2割型性能の向上も見込め、全ての兵器更新を行うために、現場は悲鳴を上げている。

船渠では防空艦と空母の建造が行われ、部分的に解放された技術を参考に、新鋼材を開発し大型の艦船がどんどん作られ、たった一隻ではあるが日本から輸入した機関や設備を外された大型貨物船、そのペイロードを利用しさまざまな兵器や機関の実験が行われている。

グラ・バルカス帝国が第二文明圏内から撤退し、ムー国の監視を受ける事となるが、レイフォルの復旧は事実上不可能であった。

GAの艦砲射撃以外にも植民地化政策によって多数の国民が死亡し、行政など完全に失われていたためだ、その為第二文明圏が合同で管理することになり、治安維持を行うこととなった。

グラ・バルカス帝国内は現在内戦によって乱れている。戦争継続を望む過激派による暴動が多発している為であり、限られた自衛戦力で内乱を抑えるためにどんどん国力を失っていった。

一時的な平和、そして短い戦争準備期間が始まる。

7-1. 閑期・鳥人間コンテスト・動力機コンテスト

このコンテストは続いた戦争による鬱屈とした雰囲気解消と、列強同士の交流を兼ねてのさまざまなコンテストを開く一環として行われた。但し日本が参加すると出来レースと化してしまうため、スポンサーとして参加していた。

航空技術の発展を考え、幅広い知識と挑戦を元に開催することとした。

・グライダー部門

・人力部門

・超小型動力部門

軍事によつて科学が発展するのもちろんだが、民間の競争などによつて科学が発展するのもまた健全だ。

各部門の優勝チームには、ムー国中流階級の年収に匹敵する賞金を、準優勝でも年収の半年分に匹敵する賞金に、ムーだけではなく各国から参加者が集まった。

完全にお祭り騒ぎであり、各国からの観光客や貴族も集まり、会場は復興したカルトアルパス港にほど近い場所で開催された。

第二文明圏を除くとそのほとんどが、ワイバーンやヒクイドリをモデルにグライダー部門に参加、大抵のチームが即座に墜落し海面に落ちていく。

「次は神聖ミリシアル帝国から、新航空技術チームです」

順次発表が行われ、高さ10mの台座から海へと向かって跳躍、木製の骨格と布の翼を広げ飛び立つ。

「おおおお！」

観客たちから歓声上がる。

「さすがミリシアル帝国だ！」

「すごいぞー！ どんどのびていくー！」

滑空とはいえ、ほとんどのチームが飛行する事も出来ない中、初の飛行はスムーズなものだ。

結果は神聖ミリシアル帝国 新航空技術チームが80mの記録で

優勝を果たした。

栄えあるミリシアルの国威を示し、歓声の中で優勝トロフィーと賞金を受けとる。

人力部門ではムー国 技術士官学校が優勝した。

元の航空機の性能もあるが、身体能力に優れる獣人が漕ぐことで、600mという記録を打ち立て優勝を果たした。

超小型動力部門

この部門は一月前に会場入りし、それからの制作時間と、主催者から提供された30馬力と言うエンジンを元に競技が行われる。

たった30馬力のエンジンと限られた燃料、それを最適に使用してどれだけの距離を飛べるか、という過酷なもので、参加する国は非常に限られる。

初勝利は神聖ミリシアル帝国 新技術研究所が果たし、1.5kmの記録を打ち立てた。

神聖ミリシアル帝国の技術者たちは当然だと誇っているが、ムー国技術研究所が1.4kmの記録を出しており、あまり余裕はない勝利であった。

外交的ではあるが、にこやかにムー国の代表が新聞社の質問に回答し、次回の優勝は貰うと宣言をした。

ある種のオリンピッククのように、戦乱の無い国威の戦場であった。だからこそこういったことが必要となる、戦争ではない平和的な争い、たった一か月間の催しとはいえ、諜報にせよ防諜にせよ良い訓練にもなる。

動力機コンテスト

・出力部門

・重量比部門

・蒸気部門

・ロマン部門

出力部門ではムー国が優勝。ガソリンエンジンではあるが、航空機用のエンジンを改造し、初歩的なターボによって短時間ではあるが1100馬力をたたき出した。

この出力にはミリシアルも驚き、新しい動力機の開発に取り入れようと許された範囲で調べている。

重量比部門ではミリシアル帝国が優勝。その魔石式発動機は日本でも取り扱いたいと購入打診も行い、発電機としては最高の代物であった。何よりも日本が好むクリーンエネルギーであり、技術購入が不可能ならば、発電にも使える大規模な発動機の購入を打診した。

蒸気部門ではマギクライヒが優勝、効率という面ではやはり劣るが、蒸気機関の小型化に成功し小さな馬車にも積めるのは素晴らしいものだった。

ロマン部門ではパールディア皇国が優勝を果たした。

巨大な魔石蒸気機関を運び込み、小型ながら観覧車を動作させて見せた。混雑も多く平和的利用と言う事で、参加国から満場一致で採択された。

構造的に秘密な部分はあるものの、互いに新たな技術への発想につながり、さらに取引を考える各国大使にとっても有用な場となった。技術とは自国だけでは限界が生じるものだ。それが解決できるのなら、例え敵国だとしても技術を得るのは間違いではない。

72. 閑期・リーム

リームはパーパルディア皇国の国境を侵略し、侵攻を開始した。明確な侵略行為にパーパルディア皇国は即座に防衛ラインを引き、国境防衛隊を配備した。

しかし どこから手に入れたのか、複葉機を要するリーム皇国にパーパルディア皇国のワイバーンロードは苦戦を強いられ、陸戦でもマスケツト銃や魔導砲によって戦線は徐々に崩壊していた。

おそらく内乱時のパーパルディア皇国からの強奪やスパイ活動で得た兵器と思われる。

即応した国境守備隊と泥沼ともいえる戦いを繰り広げる中、皇都から主力部隊が列車によって出発した。

「我がパーパルディア皇国は自衛の為に戦力を派遣する！ これは国民を守る為の派遣であり、覇を唱える行為ではない！ リームより開放を求める国は名をあげるがよい！」

レミールの世界発表に基づき、蒸気機関車に搭載された大量の魔導砲車両、射程が伸び装填の速くなった後ろ込め式マスケツト銃、軽装甲ではあるが自走する蒸気装甲車、リンドヴルムも加えた主力軍を一度に投入した。

敵を打ち破りつつ徐々に線路を敷き、装甲列車によって防衛と新たな陣地設営を行い着実に侵攻していく。

内需に力を入れていた政策によって食料も魔石も潤沢であり、リーム本国に向け防衛陣地を突き破りながら逆侵攻を行っている。

余りの事態にリームは各地に散っていた戦力を集中させるも、蒸気機関車によって多くの戦力を即応できるパーパルディア皇国と異なり、馬車や徒歩で人員を移動させるリームでは後手後手に回ってしまう。

何よりもパーパルディア皇国は国内には線路を敷き、防衛するため戦力も蒸気機工戦力化、その戦力は内乱前よりもはるかに向上していた。

二か月もかからずリーム王国時代の国境まで押し込められ、支配していた属領は次々とパールディア皇国によって解放されていた。もはやリーム皇国と名乗っていた力は削り取られ、このままでは本国にも攻め入られる勢いである。

「なぜだ！　なぜパールディア皇国如きに押される!!」

帝王となったバンクスは皇城で叫び、軍務大臣を怒鳴りつける。

「それは……、現場指揮官が悪いかと」

バンクスを含めてリーム王国上層部は内政主義になったパールディア皇国を見くびっていた、軍の定数を減らしたように見えて、その実パールディア皇国の軍費はほとんど増減していない。

軍の規模を縮小し兵の数を減らしたのは、高価な兵器を以前の規模に配備することが不可能なためである。

高性能な装甲列車も蒸気装甲車も、維持するにも運用コストは以前とは比べものにならなかった。

開戦から4か月、リーム皇国はパールディア皇国に攻め滅ぼされ、王族貴族は全て捕えられた。

処刑は占領されていた独立国家群の代表が集まる中、旧リーム王国の大広場によって執り行われた。罪状の読み上げは、神聖ミリシアル帝国の外交官によって執り行われ、パールディア皇国は戦時賠償金を受け取り、リーム王国があった地も収める事はなく元の国境線まで引き上げた。

元よりリーム国の民衆は質が悪く、内需とわずかな外需で充実しているパールディア皇国にとって全く魅力がない地域であり、早々に周辺国に権利を譲って引き上げてしまった。

「蛮族どもがあああ！　このような事が許されるわけがない!!　いますぐはなせえええ!!」

民衆からは石が投げられ、解放された独立国家連合の代表が見守る中、罪状が読み上げられる。

「独立国家連合の総意、そして多くの国の民衆が命を奪われた事に

よって！ リーム皇国皇帝バンクスには死刑を言い渡す！！」
処刑人によって斧が振り下ろされ、リームという国は歴史書の中だ
けの存在となった。

73. 閑期・大規模演習

大規模な共同訓練、各国バラバラでは効率が悪い、最善な割り当てを行うことで効率よく戦う。だからこそ、ムー国・ミリシアル帝国・エモール国が揃って大軍事訓練を開始。

仮想敵国はお互いである。砲弾は演習弾、その他はペイント弾、兵器の損傷やけが人は覚悟の上での厳しい訓練。

「照準よし・撃てえ!!」

演習砲弾が撃ちだされ激しい水柱が船体を揺らす。その間にも空では模擬爆装したXF5Uによる航空攻撃が開始され、ペイントを搭載したドラム缶が次々投下される。

対空砲のペイント弾によって何機ものXF5Uが撃墜判定を受け、それでもなお数発のドラム缶が直撃しペイントが飛び散る。

「くそー！ 我が艦は損傷判定を受けた。旗を上げろ」

旗を上げ、前線から後方へと下がる、その間にも次々とミリシアルとムー国の戦闘が続けられる。

制空権の奪い合いでは、XF5U同士だけではなく、風竜を駆るエモールの騎士団も参加し、XF5Uに翻弄され、ペイント弾を撃ち込まれ次々と数を減らしていった。

「飛行機械のくせに早い！」

「速度で戦うな！ 生物である利点を生かせ！」

アンタレスであれば互角であった風竜も、XF5U相手にはほとんど対応が出来ず、時間を追うごとに撃破判定を受け数を減らしていく。

休憩もなしに行われた48時間の連続演習によって、2000人近いけが人と多くの兵器が損傷を負ったものの、ほんの少しのミスが絶望的損害を被る事を身をもって教えることは、練度の上昇に確実に貢献していた。

「今回の訓練では航空機による爆撃の命中精度に問題があります」

「海軍もまだまだ、防空と言う概念を理解しきれていない。これで

はジェット機相手には良いのだ」

「陸は絶望的だ。戦術がWWIクラスで発展しておらず、装甲車両も全く足りない、これでは戦いにすらならん」

訓練結果から各国の問題点が明らかにされるも、数年で解決できる内容ではなかった。

「陸上における占領戦は不可能、海空で対応するしかないでしょう」

「ロケット弾と爆弾の開発が急務でしょう」

「XF5U以外の航空機も必要でしょう。偵察衛星からアニウンリールの航空機の速度は大凡900kmと確認されています」

「これ以上の技術公開は適切ではありませんが、ミリシアルとムーには開発を急ぐように伝えましょう」

アニウンリール皇国がいつ動き始めるか不明ながら、列強国で足並みをそろえさせるために共同軍事訓練や交流を積極的に行い、太陽神の使いを、日本を必要としない力をつけさせようと準備を進めていた。

74. アニユンリール皇国

繰り返す鬼姫返還要求にこたえられず、魔石から鉱石、そして食料の交易禁止と、搾り上げつつグラ・バルカス帝国との戦争から2年半、アニユンリール皇国は2個艦隊を持つて東進を始めた。

絶えた資源を集める為なのか、もしくは本性を現したかは不明だが、なにせよアニユンリール皇国に侵攻する時は来た。

ミリシアルの艦艇は全て防空艦に改装され、空母にはアルファ4が搭載され準備は整えられていた。

兵士達も末端に至るまで苦しい訓練を乗り越え、グラ・バルカス帝国との戦争前とは比べものにならないほど精強にはなったが、何よりも戦闘経験がない。

ムー国も戦力を整えているが、XF5Uをメインとした空母艦隊、防空艦はいまだに完成段階とは言えないため、太陽神の使いとして輸出した対空砲及び対空機銃を購入し建造している。

全てを自己生産できないために、数が限られてしまいミリシアルに比べるとやはり見劣りする数しかそろえる事が出来なかった。

しかし、まずはミリシアル及びムーの混成艦隊が戦いを挑む前、グラ・バルカス帝国が名乗りをあげた。

討伐する事が出来たのなら、経済制裁の停止等を求めているのだ。

まず第一陣としてグラ・バルカス帝国の艦隊がアニユンリール皇国へと向かう。

もし戦功を挙げられたのなら、経済制裁の緩和を行うという条件ではあるのだが、

日本としては戦果を挙げる事は不可能だと判断し、ミリシアルとムー国を説得し許可を出した。

自己犠牲で戦力をさらに削ってくれるのなら、特に問題はない。何よりも命をもって、アニユンリール皇国の兵器の質を見極める良い機会となる。

グラ・バルカス帝国は対魔帝艦隊を派遣、経済が死にかけ国民が辛

い生活をしている状況を打開する為、国内の期待を背負い、再び軍事力と言う形で存在価値を証明しようとしていた。

一月後、会敵したグラ・バルカス帝国艦隊とアニウンリール皇国艦隊による戦いを、成層圏から逐次確認していた。

「アンタレスの防空網突破されました!!」

「対空砲はどうした!」

「巡洋艦2隻 中破!!」

雷撃機こそ無い様ではあるが、投下される爆弾によって艦隊は損害を被っていた。

アニウンリール皇国の主力航空隊相手に甚大な被害を被り、

「敵艦隊確認! 砲撃圏内!!」

「敵ロケット弾確認!」

誘導性は皆無ではあるが、アニウンリール皇国の航空機が発射するロケット弾、そしてかなりの大型で低速かつ拙いものだが、艦船が発射する誘導弾に攻撃され、グラ・バルカス帝国艦隊はさらに被害が増えていく。

とは言え、頑強さに任せた攻勢により艦隊戦にまで持ち込み、駆逐艦と巡洋艦による雷撃によって、アニウンリール皇国の艦を撃沈していく。

どうやらアニウンリール皇国の海軍も、魚雷という概念を理解していないらしいという情報が得られた。

これだけでもグラ・バルカス帝国を第一陣として不確定要素の多い初戦を任せた価値があるというもの、ミリシアルやムーが戦うときの戦術を十分に練る事が出来る。

そして、成層圏からの映像だけではなく、衛星映像からパルクマイラと思われる物体の運用も確認。彼らが本土から切り札を出さざる

を得ない、その程度の戦力しか保有していないことも確認が出来た。

75. 混成艦隊

グラ・バルカス帝国の艦隊は半数の戦力を失い撤退した。アニユンリール皇国も半数以上の戦力を失ったものの、彼らにとって新たな資源を得るための艦隊は止まる事もなく、北東への進撃を続けている。

「全空母は艦載機を発艦！ 攻撃を開始せよ！」

X F 5 Uを有するムーの空母群から全機が発艦、グラ・バルカス帝国との戦闘情報から、X F 5 Uでは性能こそいささか劣る事は判明したが、練度と数に置いては上回るような状況を作り上げた。

「プロペラ機相手になぜこんな！」

「くそ！ 後ろを取られたぞ！」

「3番機がやられた！ 上空からも来るぞ!!」

アンタレスと同様に思っていたアニユンリール皇国のパイロットは、思わぬ苦戦に連携を失い、数を力に連携の取られたかく乱に、ムー国のX F 5 Uはやや不利な状況になりながらも、実戦同様の訓練を続けたムー国と異なり、所詮は格下と余裕を持っていたアニユンリール皇国は甚大な被害を出していた。

「ムーとの連携時間に遅れるな！ 我々ミリシアルこそこの世界の第一列強、最強であると証明するのだ！」

艦載機であるアルファ4の推定性能は原型に極めて近付いた。誘導弾こそないがロケット弾も搭載されており、大分戦力として期待できる段階に達しつつある。

直掩以外の航空戦力を失ったアニユンリール皇国にミリシアルの航空部隊が襲い掛かった。

「怯むな！ 魔帝に連なる者に鉄槌を下すのだ!!」

アニユンリール艦隊の直掩機相手に、アルファ4が制空権を奪い取り、その制空権下でミリシアルの航空機部隊によって次々と爆弾が投下される。

爆撃機であるベータ4に搭載された、開発されたばかりの新型航空爆弾。以前の物に比べて3割程度威力は高い。

「標的に命中確認。しかし影響は軽微」

一発で沈むなど甘い考えであり、十数発当てれば上部構造物が破壊され、戦闘能力を失う。戦闘能力を奪ってから、艦船で止めを刺せばいい。

ミリシアル帝国爆撃機による初の実戦を行っている最中、日本は太陽神の使いとして攻撃を開始していた。

ラヴァーナル帝国につながる国家と伝えられたエモール王国は怒り狂い、アニウンリール皇国本土攻撃に向かって、ありつただけの兵力を送り込んでいた。

エモールの兵士によるアニウンリール皇国人の虐殺が始まるだろうと予測されているが、軍事施設が無事な場合大損害を受けかねない。それゆえに主力となる戦力は全て破壊しておくため、そしてアニウンリール皇国 本国への大陸間弾道弾の実射試験である。

励起爆弾は出来上がっているが、弾道弾の命中精度の理想値である誤差50m範囲内で済むよう、この二年で急ぎ新開発された大陸間弾道弾。

衛星画像から判明している全ての軍事拠点に向け、同時攻撃を開始した。

7.6. 区別のない攻撃

空から星が降る。認識できたものはそう思っただろう。だが次の瞬間に起きた事態は破滅的であり、一発目で直径10kmの範囲内の物全てが消し飛んだ。

大陸間弾道弾 電子励起MIRV。何が起きたか認識できることもなく、各地の軍事拠点は時間を追うごとに消えていく。

日本として要求性能である目標から50m圏内への攻撃に成功し、そこからMIRVによる広域破壊は対ラヴァーナル帝国に使用するに、十分な性能を發揮。

一日行われた大陸間弾道弾の実射試験によって、地上に確認できた軍事拠点の全ての排除が完了した

問題はここからとなる。ある程度発達した軍事技術を持つのなら、重要な兵器や施設は地下に隠す。ミリシアルも現にパルキマイラ及びパルカオンは地下施設に隠している。

偵察衛星及び偵察機で広いアニユンリール皇国本土を調べている中、北東進を続けていた艦隊はミリシアル及びムーの混合艦隊から壊滅的被害を受けたことで、通信の途絶えたアニユンリール皇国本土に戻りはじめた。

本来撤退を許すはずもないのだが、本土攻撃を控えている混成艦隊は一時的に下がり、補給と陸上部隊との合流、再度日を開けてアニユンリール皇国に向け艦隊を進める。

「これは、どういうことだ!？」

「本土攻撃をされたのか! 無事な港はないのか!？」

「通信繋がりません!!」

「艦内で動揺が広がっています! 艦長なにか!!」

アニユンリール皇国本土に艦隊は帰還するも、壊滅している海軍港に混乱し、着岸する事も出来ずに情報を集めようにも、通信は錯綜しており、艦の大多数を失った北東進艦隊ではそれもかなわず、ただ混

乱が広がり続ける。

その間にも混成艦隊はアニユンリール皇国残存艦隊を射程圏内に捕え、爆装した航空部隊が襲い掛かる。

「レーダーに反応あり！ ミリシアルの航空機です!!」

「残った航空機を直掩に挙げろ！」

「もう残っていません!!」

艦隊が混乱している中絶望的報告が上がり、対処しようにも手も足も出ず現れた航空部隊によってさらなる被害が広がる。

そしてその光景を港から見ていたアニユンリール皇国の国民は、絶対的強者であるはずのアニユンリール皇国の艦隊が、防空迎撃さえ満足に出来ず一方的攻撃を受け沈んでいく光景が目映った。

「何が起きているんだ!?!」

「これは夢か!?!」

「誰か、誰か嘘だと言ってくれ!!」

アニユンリール国民の悲鳴や絶叫が上がる中、爆撃は港へと及び始め、悲鳴が断末魔に代わり、逃げ惑う人々の中容赦のない無差別爆撃が広がっていく。

まだエモールル王国の兵団は到着していないが、すでにアニユンリール皇国民への攻撃は始まっていた。だがこれは始まりでしかない。

エモールル王国が考えている行為は、これよりももっと苛烈なのだから。

77. 差別のない攻撃

ミリシアルの航空隊による爆撃は無差別に行われ、海に近い地域が焼け野原に代わっていく。

そして一段落がついたところで、エモール王国の船団が到着し、エモール王国騎士団による軍官民間問わずの殺戮が始まった。

風竜による空からの攻撃だけではなく、草の根を分けるかのように、部屋の掃除で埃を取るように、各地に潜伏している軍官民、そして子供の区別なく殺していく。有翼人の個体魔力が優れているといっても、兵団として組織された竜人族の有翼人狩りは容赦なかった。

ミリシアル及びムーの連合国も止める事もなく、生き残っていたものを捕え、容赦なく劣悪な収容所に送り、移送中にも暴力などによって次々と死亡し、収容所に到着したものは少なかった。

この世界の住民にとって、ラヴァーナル帝国は恐ろしく、そして恨みの深い相手であり、日本が諫められるような状況ではなかった。「ラヴァーナルに連なる者を許すな！」

「我らが祖国を滅ぼした末裔を倒すのだ!!」

狂気と復讐の行軍にはさすがの日本も戸惑い、関わる事を極力避けながら、パルキマイラ及びパルカオンの探索に注力していた。

保有数は不明ながら、少なくともミリシアルと同数以上あるのではないか、そう判断をしていた。

各国が監視している中、連合国によるアニュンリール皇国本土の三分の一が侵攻を受けた時、10隻のパルキマイラが大陸中央から、そして南部および東部の海岸地帯から5隻のパルカオンが姿を現した。

連合国軍は早急に撤退を行うも、地上と空中では速度が異なる。パルキマイラの近くまで侵攻していた部隊は甚大な被害をこうむり、慌ただしく迎撃依頼が送られてきた。

空母かがから発艦したF-35Bにより、対艦誘導弾による攻撃が

実施される。

これからは日本による実験が行われる。バリアと言うものがどれほどの強度を持つのか、どの程度の攻撃なら仕留められるのか、これで対ラヴァーナル帝国戦においてどの程度の前準備が居るか、推測を立てる事が出来る。

陸上の連合軍がパルキマイラに追い立てられ、被害を被っている中二発の対艦誘導弾が直撃した。

「効果を認めるも破壊ならず」

爆発炎の中から姿を現したパルキマイラは存在しており、完全に貫通する事はなかったようだが、バリアを揺らし装甲に損傷を負っている様子が見て取れる。

本体こそ無事だったようだが、装備されている武装は破損し、覆っているバリアらしき光源が徐々に弱っていく様が映像に映し出されていた。

第二波による攻撃が決定し、各地で撃墜するのに必要な本数が調べ上げられ、5発同時攻撃によって十分撃墜が可能と結果がもたらされた。

問題とされたのがパルカオンであり、南部および東部から合流した5隻が、連合国の艦隊が集まっている北の港に向かって移動を始めた。

78. それは実験に過ぎない

パルカオンの大まかな性能は判明しているが、バリア強度そのものについては不明である。

それも水中にまで展開できるのなら、それなりの脅威となるのだが、バリアそのものの解析が大事となる。

つまりラヴァーナル帝国のバリアというものの判定、パルキマイラという存在に張れたのだから、パルカオンにももちろん搭載が予想されており、戦艦に搭載できるのなら相応の規模で都市や軍事拠点にも張られている可能性が高い。

何もわからないラヴァーナル帝国相手には、出来る限りの情報と対策を用意しなければならぬため、もつとも近い存在であるアニユンリール皇国には、追いつめられた実戦によつて存分に情報を吐き出してもらわなければならない。

東周りに北部混合艦隊に向かつてくパルカオンの艦隊に対し、近海で単独行動をしていた一隻のそうりゆう型潜水艦による、試験的攻撃が行われる。

ラヴァーナル帝国の遺産を運用する栄誉あるアニユンリール皇国の艦隊。それゆえにプライドも高く、皇国が爆撃を受けたことに激怒していた。

「下等な奴らめ！ 決して許さんぞ！」

有翼人にとつても他の種族は全て下等な蛮族、本土に侵攻している者達に激しい怒りを持っていた。

もちろん司令官もその一人であり、全力攻撃をもつて混合艦隊を壊滅させるつもりであった。

そんな時突如パルカオンが激しく揺れ、側面に水柱が上がる。

「何事だ!？」

魚雷がバリアに当たることなく到達したことを表していた。どうやら水中からの攻撃は想定していないようだ。

そして水中攻撃に関する備えは皆無に等しいらしく、被雷した二隻のバルカオンは傾き始める

「船底に攻撃を受けました！ 浸水止まりません!!」

退艦する時間的猶予もなく、乗員ごと海中に沈んでいく様を残り3隻のバルカオンの船員たちは啞然としてみていた。

ラヴァーナル帝国時代の無敵の戦艦、何をされたか不明でありながら2隻も沈んでいく。その様は理解を拒絶させるには十分であった。

「攻撃だ！ バリアの出力を最大にしろ！」

その中でも艦長クラスは攻撃を受けた事だけは理解し、即座に命令を下す。

だが、それこそ日本が待っていた状況であった。

艦を覆う光が強く成った事を確認し、続いてF-2編隊から発射された空対艦誘導弾による試験攻撃は、バリアに直撃したが貫通もせず衝撃も抜ける事はなかった。

確かめるように一発ずつ、丁寧に丁寧に一隻のバルカオンに撃ち込み続け、徐々にバリアの光の揺らぎが大きくなっていく。

「誘導魔光弾!」

「どこからだ!? どこから攻撃を受けている!?!」

「敵位置はどこだ！ 反撃できんぞ!!」

慌ただしくバリアの中で、状況を魔導レーダーによって観測しようにも、陸上設置式の大型レーダーでも判別できない距離から撃ちこむことが可能なのに、艦船に積める出力でわかるはずもない。

6発目、バリアが激しく明滅し、衝撃波が艦を激しく揺らす。

「馬鹿な！ ラヴァーナル帝国の無敵のバリアが!!」

7発目の直撃と同時にバリアが弾け、爆発の炎と衝撃がバルカオンを襲う。8発目が到達してもバリアは再起動することなく、バリアを破壊した場合発生機関に何かしらの異常が発生すると推測された。

一隻目のバルカオンが上部構造物を破壊され、事実上戦力を喪失したことで、他への新たな試験が開始される。

つまりバリア復旧までどれくらいかかるのか、そして短期間で沈め

るには何が必要なかと。
そしてバリアは何をはじめ、何を通過させるのか。

79. 実戦でこそ知りえる事もある

第一に数分の時間を間隔を発射された7発の誘導弾によってバリアは弾けた。ならば時間をかけずほぼ同時に仕掛けたら何発で弾けるのか。

混乱しているパルカオンの艦隊に対し、試験的に発射された空対艦誘導弾はほぼ同時に着弾、バリアは6発で弾け船そのものは4発の着弾で無力化が可能であると判明した。

逃げる事も出来ず爆発炎上する無敵のパルカオンの乗組員は、混乱状況に陥り中には発狂し海に飛び込む者まで出始めていた。

「レーダーに反応はないのか!？」

「アトラタテス砲を起動させろ! 迎撃、迎撃だ!」

アトラタテス砲、それを起動すれば対応できるはず、ただ稼働させるには相応に魔力が必要であり、継続戦闘時間が減ってしまうが、貴重な艦には代えられない。

ミリシアルの様に魔力が潤沢なわけではない欠点だが、アニユンリール皇国にとつての弱点であった。

稼働したアトラタテス砲は接近していた6発の対艦誘導弾、2発の迎撃に成功しバリアが砕けることなく耐える事に成功する。

「全艦アトラタテス砲を常時稼働させろ!」

防御が可能とわかり、魔力によって艦隊に指示を出すのが、冷汗は止まらず艦橋員の顔色は良くない。

高高度偵察機は状況を観察し、対艦誘導弾を迎撃できる術を持つことを確認していた。

「CIWSに近い性能を持つ兵器を確認、性能は6発に対して2発の迎撃に成功した模様」

簡単に飽和したことから迎撃能力は高くはないことは確認された。ならばどれだけの間撃ち続けられるのか試験したいところだが、弾薬

費を考えると試験できる代物ではない。

「次の試験に入る」

本来であれば禁止された兵器毒ガス爆弾、バリアは誘導弾や機銃は弾けるようだが、毒ガスならどうだろうか。

しかし日本でも現在は生産されていない。代用として催涙ガス弾を使用。催涙ガスを封入した試作爆弾を投下、バリアに接触し爆発したことから海上一面が真っ赤な霧に染まる。

映像には甲板に出て苦しんでいる船員の姿が見える為、バリアは危険性の有無を判別して空気を遮断する能力がないことが判明した。

なにせよ日本は毒ガス兵器を使用することはないので、バリアの性質について大よその情報が集まりだしている。

しかしバリアと戦艦装甲の両用については、余りにも強固で対艦誘導弾での攻撃は、あまり現実的ではないコストがかかる事が判明した。

金さえかければ反撃を受けることなく仕留められる、これは重要な情報ではあるがこれからが問題となる。

次は誘導魔光弾の性能を調べなければならぬ。その為には無傷で一隻を鹵獲し分解解析しなければならぬからだ。

戦意を徹底的にへし折る、暴力が必要となる。そしてその暴力を積み込んだC-17輸送機がパルカオンの艦隊に向け向かっていた。

80. 火

的として用意された無人艦艇が残った一隻のバルカオンに向け無防備に近付いていく。これは誘導魔光弾の迎撃テストである。

魔導レーダーに敵艦の反応が入り、バルカオンの艦橋は慌ただしくなる。ようやく見つけた敵、今まで沈められた艦の報復と怒りに燃えていた。

「見つけたぞ！ 敵艦に向け誘導魔光弾を発射せよ!!」

バルカオン後部から上空に発射され、高空を飛翔しながら無人船に向かっていく。

日本などの誘導弾と異なり、レーダーから逃れる為低空を飛翔することもなく、無人船唯一搭載されているCIWS-1Aが自動で稼働し、誘導魔光弾をなんなく撃墜した。

魔導レーダーには目標に到着する前に光点が消えたことが映し出され、何かしらの方法で撃ち落とされた事を表していた。

「アトラタス砲を敵も持つのか!? 次弾の装填を急げ!!」

一発撃った後、次弾を待つ事30分、再び発射された誘導魔光弾はやはり高空に打ちあがり、レーダー等を欺瞞するような飛翔をするのではない。

CIWSによって再び自動的に迎撃が行われ、最悪な事態を想定し、民間無人船にCIWS 1Aを態々搭載した意味はなかったようだ。

2発の誘導魔光弾によって大まかな実戦性能は判明し、あとは分解解析を行うだけとなる。

残るは誘導魔光弾の現物を入手する為、バルカオンを無事に鹵獲するだけとなった。

「攻撃開始」

上空で待機していたC-17に搭載された爆弾 10トン級大規模油脂焼夷弾。大規模な火災は生物の本能を刺激し、心を酷く傷付け、そして冷静さを奪う。

3発が順次投下が始まり、パルカオンのバリア膜にぶつかり弾ける。一面が火の海に代わり、パルカオンの上部構造物にも油脂焼夷弾の液体がかけられ、派手に燃え上がる。

「火を！ 火を消せ!!」

「消せって、海が燃えているのにどうやって!?!」

理解も対処が不能な状況、密閉空間ではないためいくらでも周囲から酸素を補充できると言っても、局所的な高温は呼吸を困難にさせ气道や肺を焼く。

「息が……できない」

「誰か助け」

一酸化炭素中毒になるには開けた空間だが、数十秒間続いた燃焼による高温によって気道と肺が焼かれ、首や胸を抑えながら次々と兵士が倒れていく。

高温に焼かれた鋼鉄の船は内部にも熱が伝わり、限られた空気流入口から酸素が消費され、艦内にいた兵士も高温と酸素不足で呼吸困難になり、甲板に逃げては死亡していく。

油脂焼夷弾の炎が消えるまでの10数分後、パルカオンは何一つ動作することなく静かに海上を漂い始める。

半日経っても何かしら行動を起こす事なく、海流に乗ったまま漂流し続け、十分な生存者がいないことが確認。

北部港に待機していたミリシアルの艦艇が一日後、船を横付けし内部を確認したが、酸欠や呼吸器による怪我で死亡したアニュンリール皇国兵士の亡骸だけが船に残っていた。

使用前の誘導魔光弾や砲弾、艦長室に置かれた資料や各種マニュアル、これは日本とミリシアルによって解析される為に回収され、外観を焼き尽くされたパルカオンは曳航、東岸部港に向かうとアニュンリール皇国民は、無事な中央や南部に着の身着のまま逃げ出す者と、誇りを傷つけられ絶望し自害するものとに分かれた。

81. 血統と立場の違い

「攻撃を開始せよ！ 攻撃を開始せよ！」

魔帝の兵器を失ったことで、通常戦力でアニユンリール皇国軍は対応していたが、空爆によつて無差別に攻撃を受け、軍民間わずに兵力を失いつつあったが、侵攻は停滞していた。

「イクシオン20mm対空魔光砲を放て！」

装甲車両に搭載することで、水平射することでムーの戦車のように運用している。

しかし、如何せん魔物の軍団が余りにも多すぎた。

「魔物の群れが突っ込んでくるぞ！ 魔石の充填を急げ！！」

「銃を撃て！ 近付かせるな！！」

制御されている為に恐怖を感じず、突撃してきた魔物の群れに突入され白兵戦へとなだれ込んでしまう。

魔物の大兵团による激しい抵抗を受け、損害を出しながら陸戦戦力に関してはムー国の戦車が頼りであり、ミリシアルの車両に装甲板を付けたものでは、魔物の攻撃にはさほど防御効果がなかった。

アニユンリール皇国の皇帝であるザラトストラは、最悪な戦況に対策会議に参加しながら状況を静観していた。

そもそも降伏などすることはないが、エモール王国は無差別に有翼人を捕えるか処刑し、ミリシアルとムーの合同軍は徐々に侵攻している。

「残されているパルキマイラを出すべきだ！」

「大陸から魔物の輸送量を増やして対策を」

「何よりも国民の保護を進めるべきだ！」

「東岸部にも侵攻が予想される。防衛ラインの構築がいるぞ！」

ブランシエル大陸以外にも占領している他大陸で開発生産していた、魔物軍団をどんどん輸送して対処しているが、いずれ枯渇するのは目に見えていた。

何よりも恐らく太陽神の使いからと思われる攻撃、それが致命的にまで戦力をめぐり取り、主力軍はもはや残っておらず、地方部隊や皇都守護隊を駆りだしている始末だった。

今は耐えられる、だが耐えるだけで追い返し、ラヴァーナル帝国復活まで国を守るのは非常に難しい。

血統が薄くなった者達を残し、皇族は南へと姿をくらませるのも手かもしれない。光翼人であるザラトストラにとって、有翼人のアニウンリール皇国民は奴隷や家畜と大差ない認識であった。

電子励起爆薬を使用した核の代替爆弾がB-52Jに大量に搭載され、ゆつくりとそして確実にアニウンリール皇国に向け飛行していた。

南部および西部の軍港を破壊する為、そして残ったラヴァーナル帝国の兵器を吐き出させ、日本が手を下す必要性をなくすためとなる。

日本は最後の準備を、これからは調べ上げた情報から、呆れかえるほど膨大な戦争の準備をしなければならぬ。

『戦争の勝敗はそれまでの準備に関わる』

だからこそ、生命にかかわる戦争の相手に対し、確実な勝利を収める為に国の総力を挙げた準備を進める。

例えそれが、星にダメージを与えるものだったとしても。

82. 兇戯はここまで

パルキマイラやパルカオンの発艦に伴い、新たに判明した地下軍事基地に向け、B-52Jに搭載されている電子励起爆弾によって、いくつもキノコ雲が上がり消え去っていく。

半日後には東部と南部の地下軍事拠点を根こそぎ破壊、戦力のほとんどを失い事実上交戦能力はない。

ミリシアル・ムー・エモールの連合国は話し合いを行うも、エモールは徹底殲滅を主張することを辞めず、アニュンリール皇国からラヴアーナル帝国の情報を得たいミリシアルなどは困るものの、技術者や官僚については捕えるということだけは了承を得られた。

もはや一部は手遅れとなっているが、少なくとも首都まではまだ距離がある。

急ぎ日本で準備が進められている中、衛星映像には皇都防衛部隊と思われるものが、隊列を組みながら南西に向かっているのが映っていた。恐らく国を預かる重要人物が退避すると思われる。

「重要人物の捕縛が任務となる。連合国家に先手を取られる前に我々で全員確保する」

空挺部隊を派遣し、南西部の山岳地帯前にC-2及びC-17によって輸送されたドローン戦車 10台、そして一個小隊の特殊部隊、急遽であった為それだけで対応する。

半日後、何も知らずに退避中と思われる集団は、待ち構えていた空挺部隊と遭遇した。

「敵だ！」

「こんなところにまで侵攻していたのか!？」

「陛下を守るのだ！」

誰一人搭乗者の居ないAI搭載ドローン戦車、それが静かに搭載されている兵器をアニュンリール皇国に向けていた。

「武装を解除しなさい。さもなければ攻撃を行う」

音声による警告が行われるも、皇族護衛隊は装備する銃やゴウルアスなど生物兵器で襲い掛かる。

過剰ともいえる攻撃、Mk 44 ブツシユマスター I I 30mmと7・62mm機関銃L43A1による攻撃は容赦ない。

「助け」

「ギィギャー!!」

AIによる判断、それは武器を持つ者すべての排除、最優先事項である重要人物の確保を除外、殺傷することに何一つ躊躇はない。

個別でありながら群であるAI車両の攻撃によって生物は肉片に変わり、車両は鉄くずに変わり果てる。識別信号を持たず、武装を持つ存在をただ識別し排除、機械に感情はない。

AIドローン戦車の後方で待機している、軽量なエクスカリバー戦車と16式機動戦闘車の6両が動き出し、対象とする重要人物の確保へと前と進む。

もはや抵抗できる兵士が居なくなり、タイヤを破壊された重要人物が乗ると思われる車両だけが残されていた。

「もはやこれまでか」

魔法によって自害を計ろうとするも、ミリシアル帝国から購入した魔法封じによって周囲の魔素が絶たれていた。神聖ミリシアル帝国も、犯罪を犯した魔導士を捕える為、相応に色々制作しており、輸送と燃費が悪い物の、高出力の魔封じ位は制作している。

車両から引きずり出され捕縛、皇族及び重要な立場に立つものはいまだ光翼人であり、厳重に警戒が行われながら、輸送機に戦車ともども載せられアニュンリール皇国を離れていった。

お遊戯の時間はそろそろ終わる、これからは本当の戦争、情報さえ得られれば、手段も方策も選ぶ必要はない。

83. 最後の準備期間

三大列強による対アニュンリール皇国戦争が開始され半年、捕縛される民間人はミリシアル及びムーに輸送されるか、エモール王国にその場で処刑されていた。

国としての体裁は失われ、抵抗をする一部の者達を除いて、すでに第二大陸の占領作戦も実行されていた。

「それでは現在の進行状況についてですが」

地図に表示された各地に展開された兵力と、抵抗状況が表示されている。

どこも攻勢は順調であるのだが、捕縛数よりも処刑数が圧倒的に多く、エモール王国に至っては処刑数に比べて捕縛数は1割程度でしかない。

「ラヴァーナル帝国の情報については、現在情報を聞き出しておりません。ラヴァーナル帝国の兵器関連については完全生産は出来ず、解析率は高く一部に至っては生産も出来るようです。パルキマイラ・パルカオンについては完全な運用ができるようです」

「誘導魔光弾の生産も出来るようで、少数ながら工場設備も確保できております」

伝説にもなっていた兵器、それさえも運用出来ていたにもかかわらず、太陽神の使いに手も足も出なかった事に、ミリシアルやムー国の面々は畏怖を感じ、敵ではなかったことに安堵していた。

「それで、大事な案件なのですが。太陽神の使いは今後ラヴァーナル帝国に備える為、一切のかかわりを絶つそうです」

「……残念だ。あの国には一度訪れてみたかったものだが」

「恩もある国家、ぜひとも国のトップにお会いしたかった」

「竜神様のお姿を拝みに行きたかったのだが」

防衛省 会議室

「そうか、日本の東側に」

アニユンリール皇国の皇族からの情報抽出によって、ラヴァーナル帝国の出現ポイントが東に10000kmの地点とわかった。

国土も国家規模そのものはオーストラリアと大差ないらしく、対処できなくはない。わずかな対話時間くらいは確保できるだろう。

「現在迎撃用レールガンの配備、電子励起弾道弾の配備は完了しました」

「量産配備を予定していました弾道弾は、定数を減らし攻撃衛星に集約いたします」

「間に合って何よりだ。あとは時間が解決してくれる状況にできた事を皆に感謝しなくてはな」

「復活日ですがやはり不明であり、ラヴァーナル帝国のビーコン及び衛星から、数か月前に反応があるようです」

「復活年については、エモール王国の空間占いだよりか。仕方ないが配備継続するのも予算がかかって仕方ない」

オーストラリア大陸を消し飛ばせるだけの戦略兵器群、維持するだけでも膨大な予算がかかるが、戦争の準備は順調に進んでいる。

元より話し合うつもりはないが、最低限の確認を行えるだけの力は整えられた。残るはその時を待つだけとなる。

84. 閑話 珍兵器

順調に対ラヴアーナル帝国への準備を進めている中、鎖国中とはいえやはり浮島には様々な国家の人々が訪れていた。

「太陽神のお使いが住んでいる場所はどこでしょうか」

「お金はいくらでも支払う教えてくれ!!」

「ぜひとも参拝をさせていただきたく」

中にはしつこく日本本土や太陽神の使いが住む本土の場所を探ろうとする者もあり、警告はしているが海賊船や冒険者などを装い、浮島周辺の海域を調べる船が増え始めていた。

海竜や海魔による海難事故を装って入るのだが、それでも途絶える事はなく日本としても呆れ始めていた。

大規模な戦争が終わり、ラヴアーナル帝国に備える時期だというのに、まるで危機感もなく私欲での行動を始める国家も増え始めている。

列強ともなればそのような行為をせず、時折外交の一環として話題に出る事はある程度とは異なっていた。

「船団を確認しました。日本本土を探していると思われる」

「またか」

度重なる船団によるEEZへの侵犯、彼らの求める太陽神の力と技術、日本と同じものを得ようと、浮島での警告など構わず航行をしていた。

海魔に見立てた魚雷攻撃によって沈めてはいるのだが、毎月のように船団が現れていた。

ラヴアーナル帝国への準備が決定したため、余剰になった各部門はこの世界の物質と技術を用意て様々な物品を新規開発していた。

家庭用品から非致死性兵器まで、魔石を利用した道具に

日本本土にも魔石の採掘が可能であった、つまり魔法と言う概念を認識できていなかったために、ただのくず石であったが認識できれば

資源である。

解析の出来た火と水と氷の魔石、それを試験的に様々な物を制作している。

- ・ 火と水の魔石を利用した発電機
- ・ 火の魔石を利用したコンロ
- ・ 氷と水の魔石を利用した冷却装置
- ・ 水と氷の魔石を利用した氷雪装置

魔石と言うものの可能性を様々な方向で探求しているのだが、もちろんゲテモノも産まれる。

・ 氷の魔石を利用した小豆バーの食べれる装甲材
装甲材が食べられてどうするのだろうか。

未来への投資は順調に進められているが、ラヴァーナル帝国戦には間に合わないと予測されている。

これもまた全てが終わったとき、何が起こるか不明なことからくる準備であった。

全てが終わったとき、この世界は日本をどう見るのか。ラヴァーナル帝国さえ倒せる武力を持つ国を、同盟とみるのかそれとも新たな脅威と見るのか。

何もかもが不明であった。少なくとも数国は、日本の技術を得てよからぬ事を考えて居る事は明白であるが。

85. 閑 綺麗な禁忌・国家

日本の戦艦は威圧効果とミサイル防空が主目的、扶桑を除いたすべての戦艦はペイロードを利用した、電磁加速砲による超長距離国土防空艦であり、戦艦を戦艦として利用する時代は終了している。

配備された戦艦は日本本土防衛に当たり、ラヴアーナル帝国がコア弾道弾を発射した場合、迎撃する為に備えている。

如何なる地点から発射されたとしても、最適な位置からの第一次迎撃が可能である。

50倍の限界を超え、TNT比率200倍まで増大した電子励起爆薬、むろんその分価格も高騰したものの、重量比当たりの威力は核に匹敵した。

「最低数の宇宙への展開が完了しています。しかし……これは」

MIRV型電子励起爆弾を搭載した純殲滅用攻撃衛星。対ラヴアーナル帝国のため、禁忌を破り宇宙に複数基打ち上げていた。

そして順調にその数を増やしている。

「……そうか。ラヴアーナル帝国本土攻撃への準備は順調なのは大切な事だ」

勝つためとはいえ、使用すればオーストラリア大陸サイズなら完全に消し飛ばせるだけの量を配備する予定となっている、そのようなものを所有するのは、恐怖でしかない。

もし奪われたり内部から裏切り者が出れば、世界を滅ぼしかねない代物。

「マスター起動キーは、防衛省長官・首相・天皇・皇太子・龍神様、5個に分けられます。何卒ぶご注意ください」

最悪な事態が発生した場合、5人のうちの誰かがキーを廃棄すれば発射することはできない。

「魔帝とも対話が可能であってほしい。これは使うべき兵器ではない」

人の持つ倫理観、国家を大陸ごと消滅させるのは、生半可な事ではない。

戦争準備期間として、ミリシアル帝国では捕えた光翼人や有翼人から技術情報を引き出し、パルカオンやパルキマイラの解析、そして誘導弾の製造に力を注いでいた。

誇り高い有翼人とは言え、厳しい取り調べに少しばかり情報を話す者もおり、身の安全と引き換えに協力していた。例え屈辱的な軟禁状態でも、処刑されてしまえばそれで終わりなのを理解できる者は少ない。

ムーではグラ・バルカス帝国の技術を取り込むことに注力し、僅かながらではあるが有線誘導式の投下爆弾と魚雷の開発に成功、現在量産しラ・カオス型爆撃機やラ・カサミ級戦艦に搭載が進められている。限られた情報や太陽神の使いから許可を得たXF5Uの技術生産から、航空機の新開発も急がれていた。ほんのわずかに感じたアニユンリール皇国でのエモール王国の行為、それが今はラヴァーナル帝国に対して向けられた憎しみによって行われているが、それが何かできっかけて自分達に向くのではないかと危惧していた。

だからこそ、軍事力の拡張は急務であり、日本の浮島を訪れては正式に話し合いが行われ、XF5Uの分解解析許可や、ラ・カサミ級に搭載されている対空砲や対空機銃のライセンス生産について、条件の取り決めや価格や技術購入など日々行われていた。

今でもエモール王国騎士団によって、旧アニユンリール皇国国土では光翼人や有翼人の処刑や拷問が行われ、ミリシアルやムー国から出る事は凄惨な死を意味していた。

グラ・バルカス帝国は最後の海軍戦力も甚大な被害を被り、もはや外征能力どころか国内を維持する戦力としてもぎりぎりまで落ち込んだ。

好意的とは言えないものの、ムーの支援によって食料や燃料の支援

は続いているが、国内は非常に貧困状態であり、餓死者こそ出ないものの、転移前と直後の好景気の再来を夢見る過激派の反乱と、もはや戦いにすらならない事を理解している穏健派による鎮圧、繰り返される内乱は収束の兆しが見えず、国民の生活が好転する可能性はいまだなかった。

86. 帰還　そして戦争の開始

エモール王国の占いにより、とうとう一か月後の復活がはっきりとした。

神聖ミリシアル帝国が把握し、解析したビーコンから発せられている信号も強く成り、世界中が緊張している中、昼間のはずが空が漆黒に染まり強烈な振動が発生した。

「衛星映像から確認、日本の東5000kmに大地出現しました。
ラヴァーナ帝国と思われます」

防衛省の会議室では緊張が走り、日本国中に外出制限が出される。

「我々は太陽神の命によって、使いとしてこの場に来ている。対話し武装解除せよ」

全ての周波数に対し最大出力で放送を行い、返答を待つ。

その間にも何かしらの情報収集が行われているのか、ミリシアルが使用している魔法通信らしきものが活発に行われているようだ。

「繰り返し。対話し武装を解除せよ」

一時間繰り返し返した頃、通信が入った。

『太陽神の使いとは笑わせる。まず、お前達の国から消してやろう』
通信が途絶え、衛星には発射された3発のコア魔法の映像が映っていた。こちらの通信から本土を特定し、躊躇なく攻撃にはいったようだ。

衛星の捉えた映像にはラヴァーナ帝国国内も活発に動き、軍港や飛行場が特に集中している様子もある。

「大陸間弾道弾と思われる物体がラヴァーナ大陸から発射が確認されました」

対話の余地もなく発射された大陸間弾道コア魔法、日本としてもはや対応する手段は一つしかない。

「イージスシステム連動よし」

「大陸間弾道弾、軌道計算よし」

「電磁加速砲、充填準備完了」

ただ、静かにその時を待っていた大和型護衛艦及び長門型護衛艦、

そして金剛型護衛艦に搭載されている電磁加速砲の照準がレーダー・コンピュータ・FCS・通信衛星の全てが連動し自動でトリガーが引かれる。

音速の7倍の速度で射出された弾体は、正確にコア魔法の推進力部を撃ち抜き、コア魔法は爆発することなく海中に落下、おそらく海中では放出される放射能によって汚染される事だろう。

もう猶予はない。このまま迎撃が成功し続けたとしても、世界は放射能に汚染される。

殲滅攻撃衛星システムの起動するため、重要人物は急ぎ皇居に集まっていた。

「自分が死んでも子供には生きてほしい。子孫に我々とおなじ過ちを繰り返してほしくない。だからこそ、ここで全て終わらせなければなりません」

「形式上の勝利を得たところで、我々は大量殺人者である、決して誇る事も誇る事もなく、このような手段しか取れなかったことを恥じる」

首相と防衛庁長官の起動キーが入られる。

「我々はこの犠牲を無駄にすることなく平和を建設し、世界平和に貢献しなければなりません」

「戦争の惨禍が再び繰り返されないことを切に願い、このような事が二度と起こらぬよう、尽力することを終生かけ行つていきます」

今上天皇陛下と皇太子殿下の起動キーが入られる。

『少年は青年になり、次世代の大人になる。その時、銃を持たせ誰かを殺させたいか。殺すのは今の世代が最後で良い』

竜神様のもつ最後のキーが入られ、攻撃衛星群は稼働を始めた。

87. 後の先

「ラヴアーナル帝国 人工衛星の破壊を開始します」

宇宙空間に配備されているキラー人工衛星、ラヴアーナル帝国の衛星群に対し小さな物体を放出、宇宙速によつて小さな物体を受けたラヴアーナル帝国の衛星は砕け散り、次々と静止軌道から外れていく。

通信やレーダーとおもわれる魔信が激増していることから、衛星に何が起きているのか把握しようとしているようだが、分かつたところでGPSや地上監視システムの衛星ではなすすべもない。

地上のビーコンはすべて破壊してあり、再び転移して逃げようにも、残された宇宙空間のビーコンは時間を追うごとに減り、あと数時間もしないうちに衛星は全て破壊が完了する。

衛星がなくては大陸間弾道弾を撃つことも出来ず、ラヴアーナル帝国の目と未来へ逃げる手段は潰した。

「ラヴアーナル帝国、艦船及び航空機による攻撃を試みている模様」
次々と発艦の準備を進めているだろうパルキマイラ、そしてパルカオンがラヴアーナル帝国本土の衛星映像に写り、慌ただしく西、つまり日本に向かって出航しようとする人々が集まっていた。

そしてラヴアーナル帝国から西方50kmの海には海魔が急速に集まり、シーサーペントらしき巨大な生き物の姿もある。

やはり海魔を使役する技術を要しており、下手に海上からの攻撃では被害が出たかもしれない。

パルカオン型艦船40隻とパルキマイラ型飛行物体80隻、300m級空母60隻とその他数百の巨大海魔、おそらくほぼ全力攻撃。

しかし艦隊を編成してくれるのは日本としても願ってもない状況、態々集まってくれるのなら数少ない攻撃で甚大な被害を与える事が出来る。

第一攻撃として北部及び南部沿岸地域に大陸間弾道弾が着弾、西部港の艦隊と合流する為艦隊を編成してたパルカオン21隻及びパルキマイラ62隻を沈める事に成功した。

ただし、ここで問題が発生した。エモール王国である。

彼らが自ら戦うと決して譲らず、どこから調達したのか船団を率いて旧アニュンリール皇国から東に向かい始めた。

勝てるはずがないというのに、恨み辛みで冷静さを失い、ただ感情に任せているのだろう。

爆発によって発生する巨大な津波に巻き込まむわけには行かず、大陸間弾道弾による西部艦隊の攻撃を中止、急遽艦隊の一部を派遣しなければならなくなった。

急遽派遣された艦隊、しかし主力となる大和や長門は電磁加速砲による防衛任務がある為、手空きであった扶桑が旗艦として、第二線級の護衛艦と共にエモール王国艦隊を追っていた。

「エモール王国艦隊 通信に答えたし。 繰り返すエモール王国艦隊」

何度も通信を入れるも応答はなく、ただひたすらに東へと、ラヴァーナル帝国へと向かっている。

「艦長、このままでは」

「最悪の事態を想定する。 各員戦闘配置」

扶桑には対艦誘導弾は搭載されていない。艦隊もはたかぜ型2隻、あさひ型2隻、あきづき型2隻と7隻編成で決して万全とは言えない。

対艦誘導弾を装備していると言っても護衛艦の数は劣り、旗艦となる扶桑は何よりも設計が古くVLSも搭載していない。

何よりも非常事態であった為、改装空母のいずもやかがは別任務で対応できず、もつとも重要な航空支援がない。

多くの事を備え、もちろん他国の暴走についても警戒し、攻撃は危険だと何度も警告していた。

第一列強であるミリシアルと第二列強のムーも、列強国の総意として太陽神の使いと攻撃が終わるまで待つと確約していた。

それが最悪のタイミングかつ最悪な方法で破られてしまった。時間と多額の予算を投入して用意した戦術兵器が使用できない。

88. 不利

衛星画像からは船団を3個に分け、なんとしても本国に到達しようという思惑が見て取れるが、そんなことをしても、ラヴァーナル帝国のレーダー網にはしつかりと写っている事だろう。

「敵レーダー波確認 妨害電波開始します」

「ハーブーン発射可能」

「標的をパルカオン19、パルキマイラ5に設定」

誘導弾の搭載数は全部で24発、パルカオン19隻にパルキマイラ18隻、不足している為航空支援が必要なのだが、距離の問題もあり十分な支援を得られることはない。

脅威度はもちろんパルカオンの方が高いのだが、300kmで飛行する巨大な物体も驚異的。しかし確実にアトランタテス砲を搭載し装甲を持ちながら、対艦誘導弾を装備しているパルカオンを放置すれば、甚大な被害を被る事だろう。

「ECM妨害がさほど効いていないようです」

「システムが古い欠点が出てしまったか」

扶桑のシステムも退役する艦艇からの流用品、第二線級護衛艦艇も最新システムではない。ラヴァーナル帝国のレーダーシステムを完全に欺瞞するだけの優位性はなかった。

こちらを脅威として認識したのか、エモール王国艦隊を放置しパルカオン及びパルキマイラは日本の艦隊に進路を変更した。

「敵艦、誘導弾発射を確認！」

「迎撃せよ！」

13発もの誘導魔光弾が護衛艦隊に迫り、搭載されている艦対空誘導弾、GMLS-3 / Mk. 29 シースパローによって艦対空誘導弾による迎撃が行われるが。

「迎撃失敗！」

「CIWS起動します!!」

2発が通り抜けCIWS 1Aが起動、迎撃網を抜けた誘導魔光弾が2発爆発し、わずかな残骸が護衛艦に降り注ぐ。

ラヴアーナル帝国の空母三隻から次々と航空機が発艦している様子
子がレーダーに映った。

確実に護衛艦隊を沈め、日本へと至る為に全力攻撃へと切り替えた
ようだ。

「航空機の支援は!?!」

「1時間後を予定しています」

「対空戦闘用意! 艦対空誘導弾を惜しまず使用し迎撃せよ!! 旗艦
をはたかぜに移管し扶桑を前に出せ!!!」

扶桑ならロケットや爆撃にも耐えられるかもしれない。だが、護衛
艦では甚大な被害を被りかねないため、CIWSの搭載数も多く強固
なはずの扶桑を前面に出す。

「対潜レーダーに感有り! 海魔の群れです!」

「このくそ忙しいときに! 各護衛艦は短魚雷発射用意!! 海上に出
ている魔物は艦砲の使用を許可する!!!」

たった一つの前提条件が崩れたことで、前線の状況は悪化してい
く。

「風竜への騎乗用意!」

「ラヴアーナル帝国の本土まであとわずかだ! 今こそ我らが先祖の
無念を晴らす時!!」

「「「おおおおおお!!」」」

それが蛮勇である事も、そしてエモール王国艦隊のおかげで日本の
艦隊が不利な戦いを強いられることも知らず、受けた無念を晴ら
すためにエモール王国の兵団は、ラヴアーナル帝国本土まであとわず
かに迫った。

89. 暴力と武力の違い

発射されたハーブーンによって、パルカオン15隻、パルキマイラ16隻に減るも、ほとんど効果は見られない。奇襲ゆえにバリアを張っていなかったので数隻はどうかできたようだが、絶対的に数が不足している。

「海魔まで距離10kmを切りました」

ほとんど水面に顔を出す事なく、短魚雷の発射射程まで50近い光点が移っている。

「攻撃の振り分け！ 射程距離を割ったものから順次攻撃せよ！」

「航空機群200機 きます！」

各艦から発射される短魚雷、そしてレーダーには空母から発艦した航空機が向かっている様子が映されている。

「艦対空誘導弾発射せよ！」

パルキマイラに使用する分を残しておく余裕もなく、航空機を出来る限り仕留めなければ、航空攻撃で艦隊が甚大な被害を被ってしまう。

本来行う飽和攻撃を逆にされてしまう恐怖、急ぎ空中給油を受けた航空部隊が向かっているが、間に合うかどうかは正直不明であった。

「標的に命中確認。 されど撤退の様子無し」

次々と発射される短魚雷によって海魔の数は減っていくものの、数の力を頼みに怯むことなく向かってくる。死を恐れない事から操られていることは明白である。

「航空機接近！」

無数の海魔が迫りくる中、扶桑の艦橋から空に航空機である黒い点が見え始める。

ありつたけ発射した艦対空誘導弾の攻撃、しかし機数が多く対処しきれなかった。

「各員衝撃に備えろ！ 来るぞ!!」

「C I W S 起動します」

ラヴァーナル帝国に恐らく飽和攻撃と言う概念はないだろう。た

だもつとも近い扶桑に向け、航空機が低誘導の誘導弾を一斉に発射しただけに過ぎない。

先頭を航行する扶桑に迫りくる誘導弾が約100発、搭載されているCIWS 8基が稼働し迎撃砲火があがる。

しかしその中を抜けた3発が扶桑に直撃し艦が激しく揺れた。

「CIWS 3基破損！」

「後部短魚雷発射管使用不能!!」

強固な艦は攻撃に耐えられても、搭載されている武装まで強固には出来ない。

艦対空誘導弾を失った護衛艦隊には空の守りはなくCIWS及び対空に対応している旧式の艦砲のみ、迫りくる航空機とパルカオンとパルキマイラ、そして海魔の群れ、状況が好転する兆しは見えない。

「護衛艦隊上空まであと10分」

緊急支援に向かうF-2及びF-15航空部隊、たった10分だがもどかしいほど時間がかかってしまう。

しかしパルカオンにパルキマイラに対応する為には十分な航空機の数が必要となる。どちらかの航空部隊が先行するわけにも行かず、連携を取るためにはどうしても空中給油の問題もあり、急ぐ事は出来なかった。

「風竜騎士団！ ラヴァーナル帝国の本土を確認!!」

「攻撃せよ！ 攻撃せよ！」

エモール艦隊の風竜騎士はラヴァーナル帝国西部に到着、日本の攻撃によって防衛力を重要拠点に集中し、一部低下している本土に襲い掛かる。

民間人もろくにおらず、人もいない沿岸部を破壊しながら内陸部へと向かっていく。そこにはいまだ無事な軍事拠点がある事を知らず。

90. 古きの海戦

エモール王国の兵団は艦隊を放棄、全軍をもって陸上し大陸中央に向かつて進軍し、ラヴァアーナル帝国は陸上兵器をもって対処を行う。本土に上陸されなければ使う事もない、防衛および占領の為の兵器。

高さ9mはある巨大な人型歩行魔道兵器40機、地下軍事基地であるために日本の攻撃を逃れ、上陸してくる部隊に備えていた。

風竜の放つ空圧の衝撃波は全く通じず、大砲の様に巨大な手持ち魔道銃器によって撃ち落とされ、陸上兵団はただ蹂躪されていく。

救援を求める魔信が発信されるも、最も近い日本艦隊にエモールに援軍を出す余裕はない。

「全CIWS 弾が切れました！ 対空防衛不可能!!」

「パルクマイラ接近中！ 到着までおよそ15分!!」

「海魔まで残り1km！ 浮上確認!! 残数6匹です!!」

「短魚雷残弾無し!」

姿を現した巨大なタコの子海魔と巨大な蛇のような体躯を持つシーサーペント、護衛艦による艦砲によって数を減らし、海魔の討伐はぎりぎり間に合うと思われた。

「敵艦隊接近!」

「砲撃準備! 護衛艦は後方に下がれ!!」

だがラヴァアーナル帝国とて馬鹿ではない。航空機や誘導魔光弾の効果がないのなら違う攻撃手段を講じる。それが海魔による襲撃と艦砲攻撃。

海魔なら対応する事は出来でも、戦艦同士の殴り合いに護衛艦が割って入れるわけもない。

向かってくるパルカオン艦隊に対し、扶桑は横腹を見せずすべての砲門を向ける。

本来なら不要な戦艦による殴り合い、時代錯誤な交戦は互いの手の

内を封じられたことから始まった。

「砲撃開始！」

合計12門、対地攻撃や格下ならまだしも、扶桑とパルカオンでは無謀ともいえる。

パルカオンは大よそ改修されたWWⅡ戦後のアイオワ級の性能を持ち、一方扶桑も改修が為されているとはいえ15隻相手にたった1隻、戦いになるはずもない。

砲撃戦が始まり、最新のシステムに補助された主砲弾は確実にパルカオンに命中させるも、15隻相手に1隻の扶桑では余りにも不利過ぎた。

パルカオンから扶桑目掛け撃ちだされた砲弾の雨、レーダーによって交差や狭差の砲弾が映し出され、回避航路を取るも至近によって艦が激しく揺れる。

繰り返される砲撃の中、避けきれない砲弾が扶桑に直撃した。

「第四砲塔損傷！」

一度当たってしまえば、速力の低下や内部人員の混乱やシステムの不安定化など状況は悪化。船速が落ちシステムが一時ダウンした扶桑に対し砲撃が集中する。

ほんの数分の砲撃戦によって各所から煙が上がり、残り11隻まで撃沈する事は出来たが、視界にパルキマイラが入り絶望しかけていた。

「航空支援来ました！」

待ちに待った航空支援、始まった空対艦誘導弾による波状攻撃、パルカオンやわずかに見えてきていたパルキマイラは爆炎を上げ沈んでいく。

扶桑は満身創痍ながら生き残った。

護衛艦は無事であったが、攻撃を受け続けた扶桑は中破し、多くの自衛官が戦死してしまった。失った人員は、死んだ自衛官は戻らない。

いままで誰一人として死亡者を出していなかったが、ほんのわずかな想定外の事態によって、多数の戦略兵器の準備では対処できなかった。

た。

91. それは何もかもを焼き尽くす暴力

綺麗ごとで勝ってしまえば、ラヴァアーナル戦争後、覇権争いで戦争をするだろう。

だからこそ、極めて凄惨でなければならない。美学もロマンも何一つなく、軍民問わず、何もかも消し去る暴力。

侵攻したエモール王国軍が壊滅したことで、ラヴァアーナル帝国への本格的な攻撃が開始された。

躊躇されていた攻撃衛星から投下されたMIRV型電子励起爆弾、軍事施設と思われるものが消滅していく。それでもなお、目を失っていないながらコア魔法弾道弾が発射され、即座に迎撃されコア魔法の弾頭がラヴァアーナル帝国本土内に落下していった。

地下施設に隠されていた発射地点にMIRV型電子励起爆弾を投下。コア魔法を撃つ度に発射基地が破壊され、周辺に放射能が舞い散る。

発電設備や上下水道設備、そして丁寧に丁寧に軍事力を削り取り、応答するつもりのない降伏勧告を日本は発し続けた。

「何が起きている!?!」

「これが、太陽神の使いの力なのか!?!」

映し出される映像をみながら、観戦武官ではなく各国の責任者は浮島で絶叫の声を上げていた。

沿岸部には船を、飛行場には脱出する飛行機を求めて人々が集まる姿が、衛星映像に映るがそこにむけ電子励起爆弾が投下され消滅。

誰一人逃げ出さぬよう、満遍なく沿岸部を、飛行場を破壊し尽くし、脱出手段を求めていた者達が消滅していく。

民間人、兵士でもないただの民間人を老若男女問わず、確認できる陸海空の軍事拠点に対して攻撃衛星に搭載されている電子励起爆弾が投下され、小規模な基地と地方都市のみが残され、首都と思われる大都市を除いて全てが消える。

「こっ……、降伏をさせないおつもりですか」

余りの状況にミリシアル帝国の軍務官は太陽神の使いに問う。

「降伏？ 私達は最初にチャンスを差し上げました。それでも、先制攻撃を仕掛けてきたのは彼らです。慈悲などありませんよ」

冷たく怒りなどを込めて言い放つことなどせず、笑顔を向けながら幼子に聞かせるように話す太陽神の使い。それがますます各国の大將や軍務大臣達を恐怖に陥らせた。

全土への攻撃衛星からの電子励起MIRVによって、満遍なく大地全てが焼き尽くされていく様子が、無人機によって記録される。

砕け散るビル群も、逃げ回る人々も、何もかもが爆発によって飲み込まれ、クレーターだけが残され、聞こえないはずの悲鳴が幻聴として聞こえてしまうほど、都市から逃げようとする車両が、電車が、爆発に飲み込まれ、大地からラヴアーナル帝国が消えていった。

余りの映像にPTSDになった国の大臣もいたが、戦争というものをロマンや美化しないためには十分な効果であった。

二か月後、降り続いた土石交じりの雨も止み、神聖ミリシアル帝国・ムー国・エモール王国・パーパルディア皇国の船団が到着。

ラヴアーナル帝国が存在していた大陸には何一つ残されておらず、点在する深くえぐられた大地に流れ込む地下水の大湖と、吹き飛んだ土塊によって若干広がった海岸線、草木一本残っておらぬ荒れ果て崩れた山々、数か月にもわたる調査の為上陸した四大列強世界連合の面々は恐怖に震えた。

“ラヴアーナル帝国は世界の敵である”

それは世界の共通認識であるが、戦争にならぬ一方的な大量虐殺、大地さえも破壊し尽くし、そこにラヴアーナル帝国があったという痕跡さえ残さない力に、太陽神の使いに対して恐怖が生れるには十分であった。

9.2. 後始末・そして黄昏の時代へ

ラヴァアーナル帝国は滅び、この世界で行うべきことはすべて終わりを告げた。

『日本は5年後元の世界に戻る。準備せよ』

龍神様の託宣に従い、日本は世界中から魔道技術の購入を行いながら帰還の準備を始めた。

クイラからは鉱物資源を大規模に輸入して貯え、急ぎ建設している20億リットルの原油保管施設も完成と原油の搬入を急がせた。

クワ・トイネからは食料を買い込み長期保存が可能ないように加工していく。

クワ・トイネとクイラはムー国に今後の保護や機器のメンテナンスを依頼し、対価として技術の移転を行う。

列車や基本的インフラとは言え、日本の技術で建設した以上管理しなくては危険、だからこそ最後まで任せるのが提供した日本の責任と考えた。

パーパルディア皇国。

政情は安定しているものの、やはり過去の栄光である身勝手な力を振るおうとする者もあり、元貴族や元官僚の取り締まりが続いていた。

そして日本の教育を受けた次期皇帝が国に戻り、さらなる国の改革に取り掛かっている。しかし日本の予想に反して、10歳以上も年の離れたレミールと若き皇帝が婚姻したということだ。

エモール王国。

龍神様はエモール王国に居るべきだと公式に訴え、太陽神の使いによつてかどわかされていると声を上げた。

日本人からしてみれば、全てを見通す神を騙すことなどできるはずもなく、そのような行為をした者は全て刑務所に入るか、凄惨な死を

遂げている。

余りの言葉に遺憾であると太陽神の使いとして公式に世界に発言したが、何よりも怒り狂ったのは龍神様であった。

龍神としては、自分が騙され操られているという妄言が逆鱗に触れてしまったのだ。

龍神はエモール王国まで自ら飛行したのち、大地を焼き尽くし竜人の半数が炎の海に消えた。それでも怒りは収まらず、特徴の一つである赤い目を奪った。

傲慢な態度を改めぬ限り、永劫そのままだと命を伝え龍神は日本へと戻る。

あらゆる物資、あらゆる技術、それを買収込み日本は元の世界に戻る為再度転移。残された国家は元の生活を取り戻し、そして静かに大規模な国家間戦争が勃発した。

グラ・バルカス帝国から流出した技術による文明国家同士による覇権争い、神聖ミリシアル帝国とムー国は最初は止めていたものの、何か国も戦争が広がると被害が大きくなってしまったため、積極的には介入することが出来ず多くの国が統合されそして滅んでいった。

確かに世界の敵であるラヴァーナナル帝国は消えた。しかし日本が消えてから10年も経たずに、ラヴァーナナルによって被るはずだった人的被害を遥かに超える人口が死滅、列強と呼ばれる3カ国を除いて各国はさらなる文明の衰退と苦難の歴史を歩んでいく。

地球への帰還編

a. 暗寧の時代

激しい光の中、日本は無事に元の世界に帰還した。

西暦2045年 4月

世界各国と即座に連絡を計り、探査機や静止衛星になんとか生き残っていた日本製の衛星ともリンクが出来た。

半日も経たず復旧したホットラインで米国および英国と連絡が取れたが、即座に航空路及び海路を封鎖するよう助言がもたらされた。

各国の大臣と連絡も取り、無事空路及び海路の復旧と思われる最中、封鎖するという言葉に緊急映像対談が行われ、その最中米国大統領が驚くべき発言をした。

「数力国が巨大生物に対して核を使用した」

巨大生物は言わば古代の大地の主、アメリカの双頭の大鷲は龍神様によって倒されたが、その卵による新たな世代は米国を守る守護者となっている。

そう言った存在を核をもって倒すなど、決して行ってはならない事だ。

「汚染された大地は広がり、日本の転移する前と比べ世界人口は激減しています」

地球上が放射能によって汚染され、陸地も海も汚染されてしまっている。

各国ともに古代の大地の主の加護によって汚染はある程度は抑えられていると言っても汚染された地域は広く、大地の主を殺した隣国に関しては全土が汚染されているという。

無事に帰還した地球がこのような状況になっているなど、日本は考えもしなかった。

対談の中、要求は日本製の水や食料、対価は技術やありとあらゆるもの、そして一部特権階級のみへの渡航許可であった。

日本側としては深く悩みながらも、地球の技術において25年近く

の遅れがある事から、その条件は飲むべきではあるのだが、突然の情
報に閣僚は混乱に陥っていた。

そんな中、隣国から既に艦隊が差し向けられていることが判明し、
急ぎ護衛艦隊を向かわせることになる。

日本海・・・

隣国の艦隊がEENZにまで迫り、護衛艦隊が到着したとき大きな水
柱が上がった。

「電磁加速砲か!？」

800kmを離れた距離から撃たれた超音速砲撃、日本が開発した
ように、地球でも同じく順調に開発がすすめられ、一步進んだ軍事技
術が当然となっていた。

むしろ超音速艦対艦誘導弾を使用しなかったのは、単に転移してい
た日本の技術が劣っているだろうという予測と、さすがに即座に戦争
を起こすほど短絡的でもなかったからだが。

威嚇とは言え日本側も電磁加速砲を撃ち返すと、それ以上の接近は
辞め 半日近くのにらみ合いの末帰還していった。

映像会談の中、状況を静観していた各国の大統領は口を開いた。

「やはり起きましたか。 米英の力が必要なのはわかりましたかね
?」

「我々が駐留すればおいそれと攻撃は出来ませんよ」

「そちらの外聞もあるでしょうが、日本本土はいま世界各国にとって、
数少ない清浄な大地なのですよ」

各国大統領からの要求ともいえる提案、避けるには日本の状況は良
くない。

「わかりました。 駐留については国会を通してなんとかしてみま

しょう」

早急に送られた護衛艦隊によってなんとか追い返したものの、なんども穏便な圧力だけで済むとは思えなかった。

日本は1億人程度の島国、戦争で減ったとはいえ10億人ものほぼ同格の国家相手に、真正面からやりあつて戦争になるわけもなく、技術や情報を対価に連合国家と連携を取るしか道はない。

汚染された地球の25年、軍事技術よりも環境浄化技術に重きが置かれていたため、それほど大きな差はなかったが、やはり多様な面で日本は後れを取っていた。

日本政府からの公式発表によつて日本人、そして在留外国人は啞然とし、放射能汚染された各国に行くことなく、日本本土から出るものは居なかった。

二か月後到着した各国艦隊や航空師団は、急ぎ用意された仮設の基地と限られた大地とは言え、割り当てられた基地内部も汚染されていない地域、高級将校などが集まり隣国とのにらみ合いがあると言つても、正常な大地に態々家族を連れて駐留を行う方針をとつた。

他国では汚染されていない地域は保護区であり、農業や畜産業と共に大切なエリア、簡単に立ち入れる場所ではなかった。

まさに人類にとつて大事な生命線、間違つても森林火災など起こしてはならないからこそ、立ち入りは厳しく制限されている。

一方で日本ではそこまで厳しくはなく、入国時に除染処置こそあつたもののその後は自由に観光も可能であり、羽を伸ばすとまではいかないものの自然を満喫していた。

各国大使館はその役目を維持しつつ、日本を時折訪れる自国の特権階級の受け入れを行っていた。

龍神様は日本本土を守る為にその力を使い、大地と海域は汚染されずになんとか清浄を保っている。だからこそ各国の富裕層や特権階

級は日本へ長期滞在旅行がステータスになり、日本に住む在住外国人は親類から物資を送ってもらえないかとの連絡の対応に四苦八苦していた。

b. 最新兵器

2046年6月

恐ろしいことに国際連合はすでに形骸化しており、大国と呼ばれた国家以外はほぼ独自に行動していた。

それ故に利害関係がはつきりしており、日本は主に米英を主体とした同盟関係に入り込む。

「ほう、これが貴国が異世界で得た技術ですか」

日本に各国の海軍空軍が存在する以上、日本が前世界から得た魔道技術は当然知られる。

だからこそ、限定した形ではあるが魔道技術の情報公開を、日本政府は技術や物資と引き換えにある程度を国際連合に所属する主要国家に公開をするとした。

「有効性はさほど高くはありませんが、新資源としては有望でしょう」
見た目上はただの石ころ、しかしそれを発電機にセットしスイッチを入れると、回転を始め発電機が稼働を始める。

ミリシアル帝国が開発していた魔道発電機、それを日本として改良を進めた物で、出力も稼働時間もかなり伸びている。

災害用発電機ではあるが、自衛隊には配備も進められている。

「確かに、これは開発に関しては連携をとるべきでしょうな」

「ここは主体として欧米日と共同研究所を作るべきですね」

つまり共同研究所を設けるので魔道技術について情報をもっと出せと言う事だが、日本としても大事な技術を全て公開するわけにはいかない。

「いえ、各国それぞれで開発し、年に一度集まり交流する方が独自性をもって開発できるかと。まだ開発も初期の段階ですので、多くの点が未知数です」

日本としてもまだ民間段階には広がっておらず、研究所で嚴重に隠されながら開発が進められていた。

「なるほど、日本もまだ理解できていないと」

「魔石を発見する為の装置、それだけでもまあ十分ですか」

日本は火水氷雷の魔石を発見する為の装置、そして基本的な使用方法を提供し、対価として物資や資源を得る。その中には日本が居ない間に発展した軍事技術、それが当面の間自国を守る為に優先された。

最新のイージスシステムを筆頭に、
タクティカルレーザーシステム

電磁加速砲

F-35 Block 35

電磁カタパルト

原子融合炉

等、

防空および海上を最優先に技術提供を受け、急速に現代に合わせた防衛力を身に付けて行く。

それでもなお、駐留する米英軍も緊急防空出動することがあり、隣国は日本本土を狙い領空や領海に頻繁に航空機や船舶を近付けさせていた。

国際的な立場としては、各国から留学申請や難民申請が多く来るもすべて断っていた。しかし圧力がないわけではなく、日本としてもわずかではあるが、米英軍のNATOを通して日本が改修生産した自律戦車ヤークトティーガーや軽駆逐戦車エクスカリバー、そしてXF5Uフライングパンケーキなどに興味を持ち、国際連合加盟国である米英軍に関わる者のみ外交及び公用として一時受け入れを始めた。

c. 圧力

国際連合に所属する国から繰り返される難民や移民申請を断り、半鎖国状態を維持しながら遅れた技術の習得に時間をかけている。

「やはり気軽に出かけられるのは良い。母国ではこうはいかんからな」

「子供も成人するまで居られればいいのだけれど、任期期間を延ばせないかしら」

日本に訪れる友好国の軍人家族、駐屯のためであっても観光として各地を回り、日本の経済は十分に再生されていった。

英米だけではなく仏や独などからも、日本に残っていた軍事企業の支社を公的業務で長期滞在で訪れるなど、なんとか清浄な大地に留まろうと手を尽くしている。

「いやはや、まさかワイバーンなる空を飛び火を吐く蜥蜴が存在するとは驚きですね。しかし兵器として十分機能を発揮したのは素晴らし」

「DNA情報は非常に高い。しかしこれは国にとっても重要なものとなりえる」

日本としても正当な理由なら拒否する必要もなく、当初の契約通り異世界で得た軍事技術やデータ交換などが活発に行われ、特に異世界の生物情報などはとても高価であった。

日本が手に入れ戻ってきた魔法技術、その中で世界中が欲しがらるものがあつた。

それは識別と吸着魔法を使用した魔道機械のだが、これを使う事で容易に放射性物質をフィルタリングする事が出来るのだ。

それも土壌から水に空気まで万能であり、原子力発電所の事故に備えて日本が開発していたものを、英米と共にさらに発展させこの世界においてどの国も喉から手が出るほど欲していた。

日本は鎖国状態であるために技術はあつても輸出版売はせず、英米が独占する形で国連加盟国に優先順位をつけ、売却せずに軍に護衛さ

せ使用していた。

「日本は世界に対して魔法技術の全てを開示すべきである!!」

しかし、古来からの大地の支配者に対し、核を使用した国は国際連合から排除されており、その国家群は独自に国際連盟を形成し、日本に対して情報の公開を迫った。

「国際連合を離脱した国家が何を言う。我々はそちらがやった始末で忙しい」

「日本には物資や技術を支払い正当に得ている。無償で公開しろとはおかしな話でしょう」

「国家である以上、無償はおかしな話だ。貴国も対価を出せばよいだろう」

むろん技術を各国に輸送し、汚染除去をしている英米がゆるすはずもなく、それどころかやや中立であったロシアまで苦言を上げる始末であった。

ロシアはもちろん国際連合に籍を置いたままであり、英米を通して技術等の売却と引き換えにほんの一部ではあるが正式に魔法技術を購入していた。その為無償で世界に公開しろと言う発言には、穏便にはあるが不快であると思いを表明していた。

むろんその中には旧式化しているとはいえ、ロシアの戦車の現物や誘導弾の技術情報も含まれていた。

しかし、他国とは異なり核を使ってまで大地を奪い返した国家にとって、正当な意見などなんの意味もなく、力で奪うための準備を静かにそして堂々と行い始めた。

それ故に日本には英米だけではなく仏と独の軍も駐屯することになり、さらなる兵器や軍事技術が流れ込み始める。

本番

0・帰還と空間神の暴走

日本は無事に地球に戻ったが、そこは異世界に居ただけ時間が経過しており、最悪な事に核戦争の後であった。愚かな事に旧時代の大地の支配者を倒すために数力国が核を使用してしまったのだ。

放射能の雨が降ってしまったことにより世界中が汚染され、転移時日本に残っていた在住外国人も自国に戻ることなく唯一清浄な日本に残り、祖国の伝統や歴史を語り継ぎ、日本から自国に援助をするなど復興に手を尽くしていた。

日本が持ち帰った魔道技術を対価に各国に遅れていた技術情報を購入するなど発展に尽くすも、それさえも気に入らず全てを開放するよう軍事的圧力も掛けられもした。

日本人も日本に住む在住外国人も、他国に対しては懐疑的になり、自らと自らの住む場所を守る為に力を求め、日本はさらに軍事面に傾倒していった。

それでもなお、隣国艦隊や航空機によるEEZや領空侵犯は繰り返され、時には漁船を襲撃され人的被害も生じ、観光旅券で入国して不法滞在や違法な難民申請など、転移前とは比べものにならないほど状況は悪かった。

そして最悪な事に、対馬は元々自国の領土だと侵攻し、一時占領され島民が皆殺しにされてしまうなど、もはや紛争ではなく国家間戦争に一時的に陥るなど、終わる事のない混乱の10年を過ごすことになり、暗い時代となる。

一方で神々の世界では空間神が暴走してしまい、その力により新たな時空が生み出されてしまった。

日本が転移してこなかった時空間、むろん神々の相克によって現世に干渉し過ぎた空間神は滅せられたが、新たに作られた世界では本来存在しない太陽神の導きによる転移した日本は現れない。

そして空間神を崇めるラヴァーナル帝国が存在する以上、空間神は信仰によつて復活する可能性がある。その前に再びラヴァーナル帝国を滅ぼさなければならぬ。

太陽神の手によつて日本は再びあの世界へと転移が決められ、まずは以前よりもさらに5年過去に戻り、今度こそラヴァーナル帝国を滅する為に、過酷な10年を過ごした日本が再び向かうことが決定づけられた。

『日本は今後、新たな世界を渡り続け、神命を果さなければならぬ』

龍神様からの神託により、地球への復帰から12年、再転移する3年前、日本は鎖国状態に移行しながら再びあらゆる技術を買ひ込み、友好国のみ事情を話し準備を進めた。

二度と戻らないという情報に、中には一部の特権階級の受け入れと移民国家設立を各国から申し入れられたが、日本は新たなフロンティアを得に行くわけではなく、新たな地に地球人種として繁殖は出来ないと断りを入れた。

『そのような考えがあるからこそ、神々が転移する国家に選ばないのでは？』と日本政府が問いかけたことで、各国はそれ以上要求することはなくなった。

10数年攻撃を受け続けた隣国に行ったたった一つの報復は、欧米口に電子励起弾頭の製造方法とサンプルを数発渡した後、二度と戻らないと連絡して地球から消えた。

欧米口がどこに使うか理解しているが、自ら関せずとしてこの15年間味わった苦悩への小さな報復であった。

1. 1629年 生存の為に

再び訪れた世界は龍神様のお言葉から1629年1月とわかる。

空間神によって作り直された時空間、急ぎ纏められた世界で起きた事の時系列を纏め方針を練る。

1. ロウリア王国は軍備拡張中であり、時間を置けばクワ・トイネとクイラを襲う。

2. パーパルディア皇国は戦争中であり属領を増やしている最中。終息後は世界に対して行動を起こしかねない。

3. ラヴァーナル帝国の転移に引きずられ、現れたグラ・バルカス帝国もまだ出現していない。しかし転移後は世界に宣戦布告を行う。

4. アニユンリール皇国は魔帝出現の準備をしている事だろう。ヘイスカネンに魔王復活の工作と面倒な事が多い。

ラヴァーナル帝国を仕留めるには大陸間弾道弾と攻撃衛星で全て片が付く。予算と時間だけで解決は可能だ。

今回日本はこの世界で技術を磨き上げ、他の世界でも生きていかなければならない。

目的は戦争ではなく生存する方法を会得する事。各国へのかかわりは最低限に済ませ、国力を徹底的に増強し、他の世界に移った時の準備をしなければならない。

この世界よりもはるかに過酷で、劣悪な環境である地球、それと同等以上の世界である可能性に対して、あらゆることに備えなければならない。日本人が、在住外国人が生き残るために。

1. 多角的再生エネルギーの開発

2. 核融合技術の開発

3. 再生資源の開発

4. 科学的魔法の研究開発

大規模な軍備拡張、攻撃衛星の再配備、GPS等衛星の打ち上げ、魔法研究、何もかもが国の総力を挙げて行われる。

誰もが平和な生活を望むために。

それ故にこの世界における方針を決定した。

1. パーパルディア皇国は早期に対処し、そもそも戦争をさせず、国家を二分し相對させる

そもそもフィリアデス大陸の住民は覇権主義なところがあり、全ての住民を平和的思想にするには時間がかかりすぎる。

2. グラ・バルカス帝国に関してはムーとミリシアルに対処させるが、前もって技術支援を行う

ミリシアルには後述のアニユンリールの技術を取り込ませ発展させる

ムー国は冷戦初期程度まで技術移転するための閉鎖都市を建設する

3. アニユンリールについては即刻日本が対応し、戦力を壊滅させ、のちの処理はミリシアルに任せる

古代兵器基地及び主力軍基地を壊滅させ、あらかじめ日本が戦力を奪っておく

4. 魔王への対処はムーに任せる

アニユンリール皇国の作員が復活させたが、爆弾で城ごと吹き飛ばすことで対処する。もし生き残っていたとしても、エスペラント王国との合流の為、グラメウス大陸の南部森林は焼き払う

5. エスペラント王国に関してはミリシアルとムーに任せる

邪龍については休火山ごと消滅させておく

6. 日本の国外軍事行動は極力無人兵器に任せる

人的被害を出すわけにも行かず、戦場となりえる地域は無人機を主力とする

第一次行動として、アニユンリール皇国攻撃の為、準備が進められていく中、外交団がミリシアル帝国へと向け出発していった。

2. 1629年 72時間戦争

神聖ミリシアル帝国はパニックに陥っていた。

「我々は太陽神の使い。ラヴァアーナル帝国復活が近付き、神の導きによりこの地に転移してきました」

突如伝説の中で語られていた太陽神の使いが、艦隊を引き連れカルトアルパス港に現れたのだ。最新型のゴールド級戦艦を遙かに超える船も確認され、一目で技術的に隔絶したものであると認識できた。

国家の混乱と真偽の確認を終え、そして急遽重要会議が開かれたが、そこで太陽神の使いは衝撃的事実を話した。

「我々はこれより、ラヴァアーナル帝国に従うアニウンリール皇国を滅ぼします。観戦を望むのなら武官を1週間以内に用立てする様に」

皇帝であるミリシアル8世にまで情報は即座に上がり、軍務大臣と情報局長に観戦武官として同行を命じた。

見たこともない巨大な飛行船に搭乗し、偵察機から映し出される映像を会議室で閲覧することになったのだが、未知の技術の山にめまいを覚えていた。

「これからの映像はリアルタイムで現場から送られてくるものです」

太陽神の使いの言葉に、飛行船の内部を見回していた観戦武官の視線が画面へと向けられる。

映し出されるミリシアル帝国よりはるかに発展した都市群の航空映像、まだ衛星群の打ち上げが出来ていないため、偵察機による映像であった。むろん三基だけがGPS衛星は打ち上げられており、最低限弾道弾を撃ちこむ程度の精度はある。

残されていた電子励起弾道弾によって、アニウンリール皇国本土及び所有する島々の重要軍事拠点を吹き飛ばされる。地下軍事施設なども全て判明している為、わざわざ調べる必要もなくパルカオンやパルキマイラ、主力兵器も根こそぎ消失させて既に軍事力はない。

それでもなおアニウンリール皇国は、降伏するつもりはないらしく残された兵団をかき集めている様子が映し出されていた。

日本としても弾道弾はもうなく、広いアニュンリール皇国を占領する人的戦力もなかった。

しかし自律兵器の大量投入による侵攻、そしてごく少数の兵による国家の中核人物の拉致、それだけで国としての体裁は失われる。

「これが、太陽神の使いの力……」

「もはや……、戦いにすらならないではないか」

啞然としているミシリアル面々だが、その間にも刻一刻と戦況は変化していく。

戦争が開始して36時間、航空爆撃と共に首都周辺に自律兵器であるAI搭載ドローン戦車群と少数の空挺部隊が降下、アニュンリール皇国皇族を捕える為、無慈悲な侵攻を開始。

ほとんどの兵士を沿岸地帯に集め、敵の本土上陸作戦に備えていたため、無防備に近い首都は皇族護衛隊以外は出払っており、アニュンリール側に多数の死傷者を出しながらも、中枢施設群の破壊と皇族の捕縛に無事成功。

軍務大臣など各部署の責任者は国に残ってはいるが、突如現れた正体不明の部隊によって皇族が攫われたことで、敵の仕業なのか内部の仕業なのか疑心暗鬼になっていた。

戦争開始から72時間、重要施設をすべて失っただけではなく、皇族である光翼人も全て捕えられ、アニュンリール皇国は国家としての体裁を失った。

各地に残された工場や小規模な軍施設が、かろうじて生き残った軍人や民間人を集めているにとどまる。あとの始末は神聖ミリシアル帝国及び自律機械に任せておけばよい。

「ラヴァーナルに関わる技術も幾らか残されているでしょう。ミリシアル帝国で確保できるように残しておきますので、確保するなり有翼人を捕縛するなり自由にするのがいいでしょう」

太陽神の使いの言葉に、ミリシアル帝国の軍務大臣と情報技術官はすでに考えるのをやめ、状況をただ青ざめた表情で見ながら、報告する為にメモを書き取っていた。

日本国内でも行われている魔法技術の開発、所詮は発電や電気や動力の代替がほとんどで、実用性に関してはそれほど高くない。

科学の補助として利用できるが不安定性もあり、まだまだ魔石技術の発展が必要であった。その為アニウンリール皇国の技術者が持つ情報は有用ではあるが、発想に柔軟性が失われる危険性もある為独自に発展させていく方針をとっていた。

3. 神聖ミリシアル帝国・ムー国

太陽神の使いが現れたことによる混乱、そしてアニウンリール皇国の殲滅、ラヴァーナール帝国技術の回収、そして来るべきラヴァーナール帝国に対しての備えとして、国内は大混乱に陥るはずであったが、ラヴァーナール帝国復活に関しては厳しく緘口令が敷かれたことで、最悪の状況だけは回避できていた。

「まさかラヴァーナール帝国に連なる国があつたとは……」

皇帝であるミリシアル8世は軽く怒りを抑えながら、各部門の報告を聞いていた。

軍務大臣と情報局長は、かき集められた情報を纏め準備を進める事に疲れ果て、目の下に深い隈を作りながら言葉を続ける。

「現在艦隊を派遣し、制圧と技術回収を行っています。国土が広い為長くかかるとは思われますが、太陽神の使いの言う通り、国家体制はずでに失われております」

報告を聞きながらミリシアル8世は太陽神の使いの事を考えていた。

好意により小型であるが映像端末に記録されたものが貸し出され、それに残されていた戦争の映像、大国を三日間で壊滅させてしまったその力が、ラヴァーナール帝国にだけ向けられることに安堵し、また間違つて敵対してしまうことを恐れていた。

「アニウンリール皇国の皇族である光翼人は現在魔封じの枷によって拘束され、嚴重に管理されております」

これからアニウンリール皇国の皇族、つまり光翼人からラヴァーナール帝国の情報を聞き出さなくてはならない。

兵士を送り込みアニウンリール皇国の完全な解体と制圧、残されている設備などから技術解析などすることは非常に多い。

捕えた有翼人から魔帝と技術情報の取得、当面の間ミリシアル帝国は慌ただしいことになるだろう。

「エモール王国、彼らにアニウンリール皇国の光翼人について、世界会議までに情報を纏めて出すように伝えるのだ。 穏便にな」

ミシリアルの兵団は、順調にアニウンリール皇国が支配していた領域の占領を進め、その中で抵抗を続ける工業区や小さな軍事拠点に攻勢をかけていた。

1629年中頃

現在の日本は、元の世界に戻った時の魔法技術などによって、多くの権利や資源を得る事に成功はしたが、世界中が疲弊している状況では現物交換なども多くあり、日本も現物での受け取りによって技術情報の公開なども行ったが、やはりそれを良しとせず軍事的に圧力もかけられた。

汚染された世界では清浄さこそなによりも価値があり、科学と魔法による放射能の遮蔽と除去技術の開発を現在は何よりも注力している。

未開の地で危険を晒しながら手に入れた技術と情報、それを世界中から狙われた日本は、日本人だけではなく日本に住む在住外国人もまた、世界を、母国を中々信頼できないようになっていた。

徹底管理され増強された食料自給率、国内の核融合炉や自然エネルギーの開発、バイオ燃料。

少量の鉱物資源さえあれば、日本は十分に自活が出来る。

だが、何よりも問題は、減ってしまった海空の自衛隊。

海上自衛隊は残念ながら一個艦隊は隣国との防衛戦で失われ、電磁加速砲搭載の超広域防空戦艦大和も現在修理中と、防衛能力が低下している。英国から1隻のQ E級空母を融通されたものの、失われた人員やイージス護衛艦は戻らない。

航空自衛隊はF-2戦闘機が全機稼働不能状態であり、F-15シリーズも過半数が修理状態にある。F-3の生産とF-35の米国からの購入である程度は戻っているものの、全体の稼働率は60%を切っている。

陸上自衛隊は対馬奪還戦によって1師団を失い、ある程度は補充されたと言っても万全とは言えない。

日本は確実に弱っている。それゆえにアニユンリール皇国を完全に仕留めきる事までは出来ず、技術回収の名目で後の事をミリシアル帝国に任せるしかなかった。

電子励起のMIRV弾道弾も尽きてしまっている。この世界の猶予はおよそ30年、来るべき日に備えなければならぬ。

まずは膨大な鉱物資源を確保しなければならぬ。しかし直接クワ・トイネやクイラに関わるわけにもいかない。

1629年中頃 ほぼ同時期

ムー国 オタハイト港

大艦隊を連れず、人知れず気付かれないように配慮をするべきと考えられたが、ミリシアルに行ったように、正規に圧力を掛けることが最終的に決定がなされた。

その為現在も無事な長門及び伊勢型超広域防空イージス艦を基本とした艦隊を派遣。

「暇だなあ」

ムー国は中立宣言によって平和な状況であり、日本では約160年前に存在した戦艦、三笠に酷似したラ・カサミ級戦艦を設計している技術的段階にあった。

そんな国家であるために、他の地域の文明圏国家から稀に戦争を挑まれることもあるが、ここ数年はそのような事もなく安全な年月を過ごしていた。

「おい……なんだあれ」

「ん？ 何がみえたんだ？」

監視員の視線の先には見たこともない艦隊がいた。

急いで書類に目を通すが、今日は艦隊の寄港予定はない。

「……おいおい、ミリシアル帝国の艦隊か!？」

監視員たちが慌てている中、日本の艦隊はオタハイト港に向かっていった。

日本の艦隊による圧力は、ムー国が科学文明国であるため、技術移

転にしろ技術指導にしろ都合が良い。だからこそ惜しみもなく全力で圧力を掛けに出ていた。

海軍関係者だけではなく住民たちにも騒ぎが広がる中、港の間近で集まっていた艦隊の中から一隻が港に着岸。梯子が下ろされ中から人が降りてくる。

「我々は太陽神の使い。 国家元首及び軍事・技術・情報責任者と面会を望みます」

突然の訪問に大慌てになり、他国の外交官や商人達は太陽神の使いが現れたと本国に連絡取ろうと動き始める。

多くの混乱と共に各部門の責任者が集められ、緊急会議が行われた。

「それでは、我々に技術を託して頂けると?」

「条件を飲めるならですが。 貴国の今の技術から半世紀程度は進んだものを与えましょう」

一時停滞したとはいえ2060年の日本にとっては100年前の骨董品の技術、別に惜しくもない。これで必要なモノが得られ、日本が直接介入する必要がなくなるなら十分すぎる。

太陽神の使いとしての要求は以下になる

1. クイラの鉱山及び油田の整備
 2. クワ・トイネに蒸気線路の敷設
 3. クイラから鉱物資源および油田の輸出
 4. クワ・トイネから食料の輸出
 5. マイカル南部、山岳地帯に囲まれた港湾部の基地化
 6. 基地化に伴う人員の融通
 7. 基地周辺の陸海空域の完全封鎖
- 等、とんでもない要求であった。

「食料や鉱物資源については、なんとかできるかと思いますが、基地や人員については……」

ムーの各部門の代表者達が話し合いながらも、余りにも重い条件に

難色を示していた。

「スパイが国内に入り込んでいる事を知っているでしょう。少しでも流出すれば戦乱を巻き起こしますよ?」

はるかに発展した技術、それに伴う弊害、第五列強レイフォルも虎視眈々とムーを狙っており、スパイなど当然入り込んでいる。

「……お時間を頂けないかと」

「半年は待ちます。ですが」

太陽神の使いの手に持っている端末から映像として流している平
行未来のムー国の、カルトアルパス港での大敗、アルーの大虐殺、こ
れは起こりうる高い可能性の一つである。

「これはあなた達が我々の力を借りなかった場合に起こりうる未来で
す、それをお忘れなく」

退室していく太陽神の使いを見ながら、ムーの代表者達は頭を抱え
た。

翌日から重要機密として連日の会議を行い、会議の参加者達が疲弊
していく中、ミリシアル帝国の使者が公式にムーを訪れ、太陽神の使
いの来訪とそれに伴う人員の供出について話し合いが行われた。

ミリシアルにも同じように人員の供出を求められ、むろんそれは技
術の向上を対価としているため、ミリシアルは受ける事にしたので第
二列強であるムーへの通達に訪れていた。

ミリシアルの決定にムーも国内の調整を行い、一年後を目途に人員
の用意をすることを決定した。

国内では南東部海岸線沿いの山岳地帯の一部地域が封鎖され、一切
の立ち入りと接近が禁止された。法的な問題や国民向けの説明全て
が追い付いているわけではないが、少なくとも第一列強との共同での
技術開発を行うとして、表向きは纏められている。

海上油田構造を起点に、メガフロートを接続し大規模な人工島の建

設を進めている。日本本土は完全に鎖国、そのための準備を進めていた。

交易は以前と同じように日本本土には来させない。ただし今回は軍事拠点の面も持たせ、早期に獣人傭兵団の結成を考えている。

4. 1630年 初期 技術移転開始

商業都市マイカルの南東部の山に囲まれた海岸線沿い。

これから技術流出を一切させず、他国に知られることもなく、技術を急激に発展させなくてはならない。

南東部の海岸線の一部を租借地として大規模に借り受け、無人機と自律建機によって24時間作業によって都市及び設備建設が進められた。

封鎖軍事都市

兵士によって厳重に管理され、一切の情報が外部に漏れないエリア、ムー国でありながら、ムー国ではない特定軍事都市、全ての技術が1960年程度まで引き上げられ、あらゆるものが生産開発が進められる。

ジェット戦闘機や誘導弾に必要な集積回路や誘導システム、材質工学や航空力学、電子工学に通信技術、軍事に必要なモノを時代を限定して開放、そして製品企画の概念を教える。

よくて1920年程度であった技術を40年も飛び越す技術の向上に、それなりに優秀な者達が集められたと言っても、理解し取り込むには日々苦勞することが予想されている。

建物が立ち並ぶ中、心配そうにしている住民として集められた20歳から40歳までの民間人、技術者と科学者の第一陣数千名、全てが封鎖軍事都市で暮らしている。

共通開発区

技術に関して共通範囲の知識を得る為、学校や研究所に、重工業および科学工場が建てられていた。

真空管ではない初歩的なLSI技術、それに伴う科学と化学技術、最低でも初期の誘導弾及び超音速ジェット機を製造できなくては困る。

しかし発展に伴い汚染される空気や大地、除染や除去技術もむろん

開放し、自己開発と生産をしつつも、部分的には最新の日本の技術が投入されている。

生活水準は1980年代レベルで、ただ生活するだけでも驚きの連続であり、ムーとミリシアルから比較的優秀な人員が集められたが、混乱するものも少なからずいた。

しかし解放されている科学情報にミリシアルやムー国の学者達は驚きながらも、数年出れないと言う事を含めても歓喜して知識を吸収していった。

海軍区

造船所と船渠も建設が完了し、渡された設計図を見てムー国の造船技術者たちが悲鳴を上げる。

「不可能です！ こんな巨大なものを作るにはノウハウがありません！！」

前世界のグラ・バルカス帝国から入手したグレードアトラスター級戦艦の設計図、それを日本が手を加え戦艦と言うカテゴリーの最後の艦船を設計した。

それとは別に空母の設計図も渡しており、これもまたグラ・バルカス帝国の空母の設計図に手を加えている。

むろんそれは技術移転を行うための一点物ではあるのだが、1960年までのあらゆる船舶に関する技術が詰め込まれていた。イメージシステムに関するものは秘匿されているが。

「それを可能とするだけの技術を得るのが目的です。5年で建造し、それから毎年一隻以上建造してもらいます。作る為の技術移転もちろん進めますから安心してください。当分の間は眠れるとは思わない事です」

笑顔で話す太陽神の使いに、ラ・カサミでさえまだ建造が始まっておらず、未知の技術の塊である造船に技術者達は悲鳴を上げた。

空軍区

日本に保管されているグリペンE 最終的な目標であるが、当面はサーブ 35 ドラケンを生産できなくてはならない。

もちろんジェット機概念さえ考えたことがない為、まずは単翼レシプロ機として一式戦闘機 隼の設計図を渡した。

「これは、どういう理論で飛行するのでしょうか？」

いまだマリンも製造が始まったばかりで、単翼機の飛行理論もいまいち理解しておらず、そこから航空技術者たちに理解させていかなければならない。

「理論は共通開発区での学問と共に平行していきますが、まずは製造する為のノウハウを得るために、試作してください」

「はい？」

「ですから試作製造してください。 工作機械を作り、半年以内に形にしてください。 それまで休みはないと思ってください」

表情が失われた顔で伝える太陽神の使いに、ムーの技術者たちは青ざめていく。

まだまだ段階は多くあり、LSIなどは共通区で開発するとしても、まずは電子システムを必要としない構造のジェット機も間に挟む必要性があり、沢山の段階を踏まなくてはならない。

隼がつくれたら次は橘花を作る為に散々苦労してもらおう腹積もりであった。

陸軍区

戦車

自走砲

対空砲

兵員輸送車

輸送車

小火器

軽機関銃

対装甲火器

等、他の部門より遥かに多様なものが必要となる。それを一から開発しなければならなかったため、できうる限り部品の共通化と多くの人員の割り当てが予定されている。

中でも苦勞すると思われたのが装甲車両系であり、もつとも情報があり多様な派生型を生み出したM4中戦車をベースとした。M4中戦車・M7自走砲・T34カリオペ対地ロケットなど、多様に生産されたため色々と融通が利く。

車両は基本的な技術が向上すればほとんどの事が解決し、機銃についてもまた同じこと。何よりも基礎科学力の向上が急務となる。

渡された設計図を見ながらなんとか理解しながらも、現物が無い為首を傾げている者もいた。

「これは、装甲を付けた車両?? でしょうか」

「砲がついてますが」

「タイヤではなく、これは一体?」

「これをまずは製造できるようになってもらいますが、半年ほどで試作してもらいます。各部門ごとに別れ、協力して24時間体制で取り掛かるように」

各区域では技術者たちが悲鳴を上げていているけれど、以前は提供して任せていたのだが、危機感がありながら時間をかけてもまともに量産が出来ていなかった。

だからこそ今回は徹底して管理し、日本が無人数を少数出すだけで片が付くだけの力を付けさせる。その為には厳しい教育を行っていくつもりであった。

試験区

日本本土に今他国に対し、軍需品を売却する余裕はない。だからこそ、他国に製造させるしかなかった。

しかし何もしないわけにも行かず、日本では民生品を軍用品に近付けた改造を施す事で解決を図ったのだが、そんな危険な代物を国内で

試験するわけにもいかない。

中小企業を主体とした開発、それ故にムー国内で実戦に即したテストを、ムー国軍人に行ってもらっていた。

防弾鋼板

装甲鋼板を作るメーカーも生産ラインに余裕がない為、経験のない手空きの中小企業に依頼したは良いが、やはりノウハウなしで要求水準を作るのは無理であり、せいぜい小口径の6〜7mmの防弾が可能程度なものしか作れず、安価な防弾鋼板として採用された。

ドイツのウニモグの装甲車モデルを参考に重機銃を搭載したガントラック

安価な防弾鋼板を使用し、重機銃を複数搭載する民生トラックの改造品

テクニカルを参考にブルドーザーをフレームベースとした簡易戦車

安価な防弾鋼板を三重に全面溶接し、極めて鈍重ではあるが装甲車としては十分であった。ムーが所有する程度の砲であるならば、105mmであつても問題ないとされる

玩具がベースの自爆兵器

簡単なAIを積んだ電子科学教育玩具を改良し、C4を搭載した自爆兵器。

サッカーボールほどのサイズで自律徘徊歩行し、設定範囲内に人間を見つけると追いかけて自爆する制圧型兵器。

その他いろいろな民生品を元に改良した兵器が開発され、テストしながら民生品として改良すべき点の見極めが行われている。

どんな製品にも一種の共通する通過点がある。民生品を兵器化する為のボーダーラインを探していた。

5. 資源国・海上都市・蠢く者達

クワ・トイネ及びクイラは混乱していた。突然の第二列強ムーの外交官が訪れ、開発を対価に食料と資源を購入したいと言ってきたのだ。

遠く離れた第二列強、それが第三文明圏の文明圏外国家に自ら交易を求めに訪れ、さらに開発したいと申し出るなど通常あり得ない事。

そして提示された書面には第一列強である神聖ミリシアル帝国の許可、つまり文明圏を離れた国家と交易を行うことを正式に認めていると言う事になる。

「食料と鉱石の輸入、代わりにクワ・トイネとクイラを繋ぐ線路、つまり物流を整備しましょう。もちろん我々が使いやすいように港の整備も行わせてもらいますが」

ムーの提案、つまり列強の提案に断れるわけもなく、両国は受け入れるとともに大規模な開発が始まった。

急ピッチで線路が敷かれ、道路が整備され、蒸気機関車を稼働させる水の補給所のために水道が敷設され、一部ではあるが急激に発展していく。

農作業で集められた食料と鉱石は、当面はムーの車両で港に集められ、大型船によって運び出されていく。

その先は建設の終わっている日本の海上施設、そこで積み替えられ日本本土へと輸送される手はずとなっている。

事情が分ならずとも二国は物流の向上によって、少しながら発展することとなる。

1630年中期

輸送された先はメガフロートによって出来た海上都市。

関西国際空港の4倍ほどの大きさがあり、本土と第三文明圏の間に係留されている。

日本から自動化された輸送船団が到着し、ムー国の船団から輸送されてくる物資を待っていた。日本に流れ込む鉱石資源が国を蘇らせ、

軍備を再び整える事が出来る。

日本の再転移についても、相変わらず在住外国人は日本で元母国の風習などを大事に守り、特産品だった食べ物を作り歴史や生活を残そうとしている。

某国軍事産業B

「つまりこれはアレを作れと言う事だな？」

「確かに、アレこそ民生品で手軽に作れる」

「念のため改修をしておくべきだろう」

某国軍事産業G

「転移前も酷かったが、やはりということか」

「我々も居場所を守る為に協力しなければな」

「民生品をか。これは難儀だが、新しい商品になるだろう」

某国軍事産業R

「自律戦車の実績はあるが、さて民生品となるとどうすべきか」

「ここは車両を選ぶべきか」

「安価なのが重要だが、互換品を多用するシリーズも必要だろう」

国内に広く民生品を改良する為の案を求めた時、各国企業の技術者達が動き出した。

一方で日本人も研究会やサークルなどが集まり、科学実験玩具などをベースにあれこれと弄り始めた。

6. 制御された暴力とはつまり武力である

1630年末

空軍区

相次ぐ体調不良者の続出や過労による入院者が出る中、特定基地の飛行場に試作一号機である一式戦闘機 隼が完成していた。

不完全な溶接個所に不均一な鋼板、形状も一定ではなく僅かな歪みのある風防、多大なる犠牲者を出しながらも、苦労の末に製造されたが、まずは飛行試験をしなくてはならない。

「かかってくれよ……」

「頼む……。飛んでくれ！」

もし失敗すれば休暇はお預けであり、技術者たちは祈る様に成功に願いを込めていた。

ゆつくりとエンジンに火が入れられ、プロペラが回り始める。徐々に加速し始め、ムー国テストパイロットが操縦する隼は機首を上げ、ゆつくりと機体を宙に浮かび上がらせる。

「やったぞー！」

「そのままいってくれ!!」

技術者たちの願いを背負い、隼試作一号機は高度を上げ特定基地の上空を舞う。そして5分ほどの飛行時間を終え、無事に滑走路へと着陸をした。

まずはワンオフでもよい。あとはこれを量産する為に必要な手順や工作機械の作成、そして問題個所の修正が必要となる。

しかしワンオフで作れてしまえば、逆牽きで必要なモノを割り出すのは難しくはない。

「上出来です。まずは二か月しつかりと休んでください。それから量産できる体制を整えましょう」

安堵して力尽きたのかバタバタと倒れていく技術者達。たとえそれが短い飛行時間だとしても、それだけでも十分過ぎる成果を出していた。

陸軍区

こちらは予定通りには行かなかった。

不格好ながら車体と砲塔部と砲は出来たが、重量に耐えられる駆動系を作る事が出来ず、エンジンについても稼働時間や燃費を犠牲にしても満足が行く物を作る事が出来なかった。

これは鋼材に関しての知識が余りにも不足している事が原因であり、一時試作製造を停止し、共通開発区による鋼材の制作に注力することになる。

しかし砲塔と搭載砲は完成しているため台車に乗せられ、外部油圧駆動で砲塔が旋回、試射場に置かれている標的のムーの車両に向けられる。

多くの技術者が見守る中、現地で製造された対戦車砲弾、それを用し砲撃を行う。

「砲撃開始！」

号令の下撃ちだされた砲弾はムーの車両を一撃で破壊し、技術者やムー国陸軍幹部が驚く中、続けて榴弾が装填された第二射目が行われ、鉄で作られた小屋が吹き飛ぶ。

「おおおお！」

「やったぞ！ 製造したとおりだ!!」

技術者達は喜び、軍幹部たちは初の戦車と言うカテゴリーに大きく驚いていた。むろんこの情報を国に伝えたいものの第一次帰郷は5年後、それまでは特定基地から出る事も情報も出す事は出来ない。

海軍区

重要な鋼材の研究が完了するまで、船体も砲身も製造する事は出来ないため、いまだ建造は出来ず、溶接の仕方や大型旋盤の製造など基本的な作業に従事しながらではあるが、順調に準備は進んでいた。

試験区

半年ではあるが、ようやく一つ目の実用品が出来上がった。

民生用学習ロボットキット、これをベースに改造、寸胴で短足な二頭身による歩行、どこから見ても爆弾とわかる黒くてまあるい頭部兼胴体、導火線風の無線アンテナ、ねじ巻風増設バッテリー、識別するカメラアイ。

自律徘徊型爆破兵器、第1号 通称ボンバーソルジャー

ほんの6万円程度で作れる玩具をベースに、C-4爆薬を乗つけただけの代物。極めて安価で軽量、スペックアップも容易で、ちよつとした段差程度なら跳躍で乗り越え、問題となったのは版權だけであつた。

試験場に建てられた二階建ての住居、設定した通り入口から徒歩で入り、空いているとはいえ扉をくぐり、階段を上つて目標の人形を発見し自爆、家を爆破することに成功する。

通信システムによつてカメラアイの映像は常時送られ、行動に問題がないことを確認、正式に採用されることになる。

世界会議

世界会議は大きな混乱を巻き起こした。

太陽神の使いの現れ、アニウンリール皇国の本性、ラヴァーナル帝
国復活が近い事、各国は伝えられた情報を、自国へ魔信で伝えるも、
混乱は広がっていく。

その中でも大きな衝撃を受けたのは通告を受けたパーパルディア
皇国であつた。

日本側が把握しているのはルディアスとレミールの二人が、主に執政者として才を發揮していたこと。ならばどちらかを国から引きはがしてしまえばよい。ミシリアル及びムーから得たパーパルディアの現状、そこから一部地域を租借地として占領する方針とした。その地域で基本的魔石技術開発とワイバーンおよびリンドブルムの生物研究を行うとした。

その趣旨をミリシアルに伝え、神聖ミリシアル帝国及びムー国の連名の命令書、その書類がミリシアルの外交官によつてパーパルディア皇国に渡される。

「そんな、ミリシアルとはいえ、こんな一方的な」

当時の第一外務局責任者は余りの内容に唾然とするも、世界の頂点の2国からの命令書には逆らえるわけもなく、苦言を言う程度しかできな

「あなたが普段している事でしよう。これはラヴァーナル帝国に備える為、必要な事です」

力関係を盾にされれば拒否できるわけもなく、デユロからさらに東北東に面する地域を租借地として、旧属領の一部をパーパルディア皇国は提供することになる。

7. 1631年初頭 軍備とは

元アニュンリール皇国

日本の自律兵器は全て引き上げ、現在ミリシアルによる占領と技術回収が行われている。

自分達より一步以上進んだ技術はミリシアルを発展させることに寄与し、有翼人の技術者は容赦なく捕らえられ連行されていった。

ムー国封鎖軍事都市

共通開発区

基本的な共通技術の開発が為されていく中、やはり歩兵装備を蔑ろには出来ない。

それこそ第一次世界大戦級の歩兵連発銃に、それに準じた戦術、それでは近代装備を身に付けていても意味がない。

戦術を叩き込まれる軍の将校たちは今までとは異なるモノに苦勞し、騎乗訓練でも毎夜うなされるほど苦勞していた。

自動小銃

車載向け機関銃

迫撃砲

ロケット砲

そして何よりも歩兵用対装甲砲が必要となるが、その為には鋼材及び工作機械の発展が必要であり、科学と化学の向上が重要となっている。マリン用の機銃の精度が元の世界の同時期の物より劣るように、現在のムーでは量産精密加工がまったくできないので、そもそもまだ早すぎる。

並行するように火薬についても開発がすすめられ、ロケット技術に關しては基礎の基礎を教える程度に留める。無理な開発は大変な危険が伴うのもあるが、そこまで必要としているわけでもない。

パーパルディア皇国 租借地

ここでは魔法生物技術の開発が行われている。
ワイバーンおよびリンドヴルムの研究になるのだが、生物的改造を行うわけではなく、生物的特徴を補助し強化する魔道的鎧の開発が進められた。

これは他の世界に行ったとき、その世界の戦獣ともいえる生物を有効活用する際の参考にする為であり、現地の技術をベースとしたもので、技術の吸収を主目的としている。

「なるほど、これが地竜ですか」

ワニ亀の甲羅の無い地竜リンドヴルム、分っている限りの生体情報を集めても正直実用性に欠けた。

重弓なら撃ち抜ける程度の皮膚、馬よりもパワーがあっても鈍足な歩行速度、射程10m程度の火炎放射、生物ゆえの欠点でもあるのだが、まだ怪力で狂暴な像を兵器にした方が実用性があるだろう。

しかし派遣されている技術者として、何かしら実用性のあるプランを出さなくてはならなかった。

日本本土 防衛省

日本国内ではようやく入ってきた資源によって産業は十分に回り始め、急ぎ軍備を整え直す事になったのだが、空海については生産するだけで済むのだが、問題となったのは陸であった。

戦車はすでに無人化が当然であり、有人タイプは非常に限られている。日本でもすでに限られたものだけである。

10式戦車改

135mm滑腔砲を主砲とし、TLSを搭載する。次世代モデルは完全無人な為、有人最終モデル。

レオパルド3A5J

140mm滑腔砲に防衛システムTLSを搭載する現在最高峰の輸出向け主力戦車。

日本向けに追加改良が施され、大陸での運用に向けて統合強化パツ

ケージが用意されたが、75tという重量に難がある。
以上2種のみとなる。

「レオパルドは重すぎて主力化は無理だろう。しかしどうしたものか」

「国内向けに10式改の定数変更はなしで良いだろう。残りは無人戦車で事足りるはず」

それさえも無人での運用が主体であり、有人でも可能と言うのに留まる。もはや戦車は無人AIの時代であり、前線統制機もしくは何かに対応すべきことがない限り、有人であることはない。

55式無人AI戦車

135mm滑腔砲・TLSを搭載。

58式155mm装輪無人AI自走砲

155mm榴弾砲を搭載。

GMLRS 無人AI連装ロケット砲

等、ほぼ全て無人AI化しているため人手はほとんどいらぬのだが、生産配分、つまり敵性存在を仮定する場合の配備の割合が問題となる。

「次の世界次第だろう。ここではまずは定数に戻す事を考えるべきだ」

「それだけでも何年かかるか」

通常編成に戻すまで生産する事は確定として、それ以降の追加配備について柔軟に対応する事となった。

「では次の議題ですが、旧式化した戦車群についてです」

ヤークトティーガー TALON

日本初のAIドローンタンクであり、開発当時は先進的機能が多数搭載された。しかし改造する余地はほとんどなく、大型ゆえに的になりやすい。実用性についてはないと考えてよいだろう。

「うゝむ。もはや維持する理由もないが」

「しかし維持費は民間から集まっている。いくらか改良加えても良いだろう」

「ラインメタル社に依頼するべきか」

旧44式戦車 オイ車

もはや運用理由もなく、旧式化した90式同様にスクラップにして資源にする案も出たのだが、威圧効果だけは確認されている。

「もう不要だろう。 使い道なんぞないぞ」

「威圧効果はあるのだが、装甲がなんともしがたい」

「スクラップ、にするには少々国民の人氣がありすぎる」

「民間からの出資を募り、それ如何によって決定しても良いだろう。財務を圧迫しなければそれでいい」

急造自律軽戦車

「これはリサイクルでいいだろう。 急造品でもはや性能も劣る」

「アニユンリール皇国戦で充分使用した。 展示用の一両を残すだけでいい」

エクスカリバー戦車

空挺利用が出来る唯一の戦車ではあるのだが、やはり性能的に旧式であることは否めなかった。

「軽量なのはよいのだが」

「空挺利用が出来るのは強みとなる」

「改装案を練るのが一番か」

多様な旧式化した装備について、繰り返し議論されることになるが、やはり代替するものがないものについては、改良するしかないのも実情であった。

「では次の議題ですが、民生品を改良した兵器についてです」

105mmパイプロケットコンテナ

鉄パイプと1000円もしないマイコンボードで作られた無風状態なら直線に飛ぶだけの多連装ロケット砲。

「ほとんど連装の迫撃砲だな」

「射程8kmあるが、まあ価格は極めて安価なのが特徴か」

「弾代も安価なのは良いが、正規採用は出来ないな」

「低文明相手には使えるだろう。コンテナのおかげで輸送も容易だ」

地对地廉価誘導弾

8000円以下の安価な電子マザーボードと民生センサーに制御される安価なプロペラ推進とC4爆薬で爆砕する誘導弾

「まるでラジコン爆弾だな」

「無線飛行機を流用されたのだから、間違いはないだろう」

「射程は、ふむ15kmか。悪くはないが」

「装甲車両程度相手が関の山か。それでも砲兵相手位はどうかなら」

稼働防壁

ブルドーザーのブレードに巨大な防弾鋼板を溶接した進む地ならし兵器

「まるでゲリラの手製兵器だな」

「こんなものでしょう。盾としては十分かと」

ハイローとはまた別のカテゴリとして、チープが加えられ、民間をベースとしたものが今後取り決められることとなった。

8. 1633年初頭 第一次策略

やはり強く帰郷を望むものも居り、さすがに5年は長すぎたとして、第一次帰郷としてムー国200名 ミリシアル50名が軍事基地を出る。その代わりに新たな物資と5倍の人員を補給されることになっていくのだが、それは帰郷する人たちには知らされていない。

メモ紙一枚さえ一切の持ち出しを禁ずる代わりに、記憶したものは技術的に関するのなら、口外しても構わないとした。詳細に覚えているのは難しく、せいぜい概念程度であることと、人の口に戸は立てられぬからだ。

そして自国に戻った人々は、得た知識や技術をもとに様々な物を生み出し、そして不要となった都市内部で使用されていた改造工作機械、改造品ではなく新しく作り直したため、不要となったものは帰郷と共にムー国に売却された。

「これが、新技術の工作機械か」

オロセンガに運び込まれた元ムー国製の工作機械、無茶な改造を施されていると言っても、工作精度はムー国の最新式よりも高く、工作速度もずつと早かった。

日本の求める工作精度と工作速度を出すために、原型が変わるほど手を加えられ改造されたのだが、改造品をベースに一から工作機械も作った為、不要になっていた。

「これが不要とは、まったく都市では何が使われているのやら」

イルーレ兵器工業の幹部は驚きながら、テスト稼働で制作された精密な部材を見てため息をついていた。

「技術者達も素晴らしい知識を得ており、ガエタン工業とも取り合いになっております」

「出来る限り当社で確保するように」

ムー国の発展も予定より進んでいく。これが日本の思惑通りに、自衛できる程度の力となるように。

パーパルディア王国 租借地 技術開発都市

リンドヴルムに装着する為の鎧が完成した。といつても全身を覆う木製装甲に関節部を考慮したに過ぎない。

その木製装甲の上に、日本では廃案となっている 冷却小豆バー装甲 を装着している。技術的に流出しても何も問題はないため採用された。

そして準備が整ったとしてパーパルディア王国分割を始める。パーパルディアの皇族を招き、パーパルディア王国が誇るリンドヴルムと戦うこととなった。

演習地域には皇族の観客席が作られ、皇族の中にはまだ若いレミーもいた。

軍務大臣や軍人の視線の先には2匹のリンドヴルムに相對する装甲を施された1匹のアーマード・リンドヴルム。

リンドヴルムの使役をしたことでパーパルディアは大国になったと言うが、日本からしてみればそこそこ知性がある程度の生物にすぎず、動物の調教と大差など何もなかった。

狂暴性も軍用犬とかわりなく、むしろ飢えさえなければ歩行速度も遅く脅威度は低い。

「我ら兵団の誇るリンドヴルム、列強に認められた国とはいえ、操れるはずがありません」

軍務大臣が自信をもって不可能だと皇族に伝える中、合図の旗が振られ戦いが始まる。

パーパルディア兵の角笛の命令を受け獣としての本能が強く、パーパルディア王国のリンドヴルムは雄たけびを上げた。戦獣としては正しいかもしれない。

しかし軍用獣としては宜しくない。徹底的に教育を受けたA・リンドヴルムは雄たけび一つ上げず、小さな笛の命令に従い動こうとはしない。

始まったばかりだというのにパーパルディア王国側のリンドヴルムは走り出し、無駄に体力を消耗している。

「我らのリンドヴルムと違って、臆病なようだ」

「所詮列強に認められてると言っても、リンドヴルムを扱えるわけがない」

パーパルディア王国の面々はくすくすと笑いながら、演習場を眺めている。

一方で命令に従いA・リンドヴルムは、体力を無駄に消費しないようにじっと待ち構える体制を取っていた。

たどり着いた一匹目のリンドヴルムは、身を半分起こして前足を振り下ろすが、小豆バー装甲にひびを入れたが、足を滑らせ転倒してしまふ。A・リンドヴルムは大きく口を開き、起き上がろうとしているその首、強化された牙で一頭目の首を噛み千切り血しぶきが舞い上がる。

遅れてたどり着いたもう一頭目のリンドヴルムは口部に炎を宿らせ、火炎放射をA・リンドヴルムに浴びせかける。

「何か甘い匂いが？」

「甘ったるい…?？」

周囲には溶けた小豆バーの匂いが漂いはじめる。

火炎放射をその身に受けるが全身を覆う小豆バー装甲は溶けながら耐え、氷の魔石が仕込まれている為A・リンドヴルムへの影響もほとんどない。

火炎放射が消えると同時にA・リンドヴルムは襲い掛かり、体当たりで転がすと同時に首に噛みつきそのまま引き千切ってしまった。

「そんな……馬鹿な」

少し体表にやけどを負ったA・リンドヴルムであるが、二頭を相手に勝利を収めた。

パーパルディア王国の軍務大臣は青ざめ、角笛で命令を出していた兵士は責任の重さに気絶してしまった。

「さて、余興も終わりましたし、開発都市の見学会へと参りましょうか」

文明として一段階以上魔道技術によって発展した魔道技術開発都市にそのまま招き、やんわりと別荘を建てて暮らすことを勧め、一部ではあるが発展した都市を見て別荘を建てる皇族は居た。

その中には若きレミールも居り、日本側の意図通り別荘を建てる事を選んだ。あとは懐柔していくだけとなる。

9. 解析・混乱するムー国

海中に沈むパルキマイラとパルカオン、水竜との交渉もようやく終わったことでサルベージが完了し日本で解析が進められていた。

その中でももつとも有望視されていたのが、バリア装置となる。引きはがして解析していたのだが。

「大気を固めているようですが、これ効率が悪いですね」

「液体魔石を大量に喰いますし、そもそも対艦誘導弾程度で壊れるのでは意味が薄いかと」

「これを日本の軍用にするには手間がかかりそうだ」

超常現象的なものかと思っただが、科学的に一応の説明が付く機能であり、日本に住む各国の技術者たちはある種の落胆を覚えた。

地球でも魔道技術に関してある程度発展が行われたとはいえ、超高レベルの物はある種の超科学的なものを考えていたのだが、わりと現実的であったためだ。

「まずは効率の強化を目指しましょう」

「魔術回路は思ったよりも単純ですから、無駄を省いていきましょうか」

一方でパルキマイラの飛行理由については不明な点が多く、破損しているパルキマイラでは解析が難航すると予想されていた。

ムー国

たった200人、それが軍事技術開発都市から帰郷してきた。

しかしもたらされる知識と技術はとんでもないもので、軽・重工業は急激に発展しあらゆるものの価格が落ち、品質が向上している。

製造業界が混乱しても無理はないのだが、製品によつては現行品が突然二世代以上旧式に変わり、腕時計など巨大な腕輪から手首におさまる程度まで小型化してしまった。

急激な価格の下落についていけない企業は潰れ、国内は商工業は大

いに乱れた。むろん第一次産業でさえ、新しい知識によって効率が上がり、インフラ設備も更新が可能となったからだ。

「一体どうしたものか……」

ムーの経済を担う大臣や役人達は集まり、対策を考えても国民の自主開発及び製造を止められるわけもなく、国政としてある程度の企業の保護を行う事しかできなかった。

「技術はかなり発展しています」

「報告では数年は飛躍的に向上し、各部門では製品の世代交代が進んでおります。注目すべきは重工業であり、製品の品質向上と低価格化が顕著で」

「医学についても、新しい薬品や治療方法など」

うれしい情報である。少々怪しんでいた封鎖軍事都市であるが、一年で戻ってきた国民は誰もが高度に進んだ知識を習得しており、あらゆる面でムーを急速に発展させている。ただし。

「それで、ですが各部門からは従来の製品からの切り替え予算の増大と、倒産企業の保証について案が」

「軍務省からは予算の増額願いが」

「医薬品について高度な研究機関設立の提案がなされ」

急速な発展に国や企業が耐えられるかどうかという所まで来ていた。

得られた知識や技術によってムーは発展しているが、実践するには資源や金銭が膨大に掛かる。

「それで、税金はおよそ昨年の300%を超えるかと」

「しかし、これはバブル景気と言うもので、あるラインを越えた時に」
経済学を学んだ者もいるため、これがどのような状況を生み出すか理解していた。ムーは急激な発展に対して難しいかじ取りを強いられることになる。

レイフォルはムー国発展の情報を聞き、静かに軍の力を蓄え始めた。その一部でも篡奪する為に。

日本の技術を一切使用しない、パールディア皇国で得られた技術だけで発展した都市。日本としては特に何も優れた物ではなく、日本に昔あったものを魔道で再現したに過ぎない。

それでもなお、パールディア皇国よりも発展しているという事実は変わらず、皇族の別荘には常に誰かが滞在しているようになっていた。

特に日本が意図して魔道都市に広めている美容技術、これを受けられるのは魔道都市の特定のみであり、パールディア皇国の権力も及ばないため、魔道都市に居るしか受ける方法がないのも理由であった。

10. 1633年末期 局地戦？

理由は大したものではなかった。

ムーの輸送船に対して海賊が襲い掛かってきたためムー海軍は通常通り排除したもののだが、輸送船を攻撃していた船が海賊船ではあつたのだが、その海賊船の中に囚われていた者が居たとして、ムー国に多額の賠償を、レイフォルの属国の一つ、パガンダ国が主張した。

賠償として技術を寄こすように要求、第五列強たるレイフォルを盾に強弁に出ていた。むろんムーとしてその証拠もなく、技術を渡す事は拒否していた。

レイフォルはパガンダ国が一軍をアルーとの国境に差し向ける許可を黙認し、迅速な行動が行われ国境に展開しアルー防衛隊とにらみ合うことになる。

封鎖軍事都市

都市で暮らす住民の中から、技術や戦術に関して才能を発揮し、乾いた大地に水がしみ込むように吸収する天才が現れだした。

マイラス・ルクレール

ラツサン・デヴリン

以上の二名が飛びぬけて理解が良く、今後を期待できる反面、他国に暗殺されないか危惧しなければならぬ。

共通開発区

ようやく第一歩として高品質の真空管量産が可能となり、真空管コンピュータが作り出された。

この発展によって大いに賑わい、1635年に予定されている第二次帰郷については運び出される一つに加えられる。

他にもレアメタルを使った鋼材の製造も進み、順調に開発は進んでいる。一方で一部では医学に関して早急に広めるべきだとの意見もあり、日本としても軍医の技術向上は戦場での急務として、最新医療器具を用いない範囲ではあるが、ミリシアルとムー国の軍医を受け入れる方針をとる。

そして第一の患者は、兵士の虫歯処置であった。

「ひいー」

椅子に座っているムー国の兵士は恐怖に震えていた。ムー国が発展していると言ってもまだまだ劣っている面もあり、やはり痛さに関しても現代日本に比べるとはるかに強い。

「はい。じっとしている」

治療器具は最新のものを使うが、それを参考にミリシアルやムーで開発すればよい。

「では、処置の仕方をよく見ていて下さい。映像でも繰り返しみることにようになりますが、実地には劣りますから」

数人のミリシアルとムーの軍医が見ている中、処置が始まる。

「あああああ!!!」

待合室にいる兵士達は聞こえてくる悲鳴に両耳を塞ぐ。

「俺……帰ろうかな」

「お前は歯じゃないだろ……。俺は骨折だぞ……。きつと恐ろしいことに」

恐怖が伝番していく中、不摂生や運悪く怪我をしてしまった人々は震えながら順番を待っていた。しかし医療の向上は兵士の命を救う、今は医療技術の向上に協力してもらおう必要があった。

空軍区

隼の完成度を高める作業が続けられる中、次のステップに進むため長くかかるだろうジェットエンジンに取り掛かり始めた。

目指すは ネ20型ジェットエンジン を搭載した 特殊攻撃機
橘花改

ここからは一歩ずつ理解させていかなければ、技術的に酷い歪みが出てしまう。レアメタルを使用した材質の製造など、何段階も困難な道があるため焦らせるわけには行かない。

一年か二年は遅々として進まないだろうことも予想されているがそれは仕方ない事、だからこそブラック労働をさせてまで隼の製造を急がせたのだから。

このままジェットにまで到達しなくとも、隼さえ量産できれば防空はどうかなる。

海軍区

さすがにいきなりGA級の大型艦を製造するのは難しい、まずは手慣らしとして重巡洋艦を建造することとなった。

むろん機関は現在ムー国で製造されている最新のディーゼル機関を軍事都市で改良したものであり、リベット止めなどさせずにムーとしては初の全面溶接作りとなる。

日本側が提供したのは古鷹型重巡洋艦の設計図、もちろんそれなりに手直しこそされているが、現在ムー国で建造が始められているラ・カサミに劣るようなものではない。

「これはムー海軍の大きな発展の第一歩となる。各員誇りをもって仕事を行うように！」

現場責任者であるムーの海軍技術大佐は緊張した表情で建造開始を命じた。軍事都市にある船渠で行われる初の建造、みな緊張感と初めての建造に大きな混乱が起こる事を予想していた。

陸軍区

ようやく駆動面での解決が見られ、M4中戦車は完成を見た。まだ問題があると言っても、ムー陸軍が装備する如何なる既存の兵器でも破壊する事が出来ず、圧倒的な戦力に陸軍の士官は恐怖とその力に魅せられた。

これからはM4A3E8までの改良と各種歩兵装備の製造が主となる。ここからは技術の積み上げ、一足飛びに行く必要もない。

そしてM4中戦車をベースに対空砲・自走榴弾砲・ロケット砲に人員が分けられバリエーション製作が進められる。

小銃の研究も並行して始められ、M1ガーランドの図面を参考に研究が進められている。対戦車火器はさすがにロケットの研究が完了せず、遅々として進んではない。

その一方で僅かではあるが休日には有志で戦車の研究も進められ、砲

塔を持たないかわりに大口径砲を装備する自走駆逐戦車を、ムーは得た知識をもとに新たに設計を始めた。

太陽神、日本の援助なく技術を参考に新たなるムーの戦車を作り出す夢が動き出した。

試験区

「パンジャンこそ始まり」

「つまりパンジャンこそ至高にして究極」

「ぱん殺く」

製造されたのは直径4mはある巨大なローラーに、モーター及び安価なロケット推進を装着。英国技術者たちが作ったように思えるが、これは日本に住む英国面に侵された紳士淑女達の作品である。

大した機能なく、鋼鉄とコンクリートによって作られたローラーが侵攻し、地面を締め固めながら砲撃も銃撃も耐え、そして目標地点で自爆する 対戦車陣地等破壊兵器。

非常に安価に使えるとは言っても、悪ふざけが過ぎるものが増え始めたため、日本国内の開発者に一定の条件を加える事を伝えることになってしまった。

日本も別に世界の警察をしたいわけではないが、自らの技術が原因で紛争になられでもしたら寝覚めが悪すぎる。だからこそ理性ある国家対してのみ限定的に技術を開放している。

パーパルディア皇国に面する魔導都市

実験に過ぎないとはいえ、パーパルディア皇国の魔道技術では大したもののは作れず、日本国内で開発している魔道技術の方が遥かに発展している為、得るものは生物情報に限られる。

魔道技術のみによって上下水道の敷設などを行い、生活水準を上げる程度には手を加えたが、パーパルディア皇国内をかく乱する程度にしか使い道はすでになかった。

しかしリンドヴルムについては利用価値が思ったよりも高く、調教

次第によつては非常に温厚で、雑食な事から様々な作業にも使えるなど素晴らしい物だった。そして食肉として実に美味しく一度に大量に得られる。

11. 1634年1月 1日戦争

アルー国境線に面する場所に展開しているパガンダ国の兵団が突如国境を越え、アルー防衛隊との戦闘が始まった。

ワイバーンと騎士や歩兵の侵攻、ドーソン基地から離陸したマリンとワイバーンの航空戦はすぐに始まった。

1万程度ではあるが軍勢が国境を越えたことは、アルー防衛隊だけではなくムー国軍の出動に繋がった。ムーの永世中立とは無抵抗というわけではない、外交とそして武力をもって国を国民を守るという意思表示でもある。

「導力火炎弾に注意しろ！ 当たれば無事ではすまんぞ!!」

ワイバーンとマリンによる航空戦、マリン複葉機は圧倒的にワイバーンよりも空戦力は優れる。しかし木製故に火炎には弱く、まぐれだろうと直撃してしまえば無事では済まない。

ワイバーンにのる竜騎士達は導力火炎弾をワイバーンに命じ、口部に炎を宿し攻撃の体制に入る。

マリンの編隊は上昇を始め、ワイバーンの導力火炎弾は首を曲げた状況では放てないことから攻撃が止まった。ムーにとってワイバーンの欠点などとうに熟知しており、マリンを使用する上での優位な戦法など当然前線の兵士は全て理解している。

そしてマリンは機首を下げ、上昇を始めたワイバーンに向け機銃攻撃を開始、何かできるはずもなく体を撃ち抜かれワイバーンと竜騎士は次々と地面に落ちていく。

陸上ではアルー防衛隊の榴弾砲が次々と火を噴き、雪崩のように突撃してくるパガンダ国の歩兵団相手に奮闘している。

「70mm歩兵砲を撃ち続けろ！ 奴らを近付かせるな!!」

パガンダ国の戦術はいまだ旧来の近接歩兵が主体であり、榴弾砲の攻撃と塹壕による銃撃、それだけで突撃してくるパガンダ国の兵団は大損害を負いたった一日でパガンダ国の兵団は壊滅した。

しかしムーも無傷とはいかず、アルー防衛隊の一部は切り込まれたため死傷者が出ており、レイフォールを通じて苦言を伝えるも、レイ

フォル側はパガンダ国が独断で勝手にやったことだとしらを切り、一切の謝罪や賠償もなく国境線から兵士を引き上げただけであった。

ムー国としても中立故にそれ以上の事は言えず、アルー防衛部隊に關して増強をすること以外手はなかった。

封鎖軍事都市

共通開発区

相変わらず各地区が求める鋼材の製造に苦勞しているのだが、新たな工作機械の製造や研究室レベルでの製造は成功するなど、確かに技術は発展していつている。

通信に關して特に発展が進められ、ミリシアル帝国しかなかったカラーでの放送にも成功、無線の品質も向上と共にスクランブルも掛けられるようになった。

陸軍区

M4戦車の完成度を高める作業を進めつつ、ムーの技術者達は休日を使って集まり、ムー製戦車の設計を行っていた。

1. 出来る限りムー製大口徑砲 イルーレ105mmカノン砲クラスを搭載

2. 砲塔は重くなり構造も複雑になる為車体直付け

3. 戦闘室は製造しやすく、溶接を容易にするため角形

4. 履帯や駆動部を流用する為、重量に耐えられるよう延長

何度も話し合いが行われ、概略図面に起こされ制作したいと小さな模型と設計図で提出されたものは、なぜかイギリス陸軍駆逐戦車チャーチルガンキャリア と非常に似通った形状をしていた。

むろんムーの技術者たちはその事を知るはずもなく、自らの技術と量産性を考慮し、求める性能を出すために割り出したに過ぎない。

日本としてもムー技術者たちの努力を否定するわけもなく、試作製造する事を了承し新たに駆逐戦車と言うカテゴリーが加えられることになる。

空軍区

隼の完成度を高めるために各部に手を入れつつ、量産する為に必要な手順をまとめるなど進めている。

それでも一定の技術的進歩も見られ、今まで製造していたマリンについての改造案が出るなど順調に技術者育成は進んでいた。

そして陸軍技術者達が自ら新たな戦車を提案した話を聞き、自分達も何か出来るのではないかと時間を作って集まるなど始めた。

海軍区

ムーの海軍技術者達から、太陽神の使いの持つ最新鋭戦艦を一度見たいと要望が上がってきた。

ムー技術者の言い分ももちろん理解でき、最新鋭の戦艦をみたいのもわかる。しかし日本には超広域防空艦大和くらいしか、GAに匹敵する戦艦はない。

来年末くらいにはイージス艦の再配備も一息つくことになるが、大和・長門・伊勢・金剛はすでに電磁加速砲のみで戦艦砲はない。

戦艦砲をいまだ搭載している戦艦扶桑はあるが、設計図上の性能はGAよりは劣る事だろう。大改修が行われていると言っても、艦のサイズをそこまで大きくできるものではない。

わざわざ設計製造する理由もなく、とはいえムーやミリシアルに見劣りする現状はあまりよくない。

日本が考えたのは完全防空艦でありながら、見劣りする事のない超大型超広域防空艦の新造案である。戦艦砲など積まず、誘導弾と電磁加速砲にTLSのみとした、とはいえ建造するかと言われれば悩みではあったが。

12. チープ兵器 戦意破壊兵器

あらゆる国の部署が忙しい中 第三兵器研究室は暇を持って余していた。たった5人しか所属者の居ない場末も場末、帝国時代の技術研究と保存を主目的とした零細部署。

技術が失われないように細々と予算も付いており、資料をデータ化しプラモデルやCG企業に設計図の提供などを行っていた。

ホリ車やチリ車などはスクラップになった為、管理すべきはオイ車だけなので普段通りの作業に戻り、ぼちぼちと回ってくる作業を行っていた。

「所長、暇ですね。 他の部署は残業続きなのに」

ボサボサの髪を整えもせず、場末で呼び出されることもない静かな狭い部屋で職員は作業を淡々と行う。

「本来こんなものだ。 それよりも、オイ車の改良プランがまとまったそうだな」

プラン1

- ・ 短砲身155mm榴弾砲↓52口径155mm榴弾砲
- ・ 前部副砲塔↓排除
- ・ 後部副砲塔↓排除
- ・ 複合装甲↓空間複合装甲
- ・ 最新ディーゼルエンジンに換装

無意味でも巨大に威圧感を優先した案

プラン2

- ・ 短砲身155mm榴弾砲
- ・ 前部副砲塔
- ・ 後部副砲塔
- ・ 履帯をさらに幅広
- ・ 複合装甲↓隔離装甲
- ・ 最新ディーゼルエンジンに換装

威圧感を上げつつ価格を低減し、共通できる弾薬も安価な物を選択

した案

以上を日本に残る民間軍事会社に基本案として概算要求をだし、新たに日本に残る決定をしたレイセオン支社からの案が提出され決定された。

・短砲身155mm榴弾砲↓105mmライフル砲 61口径（ロイヤル・オードナンスL74）

・前部2副砲塔↓銃塔40mm自動擲弾銃

・後部副砲塔↓単装12.7mm機銃

・複合装甲↓多重空間装甲化

・サイドスカートの追加

・CAT製産業用ディーゼルエンジン 1350bhp

米国の軍事産業らしく各企業の兵器で手堅くまとめ、価格と重量低減が行われている。

全般的低価格化と95トンまで軽量化による運用のしやすさ、簡易的とはいえFCSの搭載も行われなり性能は上がっている。

オイ車に限っては運用費のほとんどが民間からの提供で行われる為、低価格化は何よりも嬉しい物であった。

第二兵器研究室

カリカチュア・グロテスクを取り込んだ威圧兵器、戦意と敵意を削り取り正気を失わせることを目標とし、威圧効果が見込めるとして、チープ兵器群よりも小規模ながら開発が進められている。

第一号戦意破壊兵器 ヴァージニア

・六脚部

・鍍塗装

・作り物の血色の頭蓋骨

・蠢く義眼

・甲高い奇声

・自動照準銃器

・遠隔操作

日本人の目から見ても十分にグロテスクであり、これがスピーカーから狂気じみた笑い声を上げながら稼働。

映画会社や特殊メイク会社の協力を受けながら現在開発中となっているが、モックアップ品でもかなりグロテスクであり、夜間であれば分ついても悲鳴を上げそうな出来であった。

「チープ兵器群ですが随分と揃ってきました。今後はカテゴライズ分けされ、各用途に向けた開発が優先されます。現在では迫撃砲・榴弾砲代わりのコンテナロケット、誘導弾代わりの汎用チープ誘導弾。今後は装甲車両及び航空機と艦船に注力されます」

民間軍事会社による安価な兵器シリーズが開発・生産される中で、軍を編成する上で一式必要なモノを調べ上げ安価な民間軍事組織を作り上げようとしていた。

汎用チープ地対地誘導弾 Mk 1

統制機によつて4機の無線プロペララジコン飛行機が追従飛行し、150 km の速度で標的に体当たりし爆発。5機揃つて1000万円にもならない低価格でありながら、一機当たり手りゆう弾5個分程度の対人・対物破壊力がある。

最大射程も150 km 程度ではあるが、低破壊力とはいえ何かを操作する人間を殺傷するには十分であり、さらなるチープ誘導弾の開発を進めるとした。

13. パーパルディアの乱れ

魔道都市に滞在する皇族も増え、その期間も長くなってきている。一方で国政に関わるルディアスは皇都から離れられず、だんだん他の皇族とのかかわりが減りつつあった。

「凄い。たったあれだけでこんな効果が出るなんて！」

1時間の処置を受けただけで少したが小顔になり肌に張りも出る。貴族の夫人や子女はこぞって美容の為に魔道都市を訪れ、決して安くはない美容費を支払い滞在していた。

「次回の予約が可能な日は一か月後になりますが、如何なさいますか？」

「もちろん 予約をお願いします！」

パーパルディア皇国内での女性の立場は強く家庭では女性に権力を握られてしまう事が多い。軍や官僚の夫人は無理をしてでも魔道都市に赴き、美容鍼灸やエステを受ける事で自らを磨き上げ、夫達は会うためにわざわざ魔道都市に赴き発展の差を思い知る事になる。

日本は計画をもう一段階進め、最新の美容設備を一部に持ち込み、完全紹介予約制かつ先払いのみ受けられる特別な美容サロンを設けた。

この世界ではありえない高度美容外科手術、しかしそれをいきなりやったところで信頼されるわけもなく、モデルとして奴隷として扱われていた女性を1人、経過を写真にとりながら処置をしていくこととした。

「あの、本当に私でよいのでしょうか」

選ばれた元奴隷の女性は不安そうにしている。属領での過酷な生活でやせ細り、肌も髪もぼろぼろ、表情も暗く顔に消えない怪我也負っていた。

「あなたには生まれ変わってもらいます。辛いこともあると思いますが、人生は必ず変わります」

それから生活の全てを根底から管理し、食事から生活スタイル、さらに部分的には美容外科手術によって顔の傷跡の除去や豊胸手術な

ども行い、歯も歯石を落とし白化と歯並びも治すなど4か月間の処置を行い、それを乗り越えた時別人ともいえるほど美しくなった。

美容サロンの壁には毎週記録された写真が貼られ、同一人物として少しずつ経過が分かる全体姿が一目でわかり、美容サロンであらゆる服や化粧品を使用しモデルとして活動してもらっている。

通った者は間違いなくスタイルや表情が変わり、シミやそばかすさえなくなった者もいるほど美しく成れるという証。

通うことで周りの女性達より一歩秀でて美しく成れる、夫や両親を説得し大金を支払い併設された施設であらゆる美容エステと外科処置を受け美に磨きをかける女性達、その噂だけではなく皇都に戻った夫人や子女の姿の変化、みな一応に美しさが増している事実には皇国内でその話でもちきりとなる。

皇族の女性陣も頻繁に通い始めると、若さも相まって美貌に自信があったレミールも、周囲が次々と美容サロンに通うことに危機感を感じ、美容サロンの予約を取り付け通うことにした。

日本は無事に接触に成功し、これからあらゆる手段をもってパールディア皇国を二分するため、レミールに懐柔の攻勢をかけていくこととなる。

研究していく中でA・リンドヴルムの数は少しずつ増やされ、また寒冷地で運用できないと言う事から、それを解決する為の方法も模索が始まった。

単純な解決策は体温を維持すればよいのだが、実際の所はパイクリート装甲との兼ね合いもあり簡単な物ではない。

14. ロウリアの動き

1634年5月

秘密裏にパーパルディア皇国の支援を受け、国力を増強しているロウリア王国は順調に西部地域を制圧し国力を増している。

日本としては放っておいても良いのだが、クワ・トイネには広大な不毛地帯、ダイダル平原があり軍事演習を行うにはちょうど良い。その騒ぎのうちにロウリアの野盗を相手に実験を行う。

今回はムーに表立って動いてもらうつもりであるが、日本としても最低限欲している諸外国でも運用可能な傭兵部隊、それを手に入れる良い機会でもある。

そしてムーによるクワ・トイネ及びクイラの鉄道や道路の敷設もひと段落が付き、何をするにしても都合がよい。

クワ・トイネにはダイダル平原を一時的に借り上げ、軍事演習を行うこととなった。

「無線を利用することがこれほど効果を上げ、そして大変とは」

指令室で各部隊から送られてくる情報を纏め、戦場の状況を即座に判断し命令を下す。簡単なようで非常に難しく、机上演習や狭い封鎖軍事都市で得られた知識を実戦で利用するのは苦勞していた。

「第二歩兵小隊が予定より10分遅れています」

「第一および第二砲兵隊への弾薬補給停止。迅速な補給を要請中、補給部隊は車両が脱輪によって停止しています」

「自動化中隊 想定より侵攻が進み過ぎています。速度を落としてください」

想定通りに動けず、それをフォローし対処命令を逐次出すのは非常に困難、参謀達は連続120時間と言う厳しい演習に頭痛と胃痛を覚えていた。

本演習場では怪我人を出しながらも、得られた知識を実践すること
で新たな知見を得ている。日本はその騒ぎの中にこつそりと活動を行
うことが決められていた。

得られた情報ではギムを少し超えたあたりでロウリア軍と思われる野盗が多く存在し、実験してみなければ不明な点が多い。戦意破壊兵器ヴァージニアを試験する事が出来る。

いまだグロテスクさを改良しているところであり、部分的に錆塗装ではなく人間の皮膚と筋肉を再現した素材で覆っているのだが、恐怖を感じるモノに地球人と異世界人に違いがあるかどうか不明である。

生物でありながら生物ではないこれをどう感じるのか、そして現在の技術では小型化の限界から装甲と銃器と踏破性を維持する為に、幅2・3m高さ2・3mと室内に使う事は出来ない欠点がある。

ヴァージニアはあくまで野外戦で戦意を徹底的にくじき、それ以降の敵対的な意思を喪失させ、捕虜管理の容易さなど考えられていた。

ギムよりさらに西の地域、選抜されたムー特務部隊と共にヴァージニア3台と統制車両1台が警戒を行っていた。

ムー特務部隊

獣人傭兵部隊も考えてはいたのだが、まともに運用するための教育を考慮するとムー程度の価値観がないと、クロスボウを超える武器を持たせるのは躊躇してしまう。

その為ムーから封鎖軍事基地で訓練を受けている中から、限定的ではあるが日本で生産された製品やチップ兵器群の運用を許可する部隊を編成した。

日本の中小民間企業が製造、治安が著しく劣悪な海外地域で使われる

- ・装甲トラック
- ・装甲マイクロバス
- を筆頭に中小企業で部品製造された銃器
- ・オーウエン・マシンカービン
- 民生品の防塵防滴対応品のインカムモデルを選出した無線機
- ・中距離用トランシーバー
- 等を受領していた。

「なあ、これ本当に動くんだよな？」

ムー特務部隊の隊員の一人が装甲トラックの荷台に鎮西している

不気味な物体を指さす。

「そうらしい。夜間行軍訓練もあるが、あれの運用テストもあるぞうだ」

「不気味だ……、あんなものが動く姿みたくもないぞ」

まだトラックの荷台に置かれ、未稼働状態だがそれでも十分な威圧効果を与えていた。

「おしゃべりはそこまでしておけ、標的が確認された」

特務部隊の目的は夜間行軍演習と野盗の排除、支給された新兵器を使用した殺人への慣れ、クワ・トイネには行軍演習中に野盗などの排除を行うことも申し入れていた。

「まずヴァージニアが攻撃を行い、逃亡者は一人残らず射殺する」

15. 戦意破壊のはずが

ギム防衛陣を調べる為、ロウリア軍ではあるが質の悪い者達を集めた野盗・傭兵団、今夜は夜営して翌日にロウリアとクワ・トイネで農作物を取り扱う商人でも襲おうと準備をしていた。

「……獣か？」

そんななか、夜営した場所から離れてトイレを済ませていた男が、妙な音に気付き剣を手に取り森の方を向いた。

揺れる木々の中から六つ足をした大きな物体が出てくる。

「まっ魔物か!!？」

気色の悪い骸骨の頭部の目がぎよろぎよろと見まわし、血肉の見える部分が松明の明かりに照らされてその姿腰が抜けそうになるが、踵を返して野営地に向かって走る。

「ばっ、化け物が現れたぞー！ 全員武器を取れ!!」

言葉を発した後、激痛と共に体が動かなくなり意識が途絶えた。

「対象一名を無力化」

操作する自衛官がムーの特務部隊と共に後方でヴァージニアを操作している。簡単な動作は自律判断するものの、対象物への殺傷は人間がトリガーを引いて許可しなくてはならない。あくまで生き物を殺す判断をするのは人間であり機械に最終判断をさせず、人間が責任から逃れられないようにとの判断である。

しかし野盗の中に怯える者も少しはいるのだが、大抵のモノが武器を持ち無謀にも向かってくるため、戦意破壊効果は見られない。

ヴァージニアに搭載されている銃器で一人ずつ射殺するが、それでも放たれる矢が車体を少々傷つけるなど諦める様子は見られない。

むろん士気などろくにない為に逃げ出す者もいるが、戦意を保ったままではなんの意味もない。

四方に逃げ出した野盗は、ムー特務部隊の射撃演習の的として伏せていた部隊に撃たれる。

「撃て！」

命令と共に特務部隊の攻撃が開始され、その夜は一つの野盗団とはいえ100人規模が壊滅した。

日本 防衛省 第二兵器研究室

残念なことではあるが、どうやら魔物と言う生物と認識され、戦意破壊兵器としてさほど効果はなく失敗作の烙印が為された。人殺しや略奪暴力になれている者達にとつて、少々見た目がえぐいものだろうとなんてことはないということだ。

「戦意破壊兵器のプランは一からやり直しとなります。一地域とはいえ魔物が存在し、さらに海魔が居る為外見だけでは有効な効果が得られず、ヴァージニア計画の一切が白紙となります」

多くの職員が居る中、画面に表示されている新たな戦意破壊兵器のプランへの説明が行われる。

・ 強臭気爆弾

くさやの原液以上の臭気をまき散らす液体放出機

・ 睡眠妨害ドローン

自律飛行しながら耳障りな大音量を鳴らし、敵軍の安眠を妨害するドローン

・ 物理的戦意破壊兵器

未定

無駄な戦闘を避ける為、手間のかかる戦後処理を簡易に済ますために、戦意破壊兵器の開発は続けられる。

15. 実用試作戦車

1934年9月

日本でもつとも長射程かつ巨砲、それは超広域防空艦大和の艦載型電磁加速砲となる。しかし技術は常に開発が進められ、いくつかの指標が決められていた。

1. 広域防空向け高出力化
2. 近距離防空向け速射化
3. 車両搭載向け小型化

1及び2は順調に開発が進められていたのだが、3が問題となった。

試作品として異なるタイプが2基完成したのだが、10式改及びレオパルド3A5J、そして無人戦車群には搭載不可能、もとより想定していない大電力が必要な機関を搭載する余地などなく、小型化しても戦車搭載としては大型な加速砲を搭載するキャパシティなどなかった。

そんな中、選ばれたのは日本国内に現存する大型戦車であり、国民出資のオイ車とは異なり配慮も必要なく、ある種実績のあるものだった。

「やれやれ いくら何でもこいつを酷使し過ぎじゃあないか」

「バカでかい利点が役に立つとはな」

「無駄に大きい以上、確かに新鋭戦車よりキャパシティはありますかね」

「まさか戦車に搭載するとは、日本の気質には呆れる」

ラインメタル社やレイセオン社やBAE社にMBDA社の社員達が集まり、目の前に置かれた戦車を見ていた。

ケーンクスティーガー・TALON

無人AI戦車として使用された後、国内演習場で保管され今後について会議が行われていたのだが、その巨体と搭載可能量の大きさから選出された。

何しろ無人機の試作段階で検査装置やチェック装置まで満載して

もなお、車内容量に余裕がある為使い倒されるほどであった。

「まずはオーバーホールと駆動系の改良からやっつけていきますかね」

「そこは製造した専門家に任せる。我々はエンジンと無人システムをやる」

「こちらは砲塔回りと主要システムを担当します」

「汎用誘導弾システムはこちらがやるべきですかね」

戦車に搭載する初の電磁加速砲、如何なる問題が発生するかなど予想もつかず、今後の戦車への搭載に向けたテストベッドとして改造が行われる。

AI搭載型遠隔操作ドロインタンク 電磁加速砲試験車

・ 試製電磁加速砲 短射程型

・ ミストラル汎用誘導弾 6基

以上が現在のプランであるが、これは臨機応変に変更される。

日本では各国の軍事会社、そして友好的な外国人が暮らしている。異世界で得られた情報から日本の軍事には何が必要なのか、それは日々議題に上がっていた。

問題となったのはGA級戦艦に対する破壊力不足、前世界では乗組員を殺傷する事で制圧したが、それでは不可能な場合も考えられた。費用もかなり効率も悪い、そこでひとつの提案がなされた。

十数発撃ち込む必要がある対誘導弾よりも、六発分の価格で終わる一回の重打撃、参考にするものもあり該当する弾薬もある。P-700及びP-800を参考にした重長距離対艦誘導弾、撃沈できなくとも艦そのものを完全に戦闘不能な状況までにすれば良い。

提案されたP-700誘導弾を参考に、新たな対艦誘導弾の開発が始められた。

現在の日本には、技術参考用にと各国から魔法技術の取引において、為替ではなく現物として日本に押し付けた在庫処分の戦車や車両が沢山ある。T-14にT80BVM、日本の10式改や無人戦車にはその技術は取り込まれ、装甲分野において西側とは異なる発想は発展をもたらした。

日本を侵略しようとした国家を除き西側・東側を問わず、英米と共

に開発したとある技術を利用する為に技術や物資は得られていた。

封鎖軍事都市

陸軍区

試作製造されたムー技術陣交換のガンキャリア、その出来は上々であつた。

設計通りに稼働するガンキャリアは、試験場所の不整地を難なく進み標的の前に停車、砲の狙いを定め標的であるスクラップの車両を砲撃で吹き飛ばす事に成功した。

「よしよしぞー。」

「105mmカノン砲も搭載できればよかつたのだが」

唯一設計と異なるのは105mm砲ではなく75mm砲を搭載している点だつた。

イルレー105mm砲は工作精度の低さから満足できる威力を出せず、新砲の開発を続けるために代用としてM4中戦車向けに開発された75mm戦車砲を積んでいる。

日本としては特に言う事はないのだが、中戦車のM4 自走駆逐戦車のガンキャリア、そうなると偵察に適した軽戦車が必要である。

その為部品の共用が出来るM3軽戦車を推奨したいところではあるのだが、まだムーは軽戦車 中戦車 重戦車 駆逐戦車 自走砲と機甲師団を結成するのに十分な構成を理解出来ていない。

空軍区

隼を参考にしつつ、ムーの航空技術者たちは、全体を鋼管で構成し、エンジン部周辺のみ金属、残りは羽布張りかつ主翼は木製で脚は固定と新たな航空機を設計した。

フォッカーD-21に酷似している面もあるが、ムーとして複葉機のマリンから冒険をした革新さと実績のある部分を混ぜた、ムー国技術者が独力で作り上げた初の単翼機。

確かに隼には劣るかもしれないが、ハイローミックスの運用とする

ならば、ハイの隼とローのD-21と一応揃った。

偵察機・爆撃機・警戒機・艦載機とまだまだそろえなければならぬが、ムー本土防空に関しては量産さえできれば問題なしと言えるだろう。

海軍区

船渠では、建造中の艦はアップグレードを可能とする余剰スペースや配管など、工員が理解できないものもあれば、現場の臨機応変過ぎる場合によつて、再チェックしたところは全てやり直しになったりなど、現在多様な面で作業工程に問題が発生することで遅延し、責任者である大佐は胃薬と頭痛薬が手放せない状況であった。

「大佐！ 現場にお出でください!!」

日々呼び出される中、日本製の薬を片手に現場に赴く海軍技術大佐の姿が毎日見かけられた。

ムー特務部隊向けの武器の開発も行われるようになり、ムーが自身の為に開発しているM4中戦車とは異なる戦車と装甲車両の配備を予定していた。日本で製造されるが戦車は13両のみ、装甲輸送車を20両と最低限である。

一時その選定に時間を要していたのだが、ムーの為を思うのなら特務部隊でありさらに教導団でもある為、M4中戦車を改良するのが一番であるとされた。

現在、各部の問題はともかくとして外側、つまり溶接と鑄造の組み合わせである装甲車体だけはM4A3E8は出来上がっている。エンジンや駆動部に砲などはまだまだではあるが、その辺を全部日本側で製造すればよい。

そして日本での魔改造計画が始まった。

16. 割れ始めるパールデイヤ

権力者の女性達は魔道都市に住まい、夫たちは通うか住まいを変え
るしかなかった。しかし妻が美しく成れば同僚に自慢し、娘が美しく
成ればより良い縁談が得られる。

貴族達は権力に大きく響くために妻や娘を止められるわけもなく、
別々で暮らすか本宅を移すしかなかった。

「次の予約は……一週間後か。なんとかならないものか？」

レミールはため息を付く。皇室待遇として特別な時間帯に予約を
入れられているのだが、レミールだけが皇室の女性ではない。

皇室の女性陣も皆美しさを求め、今まで最も美しいと自負していた
自信も揺らぎ始めている。

「優待頂けているレミール様には、特別なプランをご利用いただけま
すが、如何致しますか？」

理由など特になく、レミールを懐柔するために用意されていたモ
ノ、食事から運動までトータルに管理する美容プラン。

つまり美しくなれる代わりに日々を管理されることになるのだが、
もちろん肌の張りから体系までトータルに管理することで美は増す
ことは嘘ではない。

サロンの受付で差し出された内容は、朝から夕方まで内容が書かれ
ており、一か月先まで予約が取れない薬膳美容料理が朝昼夜と入って
いた。

「考えさせてもらおう」

「お早めにお願います。空きは一枠しかありませんので、他のお
客様がご希望された場合枠がなくなってしまうです」

むろん虚偽であるが、同じ美容プランを専属モデルやミリシアル帝
国の婦人が5人ほど受けているのも事実、レミール専用に一枠を開け
ているだけで、本来は競争倍率1000倍以上の大人気美容プランで
ある。

「そ、そうか。明日にでも回答しよう」

魔道都市の別邸に戻るため外に出る、元は属領であったはずが帝都

よりも発展した都市。皇都に比べ全てが比べものにならず、凹凸もなく一枚岩で作られた地面に街道を照らす光、古い建物こそ残っているものの何もかもが此方が優っている。

皇都との余りの違いに嫉妬も起こらず彼我の違いにため息まで出てしまいそうに。

「レミール様 迎えが参りました」

側仕えの声に視線を向けると、魔道都市でのみ使われている 魔導車が走ってきた。

御者席の前に馬はおらず、代わりに馬車の後ろに魔道機械というものが動力となっている。これもパーパルディアにもあつた魔道技術を参考に作られたと言われている。

なによつてここまで差を付けられてしまうのか、もしこの魔道都市を作り上げた国の皇族であつたなら、今よりもさらに発展した生活が出来る事だろう。

ほんの僅かに、レミールの心に間隙が生まれ始めていた。

日本

防衛省 第二兵器研究室

戦意破壊兵器 強臭気タイプ S

日本に残つたスウェーデンの人達が考案し、素晴らしい栄養を持つシユールストレミングの身とは別に出来る原液、本来は捨てるものだがそれを科学的処理を施してさらに濃縮、元々8070 Au程度だったものが20000 Auを超えるまでに達した。

例え大量に撒いたとしても周辺地域に一切害が無く自然環境に影響もなく、その上後処理も必要とせず自然に還る。

吸気した生物が激しく嘔吐してしまうという欠点や、もし原液を浴びた場合数日間は決して匂いが落ちない危険性もあるが、戦意を破壊するという目的は十分に発揮すると考えられた。

問題は製造するのも輸送するのも劇物扱いに準拠する扱いの必要性が生じてしまったことだが。

人員がほとんど居ない物資中継メガフロート、ムーの輸送船から日本の輸送船に物資が詰め替えられるだけであり、ほとんど無人化している為人はほとんどいない。

周辺地域は水竜の地域ではあるのだが、日本との取り決めで定期的な海産物 主に蛸海魔のトレードが行われ、チョコ飼料が好まれるので等価重量で交換している。そんな中日本が非常に気になるモノが持ち込まれた。

「これは……、カニ ですかね」

むろんこの世界でも蟹は確認されている。ただしそのサイズが問題であった。

地球でも確認されているタカアシガニでも足が細長いので3・8 m、それが甲羅が巨大な直径2 mかつ足も爪も非常に太い。

それが水竜に捕獲されメガフロートに持ち込まれていた。

「水竜の方々の話では、これも交換できないかと提案されています」

少し対話に時間が掛かるものの、日本側と話は出来ている。新たな提案は考慮すべきものかもしれないため、一時生態調査等が行われることになった。

17. 1635年1月 やはり問題はお金である

第二次帰郷によってムー及びミリシアルから各50人ずつの帰郷が行われた。

- ・真空管コンピュータ
- ・戦車の概念
- ・無線を使用した効率的な戦術
- ・先進的医学の基礎
- ・防諜技術

政治から各企業に適切に情報や人員は配分され、ガエタン工業やイルーレ兵器工業など軍事会社ではムー国 統括軍旧装備研究部 からの依頼によって、ほぼひし形戦車のような試製戦車の制作から、口径は据え置きながら工作精度の増したカノン砲の製造など来るべき日に備え始めた。

現在では

- ・試製ひし形戦車
- ・試製105mmイルーレ砲 Mk2
- ・60mm迫撃砲

と順調に製造が始まっている。新たに得た防諜の技術が拙い為、まだまだ他国に知られてしまう可能性は高いものの、今の段階ならばまだ問題にはならない。

むろん表向きは武器更新と武装中立の強化となっているが、ミリシアルが何かを言う事はない。そのミリシアルとて封鎖軍事都市で得た知識を元に、兵器の更新が行われているため特に問題にはなっていない。

ムーはようやく最低限グラ・バルカス帝国に苦戦する程度の段階に達する事は出来た。あとは秘密裏に量産するだけとなるが、他の列強はともかくグラ・バルカス帝国相手にどこまで通じるのか、それは実際には不明な所ではある。

ミリシアル帝国では概念や基礎科学知識が取り込まれたことで、不明だった魔帝の技術に関してある程度の解析が進み、

・アルファ3の発展型アルファ4
の制作が始まっていた。パルキマイラにせよパルカオンにせよ、基礎科学が分かれば解明できる点もあり、不足していた面は徐々に埋まりつつある。

日本

艦船について様々な会議が為され、選んだのは全て実験兵器だけで制作された戦艦に似た艦船の建造であった。

とはいえ、実験レベルとは言え全ての兵器を搭載する為に、ただひたすらに巨大であり、建造するのならば妥協などせず、古来の戦艦、戦略兵器としての側面を取り戻す事を目的に再設計されることとなった。

求められたのは

1. 対地砲撃能力
2. 敵地内陸部攻撃能力
3. 航空機および誘導弾への圧倒的対空能力
4. 弾道弾発射能力
5. 単独偵察及び侵攻能力
6. 戦艦である常軌を逸した防御力

無理難題ではあるが、それが実行できなくては建造する意味がまるでない。各部門から技術者が集められ、連日の会議が行われた。

・パルキマイラから得た全周囲フィールド防御技術を改良したシステム

実用試験を終えたばかりではあるが、プログラミング技術や効率化と言う面で魔帝より地球は遙かに上であり、安定性や燃費などかなり向上している試作品。

・3連装 長電磁加速砲 3基

大和級に搭載されている物の射程はせいぜいM6の1200kmだが、M7の1800kmと改良されている試作品。

・対空用T L S 多基

レーザー防衛システム自体は当然であるが、高出力化と長射程の試作品。

- ・ 励起艦対艦誘導弾 24基
全てを電子励起爆薬に換装と超々音速試作品。

- ・ 励起重長誘導弾 4基

- ロシア製P-700 参考に製造された日本製試作品。

- ・ 戦術電子励起MIRV弾道ミサイル 1基

- ・ VLS 126セル

- ・ 特攻ドローン搭載マザードローン 10基

射程40kmかつ爆薬搭載量1kgの小型ドローン2基を輸送飛行する飛行距離100kmの中型ドローン試作機。

- ・ 原子力融合炉

護衛でもイージスでもなく、ストラテジック兵器。飽くまで実験艦であり主力艦ではなく量産される予定も全くない。むしろ建造したとしてその

“調達費用”や“運用費”

などをどうするかと問題になり、建造する目途がたつことはない。

一方で扶桑の近代化改修も近々行われるため計画も始まった。しかし近代化と言っても、実包を外すわけではない。

長門から降ろした41センチ連装砲と大和から降ろした46センチ三連装砲、技術保管の為に解析と新造を行うのだが、新造するのなら改良するのが当然である。とはいえいまだ造船業界は忙しく、プランを立てていることくらいしかできないのだが。

18. 1635年 4月 開発は続く

封鎖軍事都市

共通開発区

日々試作と失敗を繰り返している。日本とて全てを一から十まで教えているわけではない。概念や到達すべき点の品質を伝えているだけで、開発や研究はムーの技術者達が独自に行っている。

だからこそ技術者や研究者達は日々努力し、真似ているのではなく技術として理解して知識として取り込んでいた。

空軍区

遅々としか進まないジェットエンジン開発、推力も低くたった2時間だけで溶け落ちるジェットエンジンに、技術者達は苦悩していた。

隼と異なり手詰まりともいえる状況に、技術の足りなさを実感するムーの技術者達は落ち込んでいた。順調に隼とフォッカーの完成度が上がっているのですんなことはないのであるが、やはり発展しているという実感が欲しいのだろうと日本の面々には推測された。

その為の秘策は用意されている。前世界で充分に実験が行われ、効果があるらしい結果が出ていた。

これを摂取すれば発想は湯水のように沸き上がり過ぎ、常識に囚われる事のない自由過ぎる開発が可能となる。

〃紅茶とマーマイトの常用接種である〃

困った時はこれに頼れば技術の停滞など存在しない。正当な進化も存在しないが。

諦めない心となんとか形にしようとする信念を得られる。それが突拍子もない物も生み出してしまうが。

日本として禁断の果実を提供するのか、それともレシピプロとジェットエンジンの境に当たる、ターボプロップエンジンの技術を提供するのかどうか議題に上がる事となる。

陸軍区

ガンキャリアは大成功であった。ムーの技術者達は何度も休日を集まり、新たな戦車を考案しようとしている。のちにムー国の技術者達によるムー国の戦車開発チームとなる始まりであった。

「生産性を考えるなら、駆逐戦車の方が良いんじゃないか？」

「いや、欠陥ももちろんあるだろう」

「しかし、話では生産コストも落ちるようだ。製造工程も部品点数も少ない」

「駆逐戦車を主として研究し、価格低減チームと105mm砲チームに別れてはどうだ？」

「ここはM4戦車にも勝てるモノを開発するのが一番ではないだろうか」

家族に怒られることもあるため、会議や作業はあくまで午前中だけで終わらせられるよう努め、進行役によって話がまとめられる。

「では、M4中戦車を撃破できる重戦車開発と105mm搭載ガンキャリア、そして安価な量産駆逐戦車の3チームということで最終決定でよろしいでしょうか」

「「異議なし」」

そして正式にM4中戦車の車体を利用した自走榴弾砲の試作製造も開始された。M4中戦車の車体がベースではあるが、砲塔部分を撤去し新たに開発したI（イルーレ）23口径105mm榴弾砲を搭載を予定している。

試験区

徘徊型A I兵器の有効性が確認された。それは自爆機能を一時的に停止し、警備巡回用に改修されたボンバーソルジャー、元々拡張性も素晴らしい事から試験的に封鎖軍事都市内を巡回させたのだが、何も知らない住民からはマスコット扱いされている。

つまりこの世界でもSDサイズかつデフォルメされた物は嫌悪感を受けにくく、民間人が居る都市内で動作させてもなんら問題にはならなかった。

その為に日本では二種開発が行われた。

・タイプSD

戦車を縦横高さ1mサイズまで小型デフォルメし、SD（スモールデザイン）の戦車を制作。

武装は7・62mm機銃と9mmSMGを搭載しているだけだが、治安維持と言う面では役に立つとされた。現在試験的に封鎖軍事都市内部を巡回している。

タイプS

踏破性を最優先し、蜘蛛型の中でも特にアシダカグモを参考に開発が行われた。多脚ゆえに歩行速度こそ遅いものの安定して広範囲を徘徊し、難民の保護から敵対象の抹殺まで可能なことを目指した。ヘカートIIのみを搭載していることから、あくまで広域巡回モデルは試行錯誤中であった。

あと2年、それまでに現在封印され、また拡大され続けている魔王軍を倒すため、ムーとミリシアルには軍備を整えてもらわなければならない。

本来この世界を支配し崩壊から守るべき列強、その責任を果してもらう。

19. 龍 兇戯

日本を守護する 龍神 皇居の一角に座し、日本が道を誤らないように律し、時には天災の警告をし日本を守っていた。

とはいえ常にそうしているわけではない。自由気ままに日本全土の空を飛び回り、琵琶湖で水浴びをしたり樹海で寝転がったりと自由に過ごしている。

しかし害をなす可能性があるモノ、日本方向へと飛翔する野生ワイバーンの群れは、到達することはなく気ままに空を舞う龍神の姿を遠目に見るだけで怯え引き返していく。

そんな中海面に視線を向けると即座に水中に飛び込み、水竜とは異なる海魔 巨大な海蛇 シーサーペントの首に喰らい付き胃におさめる。食事をする必要はないものの、ある目的の為に必要であった。準備運動を済ませた龍神は日本東側の海域を悠々と飛行を始めた。運動代わりの戯れであり、日本が緩まないための鍛錬である。

第一教導団 F-3 40機

F-3 ブロック10

現在日本が所有する最高のステルスジェット戦闘機。

部分的にはあるが、F-22の情報も取り込まれた為、かなり高価な機体となってしまうが、その性能は第6世代機として上位に加えられるだけの性能を持っている。少なくとも現在の日本でこれに勝るジェット戦闘機は存在しない。

響き渡る龍神の咆哮と共に戦闘訓練は開始された。

電子励起爆薬に変更した空対空誘導弾、発射された合計120発がレーダー及びシステムからは直弾したと表示されるも、音速で飛行する龍神の動きは何ら変化がない。

その体から400近くの謎の物体がお返しとばかりに放たれレーダーにも映る、というより意図的に映るよう手心を加えられた攻撃、本来なら不可視かつレーダーには映らないのだが。その為に態々シーサーペントを食し有機物を取り込んでいた。

即座に迎撃誘導弾の発射と共に編隊を上下に分け逃れようとするも、追尾してくる音速の衝撃波に機が揺さぶられる。

「迎撃に失敗した。後退する」

撃墜判定18機、龍神にとっては単なる冗戯な運動、それでも最新鋭のブロック10にあたるF-3、それも精鋭教導団にとつても命がけの模擬空戦さえ戦闘にはならない。

「標的情報を確認、全艦攻撃開始」

交戦したF-3及びAWACSから得られた情報を元に、海上自衛隊の艦隊から艦対空誘導弾による迎撃と、艦対艦誘導弾の攻撃が開始される。

電子励起爆薬に変更された対艦誘導弾 総数96発、目標設定と同時に全力攻撃、随伴していた攻撃軽空母カガやQE級空母からも新たにF-35Cが発艦し継続攻撃に回る。

艦の攻撃開始と同時に龍神は大きく口を開き、衝撃波によって爆音と衝撃が旧太平洋側で響き渡り、周囲にいた水竜や海魔は逃げ去る。

衝撃波によって誘導弾は全て破壊され、海面が引き裂かれ二隻のイージス艦が激しく揺さぶられる。

30分の演習、龍神にとつてはほんの運動と戯れ、それでも教導団のF-3は損傷を負い一機は龍神に抱えられて帰還、二隻のイージス艦はレーダー及びセンサーが破損、二隻はスクリュー軸を破壊され曳航されている。死者こそいないものの軽症な者は多くほとんど戦いにならなかつた。

日本側はF-3の40機と一個艦隊とは言え一切手を抜いていない全力攻撃、電子励起爆薬を搭載した最高級の超々音速空対空及び艦対艦誘導弾でさえ、かすり傷を付ける程度の効果しかない

龍神にとつてはあくまで軽い運動、やはり古代の大地の主を倒すには、核に準ずる威力を持ったものを、大量に撃ち込まない限り倒す事は出来ない。だからこそ地球は酷く放射能に汚染されてしまったのだろう。

それがどれだけ効率が悪くリスクが大きい事か。対話を試みた方

が遙かにコストも防衛面でも優れる。

日本はいまだ龍神と対等に戦える領域には達していない。そして達する見込みもなかった。それはつまり同等ともいえる存在が現れた時、龍神に頼むかMIRV電子勃起爆弾を使用するしかないと言う事。それは日本にとっても龍神にとっても危険な事ではない。

20. 要塞　そして開発の完了

1636年　1月

ムーの最前線となるアルーは、過去に放棄された長い城壁などは朽ち果てるままであり、もはや防衛都市としての能力は失われている。東に200km離れているドーソン基地の規模もそこまで大きくなく非常時の防衛力に疑問が生じていた。

つまり要塞が必要である。しかし民間人への圧力になっても困る為、アルーから100km東の地点に建設がされる。

しかし要塞の建築が行われるといっても基本は防空要塞であり、ドーソン基地まで道路を敷設しつついくつも塔を建設するに留まる。分厚い壁も砲撃や爆撃には意味は低く飽くまで防空目的であり、地上戦は現在封鎖軍事都市で散々苦勞してもらって作っている戦車や装甲車両に砲兵隊に任せられる。

現在その防空用の対空機銃やレーダーシステムも開発中なのではあるが、それはムー次第である。

封鎖軍事都市

共通開発区

長らく各種銃の開発が行われ一応の完成を見た。

戦車兵や装甲車の自衛武装として　ロシア製のポルト式ショットガン　TOZ-106である。

折り畳みストックで小型であり、散弾銃の為威力もあり、そしてポルトアクションで構造も簡単で安価、あらゆる銃器を調べたうえで、ムーの技術レベルから選定された。

他にも連発銃としてM1ガーランドMk2の製造も完了しつつある。いまだ歩留まりが高くないので潰して再び資材に戻すなど手間はあるが、7.62x51mm弾仕様であるため各種機銃との共有もきく。

海軍区

ようやく古鷹型重巡洋艦の建造が完了。これから慣熟航行など色々しなくてはならないが、まずは第一歩は進み海兵の訓練も可能となった。

陸上での海兵訓練から海上へと移る時間が近付き、海上自衛隊の面々は竹刀を丁寧で磨きながら楽しみにしていた。といっても、さすがに気まぐれや私的感情で殴る事は禁じられているが。

なお、建造責任者である技術大佐は精神的負担から、胃潰瘍になり現在入院している。

陸軍区

M4中戦車の駆動系やエンジンの改良が進められている中、日本が意図したわけではなく、きつかけを与えたわけでもないのだが、自主性を重んじつつ発想に苦勞している者には、紅茶とマーマイトを提供した。

ただそれだけなのだが、2種の戦車のプランがムー技術者から提案されたものが問題だった。

提案された駆逐戦車はよくできていた。

M4中戦車の車体をそのまま利用し、すでに開発完了済みの75mm砲の短砲身を車体上部に直付けと、コストダウンと製造効率の向上を両立させ、小型かつ生産性も良い。砲塔の分重量も減る事から、同じエンジンでも軽快に動くこともできることだろう。

見た目が独逸の4号駆逐戦車に多少似ている事は設計思想からして仕方がない。

M4駆逐戦車として登録されることになる。

しかし問題は、2基のエンジンを積むために10mもの長大な車体に、換装を考慮しポツンと乗せられている大型の砲塔に75mm戦車砲を搭載、M43E8さえも撃破できる戦車として、ムーの技術者達が考えに考え抜いた案らしい。

それまさに偉大なるイギリスの重戦車 TOG II 擬きである。

重戦車 TOG Iとして登録された。なお大口径戦車砲の開発が

完了したのち、主砲を換装したものはTOG IIとされる予定である。しかしガンキャリアの車体を利用して砲塔を載せればよい物を、なぜこの発想に至ったのか日本の技術者は頭を抱える事になる。

試行錯誤により実機を作って失敗することも重要な経験ではある、失敗は成功の母である、分かっているでも実際作ってみれば問題点の修正から新たな発想につながる事もある、だからといってこの発想には問題があるのではないだろうか。

あくまで日本は支援者であり、ムーは属国でも植民地でもない。自ら試行錯誤の末開発したのなら、それは推奨されるべきものであるのだが、日本は大いに悩むことになる。

空軍区

ジェットエンジンは耐熱素材の問題を解決できず、50時間という壁を越えられずにいた。比較的技術的に容易な遠心式もあるのだが、ジェットエンジン開発としては先々の発展性を考えると今のまま苦労してもらうのが一番よい。

しかし100時間の稼働時間という欠点を除けば、推力に関しては想定のおお割程度まで出せる程度にはなってきている。

しかし想定しているよりも開発に時間がかかり過ぎ、グラ・バルカス帝国との戦争までに次の段階に進める可能性が低い。

橘花改でも優勢はとれるだろうが、あくまで第一世代ジェット戦闘機のしかも初期であり性能も低い。革新的で優秀ではあるが第二世代には遠く及ばない上に、高性能なレシプロ戦闘機相手の場合被弾する可能性だつてある。

まだ目標であるサーブ35 ドラケンには遠く及ばない。しかし橘花改の生産に成功しつつある今、サーブ 29 トウンナンに向けた人員の選出を行い開発開始をスタートした。

日本 富士演習場隣接工場

旧44式戦車 オイ車の改修が始まる寸前、待ったが入った。

ジェネラル・ダイナミクス・ランド・システムズ日本支社からの横やり、安価な改造費も低価格な運用コストも魅力ではあるが、そんなもので十分な威圧効果が見込めるのかと。

だからこそ恐竜的進化の問題と言われようとも、最大の砲による圧倒的火力と巨体を持つべきだと主張した。その中にはM103重戦車の設計に感銘を受けた技術者がおり、このまま改良する意味はないと重ね重ね強く会議で主張した。

99式自走155mmりゅう弾砲の砲塔と装填システムを載せ、毎分6発以上の速射を可能としながら弾も相応に積む。

空間装甲を利用して、装甲厚計算上400mmを超えるようにと再計算も行われ、M103とオイ車を混ぜ合わせ似たような巨躯のプランを提出した。

しかし元々オイ車はクラウドファンディングによって製造された戦車。近い形状ならまだしも大幅に変更するととなると、再び民意を確認する為クラウドファンディングによって確認を取る方針となった。

- ・ 現在の安価で原型を留めたままのレイセオン案
 - ・ 大幅な変更と共にさらなる巨躯と巨砲を求めたGDRS案
- オイ車に限っては全て民意次第。

21. 1636年 9月 準備完了まで

前世界では扶桑は手ひどくやられた。非常時であり相手は想定以上の戦力を持っていた。ただそれだけではあるが、戦艦とはつまり戦略兵器であり、見せつける暴力の象徴でもある。そして 扶桑 とは伝説で太陽が昇るとされた大木の名前。その名前を冠する艦が弱いというのは非常に良くない。

といっても日本は国民と共にある国、無駄に予算を使うわけにも行かず、アレコレとアンケートを取ったり民意の確認に時間を要したものの、一部の熱烈な層が広報やCMにコラボなど活動。

「日本の名を冠する以上、改修は続けるべきである」

「唯一残る実砲搭載の超弩級戦艦！ さらなる力を持つてこそ戦艦だ！」

「大艦巨砲は戦艦にあるべき姿です、そして新たなる戦艦は女性艦長こそふさわしいと思いませんか!!」

「日本で初めて設計建造された超弩級戦艦！ 扶桑を改修して再び初の戦艦に!!」

「扶桑は姉キャラ」

少々脱線することもあったものの、総意として大規模改修は決定した。

戦艦扶桑 大規模近代化改修

扶桑に搭載されている35.6センチ連装砲は全て改良されているが、新造する41センチ連装砲の搭載に伴い、船体や特徴的な艦橋にまで手が加えられる。

・410mm連装艦載砲 6基

各社の協力を経て強水冷+高速自動装てん装置

前世界ではパルカオンに事実上敗北した。ならば今度は負けぬと殴り合いに勝てる力を求め、最適な威力と射程に連射速度のバランスから判断された。

・P-IIHC(R-CIWS) 10基

ロシアのパーンツイリを参考に、2個の独立レーダーと2連フアラ

ンクスと24連迎撃誘導弾。

二度と対空戦で苦労しないように、輸入した兵器を徹底的に調べ上げこれが最適と判断された。

・短魚雷 30発

・全周囲防護フィールド

第二艦橋に搭載された新たな戦艦の基準たる防護フィールドシステム。

戦艦とは古来の戦略兵器ではあるが、強力な大口径の艦砲と堅牢な装甲とを備える殴られても耐えきり、相手を容赦なく殴り殺す海上における暴力の権化として抑止力でなければならぬ。

だからこそ砲や誘導弾の発展により装甲が意味を無くした防御力が必要である。大出力ともなると第二艦橋をまるまるシステムにしなければならぬが、改良によって防護力も燃費も大幅に改善されている。

ある種計画されている戦艦の試験的要素も含まれている。もし作る事にならなかつたとしても、今後は扶桑を改修していくし、建造すればよいデータにもなる。

二度と負けてはならない、それは海上自衛官の殉職ということにつながる。

封鎖軍事都市

現在教導団の訓練が行われている。

「走行！ 停車！ 砲塔旋回！ 砲撃！ 走行！ それを途切れなく行うように!!」

まだ数が少ないM4中戦車に乗るムー国教導団の戦車兵、無線から飛ぶ難題の命令に車内では冷汗を流しながら各種操作に当たっていた。

訓練は実戦よりも厳しく、実戦では予期せぬ事態や緊張から100%訓練の結果を發揮できるわけもない、だからこそ何よりも厳しく、

そして殉職しないよう接する。

それが日本の、帝国時代からの伝統を引き継ぐ自衛官なりの、そして対馬奪還戦で同胞を失った優しさでもあった。

陸軍区

次々と考案される戦車案、試行錯誤の末に生み出される銃器、どれもまだまだとはいえ、基本となるモノが生み出されたのでどんどん発展している。

むろん今は爆発的な種類の増加によつてろくでもないものも多いが、利点欠点を理解すれば自然と完成度は上がり、失敗作を作る為に得た技術が他の完成度を高める事もある。

上方給弾式 ブレン軽機関銃 らしいものも作り上げつつある、これは日本が特務部隊向けに提供したオーウェン・マシンカービンを参考にしつつ、ムー国機関銃を改良して制作された。

上方給弾は欠陥もあるが給弾誤作動がしにくく製造もしやすいため、現在のムーでも性能を維持しつつ大量生産が可能であった。

海軍区

「……もういつそ」

憂鬱な顔で訓練を受けている海兵たちだが。

「全員整列！」

良くない考えを持つ暇もないほど時間を管理され、精神的に参らせる余裕もないほど日々扱きあげ、その実力はムー国の一般的兵士とは比べものにならないほど高くなっている。

そもそもムー国ではラ・カサミ級の運用が始まっている中、封鎖軍事都市では二世代以上先の艦を運用しており、同じ程度の知識や技能では扱えるものではない。

だからこそ非常に厳しいのだが、今は何一つ気付いていない。扱っている操船技術も戦闘配備もムー国海軍の物とは比べものにならないほど洗練されている事を。

利根型重巡洋艦 ムー国名 ラ・ネート重巡洋艦で訓練を受けてい

る兵士、全ては現在建造の始まっているG A級戦艦及び空母に向けた訓練、主力でありムー国全ての海兵の指標となるべく、苛酷なものとなっていた。

一方でG A級戦艦の建造も始められた。溶接技術や旋盤技術の向上もあるが、グラ・バルカス帝国の空母であるペガスス級の建造は中止された。

日本の隼鷹型航空母艦を参考に再設計が行われ、量産性と共に一部問題個所の修正が為されている。

しかし建造が遅れていることは問題視され、多くの都合上の問題から一隻のみ改装空母だが日本で建造し、先行して空母の運用訓練を行うとした。

勇猛なムー国精鋭からさらに選り抜きが選びだされたものの、一身上の都合や退役願いが出るなどいささか混乱が起きてしまった。

最新兵器を扱うため、月月火水木金金など生温く、いつそ拷問を受けた方がましだと言いたくなるほど、それほど厳しくすると通告されていたのが原因だったようだ。

日本

順調に各種兵器の開発が進んでいる中、古い兵器の再生産が決定された。

203mm自走榴弾砲 通称サンダーボルト

長い事日本国内で保管されていたが、ある砲弾の開発完了と共に実用性が見直された。"誘導砲弾"である。

炸薬と弾の発展、それにもない150km程度の射程と共に命中率ほぼ100%を叩き出す。対艦及び対地誘導弾よりも安価にそして確実に対象を破壊できる兵器と変化した。

長らくかかっていたチープ戦車の設計。

マメタンを参考にしつつ、民生用のクロウラーダンプをベース、3割ほど大きくなった60式自走無反動砲に酷似しているが無反動砲

の代わりに、90式自動擲弾銃が搭載されている。

出来る限り安価にそろえる事を目的にすすめたものの、戦闘装甲車両に関しては、砲と言う物を民生品から採用する事が出来ず、チープ戦車と言う枠組みは不可能であると結論に至り開発は停止された。

そして日本に輸送されたM4中戦車 5台 ばらばらにしたうえで改造が始められる。

・民生品の硬質ゴム履帯 駆動輪の強化
・高出力の民生ディーゼルエンジン換装及びエンジン搭載後部の溶接延長とエアグリル追加

・短砲身105mm及びマズルブレーキ

・砲塔後部カウンタウエイトの溶接延長

・3連自動装てん装置搭載

・民間中小企業制作増加装甲

ムーの特殊部隊に提供する以上制限はあるものの、許される範囲で強化が為されている。スーパージョーマンとはいえないものの、安価にそれなりのものを用意した。

技術的にもムー国の兵士でも扱えるだろう。

また、長らく開発していた電磁加速砲搭載の戦車第一号が完成した。

しかしようやくできたのだが、戦車に短射型とはいえ、仰角も限られるのに射程100kmの電磁加速砲を搭載してどうするのだ?と。どうしようもない問題が発生した。

その為再度開発の進んでいたもう一基、50kmの短射程速射型に搭載が変更された。

ケーニクスティガー・EML

・105mm EML速射型

・地对空誘導弾 ミストラルM4 4基

・遠隔操作式銃塔 CROWS III 12.7mm重機銃及び40

mmグレネードランチャー

・人工知能RANA (Raid・Achieving・Nail・

A u t o n o m y)

大きなペイロードを持つとはいえ、さすがに大電力を必要とする事から内部を圧迫し、これ以上の搭載は不可能であった。

それでも最新のAIを搭載した上に各部も最新規格品を使用し、ムー国での人命救助によって人工知能としては初の紅綬褒章が与えられている。

オイ車のプランは安価な物が採用された。あくまでオイ車はオイ車としてクラウドファンディングされたもので、民意はそのままの発展改良を選んだ。

しかしGDRSの技術者は諦めず何か手がなにか行動を続け、富士演習場の倉庫の片隅に眠っているソレを見つけた。

超重戦車 マウス、前世界でムー国教導団に貸し出され、激戦中の損傷したことで返却されていた。しかし日本としても回収したものの、直すにもコストがかかる事とグラ・バルカスの商戦攻撃に後回しで有耶無耶になり放置されていた。

大きなモノにロマンを感じる同志を集め、改修の為の予算を集め始めた。

22. 1637年 皇族の独断と魔王討伐部隊 として戦争の準備

皇族や貴族の女性陣はほとんど魔道都市に住んでおり、日本側も意図して滞在費は安くしていた。

もちろん赤字ではないがほとんど利益が出ないほどに落とす事で、一年のほとんどを魔道都市に住み、園遊会や夜会も魔道都市で開くほどであった。

そしてレミールも、元の素体が良かったこともあり、磨き上げられた美貌はミリシアルなどの高級官僚の夫人や他国王族と比べても秀でていた。

「レミール様、本日はムー国大使が面会の約束をしたいと連絡がありました」

放っておいても列強の高級官僚から贈り物をもって面会を求めくる。

「空いている日に入れておけ。 私はこれからサロンに行く」

美容サロンでは、ミリシアルやムー国の高級官僚の夫人が入れ替わり立ち代わりエステを受けている間、雑談をしていると得られる知識、それは遥かに発展している理由が談話のうちに語られ、パーパルディア皇国の政策に疑問を持ち始めていた。

第一第二列強の夫人とはいえ、みなパーパルディア皇国の皇女であるレミールより遥かに高度な教養を持っていた。

「レミールさん、ミリシアルとムーが魔王討伐に軍を派遣する事を知っています?」

美容処置を受けている間の雑談。

「そのようなことが?」

「ええ、夫も参加するようで心配しているのよ。 太陽神の使いから場所を知らされたらしくて」

「私の夫も言っていましたわね。 太陽神の使いから、もう魔王に勝て

る段階に来たので、完全復活する前に滅ぼすようにと」

まるで聞いた事もない大事な情報、しかし列強の婦人たちにとっては至って秘匿性のない雑談程度の事であった。

特に秘匿しておく必要などなく、ミリシアルやムー国内では普通に新聞などで出兵がなされる三日前に知らされていた。

いまだレミールの耳に届いていないのに過ぎない。

急ぎ屋敷に戻り、他の皇族や貴族に尋ねるも誰一人としてパーパルディア皇国が兵士を出すという話などないということだった。

レミールが動かせるのはほんの少数、それでも列強第一位と第二位が動く以上、パーパルディア皇国もどのような状態であろうとも戦力を出すべきこと。しかしパーパルディア皇国が動くという話は聞かえてこない。

レミールは他の皇族とも話し合い、ルディアスを通す事なく一軍をトーパ王国へと出兵を決定させた。

1637年6月

封鎖軍事都市からの帰還者によってムー国内でも戦争の準備が静かに始められた。

ようやく稼働時間と品質に満足の至るレベルに各種兵器は達し、オロセンガ市によって秘密裏に製造が始められた。

そしてラ・トーネ、つまり利根型重巡洋艦の設計図と知識と技術を得た技術者によって各艦の建造も開始された。ラ・カサミさえ旧式となる第二次大戦主力艦となる艦船群。

建造中のGA級は難しいとしても、せめて金剛級高速戦艦は主力化してほしいというのが日本の考えであった。あと数年、製造・運用・訓練の事を考えると時間的猶予は少ない。

いまだ封印されている魔王を滅する為、編成されたミリシアル・ムー国の合同軍、グラ・バルカス帝国出現まであと一年、ようやく諸所の準備が整った。

ミリシアル陸軍

ガンマ型試製戦車10台、ミリシアルが製造した対空砲を搭載した戦車。

出力の関係で魔道装甲は備えず、鋼材で耐えるという機関と砲以外は並みの戦車と変わらない。70mm対空魔道砲 33t、ムーのM4戦車に大分似ているのは、参考になっていることもある。それでも少なからずムーが数年前に試作していたひし形戦車よりは大分出来が良い。

残りは装甲車と歩兵のみ、さすがに空母を使用した航空支援までは考えていなかった。

ムー陸軍 教導団

M4中戦車6台、ガンキヤリア10台、TOGI台とムー国教導団は本格的な戦闘訓練を兼ねている。

残りはミリシアルと同じく装甲車と歩兵のみ、ミリシアルも同じことだが違う点を上げるとすれば、十分すぎるほど保守部品を持っていたことだろうか。

パーパルディア王国 銃兵士部隊

寒冷地域の為ワイバーンもリンドヴルムも使用できず、フロントロック式マスケット魔銃のみを持つ部隊。

パーパルディアの兵士達は自信をもって参加したが、持っている銃だけでも隔絶した差があり、先頭に立つどころか後方支援や物資輸送の護衛、トーパー王国と共に雑用程度しか出来る事はなかった。

太陽神の使い（日本陸上自衛隊）

日本は兵力を供出していない。いつでも非常時は航空機から無人機を投下できることもあり、非常時通信機を渡すだけで済ませてい

た。

合同軍は森を切り開き、魔物と呼ばれる生物を打ち倒し北西に向け進軍していく。最新兵器の運用実戦でもあるが、もちろん故障などの問題も起こしているものの、魔物や魔獣などまったく相手にならず順調に侵攻していった。

侵攻に気づいた魔王の側近であるマラストス、いまだ封印されている魔王の代わりに魔王軍を率い、迎撃に向かうもトールパ王国までの事しか知らず、トールパ王国程度の文明程度しか恐れを知らなかった。

恐れるは太陽神の使いのみ、だからこそムー国が操る戦車を見て血相を変えた。再び太陽神の使いが現れたと。

急ぎ2体のオーガと共に魔王殿まで引き上げたのだが、時間稼ぎをされている事を気付かず合同軍はオークキングなどと戦い続けた。

23. エスペラント王国 魔王復活

日本はあえて人を派遣していなかった。それは魔王相手には不要だと考えているのもあるが、ラヴァアーナル帝国でもなく従うアニユンリール皇国でもない為、直接介入する必要はないとみていた。

そんな状況だからこそ日本は龍神様に諭された。

確かに日本が呼び出された理由はラヴァアーナル帝国を倒すためだが、魔王もまたラヴァアーナル帝国に連なるもの。対岸の火ではある、だが日本は何のためにこの世界に来たのか、自らの役目は何なのか。

魔王もまた災厄の一つ、対処すべきが日本のあるべき姿なのではないかと。

龍神様の問いかけに、日本政府および国民は考えを改め、急遽部隊の派遣を決定した。

「第二戦車部隊から補給の要請がきています!」

「第五歩兵分隊からは増援要請、ゴブリンの数が多いため駆除に時間が」

後方司令部には次々と苦戦の報告が上がってくる。

「突破されるぞ! 撃ち続けろ!」

数千を超えるゴブリンの群れ、そして一部とはいえ体格も大きく力もあるオークとオークキング、統率も戦略もないとはいえ数の力に押しされ、オークキングを倒した場合一時的に撤退するものの、翌日には再び大軍をもって襲い掛かってきた。

「戦車が一台やられた!」

走り回る四つ足の巨大な狼のような獣、角から発せられる球形弾はM4中戦車の前面にぶつかり、激しい爆発と衝撃を巻き起こした。

「履帯がやられただけだ! 畜生!!」

ハッチから無事なムー国の戦車兵が出てくると、戦車兵用銃器であるボルトアクション式ショットガン TOZを撃ち始める。

その間に前線を突破した獣は歩兵の一団に向け、今度は後部から火球を放ちごつそりとムー国歩兵が10人規模で吹き飛ぶ。

しかし一斉射撃によって何発もの銃弾が獣に打ち込まれ動きが鈍くなる。

「うてええー！」

ガンキャリアの76mm砲が巨大な狼の体を貫通し絶叫の声を上げて倒れ、魔物の軍勢はそれを見て壊走を始め戦闘は終わりを告げた。

大勢は決したものの被害は少くないため、一時侵攻を停止する事になった。

「戦車は4台ほど不調になり、ミリシアル陸軍としては一旦修理する為の時間が欲しい」

「ムー陸軍としても同じこと、余りにも魔物の数が多すぎたため、弾薬の量に少し不安がある」

連合軍による魔王軍壊滅には1週間要したものの討伐は完了した。しかし銃器や戦車の故障は思ったよりもひどく、まだまだ運用については未成熟な面が見られた。

もちろんこういった問題を身をもって知る為の実戦なのだが。2週間の整備と補給を行い、その間に戦果報告の確認を行う。

「オークキングを3体か。本国に連絡しよう」

「こちらはゴブリンが20体にオーク5体と。歩兵はやはり大物は辛いかな」

そんな中、ムー国の戦車小隊が倒した巨大な狼について驚くべきことが判明していた。

「伝説なるゴウルリアスなる魔獣は一体だけか？」

「ふむ、でかいな。まさか一台を故障させる攻撃を出来るとはあなどれん」

ゴウルアスの口部から撃ちだされた魔弾である爆裂魔法、その爆発はM4中戦車の履帯を破壊しエンジンを不調にさせた。

「太陽神の使いのいう通り、いまの我々ならば、ではあるな」

「確かに。知識を得られていなければ、苦戦していた可能性もある」

「補給と修理が済み次第目的地へと向かうしかあるまい」

一部の上級将校にはエスペラント王国がある事を伝えられており、連合部隊はそこを第一目的地として向かっていた。

その頃 魔王殿では、巨大なクリスタルのようなモノの中に封じ込まれ眠っている魔王、その前にマラストスがオークやオークキングなどを潰し、抽出した魔力を使って封印を砕こうとしていた。

2.4. 対魔王

日本が派遣した空挺部隊と無人兵器はトーパ王国と魔王殿の間に設置された広場に投下され、休むことなく魔王殿へ向かっていた。

トリガーのみを自衛隊員が預かる自律した兵器 ケーニクス
ティーガー・EML

そしてBAEシステムズによって改良が施された エクスカリ
バー戦車 Mk II

急遽の派遣により十分とは言えないものの、魔王程度であるならば十分と考えられ、念のため空中投下できる兵器も用意されていた。

魔王殿

マラストラスが一か八か自らの魔力を注ぎ込んだクリスタルは、強烈な爆発と共に砕け散り魔王は目覚めた。

アニユンリール皇国が前世界で解除できたように、すでに封印は長い時間の経過と共に綻びが生じており、その身が枯れかけるほど魔力を放出したものの、マラストラスの全力の魔力は封印を砕くことに成功した。

「ふむ、随分と長い時が流れたようだな」

強大な魔力を持つ魔王、まだ目覚めたばかりで万全ではないとはいえ、魔族のマラストラスを遥かに超える魔力を持っていた。そんな存在が、太陽神の使いと思われる軍が迫って居る事をマラストラスから伝えられる。

太陽神の使いと聞き、即座にオーガに命じて魔王殿の周囲で迎え撃つ準備をさせる。一方でマラストラスは戦えぬ身であるため、とある場所に向かうよう命じられていた。

その頃エスペラント王国側は外部に国家がある事に驚き、また太陽神の使いの再来には大きく乱れた。連合軍の外務を司る者達は、エス

ペラント王国の国家承認や国交開設に向けて奔走しているが、連合軍は補給をすませ魔王抹殺へと再び動き始めた。

森を伐採し荒地を整え道を敷き、一週間の行軍の後伝説の4勇者が魔王を封じ込めたという、エスペラント王国からさらに北西に存在する魔王殿が見えてきた。

伝説の場所だと兵士達が僅かに観光気分になっている、そんな思いを一瞬で吹き飛ばす存在が姿を現した。

魔王殿の入り口に設置された玉座で連合軍を待っていた。

「魔王だ！」

「なんだと!?!」

前世界で記録してあった映像から隊長以上の兵士は全て魔王の姿を確認しており、動揺している間に襲い掛かってくる二体のオーガと魔物の群れ。

「退け退け！ 銃器の間合いを維持しろ!!」

「戦車隊前へ！」

前線に出ていた歩兵は全力で走りながら迫ってくる魔物の群れから逃れ、戦車や駆逐戦車の横に並び銃を撃ち始めた。

しかしオーガやゴブリンは銃撃によって倒れるものの、オーガは左右に分かれ構わず突っ込んでくる。オーガは恐れていた、太陽神の使いの鉄の獣を、だからこそ魔王の言った通り戦車の攻撃が及ばないよう一心不乱に突撃した、そのため対応が間に合わず最悪な事に左右の部隊は白兵戦に陥ってしまった。

「オーガに銃が効かない！」

「戦車だ！ 戦車を回せ!!」

「車体機銃でもいいから撃って止めろ!!」

オーガの振り回す巨大なこん棒によって人間が木の葉のように飛び、被害はどんどん広がっていく。オーガとて撃ち込まれる銃弾は無痛と言うわけではないが、それよりも鉄の地竜獣 戦車による攻撃を恐れていた。

そんな混戦の中に後方から一台、その鈍足が故に行軍が遅れていた戦車 T O Gの砲身が右翼をかき乱しているオーガに合わせられた。

「伏せろ!!」

通信機から響く命令。その直後信管を外された砲弾がオーガを貫き、吹き飛ばされていく。魔物の群れは何が起きたのか理解できず、ただ胴体に大穴が開かれ絶命しているオーガを見ていた。

そして続く砲撃によって左翼で暴れていたオーガも撃ち倒され、オークやゴブリンは統率を失い歩兵によって一方的に討伐され始める。

戦車砲弾でなければ魔王は倒せない。いや、戦車砲弾でも簡単に倒せるとは限らないと伝えられている。だからこそ全ての戦車と駆逐戦車は魔王に砲身を向けた。

「攻撃開始!」

集中的に行われる全戦車からの砲撃、太陽神の使いとして認識した魔王は防御態勢に入るが、いくら魔王と言えど、絶え間なく撃ち込まれる戦車砲弾を無傷とはいかず、防御結界を張り巡らせ状況を見極めようとしていた。

「効いてないぞ?!」

「撃ち続けると命令が来ている! 全車攻撃を続けろ!!」

「歩兵も攻撃を継続!」

「魔導砲魔石充填完了!」

装填・照準・発砲、すべての戦車でひたすら繰り返される作業、それでもなお魔王は衝撃で徐々に後方に押し下げられる程度で効果は見られない。

とはいえ魔王もまた、防いでいるだけでは状況が変わるとは考えておらず、一方で脅威ともとれる空を飛ぶ敵、そして強力な空からの攻撃はないと理解し、魔王は一旦身を翻した。

「逃がすな!」

「追撃! 追撃!」

声上がるも、魔王は空に浮かび上がるときさすがに戦車の砲は届かない。そしていまだ開発中の対空自走砲はこの場にはない。

一般兵の持つ小銃が魔王に向け発砲されるものの、オーガにさえ効果薄いため何も変化は見られない。

魔王は17mはある巨大なゴーレムを大地から作り出し、最も近くにいた後退中のムーのM4中戦車が蹴り飛ばされ十数メートル転がっていく。

同じく蹴りつけられたTOGは少し滑るだけで止まった。そして予期せぬ抵抗感にゴーレムは体勢を崩し前のめりに転倒。

M4中戦車に勝つ為、狂ったように装甲を強化し重量が増加した結果、どうやら余りの重量に巨大なゴーレムとはいえ軽く蹴ったくらいでは力不足だったようだ。

「下がれ！」

TOGに搭乗している車長は叫ぶが、ゴーレムは身を起こしながらTOGを踏みつけ逃がそうとはしない。それでもなお、M4A3E8の76mm戦車砲に耐える為に作られた装甲と構造は、駆動部が碎け履帯が破損し歪みながらも耐えてみせた。

日本としても予測と見立てが甘かった。まさか自力で魔王を復活させるとは、想定している範囲内にそれはなかった。

だがそれでも連合軍は戦いを続け、魔王からゴーレムに標的が変更され撃ち込まれる砲弾は偶然ゴーレムのコアともとれる部分を貫き崩れ落ちていく。

ムーにとつても、ミリシアルにとつても偶然の出来事だが、ゴーレムを倒せたという結果は何も変わらない。

偵察及び監視ドローンから送られてくる映像には魔王と戦っている連合軍が映し出されていた。

「現在対象と交戦中の模様」

ミリシアルとムーの連合軍に対空兵器はない。それゆえに魔王が飛行状態にあるのは非常に不味く、そして上空から行われるだろう一方的な攻撃、入力された指令に従い、ミストラル汎用誘導弾Mk4の軌道の一部再設定し、状況を認識した人工知能のRANAは最適な攻撃を選定、承認を自衛官へと求める。

承認であるトリガーが引かれるとともにミストラル汎用誘導弾M

k4は上空に一度上がり、魔王に向け降下していく。

ゴーレムが倒され歓声が上がる中、魔王は啞然としながら地上を見下ろしていたが、突如起きた爆発によって地面に叩きつけられる。

防御障壁を体表に張り巡らせていたおかげで、怪我こそないものの何が起こったか理解できず動きが一時止まっていた。

状況が読めないとはいえ即座に連合軍の攻撃が始まり、小銃を持つ歩兵まで攻撃に加わると、徐々にそして確実に魔王の魔力を削っていく。

「仮帽付徹甲弾（APBC）弾込めます!!」

まだ機械量産が出来ておらず、徹甲榴弾（APHE）が主力生産されている中、特に高価な砲弾として手作業で制作されていた。

むろんその高い製造コストの代わりに、威力は十分に確認され少数ながら各車に搭載されていた。撃ちだされた砲弾は魔王の防御魔王を打ち破り体を引き裂いた。

大きな歓声と共に、伝説の魔王討伐に合同軍は喜び、そして一部の将校は恐れていた。魔王さえ倒す事が出来る軍事技術、そのようなものを旧式だとあっさりとは明かす太陽神の使いに。

もし敵になったとしたら勝つ事はおろか抗う事すら出来ないのではないかと。

この時、太陽神の使いから貸し出されていた映像記録装置から、魔王討伐の歴史映像として残され、それは一部着色され映画や本など創作に長らく使われるようになっていった。

今回の功績によりミリシアルのガンマ試製戦車は改良を進められることが決定し、ムーではTOGは記念博物館に送られ開発は停止された。

そして鬼の国との外交終結や封じられている邪龍との戦いに備え、ミリシアル及びムーはさらなる軍備拡張を。

しかしマラストラスがまだ生きている事、そして密かに動いている

事を知らなかった。

日本

同志を集め、進められてたマウスの改修が完了間際になっていた。マウスをベースにするため似た戦車が選ばれ、元々あった車体構造に傾斜装甲を追加し固定砲塔化、車体後部に移設し開発が終わったばかりの40口径203mm榴弾砲を搭載している。

- ・40口径203mm榴弾砲
- ・超重戦車マウスの車体
- ・後方固定砲室
- ・楔増加装甲

沿岸線防衛にでも使用するのかと問いかけたくなるような巨砲と巨体、運用方法に問題が発生する重量、ただし威圧と言う効果は確かに絶大であった。

知識が無い者が見たとしても、確実に暴力的な存在であると認識でき、空冷式サーマルジャケットの付けられた巨大な砲身からの視覚的圧力はかなりの物だった。

25. 1637年末 繰り返される準備

封鎖軍事都市

遅れに遅れていた初歩的集積回路の開発が完了した。まだまだサイズは大きく電力効率も良くないが、少なくとも真空管よりも圧倒的にあらゆる電子システムの小型化が可能となった。

大量生産はまだまだ不可能ではあるが、重要なシステムの小型化は可能、急務であったレーダーシステムの高性能化はこれでどうにかなる。

またロケット兵器の製造がようやく完了した。これによって陸海空と兵器の充実が図れることになるのだが、危険性もある為他国に情報知られることが無い様強く太陽神の使いとして警告を行うことになった。

陸区

基本的な歩兵火器

M4中戦車

M40 105mm自走榴弾砲

M4軽駆逐戦車

ガンキャリア駆逐戦車

各種輸送車両

一揃い最低限必要なモノはそろった。

対空車両については少々遅れているものの、車体は出来ている為対空機銃の完成を待つだけとなる。

しかし重戦車に関してはTOGシリーズは開発を中止、新開発が始まっているのだが、ムー国技術者達の紅茶とマーマイトの過剰摂取を止めた所、順当にガンキャリアの改修による重戦車案が提案された。

魔王戦に参戦したTOGとガンキャリアの技術を

とはいえ一国で複葉飛行機まで発達させたムー国。

魔王戦によって中戦車と重戦車の欠点と利点をよく理解し、主開発

を中戦車に、技術的袋小路に陥らぬようにと予備戦力として重戦車を置く方針を選んだ。

主力開発戦車案

- ・改修発展させた ガンキャリアベースの駆動系
 - ・TOGで取り入れた基礎構造の重要性と将来の拡張性の確保
 - ・M4戦車を全面的に超える性能
- 予備重戦車案

- ・TOGが大型過ぎた欠点の克服
- ・鈍足の解決

・開発中の90mm戦車砲の搭載
など日本側も中々驚くほど設計構想の向上が見られた。

海区

GA及び隼鷹級空母の建造は順調に遅れている。

46センチ砲どころか巨体故の溶接作業に、内部の設備製造ともはや技術的限界ギリギリの作業に現場責任者は頭痛持ちになり倒れ、技術士官はストレスで体を壊し、建造責任者である技術大佐は病室から指示を出す始末。それでもなお建造は進められ、作業に慣れてきた現場職人によって建造速度は徐々に上がってきている。

一方で訓練を始めたラ・トーン所属の海兵は半年前から始まった海上訓練。

海上での訓練・補給・修理と休みなく、封鎖軍事都市によって用意された補給艦や工作艦まで派遣し、今まで一度も寄港することなく長期航海訓練が続けられている。

疲弊を越えて麻痺し始め大分兵士らしくなってきたことから、不要となった旧式装甲艦を的に実戦に即した砲撃や戦闘航行などを始める。

そして日本から到着した改装空母のベースとなる不要となった5万3000トン級ばら積み船を改修し、210mの飛行甲板を備えた改装空母。とは言え完全ではない。

ムーで運用ができるよう、昇降機と飛行甲板は備えただけで機関

はなく、巨大な船体を建造するのに手間取っていたムーの訓練の為に用意され、建造の遅れで保管されていた機関や設備等の艤装が進められ、ムー国の空母を運用していた者達を集める事から始まった。

空区

橘花改は完成した。

プロペラの無いムーのジェット戦闘機、目標推力を満たした上に若干の軽量化により大本より1割程度速度と旋回性能が向上している。だが性能は低く橘花改は攻撃機として利用は出来ても、戦闘機としてはまだまだ利用は難しい。

サブ29 トウナン の生産にはまだ掛かるが、これが量産体制に入れば、ムーは軍事に傾倒した政治体制を取らなくてもひとまず完全な防空が可能となるだろう。

いまだ誘導弾の開発が遅れている為武装としてはロケットと機銃のみだが、問題ないとされている。問題は初歩的誘導弾のめどが全く立っていない事だが。

実験区

問題が発生していた。教導団の戦闘機パイロットたちは過激な訓練を乗り越え、技量はすでに 橘花改 を完全に操縦できるにまで至っているがゆえに増長していた。

例え魔帝や太陽神の使いが相手だったとしても、勝てる可能性がある。

それ故に少々お灸をすえなくてはならない。今の段階で油断してしまっただけでは、何のために技術供与を行ったか意味がなくなってしまう。

だからこそ日本から訓練用に武装の排除されたF-2を教官たちと共に一時送る事となった。

訓練用のF-2は極限まで軽量化が施された実に日本らしい狂った機体であり、すべての安全装置まで取り除かれているので非常に危

険だが、それ故に最新鋭機であるF-3を相手にしても、ドッグファイトに限定すれば遥かに優位に立てるほどに達していた。

そもそもドッグファイトに入る時点で戦略・戦術的に問題があるが、ドッグファイトと言う恐怖を知らないわけには行かずに現代でも行われている。

増長しているムーのパイロットたちに航空戦の恐怖を叩き込む、その予定を伝えられた訓練教官たちは久々の生きの良い獲物達に、どのような航空戦技をもって搾り上げるかその日を指折り待つようになった。

ムー

ムー国全体で問題が発生していた。それは工業技術の発展による電力不足である。あらゆる科学が発展したため、発電所より供給する電力が追いつかず、各種製造が遅れ始めていた。

到着までは時間を要するが、ここまで順調に技術を育てることでグラ・バルカス帝国に抵抗できるようにしたものが、この程度の失敗で遅れてしまうのは日本政府としても、予測出来てなかったと片付けることできなかった。

これは指摘を忘れていた日本側の落ち度として、災害派遣用に建造されていた海上発電船をムーに派遣する事になる。

2.6. グラ・バルカス帝国の出現 恐れていた事態

1638年初頭

偵察衛星の映像にグラ・バルカス帝国本土の出現が確認された。

混乱しているのか艦隊は周辺海域に広がり、多くの情報収集と共に小さな島々を制圧している。しかしその際には先制攻撃を受けているところも確認され、一方的にグラ・バルカス帝国が悪いと言い切れる状況でもないらしい。

異常事態と資源不足による国内不安を抑える為には、やはり軍事的大きな戦果による民衆の意思統一が必要となるのだろう。

レイフォル及びパガンダ国の行動には問題があることは、現在の世界会議に参加する各国も理解しているだけに不運な始まりだったと言えなくもない。

前世界では処刑された皇帝の弟君 グラ・ハイラス。処刑される前に強行奪取しておくのも、今後の外交に使える可能性が上げられた。

しかし問題もある、これは内政問題であり、大まかな処刑日は分かっている、正確な日時と時刻が不明ときている。奪還するにはかなり無理な行動が必要となるなど、多くの問題はあがるが大きなリターンはあるだろう。

それでもなお、スパイの潜入と工作が着々と始められていた。

各国にもたらす影響

ムー国に対しては飴と鞭というような厳しい技術移転をしていたが、さすがに鞭が強すぎた面もあった。

過労で入院する者や体調を崩す者も多く、その労働環境はお世辞にもよいとは言えない。そうでもしなければグラバルカス帝国に対して勝てないと言う点はあったが、現在到達したレベルならばもはや引き分けにもちこむどころか、時間さえかければ勝てる段階にあるだろう。

その苦勞に報いることもあり、特別に2カ月もの長期間の休養と共に日本への観光を許した。

前世界では戻れない可能性もあり技術流出に細心の注意を払っていたが、再び他の世界に移転するのなら限定公開しても良いという結論に達したためだ。

もちろん写真どころか一切メモを取る事も許されず、倫理観に少しでも問題のある者は招かれることはない。集団行動を徹底されるものの、全てにおいて未来の技術で構成された都市、科学と言う点においていくつもの枝葉の先にある発展した一つの先があるからだ。

理性的な者だけが見て体験したのであるならば、その知見を有効に利用してくれるだろうという、願望も日本にはあったが。

第三文明圏外

クワ・トイネ公国及びクイラ王国に設置されていた線路および鉱山に原油設備、ムーの設備も中々悪くはないのだが、彼らの参考になるように全て日本式に作り直す。

最適化とまでは行かないが、ミリアルやムーが目指す先の技術で何ができるのかをその眼で見えて理解してもらうため、ほぼ全力で改装を始める。

日本としても資源の備蓄を考えており、ムーの設備ではいささか生産量が少ない。備蓄しつつ全力で産業を回すにはまだまだ足りないのだから。

効率の悪い個所を全て作り直し、運用方法についても問題個所を指摘し整え直す。それだけでも2〜4割の程度の向上が見られたが、まだまだ日本が求める採掘量には足りない。

一部ではあるが日本の手によって備蓄タンクの建設や農作機器のレンタルなど、最低限必要な支援をすることで日本が必要とするだけの輸出を確保することとなる。

神聖ミリアル帝国

ミリアルはさすがと言うべきか、アルタラス王国から大量に魔石を買い上げ、新たな理論をもとにゴルド級を何隻か改修し空母を作り始めている。ミリアルの燃費が悪い双胴型大型空母ではなく、単

胴型空母ゴールド級の誕生であった。

アルファ4型の開発及び量産開始と共に、新型であるアルファ5の研究開発もスタートし、順調に力を蓄える事が出来ていた。

まだまだ艦上戦闘機と陸上戦闘機を分けるだけの力はないようだが。

あらゆる準備が順調に進んでいる中、ムーから技術情報が少々漏れた。正確には日本がムーに与えた物ではない。元々ムーが自己開発していた現在では旧式になる技術、それでも複葉機の技術等が流出しているのは由々しき問題であった。

そしてその先はパガンダ王国となっている。第二文明圏の安定が乱れる事は明白であり、情報を漏らした人物は国を出て行方をくまらましていた。

一度流出した技術はどうしようもないため、ムーの政府は頭を抱える事になり、太陽神の使いからもたらされる技術によって意識に緩みが生じている事によりやく気付くことになった。

27. 1638年末

パーパルディア国内はルディアスと他の皇族の間で考え方に差異が現れている。

パーパルディア王国の発展を大事にするルディアス、国も大事ではあるがパーパルディア王国の他国での評判は良くなく、他国の要人と関わる事で体面を気にしはじめていた。

美容サロンでのたわいない談話でも、ミリシアルやムーの高級官僚の婦人ともなれば、その知識の蓄積はレミールを上回り、国の在り方や財政など、パーパルディア王国の政治体制に疑問を感じながら限界であると知るのは容易であった。

体面は大事なものではある、そしてその体面もメンツではなく、貴族としての務めであると考えれば、曲りなりとも理性的近代国家であると言える。

前世界では日本が小さな謀略を積み重ねルディアスとレミールを引き離したが、今回は皇族や貴族の女性陣が自ら周りの目、それを気にして夫に話したりそのことでもうにかしようとする夫婦、他国どころか魔道都市も訪れず侮る者と、亀裂が発生していた。

ほんの少しの予定が明確な亀裂、これは思っていたよりパーパルディア王国の女性陣は明晰、というより他国からの体面も気にし、さらに夫に対して強く出れるという立場が理由であった。

そして皇族からの命令により、一部ではあるが隣接する10州が皇族直属の開発管理属領として体制を得た。A・リンドヴルム、そしてワイバーンロードと歩兵一旅団、たったそれだけでも皇族や貴族から集め兵団を構成する小さな軍隊。

開発管理領地では軍官民全てが開発という名目で新たな試み、つまりムーなど先進国の法律ややり方を取り入れ、発展させる試みとなる。

皇族たちは、魔道都市を首都としたパールネウス国の建国、元はパーパルディア王国の皇族の過半数が独立させるためにひそかに行動を始めていた。

日本としては少々予定とは異なるものの、パールディアを新たなモデル国家として、連邦制として成り立たせるための基本的仕事を始めていく。

大陸の国民性から独立させても戦乱しか生まない為、平和のための統一とは異なり、平和のための連邦統合化への試験的試みとなる。これもまた、次の世界で必要としたときの経験を積むため。

皇族の中で話し合いが行われ、筆頭としたのはいまだ迷いのある中レミールが選ばれ、軍を整え農地をまとめ直すなどをはじめると、静かにそして着実に動き始める。

やはりルディアスは皇帝として皇都から離れる事がなく、日本が接触する為にくっつか手を尽くしたが列強の皇帝である以上側近への面会さえできなかった。

日本

海魔とは人に近い知性を持つ人型ではない生き物であり、かつ人間に対して敵対的であると定義された。

では人に近い知性を持ちつつ敵対的ではないのなら、すなわちそれは海魔ではないということになり、慌てて日本は輸入や漁獲していた生物を急ぎ調べたが、一般的な蟹にはそのような事はなくほっと一息つくことになった。

レイダークラヴ族の代表者、といっても規模は100杯くらいであり、いくつもある集団のうちの一つでしかない。

話し合いの結果日本に協力してもらえらることになり、彼らは食料と水竜族との仲介を引き換えに戦力の提供を申し出てくれた。

彼らはリンドヴルムより甲殻が硬く、そして力も非常に優れ片言ながら人語を話せる。本当に優れたレイダークラヴ族 だった。

合わせて30杯、彼らは協力するとして現在メガフロートに集まっている。

「ケイビ？ というものをすればよいのか？」

「ジュンカイして アヤシイものを捕えればよいのだナ」

少々アクセントに不都合があるモノの、意思疎通に全く問題はな

い。

陸上生活も定期的に体を沈める海水があればよいとのこと、そして彼らは捕食者から身を守る生活をしていたことから、非常にルールというものに厳しく、二か月の間問題がなかったことからチープ兵装の一部を任せる事となった。

水竜族と関りがありながらも、人型外とは対話が難しいという固定概念に囚われていた。

さらに他の世界に行った場合、もっと人型と離れたタイプの可能性もある為、多様な生物に大して差のない対話が要求されることに外務省や研究者は頭を抱える事になる。

もちろんその中には、初の非人型タイプの協力者であるレイダークラヴ族に道具の使い方や対話など、自衛官も苦戦する事になったのだが。

ムー国

帰郷が始まった。これからムー国中に広がり、あらゆる技術を発展させ準備しなければならぬ。

適度な情報流出と言うミスも犯した事から、防諜に関する緊張感と質の向上につながり、ほとんどの人員や技術者達がムー国へと戻っていった。

あらゆる新技術を整備運用する為の力を含め、ムーはこれから大きな変化が起きる。

海区 技術者の帰還が行われ、重巡洋艦と空母の建造

ムーに置いてようやく戦艦が完成した。最初にして最後の超弩級戦艦、これから習熟訓練が行われるため古鷹型 利根型と続き、ようやく熟練した兵士を回すことで習熟航行訓練が行える。

隼鷹型空母にも搭載可能なレシプロ単翼機のD21だけとはいえ、運用する為に首都防衛隊などから人員をかき集めている。

領海防衛にはもう少し時間がかかる事だろう。

空区 隼とD21の正式な生産

ジェットエンジンである橘花についてはまだ軍事都市でのみだが、レシプロ機については各生産地に置いてマリソとの世代交代を始めよう。

ようやく防空は十分だろう。

陸区 M4戦車及びM4系駆逐戦車とM40自走榴弾砲の正式な生産開始。

ムーでの生産が始まり、順調に対グラ・バルカス帝国の準備は出来つつある。問題はガンキャリアや重戦車などは生産を行わない方針となった。

多様な種類を生産するだけの力はあるけれども、そこまで訓練を出来るほど余裕はない状況であり、時間的余裕を考えれば不可能であった。日本の手によって改良されたM4シャーマン、教導団として運用されるムー陸軍の底上げに奮闘している。

封鎖軍事都市

半数以上の人々が国に帰還したが、今度の新技術開発の為に残った者達は日々研究に没頭している。

もはや各区に置いて日本は指導をすることはほとんどなく、自力での発展を目指す段階に入っていた。

海軍区

現在対潜装備の開発が進められている。

研究開発中のソナー及び爆雷なのだが、魚雷についてはとっかかりを掴むことが出来ずにいた。

空軍区

SAB29 トウナンの試作機の飛行試験は始まっている。まだ問題点はあるのだが、少なくとも短時間なら稼働させる事は出来る。

し飛行する事も出来たのだが。

パイロットの技量が優れていたため、なんとか脱出する事が出来たが試作一号機は墜落した。単発機故にエンジン不調に対応しきれず、全損という調査も出来ない状況にムーの技術者達は頭を抱えていた。

陸軍区

ムー独自であり、ガンキャリアを参考にしたことから、イギリス陸軍のブラックプリンス歩兵戦車と中々似ていたが、相違点は強化された装甲とエンジンであり、さらに長砲身の76.2mm戦車砲を搭載していた。

ムー国製 重戦車 BP

・長砲身76.2mm戦車砲

・約7mの全長と分厚い装甲

・出力改良されたエンジン

などムーとしてTOGの実戦データを参考に手を加え、装甲と火力そして機動力のバランスを取ろうという試みがなされている。まだまだ技術的には未熟ながら、主力戦車という到達点に近付こうとしていた。

一方で中戦車案は苦勞していた。元々M4中戦車は完成度が非常に高く、大本のアメリカもM26パーシングを開発するにはそれなりに苦勞している。

なのでそう簡単に開発は進むはずもなく、そもそも重戦車案も76.2mmの長砲身を使うなど対戦車砲の問題まで発生していた。

あくまで日本が手を貸したのは自衛が出来る範囲までであり、それ以上については独力で自己開発していかなければならない。

しかし、大量生産と言う枠から外れたことから、残された技術者達は様々な物を考案設計し、模型化までしたりと爆発的にさまざまな戦車が考案され始めている。

時期にムーらしい戦車を生み出す事だろう。

実験区

のちに航空機に人生を捧げ鬼才と呼ばれる一人のパイロットと、狂人と呼ばれる技術者が居た。

ムー国パイロットや技術者達が勝てるはずだと油断している中、太陽神の使いとの航空訓練と聞いてから二人は 橘花改 を弄り始めた。

2丁の機銃を1丁外し、搭載弾薬も半分に減らし、全ての防弾板を引っぺがし、搭載燃料も半分に減らす、さらには不安定化及びエンジン寿命の減少も覚悟したうえで圧縮率まで変更していた。

そこまでも勝てるか分からないと、航空機動についても話し合い、当日に向けて出来る事をなしていく。

当日朝、大型飛行船M L 86 XからF-2訓練機が下ろされていくその様子をムー国の兵士達が見守る。

ムー国空軍司令官はパイロット達とは異なり、冷静に勝てるとは判断していない。それでもある程度は抵抗できないのではないかと考えてはいた。

昼が過ぎた頃、訓練を行うため上空に上がった橘花改が巡航速度に達したところで、訓練開始の合図である対空砲が撃ちあげられた。

「編隊を維持！」

「よし！ ムーの精銳の力を見せつける!!」

通信では基本的な命令こそリーダー機から行われるものの、具体的な対処や警戒方法など伝達されることがなく、地上とも連携が全く取れていなかった。

這うようにF-2は海上から訓練域に突入、編隊を保っていた橘花改は即座に混乱しばらばらに分かれてしまう。

ムーは橘花改を運用できると言っても、航空機動や戦術はまだまだレシプロ機と大差ない状況であり、その辺りの研究がまだであった。

地上の戦術官と航空機パイロットの連携、それが出来てやっとならなくは群である戦闘機となる。たとえば地上から目視管制官によるサ

ポートだったとしても、あるとないのでは大きな差となる。

ムーはまだまだそう言った面が甘く、次々と撃墜判定を受け滑走路へと向かっていくが、ただ一機だけ異なる橘花改が居た。

「一時方向に注意―」

未熟ながらも地上からの管制を受け、後方もしくは下方を取ろうとするF―2から逃れると、スライスバツク、水平からマイナス45度バンクし、斜め下方宙返りをする事で振り切ろうとする。

他の橘花改が3分も持たずに撃墜判定を受けている中、唯一残っているのは奇跡ともとれた。日本側の教官も油断していたわけではなく、橘花改のスペックを調べ上げ、空撮されていた映像から練度をしっかりと把握していた。

元々複雑な航空機動ではなく速度を生かすべき機体特性、連続した過酷な航空機動かかるGによる体力の消耗、電氣的サポートの無い操縦桿とフットペダルに掛かる精神と肉体の負担、それでもなお操縦し続ける根性に教官も感心していた。

しかし性能の差は残酷、5分ほどで精魂尽き果て、撃墜判定を受ける事になった。

最後にムー国パイロット達による挨拶が行われ、全員が日本の教官たちの前に並ぶ。教官達は手に持っていたアグレッサーの証として用意していた髑髏の額に星のマークが入ったワツペンを数名に渡した。

「負けると言う事は、つまり死ぬことだ。君達は戦死した」

渡されなかった者達は安堵しているようだが、ムー国パイロット達からアグレッサーになりえる第一段階の選別の行為、渡されなかったものはそれから外れたと言う事になる。

翌日からは管制官や戦術士官の中から選別が行われ、最終日、戦術官とパイロットに整備員の合計40名がムー国初のアグレッサーとして新たに編成された。

「これからも厳しい訓練を積むことになるだろう。だがめげるなよ」

特徴となる髑髏マークとスズメバチのマークが隊の部隊章となり、

ムー国の飛行隊全ての指標となるべく今後も厳しい自主訓練を続けていくこととなる。

その後、たった一人、アグレッツサーへの入団も断り橘花改にこだわり続ける鬼才パイロットと、変人技術者は以後とんでもない事をしてかすのだが、誰もそれまで気が付くことはなかった。

28. 1639年初頭 ムー生粋の奇人と変人

日本では徹底して資源の備蓄と産業の再生に手を尽くしていたため、ようやく万全と言える状態に戻りつつあり、国外への戦力派遣はいまだに控えているものの、ようやく戦力の補充から拡充へと体制を切り替えることが出来た。

抑えられていた研究開発も各分野で活発になり、平和的技術発展と共に恐ろしい兵器が偶然生れた。元々は医療用のものであったのだが、余りの危険性から多くの署名や意見から化学兵器として登録され、厳重に管理されることになる。

・CCA脱毛液ガス状噴霧兵器

吸い込んでも無害であり、目的の箇所に霧状に噴霧するだけで絶大な脱毛効果が認められ、あらゆる毛が一日後には抜け落ちる。それはムダ毛 から 頭髪 に至るまですべてである。

その非人道性は余りにも高く、戦意破壊兵器として運用するにも細心の注意を必要とするべきであると、一部の人は署名を集めて訴えるなど酷い物だった。

脱毛なので再度生えてくるのだが、やはり薄い方々など一本一本を大事にする人たちにとっては残酷らしい。

・ハリアーIIACV

続けられた改良によって、F-35シリーズは素晴らしい性能を持っている。問題はその調達価格であり、高価なF-3と合わせてF-35を調達するのは日本防衛に関しては何も問題ないが、国外で運用するとなるとさすがに高価かつ過剰な性能を持つ機体を消耗するつもりはなかった。だからこそ安価な機体でありながら、F-35に近い運用ができる機体が求められ必然としてハリアーが選定された。一番の目的は低価格化であり、民生品で代用できるものは躊躇なく採用し、システムボードも代用品となっている。

総じてACV(Advanced Cheap Version)と

命名されたが、長らく改良が行われず、40年以上手が付けられなかった理論と技術の向上から、調達価格はF-35の10分の1以下でありながら性能は原型機の2割弱程度向上することができた。

これならば気にすることもなく運用する事が可能であり、信頼できるのならムー国のアグレッサーや特殊部隊向けに供与する事も出来るだろう。

訓練や海外供与向けに月産5機程度で生産が開始された。

ムー国の封鎖軍事都市ではS A A B 29の試作に失敗し続けた。

エンジンの破損に悩み、対策を取ろうにも着陸するところには全損してしまうため、原因究明が出来ていないのだ。

むろん原因究明のための技術が不足しているのもあるのだが、そんな状況であるため変人と言われる技術者は一つの案を出した。

まず橘花改の翼下エンジンをS A A B 29のエンジンを素のまま搭載。

剥離しやすい塗装を何重にも塗り重ね、はく離した度合いや枚数にヒビの状況から負担や風を知る。

そしてあろう事か、増槽を改良した翼下位置に寝転がる席を作つてエンジンを見るという。

正気ではないと止められるも、他に案がない以上強行し、飛行中にじっとエンジンを見続けた。

「エンジン停止！ エンジン停止せよ!!」

高高度飛行中、エンジンの負荷が上がり、僅かな異常の発生を見逃さず、その直後に両エンジンを停止させ滑空降下させるという余りにも無茶な行為だった。

しかし無事に着陸に成功し、解体分析したエンジンからはフィンブレード等の破損が確認された。高高度状態でのみ発生するため地上試験では見つからず、最終的には強度不足であると判明。

そのおかげもあり、S A A B 29のエンジンは問題なく完成、剥離塗装の箇所から負担がかかる場所が明確になり、S A A B 29のテスト

トにも利用され遅れていた機体は無事に量産に入る事に案った。ようやく封鎖軍事都市に置いて量産体制に移行しつつある。

新たに得た知見をもとに、テストエンジンは翼下式である橘花で高度試験し、機体は試験的に後退翼のテストや尾翼のテストなど原形を徐々に失っていくことになるが、どこか橘花に近い血統を持つメツサーシユミット Me262に近付きつつあった。

実験区域の滑走路では、地面に設置された発射装置から標的として、車両にけん引されている熱源を出しているグライダーに照準が合う。

「照準良し。 試射開始します」

噴煙を上げて撃ちだされた物体は熱源を放ち続けるグライダーを追尾し着弾、爆発しグライダーは粉みじんになる。

試験で10発命中したのはわずか6発、それでもなおムー発の誘導弾、といってもまだ初歩的なもので信頼性も低く生産効率も決して良くない。

しかしムー国発として 38式誘導弾として生産が開始され、SAB29 トウナンや艦に対空兵器として搭載されることになる。

グラ・バルカス帝国の艦隊がパルス王国に赴き、そこからパガンタ王国に向かう事が予想されている。

燃料の問題か、それともある程度は配慮しているのか、軽巡洋艦三隻である。

パガンダ王国に入り込むのも情報を得るのもさほど難しいことはなかった。パーパルディア皇国を遥かに超える酷い汚職状況であり、賄賂ですんなりと王国内での倉庫に物資と人員を隠す事に成功、情報や立場など全ては賄賂次第。なんとも諜報活動のし甲斐がない有様であった。

29. 皇弟 強奪？ 兵器の行きつく先とは

グラ・ハイラス グラ・バルカス帝国皇帝の弟君。

パガンダ王国に付くと、そうそうに外交の為に部下を連れて王城に向かっている姿が確認できた。

職員に金を積んで仕掛けた盗聴器からは、過大過ぎる賄賂の要求と、それを嗜めるような言葉が聞こえてきたところで。

「不敬な！ 即刻処刑せよ!!」

盗聴器から聞こえてくる怒鳴り声。騒ぎと共に殴打する音が聞こえ、静かになると何か引きずられていく様子が確認できた。

処刑場に移送されている中、先回りをし処刑場の責任者である男に用意していた金塊30kgを渡す。前もって話をしていたため、スムーズに処刑場責任者と取引する事が出来た。

「ではご約束通り、金塊をお渡しいたします」

「そうかそうか、それならば奴隷として融通しようではないか」
下卑た笑み浮かべて金塊を見た後、部下に言いつけて処刑を中止し枷を付けて連れてくるように命じた。

普段から処刑予定の人間を奴隷として売り渡していたことから、あつさり処刑したことにしてグラ・ハイラスと外交官達を引き渡す事を了承した。

呆気なさすぎる事に、強襲強奪するためオスプレイを賄賂を積み上げて輸送したことが無駄になってしまった。

引き渡されたハイラスや外交官は殴打され青あざもある。

「まずはお怪我を治療いたしますので、ご安静に」

処刑場に送られてきたグラ・ハイラスと外交官達は大分暴力を振るわれ、服さえも高価故にはぎ取られていたが、命の別状はなくまずは痛み止めを含めた遅効性睡眠薬で眠ってもらっている。

いくらなんでも人道に外れ過ぎた行為に隊員達はパガンダ王国に怒りを覚えていた。

限られた範囲内とはいえ簡易的な手当てを行い、早急にムー国を経由し帰還する予定となっている。

しかし経過を観測する必要もあり、望遠鏡で状況を見守っていた自衛官の目には、パガンダ王国の兵士がグラ・バルカスの船に向かい、処刑しワイバーンの餌にしたとぼろ切れとなった布を叩きつけた姿が見えていた。

烈火のごとく怒り狂っているグラ・バルカス帝国の兵と、それでもまずは報告を優先と怒りを抑えながら船に乗り込んでいく様子がわかる。

今はまだ薬で眠っているグラ・ハイラス皇弟、生きている事を伝えたとしても、暴行を受けた事は変わらず戦争は避けられないだろう。それならば国益が優先され、戦後を見据えた平和への知識という名の洗脳を行うのが適切と判断されるのも仕方ない。

数日後、大騒ぎの中オスプレイによってパガンダ王国を出発、睡眠薬の連続投与によって寝ている最中であるため、グラ・ハイラス一行は気付いていないが目が覚めた時にはムーの最新空母の医務室であった。

そのまま治療と説明を受け、
「これが、列強か」

グラ・ハイラスの視界に映っているのはムー国、といっても急速に発展中であり建設中のビルなどが多いのだが、首都オタハイトと商業都市マイカルの文明程度はすでにグラ・バルカス帝国を越えている。
「ここから首都に向かいます」

マイカル港に接岸し、飛行場に移動するとムーによって製造された、レシプロながら大型4基のエンジンを搭載し与圧式キャビンを持つラ・カオス二世に搭乗する。

その性能はグラ・バルカス帝国の皇族が利用するアヴィオール双発機を超えるが、あくまで豪華な商業機であり、専用機として改造を受けた物とは異なる。

現在王族や政府専用のジェットエンジン搭載型を試作製造中であるため、今は新造されたばかりのラ・カオス二世が主となる。

あらゆる事が考慮され、日本では戦艦の建造は中止された。使い道が余りに限られる事と、いくら技術と兵器が優れていても、人口には限度があり多くの人員を融通するわけには行かなかったからだ。

その代わりにB-52P型の追加生産と改修が決定された。10年爆撃機と言われていたが、とうとう100年を突破し、さらなる推力向上によるペイロードは増え全て50倍率電子励起爆弾に炸薬換装されたE50-Mk. 82爆弾(227kg爆薬の50倍、約MOABを満載)が満載された大地を焼き尽くす空の怪物。

しかし開発を進めていくと、もはや戦争の為ではなく大地を消滅させる兵器となっていくのではないかと、日本政府および技術者達は恐怖していくこととなる。

30. ムーと帝国

ムー国 封鎖軍事都市

保護しているグラ・ハイラス皇弟と話が微妙に合わない。

前世界で得られた事及び会話内容から穏健派であることは間違いないが、軍と軍事会社の癒着による暴走という事で比較的穏便な終戦方法を選んだのだが。

グラ・バルカス帝国では皇帝の判断によるケイン神国との戦争、それは覇権争いであり軍部の暴走として片づけるには状況が異なる。

「では、つまり帝国としてはどのような形で有れ、世界に対して宣戦布告をするか？」

「その判断となる。ケイン神国以上の国家がある事を危惧し、列強との和平外交を訴えたのだが、このような結果になった以上、ルークス陛下の統一の意思を妨げる者はいないだろう。もとよりケイン神国との戦争の為に、拡大した軍を治めるにも資源を得るにも、他国への侵攻は避けられぬこと」

大規模な戦争の準備をしていたことから、軍の力が強く成り過ぎたということだろう。

「私が戻ったところで、もはや止める事は出来ないだろう。陛下は若かりし頃は冬戦争という国家防衛戦争において前線で指揮を取った名士、敵と定めれば容赦する事はなく、もとより軍備はすでに整っている」

どうやら介入するタイミングが悪いというわけではなく、転移する前から戦時体制であったためにもはや止めようがなかったということだ。

列強と言う存在を知ったことで一旦踏みとどまったのも、勝てる相手を見定める為であり、グラ・ハイラス皇弟も完全には止められないことは理解していた上での行動と言う事である。

「それで、私はどうなるのだ」

現在では軟禁状態ではあるものの、国賓として丁重に迎えられている。ムーとしての意向と言うよりも、いまだ戦争状態にはなっておら

ず、戦後の事を考えグラ・バルカス帝国の素行を外部から見てもらい、それと同時進行で平和の理念や植民地運用の効率の悪さなどを教え、ていく予定となっていた。

「このまま事の成り行きを見守り、グラ・バルカス帝国の行く末を知り、何をすべきか考えて頂きます」

残酷ではあるが、日本は基本的に関与するつもりはない。侮れるような軍事技術差はなく、むしろ上回っている現状でどうするのか、ムーとどのような外交をするのか、それはグラ・バルカス帝国次第となる。

そしてムーとて準備を整えているだけで、やはり基本としては平和的な外交を主とし、戦争をせずに済むならそれに越したことはないと考えていた。

ムー国空軍では待ちに待った、ムー国初の自国産ジェット戦闘機の開発が完了した。

奇人変人と言われていた ネビル・プラントン 航空技術少佐によって、橘花を使用した後退翼や高高度エンジンのテストから、S A A B 29 トウナンは完成した。

M (ムー) F (0自国製 1技術供与機 2供与機)

M F 101 橘花改

M F 102 トウナン

しかしネビル航空技術少佐は橘花に拘り続け、トウナンから得た技術情報や電子技術等をフィードバックし改良を続けた。

ベースは確かに橘花ではあるのだが、機体の3割の大型化に後退翼化、ジェットエンジンもトウナンに搭載されているものに換装。

武装は20mm機関砲2門に38式誘導弾2発ともはや別機であり、日本としても改良の域を著しく超えているとして、自国産機としてムー国発のオリジナルジェット戦闘機として登録された。

M F 1001 シュヴァルベ

・ 最高速度 940km/h

・ 武装

固定 20mm機関砲2門

38式誘導弾 2基 or 100kg無誘導爆弾 2基

ムー国内では初の自国産ジェット戦闘機として大々的に発表され、ネビル航空技術少佐と共に専属テストパイロットとしてエイノ・バーリング・ユートイライネン大尉が称されたが、当人達は興味がないとして昇任や教導団への移籍を断り、戦時の最前線配属希望と機体改良にこだわり続けた。

二人が見ているのはさらなる先、太陽神の使いが持つという桁違いの化け物だけを見据えていた。

グラ・ハイラスの一件が片付いた頃、日本である弾丸が開発された。弾頭として使えるだけの強度を保ち、時間が経てば溶けるという自然環境に配慮され、製造コストこそ掛かるもの、体内に入ると貫通せずには砕け、人体内部に破壊をまき散らす凶悪性、内臓を破壊し衝撃を余すことなく伝える。

ハーグ条約に加入している日本では表立って使う事は出来ないが、《外包硬固なる弾丸にして其の外包中心の全部を蓋包せず若は其の外包に裁刻を施したるものの如き人体内に入れて容易に開展し又は扁平と為るべき弾丸の使用を各自に禁止する宣言書》

ムーなら何も問題はない。しかしあくまで非人道兵器であるため、特殊部隊向けと言えるだろう。

氷の魔石を含み凝固された 小豆バー弾頭

開発の主目的としていたのは、撃ち込んだ対象を冷凍する弾頭なのだが、まだそこまでのものは出来ていなかった。

31. ロウリア東進先遣軍VSカニ

第三文明圏外 ロデニウス大陸

ロウリア王国は動きを始めた。いままで蓄えた戦力をもって、クワ・トイネ公国とクイラ王国を占領、統一を果たすつもりなのは明白であった。

列強に対する認識も甘く、数の力さえあれば勝てるとさえ妄信している面も見られていた。総兵力50万の大軍勢、確かに小局面であるならば数の暴力を持って押しきる事さえ可能だろう。

ムーとしてはクワ・トイネとクイラは契約の地であり、高度化したつあるムー国の資源地でもある。

永世中立の名の下に表立って動く事は出来ないが、資源採取及び生産輸送基地を守る程度の兵力だけは送っていた。

「何卒、国家を守る為に援軍を」

「我々は中立であり、軍事協力は行いません」

クワ・トイネ公国は自国の為に必死に交渉を重ねるも、ムーは自衛以外はしなないとしてダイダル平原に訓練展開するだけにとどまった。

日本も正規戦力を派遣しない。戦いに関与する必要性もないのだが、レイダークラヴ族を100杯派遣。訓練と称してムーの特務部隊と共に危険地域で巡回をし、非常時は容赦なく敵対者を排除する。

道具の扱いを覚えたのはクラヴは20杯、それ以外は肉弾戦になるのだが、それとて弱い関節部分は防弾防刃装甲、目などは防弾ガラスのアイガードで覆われている。

飽くまで報酬と引き換えの傭兵活動ではあるのだが、魔物である当初は警戒していたクワ・トイネ公国の騎士団であったが、規律ある行動は騎士団さえも舌を巻くほどであった。

来る日、ロウリア軍の東伐軍はギム防衛陣が見える距離まで軍を進めていた。

「ワイバーンだ!」

「くそ! 数十体はいるぞ!!」

クワ・トイネ公国のギム防衛陣地を任されているモイジ將軍は、余りの数に冷や汗を流している中、ギム防衛陣地内には巡回中のクラヴ族と特務軍が 偶然 を装って展開していた。

「開シ」

器用に大きな爪でスイッチを入れると、専用の対空機関銃の狙いを空へと向ける。

ムーで製造されるようになった30mm対空砲、現在M4 2連装30mm自走対空砲及び 4連装対空30mm対空砲として生産が為されているが、余りにも遅れていたために、日本で急遽簡易に生産できる対空機関銃を少数生産した。

しかし日本国内で生産が開始されたときにはムーでも生産が始まり、持て余したためにチープ兵器群の一つとして登録された。

M45機関銃架MK2

12・7mm重機関銃を4基

サーマルジャケット

大型ボックスマガジン

レイダークラヴ族用操作装置

お世辞にもレイダークラヴ族の視力は良くないのだが、20杯は特別な視力矯正ゴーグルを装着しているのでそれは当てはまらない。

ワイバーンの群れ、本来なら水中生物であるレイダークラヴにも対空攻撃能力はない。だからこそ、道具の使い方を覚えた特に知性が高い20杯は苦手とする事を率先して覚えた。力強く自ら牽引しながら爪に付けられた照準器とトリガーで狙いを定めて撃ち落としていく。

所詮は12・7mm機銃4基 10門、されど2km程度の射程を持つ12・7mmの大口徑弾丸、ワイバーンは鴨打のように次々と落ちていく。

視力は悪いが海中を素早く泳ぐ魚を捕まえる関係上、動体視力はずっと良い。最高に状態が良い状態で235km、旋回や騎士が搭乗中でベストではない状況のワイバーンなど、止まっているようなものであった。

「何が、何が起きている!? 一体何をしているのだ!!」

唾然としているクワ・トイネの騎士達など気に留めず、運悪くといふべきか、運よくワイバーンごと撃ち抜かれずに済んだ騎乗騎士も、高高度から落下という地獄の恐怖を味わい、地面にぶつかり砕け散る。

ギム防壁の上では必死に梯子をかけようとするロウリア兵達を弓で倒していたが、さすがに飽和し始め白兵戦が始まっている。

そんな状況では破城槌を止められず、木製で作られた分厚い門が激しく軋み音を上げていた。

「城門が破られるぞー!」

「抜剣! 槍兵は集まれ!!」

城門の危機に慌ただしく兵士が動く。

ロウリア軍が城門を破砕しようとする中、レイダークラヴは門に集まり整然と並び、大きな爪を掲げ戦いに備えている。

城門が砕けロウリア兵が飛び込んできたところを爪で掴み、鎧事軽々と真つ二つに圧縮切断してしまう。

「魔物だ?!」

「なんでクワ・トイネ公国に!!」

ロウリア兵の持つ槍に剣、そして少数が持つ斧などでは浅い傷を甲殻に付けるだけで、たやすく爪に挟まれ命を失っていく。

なだれ込むように大量に襲ってきてても、甲殻に阻まれ何一つ効果がない。

いずれ疲れるかもしれない。いずれは倒せるかもしれない。でもそれはいつか分からない状況で、爪に捕まれば死しかない相手に飛び込んでいく兵士はほとんどいない。

砕かれた城門前は渋滞を起こし、そんな状況に一際大きなレイダークラヴが城門を抜ける。片側の爪が小さいのは水竜に襲われたときに食われ、時間をかけて再生した証。

それでも生き延びた力はクラヴ族の中でも一際強く、右の巨大な爪で騎士を三人纏めて掴むと、鎧ごと真つ二つにねじり切った。

噴き出す鮮血の雨に兵士達は怖気づき、城門を次々と抜けて出てく

るレイダークラヴに押し返され始めた。

先遣隊に配備されていたワイバーンは全て戦死、防衛陣内で激しい白兵戦が進むもクワ・トイネ兵は次々と討ち取られていくが、レイダークラヴによつて無残にロウリア兵は殺され、3万の軍勢されどあくまで3万の騎兵と歩兵であり有限、勇敢な者も居れば臆病な者もある。勇猛果敢に挑んでもすべて殺されてしまえば、強奪も出来ず報酬も得られない相手に戦意は保てない。

防衛陣地は少々焼かれたものの夜まで続いた襲撃はクワ・トイネ側の辛勝で終わった。

撃ち落とされたワイバーンはレイダークラヴが集め、食事として食り始めているがこれ以上陣が持つことはない。

あくまで国境警備を兼ねた防衛陣であり、本格的な侵攻に対応できる機能など有していなかった。

3.2. 兵の質が戦争の質

東進軍正式部隊およそ 15万、そしてロウリア海軍400隻、さすがにレイダークラヴに任せるわけにもいかず、クワ・トイネとクイラの海軍で対応できると思えなかった。

だからこそ海軍は一切手を出さず陸上へと上がってくる場所で待ち受けるのが最善で、船舶である以上上陸できる場所は限られそして上陸中は動きが鈍い。そして上陸箇所さえ特定できれば、それこそ罠でどうにか出来てしまうのだが、そこまで時間をかけるつもりもない。

航海技術が未熟な時代は 海難事故 はつきもの、星が見える夜でも突然の浸水によつて船が沈むことも、火の不始末で炎上する事などよくある ことだ。

それが魔信を行う暇もないほどであればなおさら好ましいのだが、それを行うには日本が実行しなければならぬ。

日本を選んだのは目的となるだろう港周辺住民の全国民の退去だった。船団の数ではなく、上陸できる場所は非常に限られ、ムー国の手で訓練名目で無理やり住民と家畜を全て移動させた。財産や建物に損害が発生した場合、全て太陽神の使いが保証するとして有無を言わせなかった。

ムーは最低限として、クワ・トイネ及びクイラ内にある自らの施設に攻撃した場合、十分に反撃及び報復を行うとロウリアに通達していた。

もちろんロウリア軍の将軍や騎士団長などは恐怖し従おうとした。パールディアやレイフォルなら偶然や幸運が味方し勝てるかもしれない。しかし列強第二位に座する存在にまぐれでも勝てるはずがない。

ロウリア海軍の船上では、夜間警戒といつても、元々の兵の質や戦力差から緩み切っていた。

「クワ・トイネに着いたらどうするよ」

「金と飯だな！」

「はは、女だ女。金もいいがこれはゆずれねえな!!」

これから起る略奪や蛮行に心を弾ませていたが、航路から予想していた通り、住民どころか家畜一匹いない港に着岸しなだれ込むように上陸。残されていた物資や食べ物を奪う事は出来た物の、人影は何一つもなく不満が高まっていった。

末端の兵士や兵士長が文明国を、そしてムーの強さを理解できるはずもなく、港には人影はなく、食料や品物程度で満足できるはずもなく、うつぶんの溜まった兵士達は、ムーの管理する施設に殺到するのは必然であった。

「ここはムー国の施設だ！ 一体何の用で武器を持って訪れる!!」

それさえもかまわず、ロウリア軍の兵士達はムーの施設に襲い掛かり戦いに陥った。

「撃て撃て！」

「近付かせるな！」

「ぎゃー！」

二線級とはいえ銃器を持つムー国の兵士、しかしあくまで物資の輸送などを行う施設故に大規模に配置はしてない。

矢の雨にけが人が続出し、弾切れに陥り切り込まれた事で兵士と作業員は殺され物資は奪われ破壊された。

何一つ価値の分からない設備、価値が分からない為ほんの少しの高価な食器などを奪い、残りは火をつけて荒らしまわった。

そしてそれを知った司令官や将軍は青ざめるも、もはや手遅れであった。

武装中立を認識できるのは第一文明圏及び第二文明圏の文明国家のみ。文明圏外国家にとっては、どれほど恐ろしい相手か理解できずはすもなく、その名だけでは恐れる事は出来なかった。

ムーは動く、奪われ破壊されたモノへの代償を支払わせるために。

パーパルディア王国でとうとう事態が加速した。

魔道都市に住む皇族によつて管理され一年、混乱こそ起きてはいるものの、治安の安定と農作物や鉱山資源の収入量は倍以上に膨れ上がった。

だからこそ今までの政策が大いに間違っていたのが明確になり、皇族たちを大いに悩ませ、ルディアス皇帝に進言するもそう簡単に変えられるわけもなく、むしろルディアスの気分を害するだけであった。

明確に皇族とルディアスの間に溝が生まれ、皇族は静かに信頼できる貴族や軍人を集め新国建国への準備を始めた。

一方で日本が考えていた連邦制については早々にとん挫した。余りにも基本的知識量の低さと、国民性の低さから大多数を纏められる人材がいなかったのだ。

理性的な国家とは国民が正しく情報を理解し、知識を持っている事が大事になる。よくて近代程度のパーパルディア王国と属国ではまだまだ早すぎた。

だからこそ有力な貴族や軍人の中から聡明な者を選び、各地の臨時代表として文明の火を灯す役割を与えた。まずはそこから始めなくてはならず、連邦制に移行するには1世代以上はかかると予想されている。

都合と手っ取り早く文明を高める方法などなく、これからも日本政府は他国の文明について苦慮していく。

封鎖軍事都市

ミリシアル及びムー国の軍務大臣が会議を求め、魔帝に勝てるかと太陽神の使いに尋ねた。

はつきり言ってしまうば現状では抵抗するのが精いっぱい、勝つ事は無理だろう。日本が弾道弾を迎撃する事だけをしたとしても、正直難しい。

「不可能でしょう。コア魔法に対してあなた達は対応ができません。コア魔法だけを我々が対処したとして、現状ではまだまだ力が

足りません」

はつきりという

「太陽神の使い様にとって、ラヴァーナル帝国さえ恐ろしくなく、きつと楽しめるような相手なのでしょうね」

「いいえ？」

笑顔を崩さず太陽神の使いは言葉を紡ぐ。

「面白いから、楽しいから軍備や技術が続けている者はいません。恐ろしいから軍備を続けるのです。ほんのわずかな油断で多くの国民を助けられずに殺され、そして奪還するために多くの軍人が死にました。油断など露程もせず、延々と準備を続ける以外被害を抑える事などできないのです。油断し失う事こそ恐ろしいのですよ」
いくら高圧的に出ても、攻めてこないという油断はあった。だからこそ対馬を一時奪われ、島民は皆殺されてしまった。

だからこそ二度と油断してはならない。それが過剰ともとれる準備をし続けているのだから。

ムー国 国営競技場

航空機動は技術と体力が物が言う。だが驚異的な心肺機能と精神力、そして高G状態でも操作を誤らない体力と筋力が居る。まだ完全に整備されていない為どうしてもそうなってしまふのだ。

そんな状況では体力づくりが大事であり、あらゆるトレーニングを行おうちに変態が集まり始めた。

「バルクアップ！ もつと負荷を!!」

「あと何回！ 何回!?!」

「はいラスト!」

自然とボディビル競技会が始まり、これに関しては別段秘匿する情報ではないため情報を公開。

1. 筋肉に効かせる
2. 重量を求める
3. しっかり追い込む

初のボディビル選手権では一般の参加者はごく少数で軍人がほとんどであったが、興味本位で訪れた男女はその光景に魅了された。

「腹筋グレネード！」

「筋肉がどんだん迫ってくるようだ！」

「筋肉の集団面接だな。　凄まじい!!」

暑苦しいまでに猛烈に盛り上がり。それはもちろん軍人向けの筋肉とは言えないが、遊戯としてムーに広がり、プロテインや科学的に体を壊すようなことだけは教えるために、日本マッチョ&フィット協会の協力の下、日本トップのビルダー達による実演トレーニングが行われるようになった。

「カット（筋組織）と神経システムを意識する事が」

「一生懸命トレーニングするだけではダメだ。必要なのは、賢くトレーニングすること」

参加者たちは好んで体を鍛え、やはり余裕がある列強だけはあるが、マッスルによるマッスルの為のマッスルの競演、華やかや騒ぎがあるわけではなく、淡々と筋肉を鍛え熱量が上がっていく。

戦うためではなく魅せる為の筋肉、最初は高価なライセンス生産による器具にはムーの企業は乗り気ではなかったが、参加者たちによる暑苦しい熱望に　ミリシアル及びムーの合弁会社　を設立し製造される。

魔法や科学による発展とは異なり、野蛮と揶揄する者もいるが、天然のものである肉体を極限まで磨き上げた美、それに心惹かれる者がいるのも確かであった。

33. 攻撃

ムーはミリシアルに話を通したうえで行動を開始した。

死んだ人員の死体の回収だけではなく、破壊され奪われた物資の補填の為、そして武装中立であるが故に、被害を受けた明確な反撃の為に。

実戦訓練を兼ねた空母打撃艦隊をロウリアに、復興の為に物資を積んだ小規模な艦隊がクワ・トイネに向かっている。

ロウリアとて退くに退けるわけもなく、兵士を集め大急ぎで本国に帰還し防衛体制を整えようと慌て始めた。

全てのロウリア兵が引き上げ、侵入者に荒らされ破壊されたクワ・トイネの港町は酷い有様であったが、全住民を移動させていたため人的被害だけはなかった。

正確には、ほぼ、全てのロウリア兵であり、一部は勝手に軍を抜けて港町に居座り野盗まがいのをしようと考え集まり始めていた。

クワ・トイネ公国からは守護騎士団団長イーネが責任者として、ムーからは特別編成の一個中隊と共に討伐に当たる。

クワ・トイネ側としても観戦武官としての側面もあるが、仮にも国内である為騎士を派遣しないわけには行かなかった。

「抵抗する者は射殺して問題はない。民間人に手を出す犯罪者を一人たりとも逃がさぬように！」

「了解！」

訓練の終わっている歩兵ではあるのだが、特務部隊と違って練度は期待できない。それ故にムー国陸軍と空軍の中から選りすぐった対都市侵攻部隊が頼りだ。

M1ガーランドなど自動小銃を持っていると言っても、狭い都市部で奇襲を受ければ剣に対して絶対的に優位とは言えない。

銃器を持っていないながらも、突如家々や室内から飛び出してくる相手に、少なくとも死傷者を出しながら港町に潜んでいたロウリア兵たちは駆除された。

一月後、ロウリア沖にはかき集めた400隻の帆船艦隊、そして対するはムー国空母打撃艦隊。

改装軽空母ヨージユン 1隻

防空巡洋艦ラ・トーネ級 6隻

視界に入ったたった7隻にロウリア軍の海兵はその少なさに嘲つたが、船長など将軍職の者は少なからずパーパルディア皇国のガレオン船と魔道砲を知っており、勝てるとは思わなかった。

「今すぐワイバーンの支援を求めろ！ ありつたけだ!!」

「オールを出せ！ 全速で接舷し白兵戦を開始せよ!!」

出来る事は接舷し白兵戦に持ち込むか、ワイバーンによる火炎攻撃しかない。

ロウリア海軍の総司令官シャークンは出来る限りの命令を下すが、背を流れる冷汗と震える手を必死で隠していた。

「ロウリア海軍、接舷を試みるようです」

「各艦砲撃を開始せよ。 魔信で30分ごとに降伏勧告を忘れぬように」

艦橋から状況を確認していた士官から情報を伝えられ、ロウリア軍の支援であるワイバーンが到着するまで20分、その間に始まったムー国海軍による砲撃は、ロウリア軍の弓では届かない距離から甲板機銃による銃撃、そして対艦対空両用の30mm連装砲による砲撃によって、オールで速度を増し接舷を試みる帆船は一隻たりとも接舷に成功していない。

それどころか弓矢の射程にさえ入れず次々と攻撃を受け沈没していた。それとてムー国海軍にとっては射撃及び砲撃訓練にしかかなりえない。

「レーダーに反応あり。 接敵までおよそ30。 ワイバーンのようです」

CICはまだない為、艦橋で情報を収集し即座に司令官へとあげ

る。

「航空隊発艦開始。 他の艦は防空戦準備」

旗艦である空母ヨークタウンから命令を待っていたD21艦載機が次々と発艦、直掩機だけではなく全機がワイバーンの迎撃へと向かった。あくまで艦載機の性能、されどワイバーンなど相手にならないのだが、しかし400騎という数の暴力に抗うのは難しい。

「甲板員は至急船内に移動せよ。 繰り返す甲板員は至急船内に移動せよ」

艦が慌ただしくなる中、航空戦を繰り広げ圧倒的差で撃墜していく。とはいえ相手は400に対してこちらは34、100近くのワイバーンがムー艦隊に迫っていた。

「対空戦用意」

「対空砲及び対空機銃員は最終確認せよ」

射程範囲内に近づいた事がレーダーでわかるとともに、対空攻撃が開始。

突如始まった攻撃にワイバーンの竜騎士達は対処できず、魔信で指しを乞う事さえできず体をワイバーンごと撃ち抜かれ海面に落ちていく。

「なんだこれは!?!」

「爆裂魔法か!! 全騎最高高度に逃れる!!」

「手前の船に攻撃を集中させろ! 高空に逃げてもやられるぞ!!」

ムー国でも近接信管はまだ開発中であり搭載されていない。しかし時限式信管はすでに作られており、防空圏内に入ったワイバーンは導力火炎弾を口部に発生させる事も出来ず、爆発する対空砲弾によって体を碎かれるか対空機銃によってミンチになっていく。

「だめだ……。 第二列強相手には手も足も……」

ロウリア海軍総司令官はシャークンはでに勝敗が分かっているが、それでも王命を違えるわけにも行かず、防衛戦故に撤退命令を出せるわけもなかった。

二時間もかからぬうちにロウリア海軍は壊滅し、海上に浮く多くの兵士はムー国の船に救助された。

日本式に習い一応の救助活動は行うものの、すでにムー国の兵士は殺されているのだ、丁寧に扱えるわけもなく、殺されたり暴力を振るわれないだけマシな扱いをされることになる。

数日後、ムー艦隊はロウリア王国には到着しておらず、近海で補給を行いながらある兵器の準備を行っていた。

それは日本としても使うかどうか会議が為されていたため、輸送が大幅に遅れていたことが原因だ。

大規模戦意破壊兵器 強臭気タイプ S

正式に戦争をするには手間がかかり過ぎるし、何もしないのは武装中立を保つことなどできない。少なくとも十分過ぎるほど後悔させなければならぬ。それ故に選ばれた戦意破壊兵器。

ラ・カオス二世 爆撃型 がD21に護衛されながら連日 王都上空から散布し徹底して戦意をへし折る。

すでに防空の為にワイバーンなど全滅しており、防空などないに等しい状況、吐き気を催す悪臭漂う王都。

魔導士総出て洗い流しても匂いは残り、そして翌日にはまた散布されてしまう。

勇敢に戦って勇敢に死ぬ。そんなロマンも何もなく抵抗できずにただ悪臭が漂う、何をどうして戦意を保てばよいのだろうか。

「くそ、なんでこんなに」

「うるせえ。黙ってる。臭くてイライラしてんだ」

「蠅と鼠が、畜生が」

寝ても覚めても飯を食っても酒を飲んでも女を抱いても、ひどい悪臭が漂う王都では精神を追い詰められるだけで、武勲も何もない。

虫は集り鼠は集まり、誰も戦死しておらず、城門を破られたわけでもない。それでも手も足も出さず事が出来ない上空から投下される吐き気を催す液体、そして井戸の水を一切使用する事が出来ないの喉が乾き、戦いになる前に心を徹底してへし折られてしまった。

「屈辱だ。だが、これ以上兵の戦意を保つ事は出来ん」

將軍として兵の戦意の低下を防ぐ事などできず、眠る事さえ妨げられる悪臭に精神的に参り始めていた。

それでもなおムーは攻撃の手を緩めず、ロウリア王国の求心力は落ち王都を出ていく住民は増えてゆく。

戦意破壊兵器を投入されて2週間、凄まじい悪臭から食欲を失い、睡眠は妨げられ、精神的に参り切ったことからロウリア王国は降伏を決定した。

「……申し訳ございません」

ロウリア王国の竜騎士団団長 近衛兵団長 王国騎士団団長 魔道騎士団団長 その全てが王の前に跪き、許しを請いっつも元々勝ち目のない戦いを理解していた。

「ムー国に謝罪をせねばならん。ムーの施設を襲った者を一人残らず調べ上げ、捕えるのだ」

手も足も出せず、それどころか姿さえ見せず王都の戦意を徹底的に砕かれた。王が好む湯浴みさえ悪臭の前では意味をなさず、川も井戸水も余りの悪臭から飲む事さえ厳しい。

家畜も馬も、そしてワイバーンさえもはや弱り切り、戦う力など残っていないかった。

「心得ております。現在厳しく追及し、襲った者達を探しております」

ロウリア王国はムーに謝罪する為に襲撃した犯人を捜し出し、責任者である小隊長や中隊長と共にその首を差し出すという手を選んだ。

戦にすらさせてもらえず、戦う力を徹底して削がれるという屈辱、奇襲以外では同じ土俵にさえ立てさせてもらえないと差を見せつけられることに、ロウリア王国は列強と言う存在をはっきりと知る事になった。

ムーの賠償要求こそいまだ不明なもの、悪臭に耐えられず王都を出ていく国民は多く、抑え込む兵士さえもはや士気は無いに等しい。あと数日続けられるだけで戦わずして国家が崩壊してしまう事態、抵抗などできるはずもない。

クワ・トイネ公国やクイラ王国は戦争の終結に一安心こそしたが、ムーの庇護下に入ったわけではない。再び攻めてくるのは明白ではあるのだが、身を守る力はいまだなく、ムーに対してなんとか支援を受けられないかと外交交渉を行っていくことになる。

それでもなお、ムーは武装中立であり属国を持たない国家、技術支援という考えもなく植民地でもないクワ・トイネやクイラに対して出来る事は限られる。

ムー国 軍事都市

ムーの戦車技術者は中戦車開発において、そもそも転輪が間違いではないかと発想に至った。

重量を支え安定した走行の為に転輪を増やした結果、構造が複雑になり重量増加と速度が落ちているのではないかと考え、重量を支えるのには適しても速度を上げるには不適切であると。

その為車体を支える転輪を大きくして数を減らし、車体を短くして駆動輪の位置を変更、新たな懸架方式を試みるなど新たな可能性を模索し始めている。

懸架方式や駆動輪についてムーの技術者達は研究熱心であり、あと一步で日本が教えていないタイプの中戦車が生まれそうであった。

34. 危険

ミリシアルの失敗があった。アニユンリール皇国本土の制圧は完了した。だが隣接する大陸には大規模な都市や軍事基地がない為、二線級の戦力を持って制圧を進めていたのだが、魔物の軍勢による襲撃を受け部隊は損害を被った。

第二大陸には魔物の研究所があり、小規模ながら多数の基地もあった所を見くびり過ぎていた為なのだが、徹底した抵抗に苦戦を強いられていた。

「現在第二大陸の制圧が遅れています。増援の要求も来ております」
国防省長官であるアグラ・プリンスンは、新しく就任したばかりで前任者の失策に苦労していた。

「第二師団から抽出し増援をだすように、兵器に関しては試作機のテストを兼ねて送るように。……太陽神の使いから何か連絡はないか」
担当官は暗い表情を隠すことはない。

「いえ、何も連絡はありません」

日本にとって関わる必要もなく、第二大陸でのミリシアルの苦戦も油断に過ぎない。グラ・バルカス帝国との戦争が起きる時間的猶予の中に集中的に戦力を投入すればよいだけのこと。

例え遅れたとしてもあまり手を貸し過ぎるのも良くない。せいぜい頑張ってもらうだけであった。

「それで、研究は進んでおるのか？」

ムーの封鎖軍事都市にミリシアルの技術者もいるため、ムーが誘導弾の製造を成功したことを知っており、同じく概念を知っていたミリシアルの技術者も長らく研究開発を続けていた。

アニユンリール皇国から回収した誘導魔光弾もあるにはあるのだが、ただ生産する事は出来ても内部のプログラムを理解するにはまだまだ時間を要することがわかっている。

自国生産したものの方が改造するにも理解するにも事が良く、対艦用ウルティマー、対空用クウ・ウルティマーが製造されている。

性能こそムー製の物よりも少々上回る程度ではあるのだが、対艦用

を持つているのはミリシアルだけである。

「価格こそ難がありますが、実用に足る物は出来上がっております。アルファ3を標的にしたのですが、命中率は8割を越え、現在量産体制に入っておりますが、やはり大量に生産するには希少魔金属を使いますので」

「構わぬ。財源を確保し新造艦には優先配備できるよう取り計らうように」

「新鋭艦のオリハルコン級についてですが、建造はやはり2隻まででよろしいのでしょうか」

軍務大臣が恐る恐るミリシアル皇帝に伺いをたてる。

「誘導弾を見たであろう。時代が砲から誘導弾へと変わる以上、国威となるモノは2隻でよい。航空母艦に防空艦に注力をするようにせよ。それよりも例の人員は選別してあろうな？」

「はっ！ 現在各軍から信頼できる者達の選別を進めております!!」

ミリシアルは第一列強であり、だからこそ理解しても居た。

強権を振るえるのも、多くの文明圏があまり戦争をしない事も、ミリシアルの威圧による強権があつてこそ。

それが崩れてしまえば文明国家同士は新たな列強になろうと大規模な戦争を始めかねない。

パールディア皇国

皇族たちが秘密裏に準備を続けている中、ルディアスが気付いてしまった。

すでに魔道都市に移動し戦力があるとはいえ全体の3割程度、それでも外征と属領への威圧を考慮すると鎮圧するには危険な戦力で、何よりもワイバーンオーバード部隊と新鋭竜母の艦隊までも離反しているのが致命的であつた。

日本では会議が行われ、どのようにして秘密裏にレミール派を優勢にするのか議論がなされていた。大義や意思はあつても戦力や物資に関しては、予想よりも状況は良くないというのが現在の判断とな

る。

だからこそどうするのか。魔道技術は上回り幸い兵器工廠のデュークは配下にあるが、資源については属領である程度は補えるものの、アルタラス王国から魔石を大量に得るしかない。

余りにもかかわりを限定し過ぎた事から、直接手を下せる方法が限られている。その為少し手を広げなくてはいけない事態に陥ってしまった。

日本

ある技術者が発想を359度転換した上に斜め88度に視点を変え、チープ戦車に積む砲がないなら、砲を積まなければいいじゃないかと考えに至った。

ラムアタックを主とし、速度と前面強度を重視すればよいと主張。高速で前進し、装甲車両を含めた障害物をラムで破壊し侵攻するのみ。そして各種掲示板や情報を集めて議論を重ね、歴史の中に埋もれ発見された計画し試作された戦車。

つまり ラムティーガー である。

元は工兵用であるが、体当たりするのは危険とはいえ無人戦車であるなら何も問題はない。

しかし戦車とはC F E条約第二講で大まかに決められ、それに当てはめると砲塔も砲もないので該当外になる。ただし製造国が正式に戦車であると認めてしまえば、戦車になってしまうという曖昧さもある。C F E条約を順守するならそのような不利になる事を言うなどあり得ないが。

クラウドファンディングによって順調に資金を集め、いざ製造に入る為の最終仕様決定となったところで、ラム、つまり衝角部分の決定について大いに揉めた。

ドリルを主張する者や傾斜装甲のドーザーブレードを薦める者、大型の射出式杭や大型回転のこぎりなど、衝角攻撃を好んでも多様な考えがありまとまりが無くなりつつあった。

第三文明圏外

レイダークラブ族、日本からしてみれば兵役に協力してくれる友人であり、彼らにとつては圧倒的捕食者である水竜族やシーサーペント達から逃れる術である。

相互契約ではあるのだが彼らにとつては安全の対価であり、人手が不足している日本にとつてはありがたい存在であつた。しかし移動に難があり彼らは単独では車両を動かせず、陸上の長距離を移動するのも困難、遠隔操作による車両運搬を頻繁にするわけにも行かない。

そして安全を得られると言う事で集まるレイダークラブも増え、クワ・トイネ公国とクイラ王国に出稼ぎと言う形で傭兵に出てもらつている。

クワ・トイネ公国ではかなり驚きと警戒があるものの、ギム防衛に手段を選んでいる余裕がなく僅かでも戦力を求めていた。

ロウリアの休戦は一時的なもので戦力が整えば再侵攻を行うのは目に見えている。しかしムーは中立であり軍事的協力はせず、兵器の販売もしないと通達している。列強どころか文明圏国家との繋がりもほとんどないことから手詰まりと言えた。だからこそ見た目は力ニそのものであるレイダークラブ族でさえ、クイラからの傭兵を除けば数少ない協力カニであることに違いはなかった。

状況をどうにかしようと、クワ・トイネ公国とクイラ王国は外交官や將軍を積極的に文明圏国家に外交に向かわせることになった。

35. レイフォルの行動

以前ムーで起きた技術流出事件。

この事件を徹底的に調べ上げたところ、同時期にスクラップとして廃棄されたはずの製造機械も一緒に流れ、レイフォルではマリンには劣るものの初期の複葉機が作られていた。この時がレイフォルの絶頂期であったともいえる。

ムーに並ぶ時が近いと大々的に発表し、すでに生産配備されたものがレイフォルの上空を舞うなど最新鋭の戦力として国民に知らしめていた。

つまりムーから姿を消した技術者はレイフォルに居ると言う事になるのだが、すでにムーでは第二世代ジェット戦闘機の全域配備とまでは行かないものの、首都など重要地域には配備が始まっていた。それ以外の地域でも隼が主力であり、複葉機ではもはや相手になるはずもない。

マリンはすでに旧式であり地方軍からも引退が始まっている。運用されているのは初期訓練用や極々小さい基地のみ。もはやムーはレイフォルを相手として見ていなかった。それよりも迫りくる危機への準備をするためにアルーや空洞山脈周辺では建設ラッシュが続いていた。

第二文明圏 ムー大陸

ムーの航空技術者が発展した技術を使用し、自ら産みだしたD2 1、性能は高くないものの決して悪くもない。固定脚は構造にも余裕があるので悪路でも離着陸が可能であり、布製で軽量なため滑走路も短く済む。隼とは異なりエンジンも信頼性重視で精密に調整された燃料である必要もない。

レイフォルではそのような事を知らず、ワイバーンロードから複葉機へ主力を改変するため産業を改変し、大量生産と共に空港の整備を始めていた。

そして情報は少ないものの鉄製の軍船建造まで始まっている。物

的に流出したのは確かに複葉機程度であるが、知識を知る技術者そのものが離反したことで、軍事面が主流であるがレイフォオルは急速に発展し始めていた。

「我々はパーパルディア皇国を越え、第三列強のエモール王国さえも超えるのだ。その為にはムーと並び立つ力をムーから奪わなければならぬ」

レイフォオルの皇帝は第一列強となる夢を見る。

しかしグラ・バルカス帝国に敵うわけもなく、パガンダ王国は現在グラ・バルカス帝国の艦隊により攻撃を受け壊滅。

レイフォオルでは戦列艦に竜母にワイバーンロードを集め、パガンダ王国を滅ぼした相手に報復を行うため準備を進めていた。

列強でなければ対応できない大艦隊、そして編成されたばかりの複葉機さえも加え、絶対の自信をもって迎撃が可能であると考え、故にレイフォオルではすでに戦勝式とパガンダ再制圧のための準備を進めていた。

日本

戦車と言えばドイツであり、日本の最新鋭戦車も大いに参考にしているし、レオパルドのライセンス生産までしている。

戦車の始まりはイギリス、唯一の空挺戦車を日本国内で製造し、新型空挺戦車の開発が進んでいる。

現在の戦車の形の基本を作ったのはフランス、しかし日本国内においてフランス系戦車はない。

ドイツとイギリスの兵器企業が戦車の実績を上げる中で、フランスの兵器会社は日本国内で様々な広報活動をし、開催した発表会では様々な人々を集めては必要性を訴えた。しかし問題が発生、そもそも有名な戦車がないのだ。

ドイツは良くも悪くもテューガーやマウスなどがあり、さらに戦後はレオパルドシリーズなど極めて知られている。

イギリスは戦車の始まりで、一旦遅れたとはいえ独自のチョバム・

アーマーをもつチャレンジャーシリーズがあるし、その複合装甲技術は秀でている。

だがフランスは大戦中に有名な戦車はなく、戦後もルクレール以外はさほど名は知れていない。

ただ、ごく一部の層から猛烈な押しがあり、ARL44の要望と共に予算が集められ製造が決定された。塗装の指定まではあったが、さすがに製造されていない90mm砲は不可能で、ロイヤルオールドナンス製105mmを採用する。

暗黒大陸

マラストラスは魔王を失い、魔王軍を失い、自暴自棄になっていた。その命を捧げ、邪竜の復活を考えはじめ邪龍復活を目指し火山に向かい始めた。

36. パーパルディア皇国とパールネウス国

第三文明圏

ファイルアデス大陸では国家が二分するという事態に陥った。

これはルディアス皇帝と他の皇族の意見の相違によるものであったのだが、具体的に割れる結果となったのは皇国民の意思でもあった。

「新たな皇帝を！」

「我らに食事を！ 生活を与えてくれる皇帝を！！」

奪うのではなく育てて上等な上澄みを得る。それが新たな皇族がとった手法であったが、それが今までの国家方針と大きく違った。

《誇りがあれば食い物が少なくても生きられる。 誇りがほとんどなくても食べ物が十分なら生きられる》

だからこそそれなりに誇りを保てる属領法の下、食べ物優先して生産させる。そしてそれを実行するために魔道実験都市で得られた知識と技術を大いに活用する、魔石を使った蒸気機関車による大量かつ迅速な輸送、計算された農業計画、農機具の安価な貸し出しなど、食料を優先しつつも外征を使用しない国富を優先した結果であった。

搾り上げれば疲弊しますます搾れる量と食うところは減る。しかし肥えるまでは行かないものの手間暇をかけて適切に育てれば搾れる量も食う所は増える上に忠誠心まで付く。

安定して搾れる量が増えれば兵士も貴族も楽が出来る。どちらが長期的に見ても利が大きいかは深く考えるまでもない。それが理性的搾取国家というものだ。

正式に皇族は声明を出し、魔道都市によって実験が行われていた属領とともにパールネウス国の設立を発表した。

「新たな女帝レミール様に忠誠を！」

ほぼ同等の文明、変わらぬ軍事力、しかし確たる戦力差、されど拮抗する程度の兵力。何よりも最新鋭の竜母ヴェロニアとワイバーンオーバーロードは工廠都市デュロに配備され、その軍はレミール派の皇族に忠誠を誓っている。ルディアスとておいそれと手を出せるわ

けもない。

勝てないが負ける事はない戦力、日本は密かに助力する為ムーを紹介することで、食料と魔石資源をアルタラス王国及びクワ・トイネ公国から買い付け、輸送する手はずになっている。

元よりアルタラスにクワ・トイネとクイラからは資源を膨大に買い付け国内貯蔵する予定だが、それを一部前倒しにすることで、レミール派に物資を融通する。該当国の産業を少々荒らしてしまうが、売る品物から情報まで困る事はない。

クワ・トイネ公国

「ムーから連絡があり、文明国家から兵器売却と食料購入の打診が入っております」

ムーからではないが、ムーを介して文明国家が一部技術を買ってくれるという喜ばしい情報であった。

「ワイバーンロードを20頭、固定式魔導砲を10門、戦列艦を20隻。弾薬や砲弾などは別途購入するようにとのことですよ」

日本がムーを介して第二文明圏文明国家から入手した物資ではあるのだが、文明圏外地域の文明圏外国家であるクワ・トイネ公国では超兵器であるだろう。

「しかし、食料は2000万トンを要求されており、ムーの輸送列車の協力を得られないと難しいかと」

対価は食料、それもかなりの量の買い付けであるが、ムーが敷設した列車を利用すれば不可能な量ではない。輸送に借り受ける費用は掛かっても、国防を考えれば比較にならないほど重要なものが得られる。

「ムーの外交官殿に話し合いの場を明後日以降に設けたいと連絡を。各担当官には2000万トンの用立てする方法と兵器輸入について緊急会議を行うと通達をするように」

アルタラス王国

「さらに魔石を5万トンだど!？」

近年発注量が増えているミリシアルを介し、伝えられたさらなる取引量、膨大だが日本の本来の貿易量から考えれば微々たるもの。

「はい。そのような連絡が来ており、東方にある文明国家からの発注とのことです。ミリシアルからの依頼である為、断るのは少々難しいかと」

不可能ではないものの難しい発注量、しかし断るのは難しい先からの依頼となれば悩みは深い。

「……他国や商人への売却量を減らすと通達と交渉を。発注先へ優先するように根回しするのだ」

王は頭を抱えてはいるのだが、第四列強のパーパルディアでさえ第一列強には逆らえず、第一列強からの命令とあれば横暴な事をアルタラス側に言う事などでできず、嫌がらせくらいはしてくるだろうが、そのような事に構って発注量を減らせる相手ではない。

一月後、工廠都市デユロに大量の物資が未知の鉄の輸送船によって届き、何事かと輸送責任者を呼び出したところ、差し出された書面には、聞いた事もない名前の文明国家からの支援物資はレミール宛であり。

《民の平穏な暮らしを愛する女帝へ》

などと書面が添えられ、物資支援と魔道都市の技術の一部の譲渡が条件付きで書かれていた。

A・リンドヴルムや3銃身マスケット銃など元々魔道都市の防備に使われていたものであったが、魔導馬車に使われていた動力を利用した列車など革新的と言えるものを製造できるようになるのは力となる。

とはいえ情報と技術が使用できると言っても、運用するのも生産するのも時間が掛かる、出来る限りにらみ合いの状況のうちに用意が出来なければ押し切られるだろう。

だからこそ急がねばならないし、公式に支援者が居るために手出しが難しい事を皇帝ルディアスに理解してもらはなくてはならないのだから。

37. 列強統合空母打撃群

旧アニュンリール皇国保有の第二大陸では神聖ミリシアル帝国による討伐中、

ムー大陸ではグラ・バルカス帝国による侵攻戦争への備えで慌ただしく、

ファイルアデス大陸ではパーパルディアの分裂による内乱寸前、

第三文明圏外ではロウリアとクワト・イネ及びクイラがにらみ合
い、

お世辞にも世界は平和と言える状況ではない。

事情はあれど日本がそこら中に手を出した結果ともいえるのだが、潜在的に先送りにしていた問題が発露したともいえる。

なんにせよ、日本はある程度の平穏な状況を望んでいる為、少しづつ対応を考えているのだが、ファイルアデス大陸はレミール派に支援をはじめてはいるがまだ時間を要する。

ロウリアは末端の兵士の無法で一旦引いた、海軍と竜騎士こそ損害を負ったものの、陸軍はまだ数が残っているため、危険な事にはかわりが無い。食料と資源を守る為にムーを介し、兵器の輸出を行ったが最低限自衛程度は出来るだろう範囲に過ぎない。同盟を頼める文明国家を見つけるなり、食料と資源を利用してムーに保護とまでは行かなくても自衛できるだけの力を求めるなりすればよい。いつまでも日本が守れるわけではないのだから、自衛する努力をしてもらわなくては。

ムー大陸ではレイフォルの軍備拡張の為、文明国家は自衛の為に不穏な空気が流れている。ムーは武装中立の為に強化すると近隣の文明国家に通達していたが、レイフォルはそれに当てはまらずいつ侵略を始めるかわかったものではない。平和は程遠く、どの国家も軍備の充実へと傾いている。

むろんグラ・バルカス帝国相手には役にも立たないが、少なからず自衛を考えるのなら間違った行動ではない。過度な拡張は問題ではあるが、自国を自分自身で守るという意思を持たないのも問題であ

る。

ムー国は空洞山脈を通る線路の敷設にドーソン基地の強化、新型蒸気列車による物資輸送網の強化、各基地へのレーダー配備と戦力強化、そして設備の習熟に急いでいた。設備や道具は作って終わりではなく、習熟運用する為の時間が必要として軍官民間問わず開発ラッシュが進んでいた。

ファイルアデス大陸

「なぜ一気に押せぬのだ！ 元は同じ皇国兵士だぞ!!」

皇国軍最高司令であるアルデは執務室の机を叩くも、戦略を練ろうとしても人手の問題ですぐには軍を動かせなかった。

自由に動かせる主戦力の3分の2は敵に持つていかれ、残っているのは属領軍や二線級部隊ばかりで再編成しなければ侵攻は出来ない。

「監査部に話を通して全て徴兵するか。それでなんとか兵力差は1.5倍を確保できる」

いまだにらみ合いの状況から物資や人員の確保など、ルディアス皇帝から命じられた制圧に向け準備を進めていく。

メガフロート

ミリシアルとムーとの会議や物資搬送の為に作られた人工島。

日本で作られたチープ兵器群、そしてそれを扱うために両国から信頼できる者達のみを集められた。

総数はたった一個艦隊、されど精鋭ではなく信頼できる者達、チープ兵器を運用する為に必要な高度な知識を教えたとしても、漏らす事も悪用する事もない同重量の金よりも価値がある人材。

日本タンカー改装軽空母 1隻

ハリアーIIACV 20機

汎用チープ誘導弾 Mk. 3 500機

ミリシアル帝国 ゴールド級改装空母 2隻

現在では訓練用に使われているそうりゆう型と比べてもかなり劣るものの、それでもミリシアルとムーの技術のみで構成された世界初の潜水艦、外観は可能な限りおやしお型に近付けている。

これが計算通り稼働すればグラ・バルカス帝国は高い吸音性と潜行性から対処不可能な恐怖を味わうことになる。

むろん日本にとっても実験潜水艦な面があり、魔導技術と機械技術を組み合わせるとどこまで性能を伸ばせるのか、どの技術が利用できるのかを調べる目的となっている。

38. パーパルディア戦争

「パーパルディアの名を捨てた愚かな者達！ その反逆者共が集うデュロの奪還を行う!!」

ルディアスは皇族が新たな国を建国したことを認めず、属領に最低限の兵士を残しかき集めた戦力をもって陸から侵攻を開始。パーパルディア皇国とパールネウス国の戦争が始まった。

「退くなああ！ 我々の家族を守る為に!!」
「獣たちに我らの家族を襲わせるな!!」

パーパルディア皇国とは異なり、パールネウス国の兵士は属領の志願兵が多く参戦している。

鉱山労働も農業労働も、全てがパーパルディア時代よりも良くなり、食うに困らない程度の生活ができ、横暴なふるまいを兵士や官僚がしないように監視官が送られ、いまの生活を維持する為にはパールネウスが存続するしかないのだ。

パーパルディアに戻ればまた地獄のような生活が戻り、最悪自分だけではなく家族も殺されてしまう。

だからこそ、志願兵の呼びかけには多くの属領民が声を上げ、兵士の数に置いては同等以上とも言えるまでに増えていた。

「突進！ 止まらずに敵陣を駆け回れ!!」
「根性ある奴だけ付いてこい!! 勇猛さを知らしめろお!!」

パーパルディアは牽引式魔導砲を使用を試みるも、さらに強化されたA・リンドヴルムは構わず兵士の中を突進し、パーパルディアのリンドヴルムを倒すとA・リンドヴルムに随伴する銃兵や槍兵が腰の引けた敵兵をどんどん倒していく。むろん討ち取られ脱落していく者も少なくないが、パーパルディア皇国が誇る陸軍の重厚陣形は崩されていった。

空中ではワイバーンロード同士が戦い、同等のはずがすれ違った瞬間大きな銃声と共にパーパルディア側のワイバーンロードが落下していく。

「また一騎やられたぞ！」

「同じワイバーンロードなのに！ 糞が!!」

大したことではない。今までワイバーンの導力火炎弾の撃ち合いから、大型マスケツト銃によってパールネウス側が狙うようになっただけである。

気付いてしまえば簡単な事、しかし気付きにくく専用の銃の制作やそれを扱う訓練は簡単なことではない。

長砲身の魔導散弾マスケツト銃

1. 5 mもの長さの銃身と後ろ込めであり、口径もやや大きい。

だが慣れてしまえば確実にワイバーンと乗り手を殺傷できてしまう。

導力火炎弾はワイバーンロードが疲れる上に、飛行軌道が単純になる。

しかし銃を使うためワイバーンロードは負担なく自由に飛び、竜騎士は銃の弾込めと発砲によって軌道はまったく異なる。その利点が圧倒的に既存の竜騎士を上回っていた。

知識と運用の違いでほぼ同等のはずが力の差を広げていく。それを理解してしまったたからこそルディアスに近い皇族以外は、全て魔道都市に赴き新たな国家の建国を選んでいたのだから。

パールネウス国 臨時首都

「現在戦線は優勢に傾いております。しかし戦死者も多く出ており、物資の輸送もなんとか充足している面があるかと」

報告を聞きながら、皇族達は地図や書類に目を通す。

「もう少し戦線を押し上げ、防衛拠点の設営をするべきかもしれない」

「いや、これ以上国民に被害が出ぬ様、和平交渉も始めるべきだろう」

「支援物資はあるが、一部は属領に回し生活上に回すべきだろう。」

その策定も始めなくては」

その様子を代表に祭り上げられてしまったレミールはなんとも言えない表情で見ている。

皇族がこれほどまでに行動をするなど、今まで育ってきた中で見て

ことなどなかった。元よりパープルディア皇国建国の為、国民を牽引し能力がある者が皇族となった。少なからずその血統を牽いていたという証拠でもあるのだが、長い事政治よりも皇居で遊樂に勤しんでいたのを見ていたレミールからしてみれば、考えもしなかった姿であった。

「レミール、何か言う事はないのか？」

「浅学な身では驚く事ばかりであり、私が言える事などございませぬ」
何も言わぬレミールに同じ皇族である父から問われるも、いまだルディアスに対する思いが残っている以上、何か言える事などなかった。

「いまはそれでよい。だがいずれは女帝になる以上、政治と軍事両方を理解せねばならんぞ」

いずれは女帝として国家を治めなくてはならない。その事はすでに決定している事であった。

ムー 軍事都市

ムー国内において様々な技術開発が進んでいる中、魔王討伐に使用されたTOGシリーズの開発は中止されているが、それを嘆く者達が居た。

魔王との戦いにおいてM4シャーマン戦車・ガンキャリア自走砲・TOG重戦車は大きな戦果を挙げ、技術は繋がれているがTOGだけはそれがなかった。

魔王との戦いを記録した博物館は大いに人気があり、連日混雑しているのだが説明を受けている人達は、大破している状況のTOGの復元もしくは後継機を望んだ。

国の要職に就くものや技術者達はその声を聴き、停止していたTOG重戦車後継機開発が静かに再開される。

日本

ラム・タンク

荒れに荒れたのをまとめたのは、潤沢な資金力がある人物であり、ラム部分をアタッチメントにして交換すればいいじゃないかと提案した。

アタッチメントを別途クラウドファンディングにかける事で、さらなる予算と運用費を稼ぐ事も出来、全ては資金を集める広報力に左右される。

大々的な広報や趣味人の集まりによって動画なども作られ、砲撃を突破し勇敢に体当たりするドーザーや、巨大な杭によって戦車を撃ち砕く姿、設計や材料によって少々形は異なるモノの、それでも最終仕様がまとまり始めていた。

その中、戦車である以上砲塔があるべきだという意見も出てきた、強力な放水砲塔を搭載する再設計も施され新たな形になり始めていた。

囚われない自由な発想、その全てが込められた異形の戦車は静かに独逸面や英国面の濃縮された知識によって形作られていった。

39. 国家から州へ

「荣誉あるレイフォルの戦士よ！ 我らに逆らう蛮族の首を取りに行くぞ!!」

確實なる勝利を得る為グラ・バルカス帝国の艦隊討伐へと、船員たちは声を上げ、建造されたばかりの新鋭装甲艦レイフォルを筆頭に大艦隊は西へと向かう。

100隻の戦列艦と20隻の竜母、列強第五位であることを示す大戦力であった。

大艦隊が出港して丸一日後、見えてきたのはたった一隻の戦艦、たった9門の砲、僅かでも先進的知識があれば必死に逃げた事だろう。

現在のムーならば、地方艦隊の艦長でさえ戦う事を扱はず、本隊の救援が来るまで機関が壊れようとも全力で逃げまわる事を選ぶ。

グラ・バルカス帝国最強にして最大の戦艦 グレードアトラスター、ムーでも相対するには空母打撃艦隊もしくは習熟訓練中の最後にして最大の超弩級戦艦が必要だろう。

「蛮族どもに我らの力を見せるのだ!!」

「敵艦発砲!」

「この距離で届くものか！ それよりもワイバーンを全て攻撃させろ!!」

ムーの戦艦によく似ている、だからこそ少しでも知識がある総司令官は油断をする部下と異なり、たった一隻の敵艦に艦もワイバーンも全てを消耗する覚悟をしていた。

列強第四位のパーパルディアでさえ、列強第二位のムーには手も足も出ないのだ。眼前の、恐らくムーと同等と思われる相手に、旗艦である運用実績もない装甲艦1隻に戦列艦の群れ、勝てるはずもない。

魔信によって総攻撃と司令官の声が伝えられ、風神の涙によって艦隊は加速する。彼らは勇猛であった。果敢であった。しかしそれだけであった。

グレードアトラスターは主砲を使う事もなく、副砲及び艦サイドの

機銃で艦隊は沈んでいく。戦いにすらならない。狩りですらない。ただ寄ってくる虫を振り払うため無造作に出した手が生命を奪う、そんな行為によって戦列艦は沈み、ワイバーンロードは撃ち落とされる。

そんな中最後の一隻の戦列艦が降伏旗を上げ、グレイドアトラスターは攻撃を停止、ほぼ接舷するほどの距離に近付いたその時、片舷すべての砲が撃ちだされた。連続した砲撃音と噴煙は一時帆船を隠してしまうほどすさまじい物であった。

2分ほどして海風によって煙が晴れたとき、グレイドアトラスターは傷一つなく佇んでいた。

艦長や船員が啞然とする中、片舷すべての機銃掃射によって戦列艦は微塵になるまで碎かれ、卑劣な行為への報復としてレイフォルはグレイドアトラスターの対地砲撃によって陥落。

軍事拠点や皇城などが砲撃によって徹底的に破壊されたものの、市街地はそれほど被害はなく、むしろ激しい砲撃によって住民は逃げ出していたため国民の人的被害はそれほど多くはなかった。

レイフォル内でも遠方の基地や属領の兵団は空爆によって戦力を削られた後に到着した陸軍によって壊滅。そう言った戦いがあったのも最初の一カ月程度であり、三か月もすれば抵抗勢力は消え去った。

軍艦と共に多くのグラ・バルカス帝国の兵士が到着し、市民は集められ財産は没収されていった。

「貴様らはこれからレイフォル民ではなく、グラ・バルカス帝国人となる。蛮族の身でありながらグラ・バルカス帝国国民になれるという名誉に感謝し、身を粉にして働くがいい！」

そして順次グラ・バルカスから輸送船が到着し、移住のために元居た住民は都市の隅に追いやられ労働に駆り出される。次々と運び込まれる工作機械や工業製品、工廠が作られムー大陸制圧に向けた準備が始められた。

もはや名前ではしか残っておらず、グラ・バルカス帝国領レイフォル州として第五列強は失われ、運よく生き残っていた皇族や貴族などは

悉く処刑され全てが終わりを告げた。

グラ・バルカス帝国 レイフォル州仮設司令部

グラ・バルカス帝国外務省はレイフォルが従えていた従属国家への対応を始める。威圧によって従うなら管理官を送りこみ傀儡化し、従わないのなら兵を送り制圧し国家を消滅させる。

過激ともいえる手法ではあるが、迅速にレイフォル陥落に伴う混乱は収束しまとめ上げた。外務省の現場責任者であるゲスタの手腕とも言われているが、実際には陸軍及び空軍の的確な威圧や攻撃によるものだ。

頻繁に派遣依頼の書面が送られてくるためため息を付きながら陸軍司令官であるファンターレは内容を確認する。

「またか。 一個師団を派遣する準備をしろ」

一方で対応している陸軍及び空軍はその度に駆り出される為、嫌気がさし始めていた。外交を司るモノがしっかりとしたこととせず、手軽に武力という手段を講じる為任務が多いことから物資の集積や錬成が中々進んでいないのだ。

「それで、列強第二位 ムーの軍事情報は手に入れられたか？」

諜報に出ている部下からの報告を受け、書類に目を通す。

「入国そのものは成功しております。 しかし情報は地方部隊だけではありますが」

白黒写真にはムーの主力機でもある隼とD-21が写されていた

「単翼機があるのか。 見た目はアンタレスと似ているが、性能はどうだ」

「アンタレスに似ているものは大よそ530kmかど。 武装は口径は不明ですが本体に二基のみ確認されております」

実際には軽く550kmを超える速度が出るのだが、都市上空や速度よりも近接航空機動による訓練を優先していたため知られていなかった。

むろん報告された速度が限界とは考えてはいないが、大よその推測の役には立つ。

「アンタレスとほぼ同等とはな。もう一機は、固定脚か。こいつはどうだ」

帝国では水偵以外ではもはや見る事のない固定脚機。

「400km程度を確認されております。しかし短く劣悪な滑走路でも離着陸が可能らしく、各地に配備されている事が判明しております」

「400kmとはいえ、そのような戦闘機とは厄介な。小さな航空基地でも運用できるとなると、全てを排除するのは相当な労力を要するぞ。スパイには配備数や拠点の割り出しにも注力するように連絡をしろ」

D-21、ムー国では機体の生産が終了し保守部品のみ作られているのだが、やはり場所を選ばない離着陸能力は敵対する予定であるグラ・バルカス帝国の現場指揮官は高く評価した。

判明している航空基地ではなく、小規模だが隠蔽しやすい多数の航空基地から都度攻撃を受けていては、兵士の疲労は積み重なってしまう。

例えアンタレスより性能が劣るだろう機体といっても400km以上ともなれば、数が相手となれば油断は出来ないのだから。

40. 1639年 第四列強とは 責務とは

「魔道砲の護衛をすこし下がらせろ！ 周囲にはAリンドヴルムを2体は護衛につけておけ!!」

「3・2・1 砲撃！」

「二斉砲撃開始！」

撃ち上げられた魔導砲弾がパールディア皇国の陸戦部隊に降り注ぐが、範囲は狭く防衛線を牽いているパールネウス国側にリンドヴルムと歩兵部隊が迫る。

「リンドヴルムが突っ込んでくるぞ！ 予備の魔導砲を撃て!!」

慌ただしく数体のリンドヴルムに魔道砲を向けるも、精度の低い魔道砲ではほとんど当たらず、突破してきたリンドヴルムについては、Aリンドヴルムが正面から迎え撃つも、重量物同士がぶつかり合う強烈な音が鳴り響き、近くにいた兵士達が吹き飛ばされる。

「銃砲兵！ リンドヴルムに向けて撃て!!」

パールネウス国の銃砲兵が魔道マスケット銃で支援を行い、リンドヴルムの皮膚を貫き血が噴き出す。それでも数発では倒しきれず、絶叫の雄たけびを上げてさらに暴れ回った。

「もつと撃て！ Aリンドヴルムは部隊に配備されてないんだ!!」

空では大型銃を使うパールネウス側のワイバーンロード部隊との交戦は難しいと、パールディア側の一部のワイバーンロード部隊が強行突破しパールネウスの地上軍に迫っていた。

「ワイバーンが抜けてきたぞ！」

「散開！ 散開しろお！」

数を力に強行突破したパールディア側のワイバーンロードの動力火炎弾がパールネウス側の歩兵を焼き払う。

「竜騎士団は何をやってやがる！」

小隊長が恨みを言いながら空を見上げると、パールネウス側が少しずつ駆逐しつつあるものの、やはり数に押されて戦況は良くないようだ。

「Aリンドヴルム隊は突撃準備！」

戦線を一部構築し直し、正面戦を行っている部隊とは異なる。現場から進言された無謀な攻撃なれど、戦意が高過ぎるとはいえ、数に差がある現状では採用する以外道はない。

戦線は一進一退が続く中、パーパルディア側の資源が枯渇し始めた。これは大した理由ではない。元より工廠都市デュロが主に軍事物資を生産していた中、それを皇族側が主要都市の一部として取り込んでいたため、備蓄で戦っていた故であった。

戦力も軍事力も当初はほぼ同等、しかし流し込まれる支援物資と新技術によつて生み出される一步進んだ兵器、その状況で物資まで枯渇し始めれば余裕があるうちに大規模な攻勢を考えるのは必然であった。

皇城では陸戦の前線とは異なり、新しく入ってきた海軍の情報に頭を抱えていた。地方艦隊も、監査艦隊も、主力艦隊も、全てをかき集めた艦隊を出向させ海からデュロを目指す準備を進めているという。さすがにこれには対応できるほどの艦隊はない。あくまでデュロにあつた新鋭竜母艦隊と地方艦隊のみ、それでは抗う事など到底できず、どのように対処すべきか議論が重ねられていた。

日本

ミリシアルもムーも介入する事は出来ない。列強同士が表立って他の列強に介入するのは宜しくない。だからこそ日本が動くしかなかった。名も知れぬ東の果てにある太陽神の使いに従う文明国家として。

日本としてはこれが一番最適な解であつた。前世界でもやったことだが、太陽神の使いが直接動き回るには目立ち過ぎる上に影響力が強すぎた。だからこそ属国と名乗った方が都合が良い、最も恐ろしい力を持った国の属国なら多少動き回っても、それほど恐れられ敬われることもなく影響力も低く思われる。

神聖ミリシアル帝国に話を通し、偽装として太陽神の使いに従う新興国家としての証明を発行してもらい、遠隔操作ロボットを準備す

る。

スモールデザインでイベントや一般のお店で利用されている、B玩具メーカーが作ったSD Gシリーズ及びZシリーズが構造強度の改良や機能の追加に簡易武装化などを施し運用される事になった。

一応は革新的デザイナーが新たに基礎デザインをしたものの、公募の結果投票数ほぼ0で敗北。今となっては革新的等謎の意見を述べるデザイナーの仕事はほぼなくなっていた。

第三文明圏遠洋

今のパーパルディア皇国の海軍は破綻寸前、其処に無関係の国家の船が、大量の物資を積んでいるとなれば、襲う以外選択肢などない。

だからこそ、日本はミリシアル帝国との大商いを利用し、ミリシアルにはアルタラスから借りれる船を全て調達してもらい魔石を満載、その受け取りと支払いの為に出向したアルタラスの船団と共に日本のイージス戦艦扶桑はミリシアルに向かった。

アルタラスによる大船団は日本の予定通りエストシラント沖近くを航行中、パーパルディア側のワイバーンロードの哨戒に引っ掛かった。

20隻もの大船団、その中には魔石だけではなく食料もそれなりに積まれている為、パーパルディアにとっては重要なものが山のようにある。

「アルタラスの輸送船だ！」

「物資を奪え！」

だから襲う事に海軍は躊躇せず、急ぎ拿捕する為に100隻もの船団を差し向けた。船団の最後尾から10kmほど離れた位置にイージス戦艦扶桑が居る事を気付かずに。

41. 1639年末 実験

パーパルディア皇国の海軍はアルタラスの船団に向かっていた。

「魔信から、アルタラスの船団になぜ接近するのかと、名も知らぬ国家から通信が来ておりますが」

「放っておけ！ それよりも今は目の前の物資を回収するのだ!!」

気にかけてもなお、戦争を継続するには物資を得なければならぬ。名も知らぬ国家からの警告の魔信など無視して当然であった。

列強であるという事が名も知らぬ文明国を軽んじてしまった。

返答がないままアルタラスの船団に近付いていくことから、警告は何の意味もなかったようだ。とはいえそれだけパーパルディアが予定通り疲弊しているということでもある。

「汎用チップ誘導弾MK3用意」

「設定は艦船、20機は飛行物体に設定」

MK3誘導弾は扶桑の後部にある甲板に手作業で並べられ、次々と海面に出ると旋回しパーパルディア皇国の海軍へと向かっていく。統制機のみ情報が入力されており、海面から50cmの高さを飛行。20機のみすでに飛行状態にあるワイバーンロードに向かい高度を上げていった。

十数分後、統制機に装着されている安価なセンサーが標的を感知、同時に統制機同士で連携し標的を各スレイブ機に振り分ける。

いづらか魔道マスケット銃を持つ兵士も居た、だが海面近くを飛行する物体に気付いたものは少なく、なおかつそれが敵性物体であると認識できる者はいなかった。

1000円程度のカメラ、1500円程度の小型マイコンボード、10万円のガソリン飛行機、800円のBT装置、30万円の爆薬、安価な兵器は制御され海面ぎりぎりの船腹に接触し自爆。開いた大穴に海水が流れ込み船が次々と傾き沈んでいく。

「何が起きている?」

「わかりません！ 次々と船腹で爆発が起こり沈んでいます!!」

ワイバーンロードに搭乗し、空から周囲を確認していた竜騎士達は状況を理解できず、そもそも拿捕が目的だったためワイバーンロードは数体が飛行しているだけで、そのほとんどは竜母と共に沈んでしまった。

「隊長！ 何か飛んでき」

爆発音が鳴り響きその続き言うことなくその竜騎士はばらばらになりワイバーンと共に海面に落ちていった。視線を周囲に向けると小型の竜のようなものが迫ってくるのが見えた。

「小型の鳥爆弾か!? 全員よけろ!!」

動きは遅く十分に振り切れるだろうと考え、ワイバーンロードに命じ降下しながら速度を上げる。

ワイバーンロードは個体差があれど最大350km、汎用チープ誘導弾は最大で180km、しかし決定的な差があった。

「くそー！ どこまでも付いてきやがる!!」

「振り切れ！ 速度は遅いんだ!」

相手は疲れた様子を見せず動きに迷いが無いのだ。降下し速度を上げて、翼で態勢を整え直し羽ばたき加速する以上、急加速急減速に急な方向転換が出来る以外、常に効率的飛行を続けられる飛行機械に対しては勝機はない。

ひたすらセンサーが検知する標的を追跡し、接触の衝撃で爆発する。羽ばたく故に飛行速度が安定しないワイバーンロード、導力火炎弾を撃ち合うしか存在しない航空機動、それで逃げ切れるほど1500円のマイコンボードAIによって操作されるレシプロ小型飛行機の運動性は悪くない。

何よりもセンサーの感知範囲が広い統制機によって、位置情報を伝えられたスレイブ機は追跡を続ける。

「このー！ 落ちろ!!」

竜騎士は接近してきた物体を斬ろうと腰に下げていた剣を振り下ろしてしまった。その直後設定を超える衝撃を受けた飛行機は爆発し竜騎士とワイバーンロードは爆発に飲まれ、体をバラバラにしなが

ら海面に落ちていった。

「だめだ！ 攻撃せずに距離を取れ!!」

必死に逃げ回るもあくまで生物、飛行機械を引き離す生物的な航空機動が出来ても、無理をすればするだけ早く疲れてしまう。

警戒に当たる事で残っていたワイバーンロード14体、その全てが逃げ回るも10分もしたところに全てが海面へと没した。

その日、パーパルディア皇国の海軍の過半数が沈んだ。鹵獲し物資を補充するつもりが、唯一確実な優勢をとれるはずだった海軍にとつて、この損害は致命的と言え、ここから徐々に国力を落としながらパールネウス国によって力と領地を失っていった。

日本

長らくおとなしくしていた日本に移住を決めた外国人の中で、露西亞から来た人たちは特に少なく、軍事企業もライセンス管理をするための小規模な合併会社が一つのみ。

露西亞というよりスラブ人として念のため血を繋ぐためだったのだが、他企業が大きく活動する中彼らも動き出した。

しかし自前の工場はなく小規模の研究施設があるのみ、そこで放映され人気を博した戦車であり歴史と実績のある KV-2とObj. 279 が選定された。事実クラウドファンディングでは相応に資金提供も受けた。

各部品の製造を委託せねばならないなど苦渋の選択もしなければならぬが、街道の悪魔を多目的無人戦車としてその大きさを利用する事、それがもつとも実用性があるとして、障害物除去・偵察部隊補給・緊急補給物資輸送・無人運用と他企業とは大きく異なる。

各企業に問い合わせ必要な部品の調達

保守用130mm滑腔砲の選定

155mm榴弾砲の短砲身への改造

装甲材の選定及び委託製造

基礎車体の発注

無人運用に向けたAIの開発
世界初の無人自律戦車を開発した国家として、新たな運用方法の模
索が始まっていた。

4.2. 1640年初頭 外交？

グラ・バルカス帝国との外交

領事館設営による情報収集と内部かく乱、少しでも戦時費用を下げ最悪回収ができる資源の選定でもある。戦後に国家から得られる情報よりも、通常時に隠す事が出来ない所まで調べ上げ、賠償として得るつもりであった。

巨大飛行船ML86X、運用・保守・訓練・予備を含めて4隻、無理な運用をすれば一度に2000トンの物資を輸送可能であり、十分実用性があるとして性能の向上への研究と2年に1隻のペースで製造されている。

現在2隻を持ってグラ・バルカス帝国 本土に向かっていた。レイフォルなどではなく、すでに場所も判明していることから態々手間をかけるつもりはない。増槽タンクを装着し、最悪な事態を想定していた。

グラ・バルカス帝国 本土が地平線の果てに見えてきた地点、いまだグラ・バルカス帝国側は気付いていないようだが、こちらから判明しているグラ・バルカス帝国の通信回線に割り込む。

「こちらは太陽神の使い。 外交に訪れた故に250m級飛行船が離着陸可能な地点への誘導を求める」

通信と共にアンタレスなどの警戒機が近海に配備されている空母から上がり、飛行船の周りを飛び回る。即座に攻撃を仕掛けてこないだけの理性はあるようだ。

通信機及びアンタレスからの誘導を受け空港に着陸、空港ではタラップから外交官が降りるがしかし一名しか降りない。

全ては用意された5頭身のG及びZシリーズの自律遠隔操作ロボット、なんであれここは敵性国家、SDタイプの自律操作兵器による護衛を受ける。

外交官は1人のみだが、護衛兵器であるG及びZは腕に9mm短機

銃が直接マウントされ、肩にはカールグスタフが積まれている。物々しい様ではあるが、全高が1.2 m程度しかないので少々アンバランスなのは否めない。

ただし恐怖も何もなく外交官の安全を最優先で行動し、最悪な事態では交戦による強硬手段を行う。

「おい、あれはなんだ？」

「人 には見えないが、わからん」

異形の物体にグラ・バルカス帝国の兵士や空港管理官は困惑していたが、後部ハッチが開かれ、大量の徘徊型自律兵器タイプSDが下ろされると驚き動きが止まった。

最悪な事態を発生させないよう、相応の威圧効果と共に兵力の移送を行っていた。

その頃、外交を行う為外務局へと案内されたものの、1人の外交官に対してグラ・バルカス帝国側は不快な感情を隠す事はなかった。

「我が国に外交に直接訪れるとは不敬ではないか！」

「前もって連絡もなしとは、蛮族な事だ」

高圧的に出てくる外交官、これだけ軍事力を見せてもいまだ差が分からないらしい。とはいえ軍部は大慌てであった。秘匿していたはずの本土へと、直接外交に現れたのだ。それも本土を任されている軍部にとっては致命的であり、責任問題及び防空や防海についての再確認など内部をひっくり返す勢いであった。

「ふむ。 あなた達が秘匿している本土の場所が判明していながら、良き外交をできないようですね」

太陽神の使いとして複数の写真を取り出してテーブルの上に広げた。

「直接帝都に赴き、グラ・ルークス皇帝陛下と謁見を申し込んだほうがよいでしょうか？」

それは帝都の航空写真と、皇帝グラ・ルークスの近影写真であった。

「……………」

グラ・バルカス帝国の外交官達は何かを言いたくとも、驚きとその事実によって言葉が出なかった。帝都内、それも皇帝の側近近くまで

スパイが入り込んでいると理解するには十分であった。

実際には前世界で得られたもので、スパイが入り込んでいるわけではない。これはただの脅しに過ぎない。

「さて、対等な外交を致しますか？ それとも他の方法を選びますか？」

テーブル席の向かいでにこやかに話す太陽神の使いに対し、高圧的に出ていた外交官達も黙り写真を見ながら考え込んでいた。

まずは皇帝近くにいるスパイを排除しなければ、下手な事をすれば身の危険が伴う。この場でも慎重に発言を選び、可能であればどこまでスパイが入り込んでいるのか知らねばならない。

高圧的な外交から一転して慎重な外交が求められ、全員が冷や汗を流し始めていた。

着陸している空港内の許可された範囲内とはいえ、飛行船を守る様に徘徊型自律兵器SD 50機が完全に動きを同調・連携している。乱れもなく警戒している動きは見事なもので、空港では別の軍部の者達が慌てていた。

「情報技官！ あれがなんなのかわからんのか!!」

「アレはなんだ。なぜあの大ききで稼働できる」

遅れてきた情報技官が遠巻きに写真を撮る事で記録したり、メモを取ったりとしているのだがわかるはずもなく、非常に小型とは言え見た目は戦車であり、搭載されている機銃は紛れもなく銃器、ラジコン操作されているかもしれないということくらいしか理解は出来なかった。

外交に来ている為に目立った行動も出来ず、分解解析も出来ない為その程度しか分からないというのもあるが、何よりも外務局から慌てて送られてきた職員から、敵対行動ととられない事の一切を辞めるよう止められたのが理由であった。

4.3. 外交を装う

グラ・バルカス帝国本土にて、外交の為に三日ほど駐機してるのだが、日に日に情報収集する技術官が増え続けていた。

「何かわかったか？」

「さっぱりだ、どうやって動いているのだろうか」

「上はどうするつもりなのだろうか。一つでも手に入れられれば色々分かるのだが」

見ただけで構造が分かるはずもなく、大よそラジオコントロールであるくらいしか理解は出来なかった。技術官はその差に恐れるものの、軍人達にとっては例え操作されていようが小型の兵器だと見下していた。

グラ・バルカス帝国が誇る2号戦車ハウンドIIや2号戦車シェイフアーIIの方が優れていると言うが、警護向けの小型でそもそも装甲車両を相手にすることを目的としていない。

三日間ほど待たされている間、グラ・バルカス帝国側では連日連夜に渡るスパイ探しと外交策に奔走していたが、スパイが見つからない事に手が出せず、いたずらに時間を消耗しているだけであった。

「では、スパイの確認は出来なかったと？」

「はい。全員身の潔白が証明できており、盗聴器どころか写真機さえ確認できておりません」

グラ・ルークス皇帝に仕える者達の身边を徹底的に洗ったものの、誰一人怪しいものなど居らず、スパイ探しはすぐに暗礁に乗り上げた。元々スパイが存在しないのだから見つけようもなく、無駄に時間を浪費しただけに終わるのも当然であった。

「もうよい。下がれ」

会議場では担当官だけではなく、外交から軍部に監察まで相応の責任者が集まった。

「諜報力は我々以上とは」

「今以上の身辺調査となると、時間はさらにかかる」

「今回は外交を受け入れるのはよいだろう。ではどうする」

外交としてどこまでを行うのか。世界に宣戦布告をする以上、その範囲が重要になってくる。領事館の設営とまでとするか、何かしらの交易に条約とそう簡単に済ませられる問題ではない。

「相手の軍事力を知りたい。双方に領事館設営までを求めたい」

「本土に領事館を設営を許せというのか！ そのような事をすれば軍事技術を盗まれかねんぞ!!」

各部署からいまだかつてない事態に責任者の面々も苦勞し、五日目にはグラ・バルカス帝国本土の中でも東岸領にある空港に隣接する形でのみ、領事館の設営と外交特権について認めるに至った。

領事館設営はグラ・バルカス帝国にとって異常な速度で進められた。

二度目の飛行船の到着と共に組み立て式のユニット住宅及び3Dプリンターによって5日と掛からず建設、自動化された建設作業機械や小型機械によって融通された上下水道にもスムーズに接続された。

完成した領事館には荷物に紛れ込ませ、各種小型兵器も運び込まれてはいるが、グラ・バルカス側では余りにも未来的過ぎて持ち込み品を簡易チェックする監査官では判別する事が出来なかった。

「では、まずは一般的な食品等から始めましょうか」

「こちらとしては、その自動機械というのを輸入したいのだが、まずはそんなところだろう」

グラ・バルカス帝国として、何度も見た自動作業機械などを求めてはいたが、日本として許可するつもりなどなかった。今後の取引で検討するとオブラートに包んで言う事で断りつつ、交易が開始された。

数々の交易を兼ねた食料品の一部に、こつそりと日本はある代物を混ぜた。国家に多大なダメージを与えてしまうのだが、戦争を継続させない事にも繋がり、さらにこちらの都合がよい人材を得る事にも繋

がる。

危険な合法缶飲料 モンスターゼロ・ストロングガード

500 ml

アルコール度15%

カフェイン含有量40 mg

アルギニン150 mg

各種旨さと依存性を感じる添加物

狂ったパンチ力と廃人さえ納得してしまう劇物。飲み口は非常に良くアルコール感はあるものの癖は弱く、疲れと共に理性が吹っ飛ぶ強烈な効果。某合法ドラックと言われるドリンクさえ超える凄まじい依存性と、企業に依頼して作った戦意ではなく国家を滅ぼし兼ねない代物。

日本国法では問題なく合法の範囲内ではあるが、倫理観から考えれば非常に宜しくない代物。日本国内で販売は決してできないのだが、戦争物資として許可製造がおこなわれていた。

4.4. 静かな侵略 訓練という名の

食品の交易によって美味しいという評価がグラ・バルカス帝国内で広がり、二か月に一度の交易では大幅に供給量を増やしている。

安価に、美味しく、大量に、グラ・バルカス帝国内に流れ込み、産業にダメージを与え始めていた。そして静かに広がる合法缶飲料、グラ・バルカス帝国の酒よりも安く、何よりも非常に良く酔える。高価な類の酒を買うことが出来ない一般兵士に広まり、そこから民間へと広まっていった。

一度飲んだら忘れられず、仕事終わりに飲めば疲れもストレスも吹き飛びご機嫌に過ごせる。そんな酒が安く手に入るのなら、少々無理をする者が出るのも仕方ない事、監視任務や交易物資の受け渡しの際に、いくらか優先的に融通してもらえよう接触をしてくる者が少なからず出始めていた。

その中から使えそうな立場の者達には個人的に融通する代わりに、領事館敷地内から出る事がほとんど出来ない為、情報を対価として求めた。

個人感覚では特に問題がないと情報と考えても、多方面から情報を少しずつ集めてしまえば、それは十分な裏付けと国家機密となりえる。

正面切つての戦いが戦争だけではない。国民は商品で、外交官ならば言葉で、国家間なら国力で、それが戦争でもある。

だからこそ、法外な値段で裏取引されるクスリのように、正規ルートを外れて販売される合法飲料缶は時に非常に高価になり、手に入れる為情報は多く入ってきている。

一方でグラ・バルカス帝国側では保存技術が優れていない為、飛行船で運ぶにしろ長期保存できない為限られたものしかない。時計や飲料などを一応輸出しているが、そもそもあまり人気もないため購入する必要もなかった。前世界において種子など植物の輸入も完了しており、必要としているものなど何も無いに等しい。

それ故に硬貨の流出を危惧するグラ・バルカス帝国は手を尽くそう

とするも、貿易赤字など対策を取ったこともなく、気付かれぬようその間にレアメタルを使った装飾品や調理道具の製造をグラ・バルカス帝国の企業に依頼し、購入する事で少しずつグラ・バルカス帝国から持ち出していった。

「それでは、今回の取引はこれで」

グラ・バルカス帝国にとつても価値のあるレアメタルから、まったく価値を理解できないレアメタルを使った調理道具や装飾品を、正規のルートをもって堂々と飛行船に運び込む。

むろん対価としてグラ・バルカス帝国側が求める多く求める合法飲料缶や食料を下ろし売却。

「確かに。それで、これは？」

グラ・バルカス帝国側の担当官は納入品目録を確認し、記載にない合法飲料缶が50個ほど木箱に入られているのが目に入った。

「人気だと聞きましたね。 少しでもだけおすそわけです」

そして広がる汚染、徐々にだが確実に飲料によってアルコール中毒者が増えつつあり、兵士の規律や工場の生産力はミスによって低下しつつある。気付かないほどほんの少しずつ、気付いた時には手遅れである様に。

ムー大陸

時が近いとしてアルーでは住民の退避が推奨され、空洞山脈に近いリュウセイ基地に物資が運び込まれていた。

戦車や航空機の優先配備、M4中戦車やM4駆逐戦車にM4自走砲にM4対空自走砲はもちろん、隼とD-21を優先的に輸送している。あくまでジェット戦闘機は主要都市及び重要工業群が優先配備されている最中、ムーの工業力ではいまだ万全とまでは行かなかった。

優先配備されている中には日本から融通されたARL-44戦車5両、そしてコンテナに納められたチープ兵器群があった。コンテナを開いてボタンを押せば稼働する簡単なチープ兵器に限られるが、

操作も簡単であり用意されていた。むろん入り込んであるスパイから隠すため、布や板などで隠し輸送されているが。

「本当に、奴らは来るのだろうか」

「レイフォルを見ただろう。ムーに侵攻してくる可能性は高い」

部隊の到着を待ち、そろそろ到着の方を聞きリュウセイ基地の駅にて兵士達は整列している。現場の兵達も状況の変化に反応し、厳しくなっていく訓練や増強されていく軍備に、日常が終わり非日常が迫って居る事を感じ始めていた。

「休暇取れっかなあ」

「当分は無理だろうよ。なにせ」

「第二教導団が到着したぞー」

整列しながらも無駄口を叩いていた兵士達は、連絡と共に口を閉じ少々乱れていた隊列を整え直す。

リュウセイ基地に直接乗り入れ可能な線路から、2連結蒸気機関車が牽引する車両に乗せられた戦車が現れる。

第一教導団が各地で訓練を行い、各基地から選別した者達でムーで製造しているM4中戦車を改造したもの、日本で改造したスーパーシャーマンを参考に、燃費を犠牲にしたエンジン出力の強化や、砲塔装甲と砲身長を犠牲にしてイルーレ105mmカノン砲Mk2を搭載するなど、ムーなりに近付けようと試行錯誤したもの。残された時間は限られ、各地では厳しい訓練が行われ軍事力の強化が行われていた。

特に厳しく訓練が行われているのは。

「15ノット標的まで30mもずれているぞ！ 初弾でも10m以内に入る様に落ち着いて計算をするように!!」

艦橋ではなく現代には程遠いもののCICがあり、指揮そのものはここで行われている。

「全力稼働はこれ以上は主機が持ちません！ 出力下がります!!」

「次砲弾装填まで530秒!」

各部から上がってくる報告、巡洋艦で訓練を積んだ者達を選び抜いた人員と言えど、過剰な負荷を意図的にかけている現状では各部

署から悲鳴のような報告が続出した。

「機関部！ 訓練終了までのあと10分持たせろ!!」

「弾頭と装薬の装填遅いぞ！ 気合入れて運べ!!」

機関室では60分の全力稼働によって過熱し、激しい音を立てているディーゼルエンジンに技師達はなんとか保たせようと苦労し、46センチ砲弾と装薬の輸送に主砲担当は余りの重量に滝のような汗を流していた。

ほぼ同じ構造とはいえ様々な問題点に対して手が入れられており、ムー国超弩級戦艦ラ・マトヤ、1番2番砲塔や艦橋は同じだが、ディーゼル機関であり排煙塔は小さく、第三砲塔のあるはずの場所にはムー製の対空砲が大量に搭載されている。

そして日本から融通されている特別な対艦誘導弾が2基だけ乗せられていた。もちろん日本側が実戦テストをしたい目論見もあり、ムーとしては後に対艦誘導弾の載せ替えも考えていた。

封鎖軍事都市

陸軍区

「準備良しー!」

開発の進んでいた90mm戦車砲、素材と技術の問題から計画を変更し参考情報を元に新開発された84mm戦車砲となった。その先行量産品が重戦車BPの76mm砲と換装され試験場に居た。

「最終試験開始!」

BP重戦車は合図とともに広い試験場を比較相手であるM4中戦車と共に走り始める。

速度は劣るものの複数の塹壕や小さな川で少々苦戦するM4中戦車とは異なり、軽々と乗り越え標的前の傾斜地を砂を巻き上げながら駆け上がる。

「さすが我が国で開発した戦車だ!!」

「大分予算も食われているが、なるほど素晴らしい!」

上級将校達が満足げに自国が自力で開発した戦車を眺めている。

停車し砲身を標的のM4中戦車へと向けた。製造中の不具合が発

生し、不要となった為何度も標的と利用されては、溶接で穴などが塞がれ使用されていた。

砲身から発せられる大きな光と轟音、一撃で装甲を貫通し中に確認用に搭載されている爆薬に到達、わかりやすく爆炎を上げ想定通りの威力を発揮したことを示した。

「「おおおおお!!」」

開発に成功した新たな転輪や駆動系を採用し、中戦車の機動力と重戦車に近い装甲を持ち合わせた新規開発中の戦車も順調であった。

空軍区

「また、失敗だったか」

空対空誘導弾、ムー製38式誘導弾を元にトウナンに搭載しようとしていたが、ジェットエンジンのような強い熱源を持たないレシプロ航空機相手には命中精度が酷く低下し、実用に達するものではなかった。

熱源誘導式の初期段階である為、いまだレシプロ航空機を誘導できるだけの性能ではなかった。

日本国内 自律兵器部隊

各種自律兵器による統合運用、しかしどれだけ性能が高いと言っても、陸戦兵器であるため対空及び偵察に難がある。偵察こそドローンと連携は当然しているのだが。

だからこそ自律兵器による対空および防空戦闘が可能なものが求められるのも当然であった。しかし航空自衛隊には航空隊と共に自律飛行する無人戦闘機は存在するが、陸上自衛隊に関すればそれはない。

「システム連携問題なし 対空レーダー及び各種センサー連動中」

牽引車両に搭載されているドローンを制御し、新たに開発された自律型自走砲の運用試験が始まっていた。

45. フィルアデス大陸

パーパルディア、北東からリーム王国にも攻め込まれ、少ない属領統治軍では抵抗も出来ず次々と属領を奪われ、もはや戦争が出来る状況ではなかった。

兵士や属領に移っていたパーパルディア国民は殺され、軍の兵器を奪われ、属領民は支配された。パーパルディア時代よりもっと苛酷に、最低限活用される奴隷から、全て使い捨てられる家畜に。人々は下級国民から奴隷に。

「休戦の使者を出せ！ 返答が来る前に兵力を引き抜いても構わん！！」

「拮抗する程度を残して総員は国境戦に送れすぐのだ！！」

状況を把握した皇族は大急ぎで兵をまとめ上げ、緊急の蒸気機関車を用意し人員の移動を始めた。あと少しで押し切れる最前線を、パーパルディア皇国との休戦を選んでまで。

パールネウス国の貴族からしても、守る義務も何もパーパルディア国の貴族と価値観に大差などないが、せっかく面倒な新たな皇族からの命令に従い、従わなかった馬鹿な貴族を蹴落とし策略にはめ、指示された雑多な方策を行うことで、食料の増産に成功し、鉱山の採掘効率も上がったのに、手間暇かけて大金を産むようにした領地を、隣国の馬鹿どもに荒らされるなど許せるわけもない。

しかし結果だけで言えば、領民からしてみれば守る為に兵力を集め、兵糧をばらまき必死に塹壕の防衛線を張ったことに変わりはない。

「戦えぬ者は平民も奴隷も全員城内に押し込め！ 戦えるものは男でも女でも全員武器をとれ！！」

唯一の古式ゆかしい古城に領民を押し込め、防衛線を敷き領地軍で必死に防衛を行った。武器を持てるなら領民にでも魔道式フリントロックマスケット銃を渡し、塹壕を掘り自らも必死に戦った。

採掘をするのにも、すぐに使い潰すより何度も掘らせ経験を積みさせた方が効率が良い。農業も使い潰すより自ら考えさせ何度も収穫させた方が効率が良い。使い続ければ手慣れてさらに一人当たりで儲けられる量が増える。そう理解すれば、領民1人、奴隷1人として、無駄に消耗をしまえば得られる金銭が減ってしまう。

1人として奪われ、1人として殺されてしまえば、他の領地で稼ぎ権力争いをしている貴族に差を付けられてしまう。

今は新興国家となり多くの貴族の状況がほぼ横並びの現状、上に立つことも簡単だが下つてしまうことも簡単、だからこそ、売つていた恩に親族の伝手を使い必死に救援を求め、防衛の本隊が来るまで塹壕を掘り、三日間必死に持ちこたえた。

元々少ないワイバーンロードも徐々に数が減り、個人所有していたA・リンドヴルムまで駆り出し、疲れ果てそれでも古城に迫るリーム軍に必死に抵抗していた。領主である貴族はただの意地で、兵士や領民は生き残るために、必死に塹壕に籠り戦っていた。

パールディア皇国 属領軍から奪われた牽引魔道砲によつて球形砲弾が塹壕近くに落ち土砂が降り注ぐ、

「退くなー、ここを抜かれると城まで届いてしまうぞ!!」

領主であり貴族の男は浮足立つ兵士達を諫め、マスケツト銃を握り塹壕から上半身を出すと近付いてきたリームの兵を射殺し再び籠る。

貴族の頭にあるのは金と権力、それを守る為に自らマスケツト銃を握り、部下の反対を押し切り前線の塹壕に籠っていた。古城と国境線の間、領民にいくつもの鉱山や農地を放棄させて作った塹壕、さすがのリーム王国もパールディア皇国とパールネウス国の二面戦に、攻めてきている数はそれほど多くはない。

「リンドヴルムがやられましたー!」

「西方塹壕にリーム兵が突入!」

たった一頭、そして戦線の一部を支えていた重要な存在が倒され、一部の塹壕にリーム兵がなだれ込み始めた報告が上がる。

「くそつ、アレを購入するのにどれだけ私財を投じたか!」

領主の悪態と共に兵士達が絶望しかけた時、後方から大きな声が聞

こえてきた。

「増援だ……。増援がきたぞおおー！」

どこからか上がった声に空を見上げると、100体のワイバーンロードの群れが現れ、リーム王国のワイバーンを竜騎士の対竜大型銃によって撃ち落とし、導力火炎弾によって地上の兵士が焼かれていく。

パールネウス国家に従う国家群に敷設されている線路、それによって早急な軍の展開が可能なので侵攻に対処、領民の犠牲は少なくほぼ完全な状況で国境での防衛に成功。

一方で所有していた属領を失い、兵力のほとんどを失ったパーパルディア皇国は、パールネウス国の軍門に下った。

25もの属領を得たりーム王国は巨大となり、属領から奪った魔導砲にフリントロック式マスケット銃の生産設備、それによって正式に第四列強はパーパルディアからパールネウス国となったが、二つの大國がせめぎ合う不安定な情勢となった。

ムーでは日本側が提供したARL-44によって、ある種の技術的ブレイクスルーが起きた。

ARL-44は他の復刻された戦車群とは異なり、砲口径を除いて忠実に再現されていることから、ムー国でもなんとか重整備も可能であり、多面的に戦車に関しての理解が深まるきっかけとなったのだ。

といっても生産効率の向上及び大口徑砲への知識がただけなのだが。

46. 1642年世界11カ国会議

カルトアルパス港　世界会議開催に合わせて各国から集まる自慢の最新鋭の軍船。

そんな中グラ・バルカス帝国が誇るグレードアトラスターが入港した。

「どの船も遺物のような骨董品ばかり。やはり中央世界など言っても所詮はこの程度か」

グレードアトラスターの士官達は見下した様子ですでに入港している魔導戦列艦や帆船をみていた。入港している他の軍船を見ていたそんな中、

「お、おい！　あれをみてみる!!」

「あれは、グレードアトラスターか!」

ムー国の最初にして最後の超弩級戦艦ラ・マトヤ、装甲理論の進化によってわずかながら形状が異なるが、見た目はほぼ同じであり、もつとも大きな違いは蒸気機関であるグレードアトラスターより排気塔が小型で、第三砲塔の代わりに大量の対空砲と誘導弾が積まれていることくらいだろう。

「アトラスターと随分と似ている。あれがムーの船か」

艦橋ではグレードアトラスターの艦長であるラクスタルは、ムーの超弩級戦艦を眺めていた。

「はい。　どうやらムー国は我々と同等の軍事技術を持つとのことですよ」

「技術も近いか。　これは中々の事になりそうだ」

副官も同じく艦橋から双眼鏡を持ちムーの戦艦を見ていた。大衆の目がラ・マトヤとグレードアトラスターに集まっている中、太陽神の使いであり日本として訪れていた戦艦扶桑改型は静かに入港していた。

とうとう訪れた時、日本は分かっているが、ムーは険悪な雰囲気であり、ミリシアルはアニウンリール皇国の第二大陸占領がようやく終

わったことで一息つき安堵顔。

第三列強エモール王国は魔帝復活の情報を伝えるべく焦り、第四列強たるパールネウス国は現在国家の再建で忙しく疲れ顔。

新たな第五列強を勝手に名乗るリーム王国は勝手に訪れ騒ぎ立て。

そして消えた第五列強の代わりにとまでは行かないが、西方地域の代表として訪れたグラ・バルカス帝国の外交官シエリア。

主な議題はラヴァーナル帝国復活の日が近い事。

そしてムー大陸で行われている侵略、そのことに関してミリシアルとムーは共同声明として侵攻停止を求める事であった。

しかしラヴァーナル帝国の復活が近い事を伝えた直後、起きたのはグラ・バルカス帝国による全世界への宣戦布告であった。

「そのような冗談に付き合う暇はないのだよ。侵略を続けるのなら覚悟をするように」

軽くあしらうとまではいかないが、ラヴァーナル帝国を相手にするため軍備を拡張中のミリシアルは、アニウンリール皇国戦で多くの実戦経験を積んだ多くの兵士と、最新鋭戦艦オリハルコン級に空母ミスリル級及びゴールド級、最新の制空戦闘機アルファ4と爆撃ベータ4にはかなり自信を持っているし、正式採用されたガンマ型戦車2も一応の完成を見ている。現在封鎖軍事都市で得た新たな知見を元にガンマ戦車3型が開発中なのも陸戦の余裕に現れ、問題を起こしていた第五列強を減ぼした程度の相手など眼中になかった。その態度はありありとミリシアルの外交官にも現れていた。

一方でムーの外交官は。

「覚悟は出来ていると言う事ですかね？」

ムーは万全の態勢を整え国家存亡の為に10年以上苦勞してきた成果は実っている。大々的に宣伝こそしていないが、陸海空ともに大幅に増強され訓練がされている。

製造コストの問題で首都や主要港のみジェット戦闘機が優先配備されているが、錬成は十分に行われ少数であれば前線配備も可能であった。

「望むというのですかね 容赦のない戦争を。もしそうなら、我々

は武装中立を捨て、最大限闘争を狂宴する準備は出来ている」

ムーの軍人や官僚の中でも、上層部に近い者は限定的に情報が公開されている。正確ではないものの、グラ・バルカス帝国がアルーを奇襲する可能性が非常に高いと。

だからこそこの世界会議において、もしグラ・バルカス帝国が宣戦布告をしてきたのなら、武装中立を捨て受けて立つと言っても良いと伝えられていた。

ムーらしからぬ発言に11カ国会議に参加しているパールネウス国やエモール王国はかなりの驚きを持っているが、ムーはグラ・バルカス帝国が侵略者となる可能性が高い事を知っている。

極東諸国代表として、特段紹介も行われず会議の隅に文明圏国家日本は注目等されず、状況を静かに静観していた。

ムー大陸 ドーソン基地近辺

ドーソン基地はアルー民の撤退の為であるが、隼やD-21が配備され時間を稼げる程度の戦力しか配備されていない。むろん撤退の為に最新の装甲車は優先配備されてはいる。

そして5つの15m級防空塔にはムー最新の対空砲が屋上に設置され、地上から10mの地点には無数の銃眼も設置されムーの技術力としては万全と言えた。いくつかの秘密兵器もあり、そのうち一つは日本が不要になったチープ兵器なのだが、使い捨てタイプの兵器なので回されている。

1つの防空塔、その屋上には他の物とは異なり不要になり改造が施されたCIWS 1Aが搭載されていた。改造と言っても装填弾数を外部式に数万発に変更だけに過ぎない。それでもなお砲身寿命を考えると余裕もあり、レシプロ航空機相手なら過剰ともいえる。

航空偵察を防ぎ、部隊の撤退を支援するための囿であり、最終手段も防空塔指揮官に伝えられていた。

グラ・バルカス帝国本土

現在日本から輸出される食品は供給量の問題から価格が上がり始め、商品を絞りつつ2隻体制で輸送すると共に、ほぼ等価となるようグラ・バルカス帝国にとつて価値のあるレアメタルから無価値のレアメタルまで、企業に調理器具や装飾品として製造を依頼しどんどん持ち出していた。

「この度も購入ありがとうございます。他にご要望がありましたらお願いいたします」

国家として少し言いたいこともあり、価値の理解できるレアメタルに関しては、購入価格の引き上げが行われたものの、輸入した食料品とほぼ同額分を全て調理器具と装飾品を購入していくので、あまり強く言う事も出来なかった。

そのほかにも企業側に色々用意してもらった鉱石類。それを磨いて銅や銀の装飾品に組み込んだ、レアメタルの原石を使った装飾品の数々は次々と出来上がり高額で購入しているので、為替と言う意味ではほぼ等価であっても、金銀に鉱石類の流出は止まらない。

「それですが、また融通して頂けないでしょうか」

合法缶飲料、購入先の企業でも広がり始め、製品製造以来の時に渡してから味を気に入ってしまったらしい。

「少しですが融通致しますよ」

飛行船から降ろされる木箱、200缶ほど納められているのだが、これで新たな情報源を得られると考えれば安いものであった。

「それと、弊社と協力関係にある企業から、一度お会いしてお話をしたいと」

そしていくつか経由企業こそあるものの、軍事企業からも合法缶飲料を手に入れる為非公式な接触が行われ始めた。

封鎖軍事都市

当初の目的を完了し、現在では新技術の開発都市としての側面が強

い。ムー国政府の保証が必要なモノの、都市内に入る事も可能であり現在では封鎖軍事とて言うより、科学発展の為の研究都市となつていた。

空軍区

ムーは余りにも視点が先過ぎたために、自らのジェット戦闘機を落とせる誘導弾を開発してしまった。もちろん有用なもので、ミリシアルのアルファ3にも十分通用する代物であった。

新たにムーでは赤外線誘導方式には限界があるものの、開発を進めつつ別の方式、セミアクティブ式電波誘導を採用したことでレシプロ航空機にもある程度の性能を出せるようになった。

かなり努力してはいるのだが、問題は単発機であるトウナンにはシステム部の小型化が出来ない為搭載が出来ず、現状では機体前部に余裕があるシュヴァルベしか搭載が不可能な欠点もある。もちろんシステム部の小型化が成功次第、トウナンにも搭載する予定ではあるのだが。

42式誘導弾として、地对空・空対空・艦対空用として量産が開始され、システムの小型化に陸海空軍への配備と習熟訓練が行われていた。

陸軍区

市民の要望と停止していた技術開発、最新鋭のムー製試作重戦車、M4戦車の10台分のコストとかなりのモノであったが完成を見た。

最新の67口径84mm戦車砲による高火力

最新技術の照準システムに無線システム

試作段階にある異材をサンドした空間装甲によって生まれる比較的軽くて強固な装甲

大馬力のエンジンによって稼働する高出力の駆動系

軽量化の全てを台無しにする徹底強化され過ぎた重甲過ぎる基礎構造

駆動部の高出力化の意味を無くさせる幅広な履帯と大量の転輪

ムー製のTOGIIである。

魔王戦で功績を上げた戦車の再製造に良き声はあがったものの、新技術の試験を除けば大いに失敗作であり、極度に大型化した戦車については今後十分な計算及びモックアップの製造を経てからの試作の方針となる。

そしてムーの試作中戦車もようやく完成を見た。

新たな懸架装置に大型の転輪のみ利用した良好な履帯

繰り返し改良され初期量産よりも軽量化され精度も良くなった7

6 m m戦車砲

M 4 中戦車と比べて良い整備性

新開発エンジンによる高出力な駆動部

ムー国設計責任者の名を冠した クロムウエル中戦車 である。

装甲こそM 4 中戦車に劣るものの、試験場では他の面において全て勝り、機動性においては隔絶した差があった。

技術供与ではなく自国開発による高性能な戦車に陸軍上層部は大いに喜び、M 4 中戦車からクロム中戦車を主力生産するとして言い出したところで、装甲に問題があると太陽神の使いとして指摘し、増加装甲によって補う事を提案する事になった。

海軍区

順調に技術者達はムーの都市に戻り、各造船所で最新鋭空母と対潜・防空巡洋艦の建造に忙しい。しかし封鎖軍事都市では最新のソナーに爆雷に魚雷の研究と技術を積み重ねていた。

いまだ敵の潜水艦と言う概念だけしか分からないものの、敵国が持っているという事実に対して対応するためには開発するしかない。

元実験開発区

現在では主な開発は終了し、日本が管理しているので静かに兵器の集積が始まっていた。

オイ車甲型

マウス改型超重戦車

ラム戦車甲型

ラム戦車乙型

KV-2型自律支援戦車

グレートパンジヤンドラム型障害物破壊用対地自走爆雷

コンテナ式チープ多連装ロケット砲

汎用チープ誘導弾 Mk 3

等

むろんムーだけでも技術的には優位に立てるが、最悪の事態としてムー大陸の文明国家が、グラ・バルカス帝国の工作によって敵に回る可能性も否定はできない。その場合はムーに対応を願いつつ、日本がグラ・バルカス帝国との前線に出るつもりであった。

ファイルアデス大陸

暗黒大陸で突如火山が噴火を起こした。むろん何が封印されているのかもミリアルやムーさえすでに知っている。

ラヴァーナル帝国でさえ制御を放棄し、封印と言う手段を選んだ邪龍、立ちはだかるモノ全てを破壊しながら南進を始めた。

魂まで捧げたマラストラスのかすかに残った意思に僅かに従い、太陽神の使いを滅するという目的に牽かれるように南へと足を向けた。

47. カルトアルパス会議 グラ・バルカス帝国本土

世界会議にてグラ・バルカス帝国の宣戦布告と共に外交官は退出、グレードアトラスターに乗り込むとカルトアルパス港を離れていった。

その間にも会議は進められ、これ以上グラ・バルカス帝国が侵攻を行うのならば、ミリシアル及びムーによって対応する事を決定。

とはいえ神聖ミリシアル帝国はアニウンリール皇国第二大陸の制圧が完了したばかり、兵士の休養や訓練スケジュールの問題から第二線級の部隊派遣と物資集積から始められる。

「それでは、各国は自衛する為の連携を密に、巻き込まれないよう交易ルートに注意をするように通達を」

「ムーは戦時体制になります。 今後は安全の為に交易路を指定し、レイフォルに近い地域については外国人は近付くことを制限します」

連日の会議とはいえ、昼食をはさんで夕刻には終わる為、委細を知るミリシアルとムーとは個別に会談も行っていた。

「では、念のため陸上戦力の派遣をしてほしいと?」

ムーの外交官は頷き、ムーの現有戦力を纏められた書類を取り出す。

「ムーでも海空軍については十分な戦力を用意しております。 ですが陸軍だけはいまだ十分な数とはいええず、戦車の数もまだ十分とは言えないのです」

記載されている戦車の数は約400両、それに追隨する装甲車や補給車に自走砲などを考えると随分と頑張っているのだが戦時体制ではないうえ、やはり技術の発展と共に量産しているため数は多くない。ムー国の規模と国境線から考えれば1000から1500両は欲しい所だろうか。

「ミリシアルでは燃料と砲弾の種類が異なる。 部隊の派遣は出来るのだが物資補給は出来ない」

「ムーだけではおそらく、負けはしませんが被害が多く出ると思われます。 対価の支払いは致しますので何卒お願いいたします」

ミリシアルはあくまで魔導文明、科学文明とは食事を除けば物資の共有はほぼできないに等しい。国民を守る為にムーは十分な戦力を欲していた。

「わかりました。話はしておきましょう」

日本としてもムーから技術協力の対価の支払い量が増えるのは、国内の産業や国民の生活の向上に非常時の備蓄と助かる。

ムーに貸し出せるモノは限られるが、単純に戦力を送り出し別行動で対応するのならば問題もなく、何よりも供与できるように開発されたチープ兵器群は、ムーやミリシアルの軍人が使っても問題ないように性能を限定し、価格を徹底して落としているのだから。

会談が終わった夜には防衛省に連絡が届き、各種チープ兵器の備蓄向け低率生産を取りやめ通常生産に変更するよう各企業に連絡、チープシリーズの各種製品はムー向けに正式量産が開始された。

ムー軍に供与する為

- ・ 民生規格範囲内で製造されたC (cheap) 装甲板
 - ・ 民生規格範囲内で製造された防弾ガラス
 - ・ 汎用C (cheap) 誘導弾 Mk 4
 - ・ 博物館と富士演習場倉庫行きになっていた20両の5式中戦車
- チリ の再整備と改造

- ・ 生成済み各種燃料
 - ・ ULCC級タンカーの派遣
 - ・ 災害派遣用海上燃料精製船の派遣
 - ・ 各種C (cheap) 銃
- ムーに派遣する自衛隊の護衛の為

- ・ 遠距離液体放射器
- ・ 自律歩行自爆兵器ボンバーソルジャー
- ・ 自律巡回兵器 SD
- ・ 自律巡回兵器 SS
- ・ 陸上自衛隊自律兵器群

など、支援と言う形で即応できる物資も部隊も限られるものの、全て低率生産ではあったが製造設備の維持を兼ねており、備蓄を徐々に

増やしていたのもある。

ムーからは感謝の言葉と共に、さらなる売却資源についての話と、以前から提案されていた旅団規模ではあるがムー軍の指揮権の譲渡、つまり独立混成旅団をムー本土内で活動を許すと言う事であった。

ミリシアルからは陸軍の派遣と共に、兵器をいくらか供与を受けられないかとの話も出るが、そもそも機械文明と魔導文明では違いが大きく、そう簡単な物ではないとしてムーと同じく旅団を任せられるくらいではないと無理であると断る事になった。

連日の会議も滞りなく進められていく中、カルトアルパス港へと向かっていると思われるグラ・バルカス帝国の艦隊を発見、近隣を警戒していたミリシアルの地方艦隊は戦力差をよく理解し、沿岸警備程度の旧式艦隊では対処不能と判断、即座に情報を上にあげるも、現在主力艦隊は遠洋で訓練中の為海軍上層部は頭を抱えた。

「即応できる艦は記載のモノのみとなります」

ミスリル級戦艦2隻

ゴールド級戦艦6隻

ゴールド級改装空母2隻

アルファ3制空機30機

ベータ3爆撃機20期

どれも二線級に落ちるために訓練計画に組み込まれず本土に残っていたものばかり。兵士についても退役予定であったりけがや病気で帰還した者、残りは本土に残っていた訓練中の新兵がほとんどで、攻めてくる国家などいないという慢心であった。

「……外交官達には非常時に備え移動を、ムーには協定に基づき戦力支援を求めよう」

苦渋とまでは行かないが、第一列強としては出来る限り選択したくない。だがもし主要施設の一つであるカルトアルパス港に損害が出てしまえば、それは歴史に名を刻む敗北となるだろう。それだけは何んとしても避けねばならなかった。

回避理由を説明するも、自国自慢の最新鋭の軍船で訪れている他の

文明国家の国々は、グラ・バルカス帝国相手に戦うと言い始めるのを宥め、カルトアルパス港を出ないように通達を出した。

そしてかき集められた二線級の軍艦に型落ちになった制空機と爆撃機、とてもではないが大艦隊相手に太刀打ちできるものではない。

連絡を受けたムーの超弩級戦艦ラ・マトヤと対潜防空艦ラ・ネート級2隻、外交官の護衛とはいえ最低限の戦力しかないことに違いはなかった。

極東諸国代表の文明国家として訪れている立場上、日本は参戦する必要はない。静かに港を離れようとした所、念のためと港の防衛を行えないかとミリシアルから内密に依頼されたのだが、偽装が判明してしまうために民間人保護の武力行使はするものの別の手段を取るとして離脱。日本もグラ・バルカス帝国が攻撃を仕掛ける事を理解しており、ちょうど入れ替わりで列強統合空母打撃群は補給と休息を兼ねて寄港する訓練予定を立ててあった故に、特に不安に思っただけで居なかった。

何よりも合同訓練終了時に、在庫処分を兼ねてまずは1000発ほど汎用C (c h e a p) 誘導弾M k 3を融通したばかり。製造ラインがM k 4に切り替わったことで、旧式を廃棄リサイクルする手間もある為、低率生産していた国内在庫の4000発も後日ムーに有償援助で送り付ける予定である。

グラ・バルカス帝国本土

合法缶飲料の委託製造はできない、しかしアルコール中毒者が広がる中、日本からの輸出では間に合わなくなるのは明白、供給不足し過ぎては目的が果たせなくなるとして、OEMとまではいかないものの、グラ・バルカス帝国の技術でも安価に製造でき、近い味を再現する事が可能なように、グラ・バルカス帝国の飲料企業と何度か会議を行った。

日本側が優位な会議と交渉ではあったが、製造可能な成分を全て提示させ、そこから配合バランスのみを指定する事で生まれたのが、

ドリンク・ゼロ・カスバル 強めのアルコールと多めのカフェインに体を熱くする生薬、日本が製造工程で混ぜる粉末として依存性を発揮する配合の合成甘味料等の輸出。

程よい飲み心地と安価なために販売が開始されてからあつという間に広がり、提携企業の売れ行きはどんどん上がるとともに中毒者は加速度的に増える。

もはやアルコール中毒者が増える事を止めるのは簡単な事ではなくなつた。日本からの輸入を止めた程度では、自国生産される酒類に流れるだけで止まらない。

簡単に売り切れたり製造中止になることが無い様、添加する為の粉末は大量に輸送し企業にはいくつもの一斗缶に封入された状態で備蓄されている。

グラ・バルカス帝国東岸領 太陽神の使い領事館 応接室

「こちらリヒテル発動機で営業部長をしているシツミヤさんです」

グラ・バルカスの軍事企業リヒテル発動機、他の軍事企業は接触を持つにはやや難しかったが、民需も取り扱っているがゆえに、飲料企業との関わりによって企業間の繋がりで取引の話を持ち掛ける事が出来た。

といつてもまずは営業の人間ではあるが、第一に部長クラスがくるのは好ましい。

営業部長であるシツミヤ、かなり苦勞しているのか頭髪も若干薄く恐らく40代だろう顔の割に全体的に老けてみえる。

「この度は噂に聞く方々とお会いできるとは光榮です。 良き取引のお話があるとか」

合法飲料缶、そして協力し製造販売を委託したドリンク・ゼロ・カスバルがかなり売れている為、該当企業は大幅な売り上げ増加によって生産工場の規模を拡大している。

今回は軍需品を下ろしている企業にまで食い込むつもりであった。元より発動機という話であったことから、グラ・バルカス帝国国内では戦時体制であり、さらに燃料の重要性から木炭車が主流だからこそちようど良かった。

グラ・バルカス帝国内の木炭自動車産業を牛耳れるだけの技術、しかし日本では好事家達が趣味で研究を続けていたものを、昭和初期イベント協賛企業が協力しブラッシュアップした代物で日本ではなんら価値はない。

可燃性ガスの濃度の高い木炭ガス発生炉、炭煙のゴミを除去するのみに最適な自己対流らせん式遠心分離方、グラ・バルカス帝国でも一応作る事は出来る、工作精度の問題から小型化は非常に難しいが。

原理を教える事はないが、最適な構造として提供し、日本が売却益で得るのは清浄機に入れるフィルターの輸出益のみ。

「これは……、しかし」

なかなかの好条件、そして営業部長とはいえ、最低限保守部品の販売や最低限の説明や保守などで掲示された技術の価値を理解していた。

「私の一存では決めかねます。一度わが社に持ち帰って検討させて頂ければと」

営業部長だけあり表情はなんとか笑顔を保っているものの、ハンカチでしきりに汗をぬぐい事の大きさに重圧を感じていた。

その日はこれで終いとなり、次の交易までにはリヒテル発動機内では会議が繰り返された、次の交渉では営業部長と共に常務が訪れ、最終の条件の確認と正式な契約と共に正式な製造図面とフィルターの売却が行われた。

ただし追加で一つの製品、木炭ガス発生炉・遠心分離機・濾過器・清浄機・冷却フィンをドラム缶サイズまで極めて小さくワンパッケージ化した特別生産品、湿式でそれなりの濃度の一酸化炭素と水素ガスを得られることから、グラ・バルカス製の物よりエンジンの出力を高く出せるものを、リヒテル発動機側が代理店として取り扱い、販売益の30%をリヒテル発動機が受け取る事で話を進めた。もちろん一切電子化されておらず、アナログ機械制御装置のみ。それだけ基礎段階で技術格差があることを理解し、余計な事をさせないために釘を刺すためであった。

邪龍アジ・ダハーカは現在海の上を東南に向かっている。グラメウス大陸からただ直線に、何かに惹かれるように日本本土へと。

48. カルトアルパス沖 海戦

カルトアルパス港

「きたぞておおー！」

魔信から上がる連絡、ミリシアルやムーが制止しても出航し迎え撃つと盛り上がる文明圏国家群、それを諫める為に主力艦隊を見てから決めろとミリシアルとムーは制した。

列強統合空母打撃群 総艦隊数10隻にして、第一第二列強最高の兵器を揃える艦隊。

神聖ミシリアル帝国の艦隊にも、ムーの3隻にも劣らぬ威容に文明圏国家群は艦隊の派遣を取りやめる判断に至った。

カルトアルパス沖

レーダーに映るグラ・バルカス帝国の艦隊

超弩級戦艦1隻

高速戦艦2隻

重巡洋艦3隻

巡洋艦2隻

駆逐艦5隻

後方十数キロから飛来し先制攻撃を狙う空母機動部隊所属艦載機250機

迎え撃つのはアルファ4制空機にベータ4爆撃機 各50機

そして打撃群のハリヤーII ACV 20機

しかしハリヤーII ACVにある7個のハードポイントには、日本でローカテゴリーとしてほそぼそと改良しつつ現役生産されているSAM-2Lが搭載されている。

SAM-2L:

91式地对空誘導弾の改良モデル、近距離多目的汎用空誘導弾タイプ91。特別な改良は何もなく、航空機にも搭載できるようにと僅かに射程延伸の改良がされたに留まる。

1ポイント3発 1機あたり最大18発 日本からの有償軍事援助物資ではある。20機分の360発は十分にあり、即座に展開可能なように搭載が急がれていた。

グラ・バルカス帝国 第一編 航空隊

相手はほぼ同等かそれよりわずかに劣る航空機を配備している可能性が高い。それがグラ・バルカス帝国の航空機パイロット達に伝えられていた。だからこそ今までとは異なり、緊張をもって任務にあっていた。

「第1から第8部隊はこのまま敵航空機の露払い。 第9以降は爆撃隊の援護。 敵機は我々とほぼ同等の性能と言うのを忘れるな！」

「了解！」

航空隊長の命令に各員は迎え撃つべく、操縦桿を握る手に力を込めた。視界に敵の航空機らしい黒い点が見えたと思った直後、急速に接近し20機のアンタレスが爆発。

「なっ、何事だ!？」

ハリアーIIACVに搭載されている射程6kmの対空誘導弾、不具合もなくすべてがアンタレスを叩き落した。

そしてミリスアルのアルファ4制空機隊が、アンタレス部隊が状況を理解する前に襲い掛かる。まだ本来の性能を完全に発揮しているとは言いが、それでもアルファ3の様に風神の涙を飛行補助に必要がなく、720kmまで最高速度を向上させることに成功した機体。

問題ははまだ航空機に搭載できるサイズの誘導弾を製造できない為、近接航空戦が必要な欠点はまだ拭えていないのだが。

「ミリスアルの航空機が来やがった、全機散開して迎え撃て!! 爆撃機に近寄せせるな！」

高度上空から急降下してくる存在に気付いたのは小隊長機、プロペラが無い未知の航空機、それでも情報だけは得られていた。彼らが不

幸だったのは与えられた情報は一世代前のアルファ3であり、新鋭のアルファ4ではなかったことだ。

左右に急旋回する者、機首を引き上げ迎え撃とうとする者、それぞれが対応しようとしたが、ミシリアルルの航空機の翼と機首に備えられた魔導機銃によって放たれた高速の光弾、10機のアンタレスに当たると貫通せず爆発、容易く装甲を破壊し翼がへし折られてしまう。

最初の誘導弾の交差で20、さらにミシリアルルの航空部隊による高度上空からの強襲で30、合計50機が3分と経たずに消えた。

しかしまだ200機は残り、爆撃機の護衛である140機のアンタレス、そして60機の爆撃機が健在であった。

「くそー！ 情報と違うぞ!!」

言葉をつづける暇もなく、護衛のアンタレス部隊は迫りくるミシリアルルの航空機から逃れる為操縦桿を倒し、Gに耐えながら急降下ではなく急旋回を行い引き離そうと試みる。

甲高い音を立ててミシリアルルの航空機が急降下を選んだアンタレスを追撃、光の攻撃が機体に喰らい付き小さな爆発が連続するとアンタレスがバラバラになる。

火力そのものが違うことに恐怖する暇もなく、ミシリアルルのアルファ4の攻撃から逃れた20機は黒い点が視界に入った瞬間意識が途絶えた。

射程に収められてしまえば、回避するすべもなく撃ち落とされる攻撃、ようやく視界に入った敵航空機の姿はミシリアルルの様にプロペラを持たぬ航空機であった。

「攻撃が来るぞー！」

各機は編隊ごとに高度を上げたり大きく旋回したり、真正面から挑むそれぞれ戦法を選んだ。しかしハリアーIIACV側として誘導弾があるのに態々危険を伴うドッグファイトなどするつもりはなかった。

新たに目標を設定された40発の誘導弾を次々と発射、そして踵を返すように急旋回しアンタレスの射程から逃れていく。

「なっ、逃げた……のか？」

攻撃起点を視界で捕えたことで、速度が遅いロケット系の攻撃と判断、大きく飛行航路を変える事で確実に命中から逃れようとしたが、誘導弾はアンタレスを追尾するように方向を変え40のアンタレスが爆炎に包まれ海面に落ちていった。

旗艦 空母 ヨージョン CIC

「アルファ4、第一から第四までは爆撃機迎撃へ。残りは敵制空機をかく乱せよ」

空母のCICからリーダー情報を元に各編隊に情報が伝えられ、戦術官によって大勢をみつつ判断される。その間にもミリシアルの艦隊及びムーの4隻は対空戦と砲撃戦の準備を進めていた。

各部から上がる報告をCICで纏められ、総司令官は状況を把握していたが想定を崩され少々焦っていた。

そしてハリアーIIACVから情報から敵艦の位置情報を汎用C誘導弾Mk3に設定され、手作業で甲板に並べられ統制機1に従属機4が1編隊ごと甲板を離れていく。

戦艦ラ・マトヤ

旗艦であるヨージョンから伝えられる敵航空機の防空網の突破、船内は慌ただしく最終チェックが行われる。

「砲弾装填よし！」

「機関部問題ありません！ いつでも全力稼働いけます!!」

「対空砲座、対応準備完了」

対空対潜戦艦ラ・カサミ改壹

報告を聞きラ・カサミの艦長であるミニラルは、あくまで対潜対空戦艦であるがゆえに、主砲の口径は203mmと小さく重巡洋艦という規模に留まる。それに歯がゆさを感じながらも、これからは空母と対空対潜巡洋艦の時代、戦艦技術の一時休眠となる最後の艦がラ・マトヤ級超弩級戦艦、それは勇ましくも儚い最後の光であった。

CICがないため艦橋から艦内全てに届く放送用のマイクを手に取り、ミニラルは声を上げる。

「対空戦闘用意。 敵の航空機は艦に重大な損傷を与える可能性が高い。 訓練を思い出し各員奮戦を期待する」

すぐそばを航行する新鋭のラ・ネート級対空対潜巡洋艦、巡洋艦と言う枠組みではあるがその規模はラ・カサミ級戦艦とほぼ同じ、限定した範囲内であればラ・カサミ以上に性能を発揮する。

ラ・トーネやラ・マトヤに使われた技術を試験を名目にラ・カサミに反映し、徹底した対空兵装にレーダー設備、簡易的ではあるが機械式照準システムも対空砲や対空機銃に積まれている。

艦橋から見えてくる敵航空機、これから起こるのは苛烈な急降下爆撃と応戦する地獄のような対空戦。

列強打撃空母群よりはるか前にミリシアル艦隊、そこから数キロ前に陣取るムーの4隻の艦隊が控えている。性能が劣り過ぎるミリシアルの二線級の艦隊では対空戦は荷が重すぎるとの判断と、そこまで多数がハリアーII ACVとアルファ4の迎撃を抜けてくるとは考えていなかったためだ。

しかしその考えに反し、数の力によって31機の急降下爆撃機と護衛のアンタレス54機が抜けていた。

「最初の獲物だ！ 各機一番でかい奴に攻撃せよ!!」

「了解！」

爆撃隊隊長機の命令に各機がもつとも巨大な艦に向け降下攻撃を開始するが、その返礼は狂ったような対空砲火であった。

周囲を航行する巡洋艦からも打ち上げられる対空砲、そして目標艦からも打ち上げられるそれは、視界を近接信管の爆発で埋め尽くされ、伝わってくる衝撃波と爆発音で操縦桿が激しく揺れる。

「くそー！ なんだこれは!?!」

「15番機！ エンジン被弾!!」

機体を貫くだけではなく、爆発する近接信管は僚機を次々と潰していく。それでもなお17機から投下された爆弾は巨大な艦目掛け落ちていくと、3回の大きな爆発音とともに煙が上がる。

「やったか!？」

対空砲火から逃れ、パイロットは視線を向けると艦後方で爆発の煙がみえるものの特別何か損傷を見つけられない。

それどころかロケットのような物体が迫ってきていた。

「10番機より報告！ 急降下爆弾の有効性を認められず！ 繰り返す攻撃の」

「くそが！ 10番機が食われた！ 左上方から敵機接近!!」

「護衛のアンタレス隊は何をやってやがる！ 銃座は敵機を近寄らせるなよ!!」

全ての報告を上げる間もなく、護衛であるアルファ4制空機と対空砲火によって爆撃機隊はどんどん数を減らしていく。

爆撃機の自衛銃座についていた兵士によって機銃が火を噴くが、700kmを超える速度で飛行するミリスアルの制空機相手にはまるで照準が合わず、僅かに牽制になるだけであった。

「来るな！ 来るなあ!!」

機銃員は視界に広がるミリスアルの制空機に悲鳴を上げるが、光弾が機体に喰らい付き爆発と共に翼がへし折れ海面に落ちていく。

「何かが追尾してくる！ 避けきれない!!」

「だめだ！ なんとかしてくれ!」

ミリスアルの最新鋭制空機 アルファ4はアンタレスよりも爆撃機を優先し、そしてアンタレスは補給を終えたハリアーIIACVによって、有効射程に入り次第撃ち出される誘導弾に弄ばれる暇もなく爆発四散していった。

グラ・バルカス帝国艦隊

通信機から響いてくる護衛対象の爆撃機が撃墜されているとの報告、護衛のアンタレスも敵の航空機相手に苦戦し、20機ほどが帰還したが爆撃機は全て未帰還であった。

3 將軍の一人であるミレケネス將軍からの命令で、列強の実力を実践において計る事を命じられており、撤退するという選択はない。

本来であればこれだけの被害が出た上に、前時代的艦隊戦などするべきではない事など分かっている。しかし世界に対して相応の存在を示す為、被害をほぼ与えずに退くという判断はない。

艦載機の減った空母は護衛の駆逐艦2隻を付けつつ下がらせ、残りの艦全ては艦隊戦の為に前進を始めた。

ムー艦隊

「誘導弾は、やはり使えるのだが一隻だけでは対応しきれんな。上には今回の情報を伝え、各艦に対空誘導弾の搭載を具申しよう」

ラ・ネットなどにはまだ搭載されておらず、対空砲の近接信管のみで対応している。それ故に急降下爆撃はかなり危険な状況であった。

幸いな事に急降下爆撃は外れたが、当たってしまったえばどれだけの被害があったか予想もつかない。

ムー国 封鎖軍事都市

集められていた技術者達のほとんどは本国各地の工廠に移り、最新の戦略を練っていた将校も帰還していた。生産力もかなり落ちていく為、あくまで研究開発や試作製造が主体となり製造設備の半数近くも移設されていた。

元より製造設備の移設が可能ないようにムー独自に製造機器も開発していた。だからこそ各企業や工廠では現在問題なくジェット戦闘機や誘導弾などムー内に於いて最新兵器の生産が行われている。

今現在都市に残っているのは家族の病気や研究者達、そして最新兵器の習熟訓練を行っている陸空の元精鋭部隊。この部隊が中核とな

り、新たに指揮権を変更された陸空混成の旅団が組み込まれる。

封鎖軍事都市の演習地区

「計算が、この難しいな」

現在大部分が輸送中ではあるが、すでに輸送されていたチープ兵器群の習熟訓練が行われていた。

単純なコンテナ内臓多連装ロケット砲、現在その訓練をしているのだが、発射角度から着弾距離の計算に手間取り、本来のトラック運送による 高速移送・コンテナ側面全開放・角度調整・発射・迅速撤退が実行できていなかった。

「手計算ではなく、その機械を使って距離の計算をすればすぐです。やってみせますので」

むろん訓練を長らく受けてきた封鎖軍事都市を任せられている部隊は、10代や20代前半の頃からから80年代の技術に慣れ親しんだ若い世代で構成されていたこともあり、新しい技術や道具にもすぐに順応する事が出来ていた。

49. カルトアルパス沖 海戦

「敵艦の反応あり！」

「主砲用意！」

グラ・バルカス帝国のレーダーに情報が入り、レーダー観測射撃を行う準備が始まる。位置情報が計算室に送られ、技術者が手計算及び機械計算で位置を割り出し、砲術員に情報が送られると次は経験で補正をかけられ46センチ砲及び35.6センチが標的移動予測地点に向けられた。

準備完了の報告が上がるとともに命令を下される。

「撃てえ！」

凄まじい轟音と共に撃ちだされた砲弾は空高く上り、標的へと向け落ちていく。

ムーの艦隊はまるで砲弾が見えているかのように航路を変更しているさまがレーダーに映っていた。グラ・バルカス帝国のレーダーは優秀ではあるが、砲弾を確認できるほどではなかった。そして現場の軍人にそこまで技術的造詣の深いものはおらず、おおよそこちらの航路から砲撃地点を推測しているのではないかと参謀は考え、判断を間違えている事に気付くものはいなかった。

砲撃が開始され数分、海面ぎりぎりを飛行していた汎用C誘導弾Mk3の群れが巡洋艦と駆逐艦に襲いかかる。威力は2〜3発の手りゆう弾をまとめた程度、巡洋艦や駆逐艦とはいえ、艦の主要構造物を破壊できるほどではないが。

「海面近くから飛行物体接近！」

艦橋から監視していた兵士が一人気付き、声を上げた数秒後に艦が爆発で揺れ、艦の側面に複数の煙が上がる。

「爆発物だ！ 小銃を持ってこい！」

一度目の攻撃で爆発物だと判断し、急ぎ小銃を持ったグラ・バルカス帝国の兵士が甲板に集まる。所詮は航空機に比べて遥かに劣る180km程度、されど単発もしくは連発銃で180kmで飛翔する物体を狙い撃つのは非常に困難である。

「撃ち落とせ！」

「近付けさせるな！」

甲板からの銃撃が行われ、偶然スレイブ機が銃撃によって爆発し、接触前に爆発したと感知した統制機は他の統制機と連携をとり、分散し設定された飛行ルートを取り体当たりを試みる。

駆逐艦や巡洋艦に継続された攻撃に、魚雷攻撃を行う準備など滞りなくできるはずもなく、甲板では魚雷攻撃の準備に大幅に遅れを発生させていた。

手りゆう弾程度では船腹に穴が開かないと言つても、それが何発もとなると溶接個所のもろい所に亀裂を発生させ徐々に浸水が始まる。

その頃、ムー艦隊では最大射程にグラ・バルカス帝国の艦隊が近付いたことで準備が進められていた。

「右側面、無線誘導魚雷用意」

ラ・トローネ型巡洋艦は艦の側面をグラ・バルカス帝国艦隊に向け、搭載されている4基の発射管が向けられると魚雷が水中に投下された。

一度に制御できるのは一人のオペレーターに付き2発の合計4発、レーダーとソナー情報を元に無線制御され、海面を10km程度まで制御が可能なのだが、そこから先は僅かに海面下に沈みただ直進するだけとなる。されど40km先の標的に10km地点まで制御できるのは、ただ直進し続けるより命中率をぐつと高める事が出来た。

巡洋艦である以上砲の数は少なく口径も小さい、それ故に対艦攻撃は無線誘導魚雷のみになる。いずれは対艦誘導弾になる、しかし今はまだ開発中で搭載はされていない。

巨大な水柱がムー艦隊の至近でいくつも上がると共に、一隻の船から爆発が上がる。

「ラ・ネクル被弾！」

ラ・ネート級重巡洋艦 3番艦 ラ・ネクルは戦艦からの砲撃を艦尾に受け航行不可能となった。いくら砲弾の飛翔が分かると言つて

も、距離が近付けば回避できる時間は限られる。

「ミリシアル艦艇、ゴールド級が前に出ます！」

「ゴールド級でか!? ラ・カサミはラ・ネクルの支援に回れ！」

戦線は乱れ有ってないようなものへとかわり、後方数キロから砲撃戦の為にミリシアルの艦隊が前進してきていた。

ソナーに光点が映り、グラ・バルカス帝国側の駆逐艦から魚雷が迫っている事が伝えられる。

「敵艦の魚雷来ます！」

「回避航路をとれ！ 機関全開！」

「ミリシアルの艦艇は前進を継続！ 魚雷に気付いている様子がありません！」

雷跡が伸びていくと巨大な水柱が上がり、ゴールド級戦艦が傾き始める。

それとほぼ同時、ムーの放った12発の誘導魚雷、そのうち6発が命中し駆逐艦2隻が巨大な水柱と共に大きく傾き急速に沈んでいく。

ムーの魚雷は少々日本のモノとは発想が異なり、二回りは大きく威力と射程を優先されていた。もちろん小型化できない高出力無線を搭載するという理由もあるのだが、破壊目標とした装甲厚がラ・マトヤであったことが原因である。

そんなものが駆逐艦に当たってしまったえば、僅かでも耐えられるはずもない。遠目には傾いて見えていただけで、命中した周辺の構造物は完全に破壊されえぐり取られていた。

「ラ・マトヤ、砲撃を開始します！」

凄まじい轟音と共に大口径の砲弾が敵艦に向かっていく。確かにグレードアトラスターと同口径の46cm砲、しかし技術開発をムーは怠らず、いくつか砲弾を生み出した。

標準的な徹甲弾・散弾、そして遅延信管を組み込んだ仮帽付徹甲榴弾、ただでさえ特別大口径故に高価な通常弾より、さらに高価なためにムーの財務大臣が卒倒しかけ、徹甲弾6・散弾3・徹甲榴弾1と砲弾の搭載割合を限られていた。

ミリシアル艦艇から光弾が撃ちだされ、光の尾を引きながら敵艦隊

へと向かっていく。

旧式化したとはいえミリシアルの艦艇、ある程度は改良され照準器や計算機も更新され、高い精度を誇るがゆえに夾叉でグラ・バルカス帝国の高速戦艦が水をかぶる。

しかしグレードアトラスターの砲手は才能に溢れるらしく、18発砲撃されれば一発は当たるという狂ったような命中精度を誇り、長い装填時間が終わるたびにミリシアルの艦艇が一隻ずつ爆沈していくという地獄のような状況が起きていた。

轟音と共にグレードアトラスターの船体が激しく揺れ、被弾したことを知らせていた。

「損傷報告せよ！」

艦長であるラクスタルは揺れる艦長席にしっかりと座りながら命令を下す。

「第一砲塔に被弾！」

「第一砲塔各部確認中！」

慌ただしく艦橋で各員が情報収集と艦の運航に奔走し、数分して状況が判明していく。

「ターレットリングに異常あり！ 第一砲塔使用不能！」

「人員が多数負傷！」

「あの巨大艦からの砲弾か。 やってくれる」

ラクスタルは報告を聞き、冷や汗を流しながら対策を考える。カルトアルパス港で見かけていたグレードアトラスターと良く似た戦艦。あの艦が持つ主砲からの砲撃と考えれば、被弾と同時に異常が発生してもおかしくはない。

他の戦艦では搭乗員の質から考えても、相手にはならぬだろう。ならばグレードアトラスターが主となるしかない。

「第一砲塔要員は第二及び第三の補佐に回るように。 砲撃は敵巨大艦へと集中せよ。 他の艦には大型艦以外への砲撃を継続。 敵は

乱れている、焦らずに攻撃を継続せよ」

1時間の交戦でミリシアルの二線級艦隊はほぼ壊滅、救助を行う為にもはや戦力とは数えられず、ムーの艦隊もラ・ネット級二隻が沈められ、ラ・マトヤ及びラ・カサミのみが残っていた。

ラ・カサミからは多数の救命ボートが下ろされ、海に漂う船員や他のボートの救援に当たっている。

「許可が下りた！ 対艦誘導弾を使用する！」

ラ・ネット級巡洋艦の一隻目が損傷を負った直後に本国の海軍総司令部に上申し、CICにある日本の衛星通信を利用した回線から許可がいまこのとき通達された。

艦長は首から下げているドッグタグに繋がられていた鍵を掴み、CICの隅に置かれている頑丈な鉄製の箱が開けられ、中に入っていたケースを取り出され割られて中に収められていた紙が取り出される。

「認証コード *****」

CICから入力が行われ、艦橋の背部に設置されている大型誘導弾二発が納められた筒が専用アームによって海上にせり出し垂直に立てられる。

「敵位置の情報を入力」

「入力情報の再確認、……良し」

「発射せよ！」

全長15mはある巨大な筒、下部から強烈な噴煙炎が海面を叩き、上空に上がると二度先端が姿勢制御の噴射をし、轟音を上げて急加速し音速を突破、標的となるグラ・バルカス帝国艦隊へと向かっていった。

大型対艦誘導弾は海面近くを飛翔、急速に上昇すると艦橋真下に直

撃し、巨大な火球が発生し高速戦艦二隻が飲み込まれる。

甲板装甲を食い破り、指向性をもって艦内で放出された爆発は重要装甲区間を破壊し尽くしてもなお治まらず、砲弾にも引火しもろい部分に集中した力によって船が引き裂かれながら沈んでいった。

大型対艦誘導弾は、グレードアトラスター級の重装甲戦艦を標的としていた事から、高速戦艦という比較的軽装甲な戦艦ではまったく耐えられなかった。

「何事だ!?!」

「他艦が敵からの攻撃を受けた模様！ 波と噴煙が酷く状況確認中！」

「被害は……前後の艦影が見えません！」

衝撃波は数キロ離れた場所で戦闘航行をしていたグレードアトラスターを揺らし、観測員からは命令を待たずして悲鳴のような報告が上がった。

「くそー！ なんとやることだ!!」

参謀が声を張り上げるも、艦橋員は動揺を隠せなかった。

ミリシアルの艦隊は救護活動を行っている2隻を除いて事実上壊滅。

ムーの艦隊はラ・マトヤ及びラ・カサミを残し沈没、2隻とも無傷とは言えない。

列強統合打撃艦隊は無傷で対艦能力はあるにはあるが、対艦誘導弾や大型爆弾を供与していない為戦艦を相手にするのは不可能。

一方でグラ・バルカス帝国艦隊も。

駆逐艦2隻は汎用C誘導弾によって小破状態で3隻は轟沈、重巡洋艦2隻は沈没、軽巡洋艦は全て沈没、高速戦艦は轟沈し救助さえできなかった。

グレードアトラスターとて、第一砲塔は被弾によって故障し、このままでは共倒れになるとグレードアトラスターの艦長ラクスタルは判断。

撤退を開始したグラ・バルカス帝国艦隊を、列強側も追うことなく漂流者の救助を行い、列強側は追い払ったと報告し、グラ・バルカス側は十分な損害を与えたと報告を行い海戦は終結した。

グラ・バルカス帝国本土

日本が輸送してきた売却用のエンジン、その造形及び機能美に惹かれ、レシプロ航空機レーズ用に細々と研究と改良が続けられていた。ブリストル社製 セントーラス型航空機エンジン Mk. XXI レシプロでありながら3400馬力にブーストで+340馬力と狂った出力を誇り、ムーへの輸出予定と、グラ・バルカス帝国への見せ札として用意された。

領事館に隣接する空港の整備場にて、嚴重に試験台座に固定され、テストが開始されると尋常ではない速度でプロペラが回転、屋根付き試験会場の中は暴風が吹き荒れている。

「良い音でしょう！ レトロなエンジンですが、あたりと言われるものですよ！」

「たっ、確かに凄いものですね！」

「我が社のエンジンが霞むようだ」

見物しているのはリヒテル発動機と軍の関係者、暴風を予測していた者達はエンジンのやや前方寄りの横に立っていたのだが、それでも強風によって声を張らなければならなかった。後方に立っていた者達は強風で飛ばされそうになり、止めろと声を上げているがエンジン音と暴風に届いていなかった。

さらに出力を上げると凄まじい風量に試験会場に設置されていた椅子は吹き飛ばされ、屋根がミシミシと音を立て始める。

「あの……、これ以上出力を上げるのは」

グラ・バルカス帝国の空軍技術者が試験会場の心配から出力60%程度で止めていた。それは固定台が振動しているのもあるのだが、会場の屋根から酷い異音と壁がきしんでいることもあった。

「何をやっているのですか。出力を最大まで上げませんと、正確な評価が出来ないではないですか」

「わ、わかりました」

軍関係者が声をかけ、意を決した技術者が出力を上げるハンドルを回した。強烈な風が前後の扉が解放されている屋内に吹き荒れ、エンジンのやや後方で見学していた軍関係者や技術者達は風に転倒し転がされ、屋根は剥がされ空を舞った。

その性能を目にした翌日には大金を支払い購入をグラ・バルカス帝國空軍は打診し、輸入元はリヒテル発動機で航空機製造についても担当となりかけたが、リヒテル発動機は軽戦車シェイファアの設計製造元であり、航空機の製造ラインやノウハウは有しておらず、ゲールズ社が搭載機の開発を行う流れとなった。

解体禁止と言っても、リバースエンジンニアリングする事は明白、しかしある段階を超えると単純なプロペラでは限界が訪れるが故に、早めにジェットエンジンに開発をシフトしなければムーに抗うのは難しい。

彼らが開発の道を誤った、と気付くのは手遅れになってからだろう。

邪龍アジ・ダハーカは日本へと向かい海を進んでいた。長距離飛行を出来ず、泳げないはずだがマラストラスの記憶からか溺れるような泳ぎ方で無理やり海を渡り続けていた。

日本は邪龍の存在に慌てることなく、じつくりと準備をしていたのだが、縄張りに入ったことから海魔が襲いはじめた、3体までなら三つ首によって対応できたのだが。

ほぼ泳げず鈍重、凶悪なのは爪と牙、体のほとんどを失っても再生する力、特に大柄なシーサーペンタなど大型海魔まで加わると容易く水中に引きずり込まれ、肉食魚まで加わり寄って集って食い散らかされながらも死にきれず、暴君と恐れられた邪竜はただの海中生物の餌と化していた。

それでもなお何日も暴れまわり、徐々に水中に適応し曲がりなりにも泳げるようになる。シーサーペンタや肉食魚では対応しきれなくなり、再び日本へと向かい始めた。

しかしすでに海竜から日本へと情報が伝えられており、大量の試作品の爆雷がかき集められ準備が進められていた。

処理するのもしサイクルするのも予算が掛かるがゆえにはあるが、試作品は

衝撃特化型

音響特化型

魔石使用型 ICE

魔石使用型 THU

など実戦テストによるデータを取りたかったのだ。

近海まで派遣された護衛艦から海面を泳ぐアジ・ダハーカに向け、SH-60N型に搭載された各爆弾は投下の準備に入っていた。

「標的確認。投下開始」

強烈な爆圧衝撃波によって、首一本と体が大きく裂けるものの、それでもいとも簡単に再生修復されてしまう。

「次弾 音響爆雷」

タイミング悪く水中にあった2本の首が聴覚をやられたのか水平や方向感覚を失い、溺れながら水中へと没する。それでもなお数分すれば聴覚と水平感覚を取り戻し、海面へと上がってくると怒り狂い、一本の首が空中に向けられ魔法の光を放ち始める。

「次弾IHU投下」

雷の魔石を利用された爆雷が投下され、自然現象で発生する落雷の何十倍にも匹敵する雷がアジ・ダハーカに襲い掛かった。過剰な電気信号によって全身が痙攣を起こし、魔力の光は霧散した。神経細胞を焼き尽くし、修復が追いつかず水中に沈んでいく。

それでもなお時間が経過すると体を再生し、再び海面へと姿を現した。

「次弾 ICE投下する」

機体から投下された爆弾は子弹となり空中でばらけ、アジ・ダハーカの周囲の海面に着水、一瞬の間において海もろとも凍結した。

弾丸と言うサイズではいまだ実用段階にはないが、子弹などのサイズとなると実用性が確認できる程度には出来上がっていた。

半径100mほどが完全に凍結、無限の再生能力も、再生するため細胞がなくなるのではなく、凍結し停止してしまえば再生も何もないらしい。しかしあくまで海水が瞬間凝結する程度の低温、アジ・ダハーカを殺傷するほどではなく、かなりの鈍い動きながらも氷を砕きながら氷海の上に這い上がる。

うめき声のような唸り声をあげるが、冷却された体の動きは非常に鈍い。

再び投下されたICE型によってさらに温度が低下、大気中の水分も凍結し、霧や雪の結晶となると徐々に体が凍結を始め、5発目が投下された時点で全身が凍結して絶命すると体が崩壊していき消えていった。

魔石を利用した兵器はまだまだ科学兵器に比べて完成度が高いとは言えないが、実用性についてはかなり使えるものになってきている。

ムー国 軍事開発都市

ムー国内で何度も名前を間違えられてはいたが、共通している事はムー内に置いておいてもっとも発展した技術開発を行う都市であるということ。

そこでいま、新しい試作中戦車が産まれようとしていた。

クロムウエル中戦車がムーにとって自国の技術者が設計製造した初の中戦車、そこに自国で発展開発した84mm砲を搭載する改良を考えていた。

「うーむ。やはりバランス問題がいかにとも」

「トップヘビーは避けるべきだが、装甲に問題が出てしまう」

ガンキヤリアやBPを設計した技術者達が集まり、概略設計図からモックアップを作り問題点の洗い出しや対処策を練っていた。

「しかし、量産時の予算を考えると、余り車体を改造するわけにもいかないですから」

重戦車 BPは本格生産は行われていない上、性能はムー国で最高ではあるが生産コストも馬鹿にならない。いくらムーでも財源に限界がある為、ムー国陸軍では戦車や装甲車両の数を揃える上で、少しでも価格を抑え運用費も抑えるように財務部から悲鳴に似た願いが出されていた。

「砲塔は重機関銃程度を抑える装甲に抑え、傾斜で弾くようにするのが限界でしょうか」

「しかし、それでは戦車と言えるのだろうか」

「そもそも比較的小型快速なクロムウエル中戦車に、大重量の砲を積むのが問題では？」

設計会議の議論は尽きず、結論は簡単に出なかったが、いくらか装甲を傾斜させることで避弾経始を採用し、装甲厚を減らし重量増加を抑えるという苦肉の策に出た。

車体に似合わず特徴的のある大型の砲塔を持つ新型戦車の名称はチャリオティア中戦車 と仮称されたが、試作製造された砲塔の脆

さから、正式採用時には 対戦車駆逐戦車チャリオティア に名称が変更されることになる。

紳士淑女の集い

日本のネットで作られるあらゆる軍事兵器の製作シミュレータ。型に取られない自由な発想は、日本一国であるがゆえに停滞しかねない技術を留めず創意工夫に溢れていた。その中には現実の技術に新たな着眼点を与えることもあり、革新的デザイナー等を名乗る怪しい者達とは異なり、紛れもない革新的発想であった、輸送が容易なコンテナ式多連装ロケット砲もその中で生まれている。

シミュレータであるがゆえに現実には危険なテストや生産するのが難しい物を製造でき、テストも出来る為チープ兵器群で採用されたものも多い。

そんな各企業やサークルが参加する中で一際異彩を放ち注目される集団がいた。

《PD研究サークル》

あらゆるシミュレータ内の大会に参加し、競技を改良型パンジャンドラムで突破。技術会議に参加しても、パンジャンドラムの有用性と発展性を語り、その技術と発想で出された課題を 最終的にごり押しでクリアする異端の技術者集団。

飛行標的を破壊するならば飛行型パンジャンを

対象物の回収なら中空式回収型パンジャンを

面制圧なら小型ロケット推進式多連装パンジャンを

農地への農薬散布なら回転式航空散水パンジャンを

人命救助なら捕食式保護型パンジャンドラムを

余りの事態に理解を拒みなくなるが、シミュレータ内とはいえ全ての課題をクリアし、実運用でも機密保護装備として自爆装置を持つ。

チープ兵器群の中にすでに採用されたものもあり、次の採用を目指し日夜研究に励んでいた。彼らは紅茶の常用飲酒に毎日の紅茶風呂、

健康に配慮しマーマイトを毎食摂取。サークル筆頭は紅茶を血液摂取していると言われるほどである。

しかし斬新で型に全く囚われる事ない発想を持つ集団であるがゆえに注目され、現在チープではなく無人兵器の最終選考に とあるものが残っていた。その見た目は常軌を逸しているものの、戦場下における人命救助については一考の余地があるとされていた。

51. ムー大陸へ

前世界では起きたバルチスタ沖での大海戦。日本も起こる事態として準備を進めていたのだが、カルトアルパス沖での結果から、グラブアルカス帝国は大艦隊による大攻勢を取りやめていた。むろんミリアル帝国も大艦隊の派遣など考えず、ムー大陸から確実にたたき出す為の戦略を練っている。

それ故にまずはムー大陸周辺海域の掌握を考え、レイフォル軍港の拡張と工廠の建設、そして本国では損傷を負ったグレードアトラスターの修理作業に取り掛かっていた。

船渠に入れられたグレードアトラスター、艦長のラクスタルは海軍省の執務室で報告を持ってきた部下と話をしていった。

「機関及び船体に問題はありません。ですが第一砲塔は思ったよりも損傷が酷く、砲そのものは交換に、ターレット回りも再修復が必要成るか」と

部下の表情が良くない事から、船の状態は良くないようだ。

しかし今回の一件では、海軍そのものが情報不足を覚悟した上での強襲だった為、責任問題などにはなっていない。

「ムーの巨艦相手には、グレートアトラスターでなければ難しい。修復だけでは厳しい所ではあるか」

計画にはあったものの、空母運用による航空機攻撃への移行に伴い戦艦の建造は停止していた。

しかしムー国艦隊の脅威度から、さらなる航空機運用のために空母及び防空艦の強化と共に、停止していたグレードアトラスターの強化艤装案について思案が行われていた。

「海軍は一時戦力の補充が必要だ」

「本土防衛は現状の戦力で問題はありません」

「陸軍航空隊……、残念だがアンタレスでは少々苦戦するとの報告がある」

「技術局では、さらなる情報収集と解析の為、スパイをムー国に送りこみます」

列強と言う存在、前もって情報収集をしていたが、ほぼ軍事技術は同等程度で僅かに劣り、規模においては勝ると分析されていたが、海戦においてかなりの被害を被り、数日にわたる会議では情報分析と得られた戦訓から戦争方針の変更が行われた。

「海軍は当面の間ムー大陸周辺海域の確保を主とする」

「レイフォルの空軍基地を増設し、陸からのムー国へ航空攻撃も視野に入れる。むろん歩兵の増員も行う」

「ムーの軍力は侮れぬ。ケイン神国よりもだ。新型航空機の開発製造、そして情報収集を怠らぬように」

戦略を一大攻勢から着実な占領による領域拡大へと戦略変更が行われ、ムー大陸制圧を最優先とした。その為レイフォルにおける工廠と軍事施設のさらなる建設へと向かっていく。

ムー国国境付近 バルクルス基地

レイフォルの元属国は恭順を示し、ムー本国に最も近い場所である元レイフォル属国ヒノマワリ王国領の東端に大規模な基地建設が完了した。

陸軍基地にはグラ・バルカス帝国が誇るハウンド戦車や装甲車が集められ、陸上からの侵攻作戦に向けて訓練等も行われていた。大量に用意された火炮と着実にムー国軍を打ち破るために。

陸軍基地に隣接するように大規模な滑走路を備える飛行基地、アンタレスやベガ型双発爆撃機が大量に配備され、弾薬食料に整備部品と潤沢に用意された。

レイフォル統合軍基地司令官であり守備隊長のファンターレは書類に目を通していたが、その中には外務局レイフォル出張所から軍の派遣要請があった。

「またか。そのような余裕はないと何度も断っているのだが」

従属国家や近隣国への従属を迫る威圧の為に軍の派遣依頼、ムー国との陸戦に備え訓練計画や物資備蓄などの計画が本国より定められ、バルクルス基地へ的一部戦力移管を考えれば、外務局の要求に答えられるわけもなかった。

その為徐々に外務局レイフォル出張所の成果は減り続ける事になるのだが、軍部が派遣を渋る為と報告できるわけもなかった。

日本 某研究所

パルキマイラの飛行システムの解析中、日本の技術者達は啞然としていた。

パルキマイラの飛行動力源、一種の反重力システムを発見し、解析していたがどうしても目標とする出力が確保できず、さらに慎重にキマイラ各部を解体分析していく中、とある容器を分解したときだった。中に収められていたのは結晶化した光翼人であったからだ。

「これは……いくらなんでも常軌を逸している！」

「生命倫理感が壊れているとしか思えん」

伝承では竜人族を革のバックにするために要求したとあったが、さすがに同族まで必要であれば兵器の一部に使用するなど、まともな価値観を持っているなど考えられない。同族さえ必要性があれば機械の部品に組み込む、とても正気の沙汰とは思えなかった。

「これが、増幅器……になつていたのですね。光翼人も反重力魔導炉単独では十分な出力を出せなかつた」と

慎重に調べ続け、増幅器の構造は現代科学においては昇圧構造に近く、昇圧コンバーターの原理を利用し、製造コストとサイズにこそ目をつむれば代用が可能であった。

ML86X重飛行船の発展拡大型への利用が検討され、安定した反重力システムの開発製造が始まった。

52. ムー初の対潜攻撃 入り込む術

先行してムー海域の威圧行動としてグラ・バルカス帝国の潜水艦2隻が北部周りに侵入していた。

グラ・バルカス帝国の情報網ではムー国やミリシアル帝国では潜水艦は存在しないとしており、それ故に対潜装備などについてはほとんど知られていなかった。

むろんスパイとしては手を変え品を変え情報を得ていたが、二線級はともかくとして一線級は常に外洋で訓練をしているか、船渠で厳重な管理の元整備が行われている上に、搭載されている装備はほとんどが機密として作業員もほとんど知らなかった。

それ故に対潜装備はない可能性が高いと報告してしまっていた。

実際にはサイズと耐久性に問題があるがアクティブソナーも、ムー国製が実用化出来ている上に、潜水艦ラ・ダマスカスも運用されている。

何よりもミリシアルもムーも、資源を引き換えに日本では旧式となった訓練用無人潜水標的への攻撃など、経験の積み上げと兵器の習熟に勤めていた。

ムー大陸 ムー国北部領海

「確かなのか？」

警戒していたラ・ネット級巡洋艦では、CICで冷や汗を流しながらソナー要員はソナー画面と聴音機に意識を集中していた。

報告を聞いた艦長は同じようにソナー画面を眺めている。

「この音は水棲生物ではなく機械で間違いありません。これはグラ・バルカス帝国の潜水艦であるかと」

初の敵性潜水艦の発見、ムー国で初の対潜戦闘となる。このことに艦長や参謀は嫌な汗を流すものの、覚悟を決め命令を出す。

「よし、対潜迫撃砲用意！ 装填済みのモノを全て使用し撃退する！！」
艦に搭載されている24連装の小型爆雷を投射する対潜迫撃砲が

4基、艦長の命令によつて初の実戦運用に艦内は慌ただしく準備が進められる。

グラ・バルカス帝国 シータス級潜水艦

潜望鏡深度まで浮上し、航行中のムー国艦艇を視認していた。

「間拔けな奴らだ。我々が狙っている事も知らず」

潜望鏡を覗いてムーの艦船を見ていたが、余りにもゆつたりとした動きに、潜水艦を知らぬのだろうとグラ・バルカス帝国の兵士は嘲笑っていた。

「魚雷用意。 どうせ奴らにはわからん、ゆつくりとやれ」

何もできない相手を嗤いながら雷撃の準備が船内で進められる中、潜望鏡を覗いていた水兵が、ムーの艦から何かが複数射出されたのを確認した。

「……まさか、爆雷か!?!」

焦りが言葉と共に出た時、海面に落ちた物体が爆発し、爆発音と衝撃が船体を叩きつけ浸水が発生し艦に被害をもたらしていく。

「浸水報告あり!」

「機関不調!」

「浸水区域を閉鎖しろ! 各部の報告急げ!」

幸いなのが小型の爆雷であり、狙いが若干ずれた事で当たったのがたった二発のことから致命的な損傷を与える事が出来ず、各部の浸水と推進器の不調程度であった。

船内では慌ただしく浸水へ対応しつつ、艦長は報告を受けながら報復する判断を下したが。

「魚雷発射用意!」

「ダメです! 敵艦航路より外れました!!」

グラ・バルカス帝国の魚雷は無誘導、発射角によつてある程度広がり当たり易いようにされているとはいえ、大きく艦首より離れてしまえば意味はない。

「仕方ない。急速潜航！」

ムーの艦船の航行速度は不明ながら、シータス級の速度では逃げ切れないと判断し、艦長は隠れる事を選んだ。可能な限り身を隠し、その後浮上しての船の修理と海域離脱、ムー国には対潜装備があるとの情報を持ち帰る事が最適であるとの考えだった。

ムー艦艇では、連続した射出の後、数秒の間において海面に落ちた対潜迫撃砲弾の爆発が水柱を立てるのを確認。時限式ではなく接触式爆雷の為、確実に目標に当たった事を表していた。

「発射装置確認……問題なし！ 次弾装填！」

海兵は慎重に弾の装填を作業を行っていく。訓練こそ十分に行っているが仮にも実戦、その作業速度はお世辞にも早いとは言えない。それでも装填が終わり早急に離れる。

「次弾装填良し！」

報告が上がり、艦長はソナー要員に目を向ける。一斉射目を終え、その効果の確認を待っていた。

ソナー要員は聴音機に耳を当て、ソナー画面をじっと見つめている。

「……対象より注水音らしきものを確認、ソナー画面からも敵潜水艦の航行を確認できず、相応の被害をもたらしたと思われませんが、再度攻撃を上申します」

「よし！ 対潜迫撃砲の再攻撃を行う！ 次で仕留めるぞ！」

再度の攻撃命令に各員が作業に当たり、対潜迫撃砲の射出角度と着弾地点の計算が始められ、出された結果に基づき航路と照準の修正が行われた。

「迫撃砲着弾地点の修正……よし」

「発射準備よし」

「全弾発射！」

射出された対潜迫撃砲弾は計算された着弾地点から僅かにずれた海面へと落下。数秒して爆発による水柱と共に大量の泡が発生した

ことから、目視で爆沈したと判断、ソナーと聴音機からも撃沈したと判断を下した。

「情報を整理し上に報告。 現海域はグラ・バルカス帝国の侵攻が確認された。 厳戒態勢が必要と上申を行う」

戦闘体制を終了し、緊張が解けた艦長は席に深く座ると息を吐いた。訓練こそしていたもののムーでは初の対潜戦闘、対潜迫撃砲の狙いも正確ではなくばらまく様に大量に使用してしまった。これからしなければならぬ報告書の山や状況に頭と胃が痛い思いをしていた。

攻撃を行わず、機関を停止させ隠密に徹していたシータス級の一隻は、ムーの対潜能力を把握した。慎重を期し情報収集に徹していたことが幸いだったが、何よりも下された命令を冷静に判断し、潜入であつて攻撃ではない事から無駄な攻撃をすることも、功を焦ることもなかった。

相手に気付かれぬように通信も控え、ムー国領海からレイフォル領海まで航行してから本土へと連絡を行った。ムーには対潜装備が存在し、それは脅威に値するものであると。

グラ・バルカス帝国 グールズ社

現在輸入した3000馬力級エンジンを元に機体の開発と、秘密裏に許可を得ずにエンジンの解析を行っていたのだが、技術者達は会議室で頭を抱えていた。

恐ろしいまでの工作精度に解析の不能な素材、生産できるようにとこのことで輸入したうちの一台を解体分析しているのだが、まったくもって生産できる見通しが立っていないかった。

何度エンジンの複製を試みても工作精度の問題で稼働が安定せず、似たような材質で代替してみても耐久性がまったく足りずにすぐに摩耗もしくは破断してしまう。

「……なぜだ。リヒテル発動機ではライセンスで木炭エンジンが作られているというのに」

「リヒテル発動機は設計図や製造方法を正式に得ているそうです。我々もそうすれば製造は出来ると思いますが」

正式に許可を取らずに解体分析をしている以上、そんなものを得られるわけもなく、そもそもライセンス許可は交渉時の段階で拒否されていた。

「これからも複製は試みる。機体の方の進捗はどうだ？」

シリウス型爆撃機やアヴィオール双発機の実績はあるものの、戦闘機に関してはいまだ正式採用されたものを出せていない。カルスライン社が他社を圧倒し、アンタレス型艦上戦闘機は僅かな改修をされて陸でも使われているほどである。

そのアンタレスにも勝る機体を上は期待しているのだが。

「機体そのものは、エンジンの出力不足で停止していました。艦上爆撃機ミルザムをベースに完成し飛行試験に入っております。試験は上々で陸軍海軍共に発注が来ておりますが」

試作機まで製作されたものの、度重なる軍からの仕様追加要求による重量増加によってエンジンの出力不足が判明し、不採用となった機体設計を流用し制作していた。機体形状や逆ガル翼などことなく艦上爆撃機 流星 に似ていた。

「肝心のエンジンは輸入のみとは。大量生産はできんか」

責任者は苦い顔をしながら生類に目を通しながら報告を聞いている。輸入ではどうしても生産数が限られ保守整備の問題からは逃れられず、カルスライン社のシェアを奪えるとは考えられなかった。

「ですが、軍の要求はすべてクリアし、さらに最高速度はアンタレスさえも越えます。これならばエンジンさえ製造できれば、主力機の座を奪えるかもしれません」

「予算の増額と増員を行う。なんとしても製造できなくてはならん」

ゲールズ社の方針は新型機の正式採用と生産に定まり、エンジンを複製しようと他部門への予算と人員配分を縮小する方針をとった。

カルスライン社は軍から新機体の発注が近々ある事を裏取引で知り、要求仕様書を手に入れそれに向けた機体開発と共に、ゲールズ社の動きを知り、スパイを送りこんでいた。

その頃リヒテル発動機では、工場の拡張が行われていた。さらなる影響力拡大を兼ね、日本でリヒテル発動機を持つ技術で生産が可能なように、彼らが生産している部品から再設計を行った三輪木炭自動車、具体的には木炭ガス専用設計されたサイドバルブ式キャブレターエンジン搭載車。何よりも出力が高くないのなら、車体を軽量化すればよいと小型化やサイドドアをなくすなどが低価格化にも功を奏していた。

これをリヒテル発動機で新たに生産販売を始めたところ、グラ・バルカス帝国内では一気にシェアが拡大し忙しい日々であった。

「この度は時間を頂きありがとうございます」

一方で技術差をリヒテル発動機の幹部や技術者達は良く理解し、十年や二十年では到底追いつけるようなものではないと。もし戦争になろうものなら何一つ出来ぬことをわかってしまうからこそ、上手く関われば大きな富を得られることも理解していた。

その為たびたび領事館に訪れては、新たな製品や技術協力の交渉を試みていた。

「可能な範囲で良いので、またエンジンや車両の設計協力を頂けないかと、代理店販売でも構いません」

「そう言われましても、こちらとしては領事館外では隣接する飛行場を除いて動く許可がありませんので」

リヒテル発動機制作した車両やエンジンなど、その他もろもろのモノの設計図や技術情報を態々運び込み、それを領事館敷地内で確認と設計図を調べて再設計を行っていた。そのような状況では出来る事など限られる。

「それにつきましては、隣接する飛行場内に当社の整備工場があり、そこならば許可地域内なので問題はないかと外務省には確認をとっております」

リヒテル発動機は伝手と賄賂によつて、飛行場内にあるリヒテル発動機の整備工場ならばと許可を得ていた。

「そうですか。 それでは少しやってみましょう」

リヒテル発動機製造の軽戦車シエイファーIIは、大よそ95式軽戦車八号と酷似している。そこからほぼ発展させずに、98式軽戦車ケニを設計したとリヒテル発動機 シエイファーの情報を開示させた後に渡すつもりであった。

53. アルーに近づくモノ 赤く輝く結晶

グラ・バルカス帝国、ムー国占領にとって重要なバルクルス前線基地、最新の機材に2個機甲師団に機械化部隊、2個航空団と大規模な部隊が配備され、砲兵がアルーに向け重砲を向け攻撃の準備を進めていた。

いまだ準備が整っているとは言いい切れず、本土で砲兵の育成も並行している為、重砲の数こそ揃っているもののいまだ攻撃が可能とは言えなかった。とはいえ後数か月によって陸上侵攻が可能な段階になるとの見込みであった。

「ムーの奴ら、それなりにやるそうだがこれだけの戦力には勝てないだろう」

「精鋭の機甲師団もさらに増強されるそうだ。オレ達も訓練が終われば歩兵から新設される機甲師団入りだな」

兵士の士気は高く次々とレイフオル総司令部から送られてくる戦車や戦闘機、侵略戦争の始まりが近い事を兵士達は感じていた。そして戦功をあげて出世する夢が近い事を。

ムー国側 アルー

アルーの住民の退避は進み、5000人ほど残っているのはどうしても先祖代々の土地から離れない人々と、その人たちを説得し続ける町の有力者、そして国境を守る為に決死の戦いを望む1000人ほどの兵士達だった。

「家々への爆弾設置よし」

「半地下格納庫への兵器の運び込み完了」

ムー国軍は都市そのものを罫として利用するために、退避し空いた家々には爆弾を、複数ある半地下格納庫にはとっておきの兵器、日本から融通された使い捨て兵器を用意していた。

「順調か。次は各自作戦書を頭に叩きんでおけ」

「了解!!」

住民の撤退が完了するまで、そして生き残るつもりのない防衛隊は自爆的な戦術であると分かっているにもかかわらず、グラ・バルカス帝国を足止めする為の準備を進める。

最後までアルーから離れないという住民たちが、土壇場の状況で逃げると言ったとき、その時間を稼ぐために。

ドーソン基地周辺 防空塔群

ドーソン基地も重要な物資はすでに運び出され、残されているのはしんがりを務める為の少数の戦闘機 隼と、人員輸送のための装甲車のみ。防空レーダー等も技術が奪われぬよう爆弾が仕掛けられ、いざと言う時完全に破壊できるよう入念に準備されている。

「敵の侵攻は近い。 各自入念に設備の再チェックを行うように」

防空塔群の責任者である司令官は、誰も生き残れないだろう防空塔群に配属されている部下達を見て、なんとも言えない気持ちだったが、誰も文句ひとつ言わず準備を整えていた。

防空塔群は前線に確実に孤立し支援も得られない。しかし市民の避難や部隊の撤退には必ず必要であり、敵航空戦力を受け止め、陸上部隊を足止めしなければならぬのだから。

空洞山脈内基地

空洞山脈内に作られた軍事基地には、キールセキまで直通の線路が敷設され、数多くの戦車や装甲車両が配備されている。

陸上侵攻するなら機甲戦力は確実に空洞山脈内を通らなければ、大戦力を一度に送る事は出来ない。

それ故に確実に侵攻する敵軍に対応する為、M4A3E8中戦車にクロムウエル中戦車、M4駆逐戦車に装甲車を配備し、山脈内での防衛戦を行う腹積もりであった。

一方で他の国境線において数か所は大規模でなければ侵攻が可能なたため、それほど多くを送る事は出来ずに、日本から供給されたARL44も持ち込んでいた。

潜伏する為に偽装が多岐にわたって施され、空洞山脈内に生えてい

る植物を載せたり石を積んだり、輪郭を誤魔化すために薄暗い景色と同色の網までかけている。

キールセキ・リュウセイ基地

最も戦場に近い都市であり大規模な基地では現在大量の物資や人員が鉄道によって運び込まれ、部隊の編制が行われていた。

「またきたぞ。 あれは第二軍の機甲師団だな」

「ああ、新型のクロムウエルを配備されているとこだ。 俺らのM4とはやはり違うな」

兵士達はリュウセイ基地に各地から集まってくる。 みな戦意は高く、隣接する飛行場には最新鋭のジェット戦闘機 トウナンが次々と着陸し集まっていた。

「第8航空隊も来たようだな」

「第1から第7までは主要都市防空で動けないのは仕方ない」

「それより明日には軍事都市から精鋭部隊が到着するそうだ。 期待していた方がいいぞ」

ムー国陸軍や空軍の兵士達は集まってくる同胞達と友好を深めながら、精鋭部隊の到着を心待ちにしていた。

翌日、蒸気機関車ではなくディーゼル機関車にけん引された一軍が現れる。 軍事開発都市から長い線路を走り、最新鋭の装備を整えた部隊である。 客車から降りてくるムーの兵士達も、無駄口一つ叩かず素早く降車し荷物を整え離れていく。

「ありやなんだよ。 同じムー軍だよな？」

「そうだが……、戦車もあまりみたことない兵器が多いな」

最新鋭の対戦車駆逐戦車チャリオティアにM4A自走対空砲、イローレ105mm榴弾砲Mk2を搭載したM40自走榴弾砲に、重戦車BPに重戦車TOGII、量産が始められたばかりの最新鋭装甲車や輸送車まで満載されていた。

それらは戦車兵等が乗り込み直接荷台から乗り降りできるキールセキ駅から順次降車、予定されている待機場へと移動していった。

「俺らとは、なにか違うような。ムー国人であるのは確かなんだが」「精鋭部隊だし何か違うんじゃないか?」

「知らないのか? 陸海空の教導団の母体となっていたのが奴らだぞ。それが出張ってくるってことは、オレらも気合を入れてないと死んでしまうぞ」

精鋭が出てくるという意味を分からないものなどほとんどいない。1人の兵士の言葉に聞いていた皆はゾツとした。

続いてムー国製のディーゼル機関車が移動し、ムー国製ではないディーゼル機関車に牽引される車両群の部隊が駅へと入る。

大量のコンテナに台車の無人兵器群、日本から派遣された支援部隊の到着であった。人の姿が見えないながら全てが自動で動き、小型の作業機によって固定も外され無人クレーン車が物資の積まれたコンテナや車両を下ろしていく。

人の姿が見えないのに作業が進んでいくことにムーの軍人たちが恐怖している中、客車から100人ほどの自衛官が降りてくるとほつとした表情を浮かべる。

それでも車両の数に比べると遥かに人数が少なく、操作するのにも困難ではないかと戦車兵であるムー国兵士は疑問に思ったが、太陽神の使いによるものがあるため何か手段があるのではないかと考え口に出す事はなかった。

全ての車両や装備には赤水晶 (Red Crystal) が描かれている。

表向きには太陽神の使いとしてムーへの支援ではなく、戦争犯罪を防ぐ為の派遣。グラ・バルカス帝国にはまだ話してはいないものの、ハーグ陸戦条約など戦争中でも守るべき人道、いまだ発行及び共通化されていない“交戦法規”の策定を目指しての事でもある。

伝統的赤十字はグラ・バルカス帝国の国旗に近い事から印象が悪いとして、最新の国際表記である赤水晶 (Red Crystal) を掲げ、戦争地域での人道支援と戦争犯罪への対処に赴く。この行為についてはミリシアル帝国及びムー国も了解し、正式に戦時国際条約を締結した事によってもミリシアルやムーの兵士が戦争犯罪を起

こした場合処罰を一任するとされていた。そして。

『無人機統括システム異常なし。 衛星通信リンクよし。 全システム良好』

カメラと液晶画面を車体側面に取り付けられたヤークトティージャーEML、名称 RANA が台車を降りる。

無人機部隊を統括管理する日本初のAI士官、最終承認トリガーこそ人間の自衛官であるが、無人機群を統括運用し、衛星通信によってリアルタイムに情報が本国に送られる。

判断の難しい人道支援と戦争犯罪への対処をするために、現場だけではなく後方から法務官によるリアルタイムの判断が必要とされたことに起因し今回運用が決定づけられていた。

一方で一つ間違えれば人工知能は危険であるとして、学習及び人格構築に関しては平和主義者でも過激思考者でもない人物によって丁寧に行われている。まるで自らの大切な子供に接するように。

54. 過剰な信頼（オマージュ作品を修正）

ムーでは現在は軍艦の建造だけではなく、クワ・トイネ及びクイラとの資源貿易用の輸送船などで造船所は許容量を超えてしまっていた。

そのような状況でも軍艦は必要であり、優先度を設け重巡洋艦ラ・トーネ級及び空母を主に建造している。しかし敵潜水艦が北部海域に現れたことが判明し、航行距離が長く船速に優れる軽巡洋艦級や駆逐艦級を必要としているのだが建造して余剰などなかった。

軍事都市にも4か所ある船渠の第一は損傷を負ったラ・マトヤの修理中、第二はラ・ネート級の建造中、第三では空母の建造が行われ、第四船渠は現在拡張整備中で軍事都市においても余力など皆無であった。

そんな艦船が足りない中、ムー大陸北側ではグラ・バルカス帝国の艦隊が現れていた。

やや旧式化しつつある空母1隻と駆逐艦20隻、問題があり余り価値のない人員達、ムー国の正確な戦力を計るための使い捨てに近いものだが、むろん情報を正しく収集するために、オリオン級高速戦艦1隻には相応の人員が配置されていた。

ムーは対する為に艦隊を差し向けつつ、比較的陸からも近い為航空機を陸からも飛ばすという手段を講じ、陸からは一式戦闘機 隼の編隊総数60機と共に5機の爆撃機が向かっていた。

胴体の過半を潰しそこに装着されたムー国初の空対艦誘導弾、その運用の為に改造されたラ・カオス2世型爆撃機。今回陸地からも比較的近い為、実戦に初使用される。

さほど性能が良くないセミアクティブ・レーダー・ホーミング、空対艦誘導弾は大きく旧ソ連が開発したKSS-1とサイズや形状など酷似していた。そして最終誘導は爆撃機ではなく、別機が対応しなくてはならないなど問題は山積みである。しかし900kgもの徹甲弾頭であるがゆえにその威力は絶大で、コンクリートと鉄材で作られ

た220mm厚の陸上標的を破壊している。だからこそ司令部はその性能以上の期待をかけ無理な命令を下してしまっていた。

航空隊は海上に到達し、司令部から指示のある方角に飛行を続ける。

「左上方に敵機多数！ グラ・バルカス帝国の戦闘機だ!!」

「爆撃隊は我々に任せ作戦を遂行せよ。全機戦闘体制、1番機から20番機は直掩、残りは迎撃に当たれ!」

アンタレス部隊を発見し、護衛の一式戦闘機 隼部隊は隊長機の命令と共に落下増槽を捨て迎撃に向かう。

「右後ろ上方！ 雲間から敵機！ 多数が突っ込んでくるぞ!」

「敵に読まれていたのか!? それとも情報が漏れたか!?」

「21番から60番までは爆撃機の直掩に回れ!!」

護衛の部隊を半数に分けて対応するが、二方向からの攻撃に対処が遅れた事から銃撃を受けた3機のラ・カオス2世爆撃機が爆発炎上し墜落していく。

辛うじて1番機と4番機は無事だったものの、作戦失敗と判断し1番機は誘導弾を投棄し陸地へと機首を向けた。

しかし、4番機は機首を陸地へと向けようとしないう。それどころか高度を急激に下げ振り切ろうと加速しているように見える。

「作戦失敗だ! 4番機! 誘導弾を破棄し帰還せよ!!」

アンタレスから撃ちだされた機銃弾は右翼を貫き煙が上がっている。右舷第二エンジンに被弾したラ・カオス2世爆撃機、護衛隊である隼に搭乗する隊長機が無線に大声を張る。

「まだまだ飛べる! 任務続行するぞ!」

機長は高笑いを上げながら無線に答え、燃料を噴き出す右第二エンジンを停止させ残りのエンジンで飛行を続ける。護衛隊の隼とアンタレスの空戦が行われる中、1機のアンタレスはラ・カオス2世大型爆撃機を低空で追い続けていた。

「ダメです! 一機が食い付き離れません!」

「落とさなくても構わん! 機銃の照準に入れさせるな!!」

海面近くの低空で飛行すると狙いを定めるのは難しく、極低空飛行

は操縦主の技量に大いに左右されるが、防空機銃も上方と後方だけの牽制で済む利点もある。制空機側も上方以外からは墜落の危険性が伴い手が限られる。

護衛隊による空中戦、ラ・カオス2世爆撃機の後部と上部銃座の必死の迎撃も数の多いアンタレス相手には苦戦。

銃座要員は必死にアンタレスに向け銃撃を行うも、正確な照準を妨げられる程度は出来ても撃墜には至らない。そして対応できるのはせいぜい一機が限界であったが、それでも十分に時間を稼げている。だが。

「左上方からさらにもう一機！ 対応が間に合いません!!」

隼の航空戦を抜け上空からもう1機のアンタレスが接近、機銃弾が胴体から左翼を貫き銃座に座っていた要員が悲鳴を上げる事もなく体を銃撃によって沈黙、そして貫かれた機銃弾は機の破片をまき散らし電装系を引きちぎり燃料が引火、左第三第四エンジンが燃え上がり機内に炎が回っていく。

「敵艦隊発見！ 敵空母艦隊が射程圏内に入った!!」

操縦士が飛び散った機体片で血まみれの顔で声を上げる。その言葉と同時に機首を上げ急速に高度を上げ始める。そんなことをすれば速度も落ちる上に照準が合わせやすくなりアンタレスに撃ち抜かれてしまうが、大型対艦誘導弾は一定以上の高度を必要としていた。「もう十分射程内だ！ 投下して機体を捨てろ!!」

護衛部隊の隊長は無線に必死に怒鳴り続ける。機長はそれに応えることなく、逆に無線から怒鳴り声が響いた。

「ムーを、頼んだぞ!!」

空対艦誘導弾は機体から切り離されると同時にロケットが点火し急激に加速。その直後引火し炎を上げながらも稼働していた左エンジン2基が滑落、ラ・カオス2世爆撃機は炎が機体全体に回りながら推力を失い海面に激突。

しかしパイロット達が機体を捨てた様子はない。ギリギリまで機体を保たせるためにその暇がなかったのだろう。

隊長機は墜落したラ・カオス2世大型爆撃機に敬礼する暇もなく、

アンタレスとの交戦を続ける。敵艦近くで誘導制御を請け負う準13番機の最終誘導電波を受け、空対艦誘導弾は目標である空母へと向かっていく。

グラ・バルカス帝国空母艦隊

アンタレスと準による航空戦が艦隊近くで行われる中、観測員によって向かってくる物体が確認された。

「大型ロケット弾確認！ 向かってきます!!」

「撃ち落とせ!!」

駆逐艦によって打ち上げられる対空砲撃、20隻もの集中したものは猛烈という言葉で片づけるには足りないものだが、それでも準13番機の最終誘導電波に従い、音速を超えたムー製空対艦誘導弾は偶然の迎撃など起こらず空母の飛行甲板に突き刺さり大爆発を起こした。

甲板を貫いた大爆発は空母の内部を駆け巡り、空母は数秒と持たず轟沈。空母を失い大幅な航空戦力を失ったグラ・バルカス帝国艦隊は、それから僅かに時間が経ってから到着したムーの艦隊と交戦を始める。

「ムー国艦隊確認！ 数は16!」

「大きさから種別は全て巡洋艦と思われる!」

砲撃が行われる前の情報戦、監視員は双眼鏡を手に艦種を判別し、その情報によって作戦が決定される。

「何かを投下した模様！ 魚雷の可能性大!」

「魚雷が来るぞ！ 監視員は目を凝らせ！ 機関全速!」

命中率が非常に高い半誘導魚雷、ただの魚雷としかいまだ知らぬ艦隊は航路を変更し目を凝らして対応しようとする。

ムーの魚雷は確かに水面から確認は出来るし航路も見なくもない。問題は相応の速度である上にそれなりに誘導するということだ。

日本とて距離によっては危険で、迎撃しなくてはならない代物だろう。それをグラ・バルカス帝国が対処できるはずもない。

「ダメだ！ 魚雷至近！ 直撃するぞー！」
「衝撃に備えろおお!!」

悲鳴のような報告が上がり、数分してグラ・バルカス帝国の駆逐艦は船舷にいくつもの水柱が上がり艦は沈んでいく。いまだグラ・バルカス帝国駆逐艦の魚雷有効射程にも、砲撃射程にはいることもない。ムーが求める艦対艦誘導弾はまだまだ先、それでも長射程無線誘導魚雷は日進月歩で発展していた。

一か八かで発射されたグラ・バルカス帝国の魚雷の航跡は発見しやすく、ほぼ直線に進む事しかできない故に発射が確認されると同時にムー艦隊は射程外へと逃れられてしまっていた。

次々と駆逐艦が沈んでいく中、オリオン級高速戦艦は海域を脱しレイフォルへと情報を持ち帰った。グレードアトラスターの交戦情報によって巨艦の危険性だけではなく、巡洋艦級の危険性及び空母を一撃で仕留められる大型ロケット弾の存在を。少しずつ、そして着実にムーの情報グラ・バルカス帝国に蓄積されていく。

ムーもまた有効な兵器と減らぬグラ・バルカス帝国の兵力を知り、軍艦のさらなる建造と兵器の生産の必要性が確認された。

空対艦誘導弾の最終誘導を行っていたパイロットは着弾成功の無線を使った後、アンタレスに撃墜されムー国基地に帰る事はなく、護衛を担当していた一式戦闘機 隼の部隊もそのほとんどが帰還する事はなかった。

敵艦隊の壊滅により作戦成功、されど被害は甚大、これ以降は最新兵器頼りの作戦については停止されることになる。

55. アルー撤退

ムー国

戦時状況として市民の活動は安全の為に制限が実施されている、しかし原則として非戦時とさほど変わらないものであった。

むろん軍需工場へ資材の優先などは行われているが、クイラからの大量に輸送されてくる資源によって不足は然程発生しておらず、製造の遅れ程度で済んでいた。

ムー国最西端の都市 アルー

国境線の向こう側では、グラ・バルカス帝国のバルカルス基地が存在する。最前線でありながら防衛設備はない。しかしただ退くだけでは戦意が下がり今後に影響が考えられ、希望者を募り決死隊がアルー防衛に残っていた。

榴弾砲は届くだろう。だからこそ民間人を避難させ、都市内に残っているのは決死の作戦を選んだ死にたがりで構成された規模は一個大隊のみ。最新兵器は肌に合わぬと拒否する熟練兵、諸事情によって戦死見舞金の為に激戦地を望んだ兵士、事情はそれぞれながらもムーを守るという意思だけは共通している。

砲撃の煙を監視していたムー国兵士が発見し、通信機に声を張り警報のスイッチを入れる。

「砲煙確認！ 来るぞ！」

即座に警報が鳴り響き兵士達は半地下壕や建物の中に避難、時間が経過し砲撃は建物まで到達、歴史ある建物が崩れ悲鳴が響き半地下壕にも振動が伝わる。

混乱を始める住民をまとめながら、いまさらになってようやく町を出る覚悟を決めた人達を町の東側へと誘導、トラックやバスに乗ってもらい順次町を離れていく。

時間が経ち攻撃が止み防衛隊本部から各部隊へと有線通信によって状況報告を求める。

「第一から第九小隊まで状況を報告せよ」

「第五小隊から連絡なし。第六小隊から砲撃によって第五小隊拠点崩壊を確認」

「第二小隊隊から連絡。グラ・バルカス帝国の陸戦部隊が国境を越えた」

「第七 第八小隊 民間人の誘導完了」

「各員作戦に従い、グラ・バルカス帝国兵にムーの勇猛さを知らしめよ。通信はこれで終わる」

仮設司令部に居たムーの佐官たちも銃器を手に出ていく。半地下式防空壕からトラックにけん引され 一基一〇〇発 単純な構造のロケット弾発射機が姿を現す。日本がムーに融通したC規格装備であり、コンテナの数は30あるので3000発、ムーの兵士によってロックが外され前後ではなく左右の壁が開かれ、導火線に火がつければと1秒に1発ずつ発射され空に消えて行く。

反撃の砲撃も塹壕もない事から悠々と進むグラ・バルカス帝国兵は至近で訪れた攻撃、手りゆう弾二発程度の低威力とはいえ3000発ものロケット弾は装甲車両を傷付け歩兵を殺傷していく。

油断していたとはいえ後陣に攻撃を受け一時的な混乱に陥るが、先陣や中陣に居たグラ・バルカス帝国の機甲師団は数か所からアルーへと入り、いまだ規律こそ保たれてはいるものの先ほど受けた砲兵による攻撃で建物や道は破壊されている。

先陣の部隊がいくつかの家々に押し入るが誰も居らず、敵はいないものと決めてかかり銃を肩に担いで略奪した食料や酒を片手に家々から出てくる。

「逃げやがったか」

「所詮は蛮族連中だ。大したものもみえんな」

その様子をムーの軍人は静かに4階建ての家の屋根から隠れながら見ていた。合図とともに大通りに面する4階建て以上の家や古びた車が爆発し、残骸をまき散らしながらグラ・バルカス帝国兵を破片が襲う。

「なっ、敵襲！ 敵し」

言葉を続ける事は出来ず、近くの建物の屋上及び室内に陣取っていたムー第五小隊から機関銃の銃撃を受け倒れていく。

「あの建物だー！ 3号車撃てー！」

砲身が向けられ砲撃を受けた家の一部が崩れ銃撃が止み、歩兵の突入によって制圧される。中にいたのはほんの10名足らず。

「くそー！ どこに潜んでやがる!!」

悪態をつきながら周囲をグラ・バルカス帝国の兵士達は銃を向けながら周囲を見回す。

「かまわん！ 周囲の建物ごと砲撃で壊せ！」

ハウンド中戦車によって周囲の建物を数件吹き飛ばすが悲鳴も何もなく、ただ建物が崩れる音だけが響くだけ。警戒しながらも再び侵攻を進めるが。

一区間進んだところで地面に仕掛けられた爆薬が爆発し、塞がれていた大穴が口を開き2両の戦車を地面に飲み込む。

「かかれえ!!」

号令と共に周囲の建物の屋上に伏せていたムーの小隊は銃撃と共に手りゆう弾や火炎瓶をグラ・バルカス帝国の列に投げる。

銃撃程度では効果が無く、手りゆう弾や火炎瓶が届かない後方からハウンド中戦車の砲撃が建物に撃ち込まれ、一部が崩れ始めても攻撃の手を緩めることはなく、戦車や装甲車の陰にグラ・バルカス帝国の兵士は身を隠す。

咆哮を叫びながら銃剣を握り襲い掛かるムー国兵士、集中砲火でたやすく射殺されるもグラ・バルカス帝国兵士に恐怖を与えるのは十分、執拗なまでの遅滞攻撃や奇襲にアル―市内に5箇所から侵攻していた部隊は停滞を余儀なくされた。

「何をやってるか！ 敵は少数だぞー！」

業を煮やした前線指揮車から中隊長が怒鳴り声をあげる。

「うゝあゝあゝあゝあゝあゝ」

狂った雄叫びと共に建物の3階からムーの兵士が車両に飛び降り、体に巻き付けていた爆弾のピンを引き抜き前線指揮車が吹き飛ぶ。

その後も建物や車両、時には地面に埋められていた爆薬による攻撃は執拗に続けられ、グラ・バルカス帝国は精神的負荷をかけられ続けアルー占領は慎重にせざるを得ない状況になっていた。

防空塔群

グラ・バルカス帝国陸軍は、丸二日かけて都市アルーを突破し、空洞山脈までを占領下に納める為アンタレス航空隊と機甲師団がドーソン基地へと向かっていった。

迫りくる100台以上の戦車、そして飛び回る敵航空機、中央防空塔ではCIWS 1Aの対空射撃と残りの防空塔でも必死の対空攻撃が行われている。

弾数があると言っても銃身が過熱し改造CIWS 1Aが定期的に停止、ムー製40mm対空砲はさほど命中率は高くはないが、CIWSの圧倒的命中率に被害を出したアンタレス航空隊は一時撤退、40mm対空砲も幾らか撃墜する事に成功はしたものの、脅威と見られたのは中央防空塔のCIWSであった。

そしてその脅威を手に入れる為、グラ・バルカス帝国は砲爆撃による防空塔破壊ではなく、物資や戦力を枯渇に追い込んだ末での鹵獲を選んだ。

民間人の撤退が済むまで僅か10台の戦車で迎え撃つ。航空支援も砲撃支援もない。屋上から見える光景に恐怖で震える中、ふと一人の兵士が小さな声で口に出した。

「この世は無常だ」

笑えてくるほどに迫ってくる敵兵の数に生き残れることもない。例えM4中戦車だろうと数の暴力には勝てないと。

それでも、アルーに残っていた民間人が空洞山脈内の列車に到達するまでの間、敵の大軍を押しとどめなければならぬ。

M4中戦車に乗る戦車兵は照準を覗き込みグラ・バルカス帝国の戦車に狙いを定め、戦車壕から砲塔だけを覗かせながら偽装布の下からずっと命令を待つ。

「攻撃開始！」

号令と共に戦車隊は10倍以上の相手に砲撃を開始、先制の砲撃と共に6台のグラ・バルカス帝国の戦車が吹き飛ぶ、しかし100台以上のうちたった6台、それでも時間を稼ぐためには前進するしかない。戦車塹壕に籠っていた所で、集中した砲撃に晒されてしまうだけなのだから。

ほぼ一発ごとにグラ・バルカス帝国の戦車ハウンドは吹き飛び、敵戦車の砲弾が当たったところで鈍い音と共に砲弾が弾かれる。

「9号車！ 突出し過ぎるな！」

何台もの中戦車ハウンドが擱座していく中、無謀ともいえる前進で数台のハウンドが突出していたM4中戦車の側面に回り砲撃を始めた。

突出してしまったM4中戦車は後退しつつ砲塔を旋回させ迎撃するものの、10発近く砲撃を受けたことで装甲を貫かれ、運悪く弾薬庫に引火し1両が吹き飛ぶと少し及び腰であった戦車ハウンドは一気に攻めたて始める。

「3号車履帯をやられた！」

「6号車！ 支援する!!」

57mm砲ではそう簡単に貫かれない装甲を持つとはいえ、1000台を超える故に9台で応戦するも1台ずつ集中した砲撃に晒されてしまい、車体や砲塔の装甲は歪み擱座していく。

「全車連携をとりながら下がれ！」

戦車隊指揮官である1号車は命令を下し、周りこもうとする戦車ハウンドの一台を砲撃によって撃破、衝撃と共に履帯が破壊され車体が停止する。

「本車は履帯破壊により擱座。後は4号車に指揮権を移管する！全車構わず交戦を続けよ！」

停車したまま砲塔を向けるが、動けない的となったM4中戦車に一斉に砲撃が集中、装甲が砕かれ貫通した砲弾が車内に飛び込み完全に動きが停止した。

防空塔近くの高さ6mもある円柱の防壁で交戦を続けていたが、周

囲を囲まれ比較的装甲の薄い側面を狙われた事で戦車隊が壊滅、野戦砲によって中央防空塔以外破壊され残った中央防空砲塔も現在グラ・バルカス帝国兵の侵入を受けていた。

「2階突破されました！」

「手りゆう弾を投げた後は撃ち続ける！」

周囲を囲まれさらに防空塔に侵入されている状況ながら、ムーの兵士は降伏などせず銃眼のある3階では下り階段に向け機関銃で応戦していたが、銃身が過熱しもはや突破されるのは時間の問題、何よりも下階からとはいえ、グラ・バルカス帝国軍の銃撃にムー側も死傷者が続出していた。

「自走爆雷を起動しろ！」

「階下にはガソリンを流せ！ バルブを全部開け！」

ムーの兵がスイッチを入れると円柱状の防壁の一部を覆っていた鉄板が外れ、火を噴き出しながら横倒しになると左右の端からロケット推進によって転がりはじめ、グラ・バルカス帝国の兵士や車両を押し潰し無軌道に転がり始める。

日本から供与されたチープ兵器群の一つ対戦車陣地等破壊兵器、正次に次世代型の開発及び生産が始まった為製造された旧式の1基はムーへと売却され、ムーでは防空塔群に運び込まれていた。

「撃て撃て！」

「57mm砲でも止まらん！」

「だめだだめだ！ 踏みつぶされるぞ!!」

歩兵のほとんどが防空塔の制圧に動き、戦車や装甲車に残っていたグラ・バルカス帝国の兵士達は逃げ惑うも重量に押しつぶされる。そして5分間の稼働時間を終えると爆発し周囲に石塊と鉄材が撒き散らされ更なる被害をもたらす。

そして防空塔では階下に見えぬよう設置されている散水設備へと繋がるガソリンタンクのバルブを開き階下へと流れ始めるのと同様に、グラ・バルカス帝国兵が手りゆう弾のピンを抜き3階に向けて投げた。

「手りゆう弾！」

爆発によってムーの兵士が吹き飛ぶと同時にガソリンに引火し1階から4階まで爆炎と衝撃が広がる。足元から伝わる大きな衝撃に終わりの時が近付いているのを防空塔の司令官は理解した。

「最後の連絡をしたい者は居るか？」

5階の指令室には有線で本国への通信回線が敷かれ、それもいまだ気付かれず使用可能であった。しかし誰一人として使うとは言わず首を横に振った。

「そうか。では我々も職務を全うしよう」

閉じられている最上階の鋼鉄の扉が叩かれ、蝶番が悲鳴を上げる中スイッチを入れるとCIWS 1Aが爆発、そして防空塔が上階から順に爆発し防空塔内部に居たムーの兵士もグラ・バルカス帝国の兵士も飲み込む。

日本から供給されたとっておきのE50爆薬は残骸を吹き飛ばし、飛び散った瓦礫によって周囲に展開していた装甲車までもが巻き込まれ甚大な被害を巻き起こす。

爆発が収まり瓦礫の煙が舞う中、銃眼からの銃撃が届かない所で命令を下していた参謀たちは啞然としていた。

強力無比な対空兵器を鹵獲する為、損耗を覚悟で送りこんだ兵士を失ってしまいながらあと一步のところで自爆されてしまい、師団長のボーグは歯噛みしながら崩れ落ちた防空塔の残骸を眺めていた。

バルクルス基地

ドーソン基地を無事に制圧し、鹵獲した敵兵器を軍が運んできた中にあつたM4中戦車を陸軍責任者たちは確認していた。

「たった10車両に61車両やられたか」

擱座した状態とは言え7両が運び込まれ、担当技官が前戦兵士や整備兵から調べ上げた情報が記載されている書類を手に説明を始める。

「砲口径は76mm、ハウンド1及びハウンド2を一撃で破壊してし

まいます。装甲はまだ判明しておりませんが、少なくともハウンド1の57mm砲では100m以内に接近し10数発撃ち込みませんと効果は見込めません」

「ふむ、装甲はリベットではなく鑄造、いや溶接か。本土に輸送するよう手配し、それまで残骸は出来る限り集めておけ」

「はっ！ 了解いたしました！」

技官が手配の為に足早に向かっていくのを眺めた後、グラ・バルカス帝国陸軍第8軍団長ガオグゲル・キンリーバレッツジはため息を付いた。

「こんなものがあるとは聞いていなかった。情報部は一体何をしているー！」

たった10台相手に総数200両の戦車のうち61両もの損失、もしもこの戦車が他の戦域にも投入されているのなら、威力偵察も失敗している可能性がある。

「上にはこれを超える戦車を製造配備してもらわねば、いずれは陸軍は押し負けかねん」

バルカルス基地の責任者でもあるガオグゲルは、自らの要求が難しい事を理解しつつも、軍団長であるがゆえにムーがこれから行うだろう反攻作戦もおおよその推測が立ってしまっていた。

56. 脱出・強行偵察・発注

空洞山脈以西はグラ・バルカス帝国の手に落ちた。警戒機が定期的に巡回飛行してまわり、生き残りのムー国兵士を探していた。

そんな敵地の中をアルー防衛隊の生き残りの分隊8名、民間人2名が空洞山脈へ向けて歩いている。

防衛隊が遅滞戦闘を行っている最中、砲撃によって倒壊した建物で2名の民間人を発見、すでに全ての退避部隊が移動してしまった後のが、1分隊を護衛に退避任務にあたっていた。

幸いな事は、防空塔群の爆発とドーソン基地占領によって負った損害のためグラ・バルカス帝国陸軍は再編中であり、アルーから空洞山脈間は戦力の空白地帯に等しく時折警戒機が飛ぶだけであった。

「お姉ちゃん……」

「大丈夫、きつとキールセキまでいけるから」

子供二人を護衛しながら8人の兵士は周囲を警戒しながら、木々や高めの雑草に身を隠し虫などに集られながらもなんとか進み目的地が近付いていた。

「非常時予定ポイントまであと1km、そろそろ見えてくるはず」

想定外の事態によって民間人護衛の撤退部隊からはぐれた場合、そこに集合し救援を求める事になっていた。

あまり使われていない雑草も生えた荒れた街道、周辺の案内標識が打ち込まれている大きな岩山と雑木林があり、周囲の大きささまざまな岩石が集められた層山のようなではある。近くで見ても苔と雑草の生えた雑多な岩山に見えるのだが、コンクリートで作られた人工物であることに間違いない。

「よし、引くぞ」

苔と蔦に覆われた土山のような物の周りには倒木や壊れた看板などが捨てられている。端に落ちていた編まれた蔓をムーの兵士達が一気に引く。

苔や蔓ごとシートだった土山が取り払われ3台の車両が姿を表す。ムー製最新型6輪機動車両、ここから空洞山脈内まで森や林など身を

隠せる場所が全くない為、見つかってしまえば交戦は避けられない危険な地帯に入る。

空洞山脈まであと30km、全員搭乗し道を空洞山脈内に向け走り出したが、10分程度たったところで哨戒飛行をしていたアンタレスに発見されてしまう。

リュウセイ基地ではシユヴァルベが1機緊急出撃の為滑走路にて最終確認が行われている。

傍受した敵無線の中に空洞山脈に向けムー国兵士の一団が逃げていると情報があり、通常通り空洞山脈上空を飛行して救援に向かえばレーダーによって察知され迎撃機が送られてしまう。

それ故に空洞山脈を超低空、山脈間の狭い谷やアーチ状の岩が連続した場所を抜け救援に向かう作戦が建てられた。本来は低速でも飛行が可能なD21を利用した苛酷な訓練飛行の為に使用されていたルートなのだが、そこを時速800kmを超えるジェット戦闘機で抜けるという正気ではない作戦に誰しもが不可能だと発言し、D21に変更し救援を行うとして出撃していった。

しかしそれでは間に合わないとしてエイノ・バーリング・ユージェイライネン大尉が自薦し、新機能搭載による飛行テストで軍事都市からリュウセイ基地に降り立っていたMF1001シユヴァルベによる救援を行うとした。

最終チェックが終わるとすぐに滑走路を飛び立ち空洞山脈へと機首を向ける。

空洞山脈

先行してD21の飛行隊6機は渓谷の比較的上層を時速200kmで飛行していた。

「3番機崖に寄り過ぎているぞ！ 墜落したいのか！」

「これ以上の速度は危険かと」

「仲間が追われているというのに！　これ以上急げないとは！」

200kmといつても熟練したパイロット達でも油断は出来ず、安全を確保できる範囲内とはいえ彼らとしては十分に急いでいた。救援に向かっているD21航空隊が焦る気持ちの中、甲高い独特の音が響き谷の低空を高速でシユヴァルベが抜けていく。

その光景を見ていたD21のパイロットたちは余りの異常な速さに正気を疑いたくなるも、救援が間に合うのではないかと希望にも見えていた。

一方でエイノ大尉は強烈な精神的負担に冷汗さえも流す余裕もない状況であった。

（次、左方向へ高度にアーチ）

機体を傾けジェットエンジンが奏でる轟音が反響、衝撃波が溪谷に生えている木々を酷く揺らし鳥たちが逃げ惑い飛び立つ。

4度操縦桿がずれてしまえば谷やアーチに激突、2秒も操作が遅れても谷やアーチに激突、ほんのわずかに操縦桿を傾け谷の間を抜けていく。時折谷の崖まで10mを割るまで接近し、極限の状況の中視界全てがゆっくりと減速し本来ならば不可能なことに体が反応する。代償は過大な脳内麻薬の分泌による脳や神経等を含めた体への負荷による寿命を削る事、それでも太陽神の使いが操る戦闘機に勝る為に鍛え込んだ体は耐えていた。

哨戒機として危険なものを排除するために3機中2機が安全な距離から上昇と降下を行いながら機銃の銃撃を、残る1機は安全な高度で追跡しつつバルクルス基地へと通信を行っていた。

撤退中の部隊は砲塔の重機関銃を撃つものの、アンタレスには大した牽制にすらなっていない。それでも民間人が載っている一両を逃す為に、残り二両は守る様に意図して目立つ銃撃を行っている。そんな状況で1時間はなんとか持たせていたものの、一両が機銃の銃撃を受け、運悪く燃料タンクを貫かれ引火しあつという間に火だるまになる。

「これ以上やらせるな！」

「手持ちでもいい！ 撃ち続けろ！」

装甲車が走る中でも運転席の扉をあけ放ち、身を乗り出しながら手持ちの機関銃さえも撃ち続ける。だがそれも長く持たないと理解している中、甲高い音が響き一機の航空機が近い事が伝わってきた。

「きたか!?!」

視線を向けた先からは特徴的な薄灰色に染められた国章も何もない航空機が見えた。

しかしムー軍の兵士なら間違えるはずもない存在、ムー国初のジェット戦闘機として大々的に広報され、太陽神の使いからムー独自の戦闘機であると認められたMF-001ジェット戦闘機 シュヴァルベ。

機体中心近くに吊り下げられた二基のジェットエンジンから赤い光を放ち、地面から僅か15mの高さをシュヴァルベは抜ける、グラ・バルカス帝国のレーダーは時折反応が小さく出るだけで機器の異常によるバグか敵機か判別できず、即座に迎撃機を送り出す事は出来ていなかった。

グラ・バルカス帝国 第5哨戒隊

「敵機か!?!」

レーダーに感があれば連絡が来るはずだが、それでも状況でこちらに高速で向かってくる存在が見える。

「ムーの敵機！ 数は1だ！」

「単機で当たるな！」

即座に地上の敵から現れた敵航空機へと標的を切り替え機首を向ける。だがその感覚はあくまで同等程度であると相手を認識していたがゆえに、戦闘速度である900kmとの相対はほんのわずかで行われてしまった。

機首を上げコックピット横のムー製20mm機関砲から放たれた弾丸は防弾が施されているアンタレスを容易く貫き、1機が機体から

火を噴きながら墜落していく。

それとほぼ同時に正面からの撃ち合いを避けるかのように機体を左に傾け旋回していく。

「逃がすかー!」

アンタレスのパイロットは降下する加速も利用して追いつがろうとするが、エンジンらしきものがから噴き出す赤い光がさらに灼熱化し急加速によって容易く突き放されてしまう。

新機能である試作アフターバーナー搭載エンジン、アフターバーナー連続稼働時間僅か1分程度である上に一度の出撃で5回までしかエンジンが持たないなど問題は多いが、そのテストの為に精銳が集まっているリユウセイ基地へと赴いていた。

再び機首を上空へと向けると異常な速さで上昇、高高度で情報を集めながら通信を行っていたアンタレスへ向かっていく。

高空にいたアンタレスは逃れようとするものの、翼下から発射された何かが高空に居たアンタレスを正確に追尾し機銃を撃つ前に爆破してしまう。

ムー製の42式誘導弾、技術的限界としてムーのジェット戦闘機でも機首にスペースがあるシユヴアルベ及び橘花しか搭載できないものの、セミアクティブ方式誘導弾は相応に音速を越えているがゆえに、レシプロ戦闘機はチャフやフレアを持たない非ジェット戦闘機では逃れる術はない。

「くっ! 第二哨戒隊より本部! ムーの戦闘機はアンタレスを上回る! 繰り返し返すムーの戦闘機はアンタレスを上回る!」

生存及び撤退が不可能だと悟り、高高度から機体を翻し向かってくる敵機に機首を向けトリガーに指をかける。司令部に情報を送り体当たりを辞さぬ覚悟を持って操縦桿を握るが、アフターバーナーによって短時間ながら最大1100km、アンタレスの500kmの上昇速度と合わせ相対速度は1600kmを越え交差の時間はほんのわずか、訓練もせずに手動照準が合うはずもなく交差する直前に逆に機銃を撃ち込まれアンタレスは墜落していく。

一方で戦闘機動の過負荷が掛かっている状況でありながらアフ

ターバーナーを多用したことで片側のエンジンが煙を噴き出し停止、速度を下げながらリュウセイ基地へと戻っていった。あくまで新機能のテストで問題が発生しないわけではない。

「同胞がやってくれた！ 空洞山脈内まで急げ！」

仲間の遺体を回収する暇などなく、撤退部隊に残された2両は再び走り出し無事空洞山脈内に到達、D21飛行隊は僅かな間だけに意図してかかる事でグラ・バルカス帝国の飛行隊をかく乱後交戦をせずに帰還を果たした。

神聖ミリシアル帝国

アニユンリール皇国を下した事で多くの技術の再取得が進む中、さらに封鎖軍事都市で科学的知識と知見を得たことで、次々と解明される古代技術によりいまだかつてないほど発展を続けていた。

宣戦布告を受けているとはいえ、主な戦場は第二文明圏周辺であるがゆえに余裕もあることながら、最新鋭のオリハルコン級戦艦の錬成も順調に進んでいる。

そんな状況であるため日本はある発注をかけていた。

「う……む。分かってはいたが、この魔導システムの開発は余りにも難しい」

「アトラタス砲の改良、それだけ難しいと言う事だ。それも知見を得ただけではなあ」

「太陽神の使いから概念のレクチャーはもらえたのだ。やらねばならんよ」

光弾を放つのではなく空対空誘導弾を放つシステムへの改修作業、それはアトラタス砲の設計と構造を利用したクウ・ウルティマ誘導弾の搭載を試みていた。

一方で一番割りを喰っているのは取引で研究開発を委託された、ルーンポリス魔導学院など開発生産などを担当する部署であった。

艦隊級極大閃光魔法の改良。日本では前世界で技術購入し細々と研究開発を続けていたものの、優先度が低くなおかつ多くの技術者は

パル・キマイラに搭載されていた反重力魔導エンジンと魔素を利用したバリアシステムの改良に人手を取られていた。それ故に技術情報と引き換えにミリシアルに対して物資の輸入や魔道技術開発の発注をかけていた。

アガルタ法国 艦隊級極大閃光魔法

1. 現状では一種の熱線で標的を焼き払うだけであり有効性はそれほど高くはない。

2. 発動時間はともかく消費魔力量が多過ぎ魔石や個人の魔力が長時間は持たない。

3. 艦隊級という大規模魔法陣形成が必要という欠点。

4. 現時点では試作未完成品段階であり実用性に欠ける。

帆船のマストほどの大きさがある杖型増幅装置を利用するアガルタ法国であったが、ミリシアルの技術者達が解析及び改良する中で標的への照準は最終詠唱者の脳力に左右されることが判明し、魔法のままでは個人差があまりに大きいとして部分的にミリシアルによる魔導機械式呪術詠唱と増幅器等魔術回路への置換が行われている。

57. 戦争がもたらす世界各地への影響

第一文明圏

現在国内の発展が著しい中ムーへの支援の為に軍艦の建造や戦闘機の製造で凄まじく景気が良い、新たに生まれる機械や道具を買うための給料を得られるため不満など一部しか発生していなかった。

「もう家に帰らせてくれえええ！」

「もう嫌ですう！ これ以上の納期短縮は無理ですつて!!」

「20日後の納期品を5日後に割り込みなんて無茶です！ もう17連勤ですよー！」

科学文明に造詣が深い魔導工場は日本から託されたライセンス兵器の製造と量産に激務の状況が続いており、追加作業報酬や特別残業手当を付けていても、連日泊まり込みの作業に誰しもが帰宅したいと悲鳴を上げていた。

「すまない。しかし上からさらに追加手当と人員補充は取ってきたから、なんとか皆頼む」

工場長も痛む胃を抑えながら、目の下に酷い隈を作りながら作業を続けていた。弾薬などの消耗品の大量備蓄は必須であるため、余裕のある他工場や民間商取引と異なり激務となっていた。

しかし生産されている兵器はミリシアルにとつてもムーにとつても唯一武器弾薬を共用でき、現状では大量生産し余ったとしても両国に備蓄し非常時は使用が出来る。無理をしても量産するのはミリシアルにとつて必要な事ではあった。

ムー大陸

空洞山脈以西がグラ・バルカス帝国の勢力下に落ちたことがムー全土に伝わった。その結果ムー大陸内にある小国がグラ・バルカス帝国に恭順の意を示し、戦わずしてその勢力下に落ちた。

一方でムー国に対し支援を要請しつつ徹底抗戦をマガライヒ共団体及びニグラート連合は選んだ。幸いな事はムーとの戦争を最優先としている為、ソナル王国とレイフォル国境線での小規模な交戦程

度で済んでいる。小規模と言っても国境線は徐々にグラ・バルカス帝国に侵され、両国によって改良されたワイバーン、空色のワイバーンロードと飛行強化装備によるワイバーンでもアンタレス相手には不利であった。

「誰か助けてくれ！」

「強化ワイバーンアーモアでは対応不可能！」

「ちくしよおおお！」

魔信から悲鳴のような報告が上がる中、国境線では少数のアンタレス相手に制空権を奪われ、シリウス型爆撃機から投下される爆弾によって陸軍は大地ごと耕されてしまっていた。

グラ・バルカス帝国側が本腰ではないがゆえに徐々に侵攻及び占領されている程度である、そう認識できる程度には両国は理解しているが手があるわけでもなかった。

「竜騎士団後退！ ムーの支援航空機が来たぞ！！」

ムーからは支援機として隼の部隊が国外に配備されていた。野戦滑走路を各地に設営しなければならないが、ムーの隼とグラ・バルカス帝国のアンタレスの性能はほぼ同等、訓練程度は格下相手を相手にするつもりでグラ・バルカス帝国の中で新兵や問題児を集めた部隊、ムー側はジェット戦闘機への転換を嫌ったレシプロ航空パイロットと地方の二線級部隊。

「ムーの戦闘機がきたぞ！」

「上への報告もある。見かけだけの小競り合いの後下がるぞ」

命令を下されている故に後方の取り合いによる航空優勢を取る威嚇のみ、グラ・バルカス帝国とはいえムー大陸全域の戦線に主戦力を送る力はない。

「全機グラ・バルカス帝国の戦闘機を追い払う。残念だが本格的戦争になれば、こちらまで戦力を回す余裕はムーにもない。警戒しつつ追いつ返すのに徹せよ」

僅かな間小競り合いともいえる銃撃を問わない航空戦が行われ、すでに交戦していたグラ・バルカス帝国の航空隊は先に撤退していく。グラ・バルカス帝国は無理に戦線を広げる必要はなく、あくまで主力

部隊である竜騎士団を標的としていた。ムー国との戦争が優勢となるまでは攻め込まれない程度の圧力を行う方針を軍の上層部は決定し、現場レベルでは徐々に国境線を押し込み、前線と本営との相違が徐々に広がっていく。

ムー国 交易都市マイカル

ようやく編成の終わったミリシアル帝国の陸軍及び空軍の一部が到着、アルファ4制空機にベータ4爆撃機、ガンマ3型戦車に歩兵、最新の魔道ライフルに魔道機関銃、二線級ではなくアニウンリール皇国制圧戦で経験を積んだ一線級の部隊を最大で20万ほど送りこむ予定であった。

一方で大規模な派兵であるゆえに物資輸送に手間取り、完全編成が完了するにはまだ一月ほど時間を要するが故に、今はマガライヒ共同体戦力の輸送とムー国国境線防衛に当たる。

「我々はソナル王国戦線を担当する。全隊列車への乗り込み及び物資移動を」

ミリシアル陸軍はムーの用意した列車への物資積み込み、ミリシアル空軍は自らの航空機に乗り割り当てられた航空基地へと向かう準備を進めていく、

科学的分析解析や思考によって実戦を食み改良の施されたミリシアルの魔道兵器群。本国ではパル・キマイラの分析も進み、原理こそいまだ完全解析は出来ていないものの、アトラタテス砲の完全コピー生産にも成功し現在最新鋭戦艦オリハルコン級及びミスリル級空母へ換装が行われている最中、それも終わり次第ムー大陸南部地域に艦隊が展開されることになっている。

第三文明圏 フィルアデイス大陸

リーム王国

戦争中に多くの属領を手に入れたリーム王国の力は増大し、パーパ

ルディア皇国属領にあった製造工場から魔道牽引砲に魔道マスケツト銃、ワイバーンロードの運用など国力は増大し、属領では苛酷な暮らしで人口が急激に減り荒れ果て始めているが、リーム王国は発展し立派な建物が立ち並び繁栄を謳歌していた。

そしてパールネウスを狙い軍備の増強に力を入れていた。

諸国家群

独立した国家はリーム王国がいつ攻めてくるから怯えながらも、対応できるのが元は覇権主義で自国を属国扱っていたパーパルディア皇国と兄弟国家ともいえるパールネウス国だけであり、救援など求められるわけもなく防衛の為必死に軍を錬成するなど努力を行っていた。

パールネウス国（パーパルディア皇国）

動きが鈍い第三文明圏ではあるのだが、そもそも対グラ・バルカス帝国へ戦力になりえるだけの力がないこともあり、パールネウス国は第三文明圏のフィルアデイス大陸でリーム王国との小競り合いが発生していた。

内政に力を入れている中で旧貴族と新貴族の間での調整が上手くいかない事も発生し、発展こそできているものの軋轢は広がっている。

レミール派である新進気鋭の貴族は難題に近い発展計画に従い苦労しながらも領地は発展し、またたつた2州ではあるが領民からの支持もある為、そのまま州の責任者であり代表としてパールネウス国に所属する州として半独立し州旗を掲げている。

一方でパーパルディア皇国ではなくパールネウス国に故あって従った旧貴族はそこまで領地運営は上手くいかず、徐々に領地運営に失敗し財産没収による取り潰しで数を減らしていた。

世界的に見れば戦争が起きる中グラ・バルカス帝国相手に、列強統合空母打撃群が戦果を挙げたことに参加を申し出るものの、余りにも技術力差が大きい為に断られていた。だがその考えは大事な事であ

る事から、第二群として過酷な規律に従い訓練を受け、さらに統帥権の放棄を条件に一年後結成を目的とし、列強打撃艦隊の結成及びミリアルとムーから技術供与を受ける事が決定された。

陸戦力

A・リンドヴルムは順調に強化アーマーの改良が進み、頭部から関節部まで覆う事が可能となった。このためマスケツト銃程度までなら完全に防ぐことが可能になり、装甲車両に近い運用が可能となった。上陸作戦時にパーパルディア製牽引式魔導砲や対空魔導砲の輸送など多目的に利用される。

何よりも雑食かつ沼地や海などをものともしない故に、調教さえしつかりと出来れば軍用でなくとも利用価値は非常に高かった。

一般歩兵の装備に関しては、新兵装への切り替えで廃棄予定になっていたミリシアルの予備保管行きにさえならない旧式化した連発銃が主兵装、それでも前込め式に比べて高性能であることは間違いない。

航空戦力

対ワイバーンロード及びオーバーロード用の飛空強化機械の開発、ワイバーンの品種改良や情報は得ていたが、ロード種となるとそのようなことはなく、パーパルディア皇国のワイバーン飼育担当技術者や竜騎士などに飛行実験や生体確認を確認したなか、ワイバーンロードそのものが高風圧に目と耳が耐えられず、自己意志を持って飛行速度を落としていたことが判明した。

さすがのワイバーンも生物である以上350kmを超える速度には呼吸は難しく目や耳にかかる負担は大きい。

その為目と耳と呼吸をカバーするフルフェイスヘルムをミリシアルの指示の下、マガライヒ共同体の飛行強化機の追加改装が行われ、ヘルムのみ輸出用としてワイバーンロード用に改良と改造が進められることになる。

対艦能力不足

導力火炎弾が対象となりえるものの、威力上昇だけではどうしようもない。粘性の燃焼液を対象にぶつけるだけでは、どれだけ圧縮や巨大化しようとも装甲物体にはほとんど効果が無い。そもそも粘性である以上いくらか風魔法で保護をしても形状維持が難しく射程が短すぎる。

ミリシアル及びムーの技術研究者達は、不要となった約5kgのガエタン工業製70mm歩兵砲の砲弾を改造、ライフリングを刻み安定翼を追加、導力火炎弾のコアとして使用する方針と共に使えるよう訓練が始まる。

「導力魔装弾用意！」

フルフェイスマスクの下に装着されている砲弾が、風魔法によって砲弾が口部の前に移動し急速に回転していく。

「発射！」

本来は纏わせることで利用していた可燃性粘液、それを粘液と空気が混合することで射出炸薬とした爆発によって打ち出された砲弾は、安定翼の影響か不気味な雄たけびのような音を発しながら飛翔、廃艦予定であり標的の戦列艦に突き刺さると容易く対魔弾鉄鋼式装甲を突き破り、中で爆発すると大穴を開けて沈没していった。

射程はほんの6km、しかし導力火炎弾に比べればはるかに長射程高威力である。

対航空能力不足

対竜大型散弾銃の改良を進めつつ、ミリシアルで不要となった旧式のイクシオン型対空魔光砲と充填機の提供。それでもなおグラ・バルカス帝国相手には相手にはならず、第一第二列強の敵とはなりえない。

対地攻撃力不足

大型ヒクイドリにミリシアルの魔導砲弾を改造した爆弾を持たせることで解決をはかり、個体差はあるものの最大平均積載量は騎手を含め200kg。そのため110kg爆弾を搭載し対空能力を失った標的への陸海を問わぬ攻撃力などを求めた。

まだまだ結果が出るのは時間が掛かるが、アジ・ダハーカの自力復活など最初の転移とは世界の事情が異なり始めていることから、予期せぬことに対応する為第三文明圏にも小さな非常事態への対策を施し始めていた。

グラ・バルカス帝国本土

日本の手によって軽戦車シェイファーⅡの情報を元に設計図に改良を加え、装甲と火力が若干強化されたシェイファーⅢとして九八式軽戦車ケニの生産が始まったが、ハウンドシリーズを超える戦車をムーが持つという情報に、リヒテル発動機も陸軍から解析のための技術者の派遣と、ハウンドシリーズを超える戦車の仕様書提出を命じられていた。

擱座したムー製M4中戦車を回収し本土に輸送され、そのうち一台がリヒテル発動機の工場に運び込まれていた。技術者達は工具を片手に隅々まで調べながら、前線から纏められたレポートを聞いていた。

「ハウンドⅡの47mmでは至近以外で貫通は不可能とのことです」

「ムーで大量生産されているとのことだが、これを量産できるとは。

これは難しい問題になる」

「70mm以上の大口徑新砲が完成するまでは、57mm新砲を使用するしかない」

一部の技術者はそう簡単に設計できない事を理解しながらも、国の為と早期戦力化をまずは優先し、判明していたハウンドの欠点でもある一部採用されているリベット構造を全て取りやめ、平面ボルトと溶接に変更し砲塔は少々装甲を改良したハウンドの47mmの砲塔を搭載。

砲は開発されたものの新型戦車の必要性に疑問が持たれ、製造されていないかった新57mm戦車砲を搭載する事でまとめ上げ、製造コス

トはハウンドIIを上回る結果となるが、外見に大きな差こそないもののハウンドIIIと命名されたつた3か月で戦力化が行われた。

従来の戦車に操作感覚も似ておりも重量増加も抑えられている事から、新戦車への転換訓練も順調に進められており、各工場でも生産ラインの切り替えが行われている。

一方で新型戦車に関しては、ハウンドやシェイファーなど車両系を主に設計製造しているリヒテル発動機とカマー重工、種類によっては国家が性能要求ではなく概略設計したものを詳細図に直し製造もしているのだが、遅々として進んでいなかった。

相手となるのはムー国製M4中戦車、調べ上げたのちに軍部が出した要求スペックは

1. 砲口径は最低でも75mm
2. 400m以上の距離で64―76mmの正面装甲を貫通可能
3. 最低50mmの正面装甲厚
4. 走行速度30km以上

と難題であるために各企業はモックアップの段階にさえ進めず、完全に停止していた重戦車ワルダーの開発も再開されるなど迷走していた。

リヒテル発動機ではカマー重工に先んじる為、出世し事業部長となったシツミヤは上から命令を受け技術的協力を受けられないかと訪れていた。

日本として要求スペックを超えるものは間違いなく3式中戦車チヌにあたる。一方でこの性能はM4中戦車と間違いなく正面から対処できるものの、その設計図をおいそれと提供してしまえばムーの戦域が不安定化するのはいがけない。

一方でグラ・バルカス帝国の技術力と工業力を考えれば、本土で生産しムー大陸まで十分な数を輸送できるかも疑問である。1式中戦車と3式中戦車では製造難易度はかなり開きがあり、部分的な改装や製造工程変更で出来る程度の差ではない。

グラ・バルカス帝国の日本大使館会議室では、数日に一度はリヒテル発動機の役員や事業部長が訪れていた。

「新戦車設計と言われましても」

「協力企業から様々な支援などを取り付けております。こちらをご確認ください」

事業部長として他企業に接触し、日本が輸入している鉱石や価値の分からない石などを使った製品の製造数を増やし価格を下げるよう説得、それを対価として設計協力を得られるよう尽力していた。書面には各企業から生産数や価格などの変更が記載されていた。

グラ・バルカス帝国としても必死であり、陸軍から各企業に対してかなりの圧力をかけられていた。

ムー軍事開発都市

各種技術開発が行われている中、グラ・バルカス帝国のスパイは軍事開発都市内部に入り込もうと周辺都市や村を訪れるが、いまだ許可が無い者は入る事が出来ないために周辺都市で情報収集を行うに留まっていた。

外見的差異はさほどないとはいえ、手慣れたスパイにとってもさすがにムー国人が訪れられない場所にいけるわけもなく、戦時体制であるがゆえに移動もそれなりに制限されていた。

幸いなのがムー国は温厚な気質であるがゆえに諸外国人を邪険に扱うことはなく、注意する程度で立ち入り禁止区域などに近付かないよう伝える程度であった。

現在港では大型クレーンによって大量の物資の陸揚げ作業が行われていた。ムーの輸送船もオタハイト港やマイカル港に物資を輸送しているが、日本は自分達が使用する分は別として輸送していることから、巨大輸送船を見られることもなく各種装備を運び込んでいる。

前線リュウセイ基地 新設第六法務軍駐屯地

巨大な飛行船、ML86X 3隻がムーリュウセイ基地に到着、一台の戦車が格納庫から自走し滑走路へと出てきた。

203 超重戦車 通称サンダーマウス

弾種はあくまで40口径203mm榴弾砲と同じではあるが、分厚い装甲と203mmの各種砲弾を分間6発という狂った速度で撃てる、むろん車内装弾数が24発しかない為最大速度で連射をすれば4分しかもたないが、203mm自走砲の弾薬補給車を使えばそれには当てはまらない。

開発が続けられた203mmGPS滑空誘導弾によって180km先の標的を狙え、少々お高い推進砲弾を使用すれば250kmまで射程となり 事実上沿岸防衛も可能な長射程と火力を有する。

問題は材質や構造の発展によって防弾性能に走破性、203mm主砲の破砕力はけた外れに良くなったが、大口徑砲を積んだ影響で120トンまで重量が激増し運用に問題が発生している。その極大まで肥大化しマウス重戦車を僅かに上回る巨体とほぼ同等の重量は運用に困難をもたらしてしまった。

しかし利点だけを問うなら、90式の120mmさえ600m圏内に入らなければ装甲を貫くことは出来ず、戦車と言う枠組みを超えた長距離砲撃が可能でもある。むろん燃費の悪さや重量による渡河の難しさなど欠点を上げればきりはないが、何よりも40口径203mmという砲身は見る者を圧倒し、ムーのリユウセイ基地配属の兵士達は啞然とした目で眺めていた。

「重203特化連隊、第六法務駐屯地へと移動せよ」

サンダーマウスの役目は重203特化連隊よりも10km以上前線に単機で座し、偵察部隊などへの囮となること。

203mm自走榴弾砲 通称サンダーボルトIIもしくは203榴2式

正式に量産され、二発撃つては移動するために3発のみの限定的自動装てん装置を持ち装甲化もされていない、サンダーマウスと同じ180kmから250kmの射程を持つ自走砲。155mm榴弾砲では弾薬サイズの問題から最大射程180kmが限界であるが故に、重量と射程を等価交換した兵器でもあった。

リユウセイ基地への配備については、戦争法に関してムーからの依頼としてムーやミリアル兵士が法を犯した場合に第三者、第三機関

として裁くために戦力派遣と言う形になっている。

地球で言う所のハーグ陸戦条約をムーとミリシアルは正式に締結しその順守の為と言う形で、グラ・バルカス帝国側にも大使館を通じて話を通し、締結した条約によりムーに部隊を派遣したことを通達していた。

日本

民間では国内の小さな島々を回る旅行開発や産業技術、地下設備拡張や地下倉庫の拡大など、あらゆる資源の備蓄の為に八丈島ほどの容積を持つ地下貯蔵庫が次々と作られては物資の運び込み、技術開発などどんどん進められていた。海外に出られないがゆえに、国内で出来る事への開発には余念がなかった。

仮初ともいえる限定的な平和の中、防衛省は供与向けチープ兵器群の見直しと追加に迫られていた。ムー各戦域での戦闘情報を得ているのだが、多連装ロケット砲システム代わりのコンテナ式多連装発射機、先進誘導弾代わりの汎用C誘導弾MK4、不要となったモノをワンパッケージ化した兵器、それらは陸軍歩兵向けで装甲部隊に空軍及び海軍への武装は無いに等しい。対装甲兵器・対空兵器・対艦兵器、それはどうしても電子技術がないとならなかった。

対装甲兵器

会議の中で米国兵器企業統合グループからの提案に、英国兵器企業統合グループからもL6ウオンバット120mm無反動砲を提案、日本では61式自走無反動砲に米国では実績のあるM50オントス自走無反動砲という実例があり、M50オントス自走無反動砲は限定された状況ではあったが、強奪された軽戦車の撃破の実績もある。

「米国製106mm無反動砲、これのライセンス生産が最適と提案する」

「英国製120mm無反動砲を当方は提案させてもらう。口径も大きく射程も上回り、搭載用としては十分となる」

防衛省や各軍事企業が繰り返し会議を行うことで、対装甲目標に関してはM40 106mm無反動砲ならばミリシアル帝国やムー国でも完全なライセンス生産が可能、グラ・バルカス帝国程度ならば十分に対装甲・対歩兵と汎用性が利く。

搭載車両そのものはミリシアルやムーの4輪装甲車でも装軌車両でも利用しやすく、量産性も運用性も優れるとして対戦車兵器であった、ライセンス生産による収益は日本政府との折半になるものの、その収益は企業と日本に留まる事を選んだ米国系へと配分される。

そして現在ミリシアルでは105mm自走無反動砲の大量生産が行われ、とある企業は従業員の休みと言うものが消滅するほどの激務が続いていた。

対空兵装

誘導弾など当然供与やライセンス生産などできるはずもなく、不要となった旧式CIWS 1A及び1Bをワンパッケージ化したものを条件付き供与する結論に至る。一切の分解及び解析の禁止、破った場合は全ての兵器を保有する部隊への攻撃及び製造設備の破壊、その条件下でムーへの一時供与許可が下りた。

「勝手に解析するなだ！ 第二列強たるムーを何だと思っているのだ！」

ある種屈辱的な条件であった為幾らか軍部や技術者達から不満の怒りの声が上がっていた。しかし。

「何を言っているんですか。 栄えある第二列強ムーが友好国の技術を無断で調べる？ そのような恥知らずな事出来るはずないでしょう」

「そもそもこちらから供与を願っている。 外観的な要素や性能からこちらでも参考になるだろう」

他国の技術を許可もなく解析する方が蛮族及び低文明的考えではないかと、先進技術都市上がりの軍人や技術者達から言われてしまえば黙るしかなかった。

対艦兵装

即座に供与は廃案となった。対艦装備などワンパッケージ化しても性能が隔絶し過ぎており、少数を供与するだけでも圧倒する事が出来てしまう。

試験的にラ・マトヤに供与したものの、これ以上は過ぎたるものになるとして供与はするもののラ・マトヤ以外には拒否する方針となった。

大型対艦誘導弾、P-1000重対艦誘導弾は日本でも徐々に備蓄が始まり必要な時に備え始めている。

傭兵としてレイダークラブ族の派遣

彼等の体の構造の解析が進み、甲殻は従来の蟹類やヤドカリ類と同じタンパク質や炭酸カルシウムの多孔質の多重構造ではなく、捻じりや引張が適切に掛かった100を超えると多層構造な上に薄くではあるが石灰化した層まであるため、長年生きた個体は9mm弾程度はなんなく弾き5・56mm弾でも貫通は難しいという複合装甲に近い物であった。

彼等は海竜や水竜にシーサーペントなどの捕食者から生き残る為、地球とは比較にならない強度の甲殻を持つに至ったようだ。

そしてムー国の前線に彼らは傭兵として200杯が赴く。派遣部隊参加は彼らの意志であり海岸線沿いの防衛にあたり、少数の部隊による上陸による後方破壊を防ぐ役割を果たす為だった。

無人機部隊

自衛官を危険にさらす事なく戦争や紛争に対処できる手段、現在ムーに追加派遣する最終試験段階に入っていた。

SDやSSシリーズの発展後継機シリーズ。

SD-S003 愛称ゴライアス

6足という多脚ゆえに歩行速度こそ遅いものの安定して不整地踏

破し、難民の保護から対象の狙撃まで可能なL25BM—30を搭載する蜘蛛型自律無人兵器。

長距離狙撃専門ではあるが、6足による場所を選ばぬ不整地踏破能力と反動制御による高い命中精度、標的となる軍隊や組織の中枢人物を狙うのに最適な兵器でもあった。

BM30mm対物ライフル L25BM—30

5km先の標的を撃ち抜くためだけに改良された狙撃ライフル。

30x173mm AP弾を使用し銃身だけでも2500mm、全長3900mmもある生身の人間には大きすぎる難物である。射程5kmという長射程を狙撃する為には、風向に気圧など様々な大気の解析及び判断システムなど多くの条件があるため、余剰な部品も多く配置や撤収にも時間を要し、大型のショックアブソーバーとマズルブレーキを付けても抑えきれず、バイポッドに伏せ撃ちのみと指定まである。

しかし狙撃兵にとっては並の兵器では反撃不可能な距離から撃てるのは利点であり、通常の建物や並みの防弾車両であるならば意味をなさない弾丸は魅力的であったため、試験的意味合いが強いものの少数生産が行われている。

そもそも開発経緯が自律無人兵器の狙撃タイプ搭載用に開発していたものを、有人向けに改良を加えたに過ぎない。

SD—T002 愛称ミニタン

96式40mm自動てき弾銃を主兵装、9mm短機関銃を補助兵装とした無人自律兵器。戦車を縦横高さ1mサイズまで小型デフォルメし諸外国で活動をする自衛隊員や外交官を守る目的で製造されている。

ボンバーソルジャー三世

見た目の可愛さから、青塗装の巡回警備用、黒塗装の索敵攻撃用、赤塗装のパラシュート投下攻撃用、3種が製造され無人機部隊に配備されているが、巡回警備用はムー国封鎖軍事都市すでに運用されてい

るが。

市民の要望もあつたので、ボンバーソルジャーの縫いぐるみが正規ライセンス生産が開始され、日本国内よりも販売数は伸びていた。

自律無人救助兵器

PD研究サークルによって提案され、何度もシミュレートし、製造された人命救助用捕食式ワーム型パンジヤンドラム。

通常時は円柱状の鋼鉄の物体として転がるだけであるが、けが人などを発見すると捕食するよう内部に収容し、回転せず全体を伸縮するワームの様に動かして救助部隊へと向かう。

先端のドリル利用して残骸や建物も破壊し救助できる点も高く評価されたのだが、いかんせん見た目が余りにも不気味な点だけは払しょくできずにいた。

なにせ直径4 m 最大長10～15 m、先端は障害物破碎用ドリル、全身は装甲板で覆われている物体、そんな物体が転がりながら移動するのだからどうしようもなかった。